

府内城三ノ丸遺跡

—大分県共同庁舎（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



1993

大分県教育委員会

府内城三ノ丸遺跡

序 文

大分県の県庁所在地である大分市は、江戸時代の府内藩城下町から発展した都市であります。府内藩の城下町については、これまで文献史料や絵図による研究がなされてきましたが、考古学的な発掘調査については実施されていませんでした。

今回、大分県共同庁舎（仮称）がこの城下町の一面に新設されることになり、それに伴い大分県教育委員会では平成3年4月から6月の3ヶ月間にわたる発掘調査を行ってきました。府内藩の城下町に初めて発掘調査のメスを入れたことになります。今回の調査地点は旧大分県企業局の跡地に相当し、江戸時代には福寿院という寺院や府内藩の上級武士である木村家の武家屋敷が存在した場所になります。発掘調査では陶磁器類をはじめとした多量の出土遺物が発見され、当時の生活像を知る上で、大変貴重なものとなりました。

このたびの報告書の作成に当たっては、約2年間の整理期間を費やしましたが、ここに調査の詳細を記した発掘調査報告書を刊行することができました。本書が、府内城城下町の研究や近世考古学の分野に寄与できれば幸いです。

最後になりましたが、調査の御指導をいただきました諸先生をはじめ、調査に御協力いただきました関係各位に対し、深く敬意を表するとともに、厚くお礼を申し上げます。

平成5年3月

大分県教育委員会

教育長 宮本 高志

例 言

1. 本書は、平成3年度に発掘調査を実施した仮称、大分県共同庁舎（大分市大手町3丁目1番1号所在）建設に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大分県教育委員会が主体となり、平成3年4月10日から6月31日に実施した。
3. 調査団の構成は以下の通りである。

調 査 委 員 沢村仁（九州芸術工科大学教授）

大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長）

秋葉正嗣（県文化課長）

林英輝（同 課長補佐）

調 査 員 渋谷忠幸（県文化課主幹兼埋蔵文化財第二係長）

栗田勝弘（県文化課主査 現大分県立宇佐風土記の丘主任研究員

調査担当・調査主任）

友岡信彦（同 主任）

江田豊（同 主任）

綿貫俊一（同 主任 調査担当）

古田寛（同 主事 調査担当）

染谷和徳（同 主事）

橋本一彦（同 嘱託）

佐藤兄洋（同 先哲叢書編さん班指導主事 文献調査担当）

上記の他、木村幾多郎氏（大分市立歴史資料館館長）・玉永光洋氏（大分市立歴史資料館 現大分県教育庁文化課）・坪根伸也氏（大分市教育委員会）などの視察と助言を得た。

4. 陶磁器類については大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長）の多大な御教示・御指導を得たほか、出土遺物の一部について小川望氏（東京都小平市教育委員会）・堀内明博氏（京都市埋蔵文化財センター）・鈴木裕子氏（東京都豊島区染井遺跡調査会）・山川均氏（奈良県大和郡山市教育委員会）の御教示を得た。
5. 遺構・遺物の図面作成は調査員が担当したほか、遺物整理・実測・トレース等で牧尾義則（県文化課主査）・後藤幹彦・古武敦子・安倍聡子（以上県文化課嘱託）・井口あけみの多大な援助を得た。
6. V-5)に使用した絵図の写真掲載について、内閣文庫・大分大学付属図書館・臼杵市立図書館・大分県立大分図書館・松榮神社・大分市歴史民俗資料館の御配慮を得た。
7. 本書の執筆は、V-4)を古武敦子、V-5)を佐藤兄洋、その他を古田寛が行った。
また、本書の編集は古田が行った。

目 次

I. 調査に至る経過	1
II. 発掘調査区の位置と歴史的環境	2
III. 発掘調査の成果	
(1) 調査の概要	8
(2) 遺構	13
①土坑 ②井戸 ③石列遺構 SA 2 ④不明遺構	
⑤埋戻遺構 ⑥ピット ⑦上層遺構	
(3) 出土遺物	22
①土器・陶磁器類 ②磁器製品・土製品 ③ガラス製品 ④銅銭	
⑤銅製品・鉄製品 ⑥石製品 ⑦骨・角製品 ⑧瓦類	
IV. まとめ	
(1) SK 20・SK 23の出土遺物についてーI期出土遺物とその意義ー	224
(2) SK 14・15の出土遺物についてー寛保の大火(1743年)に伴う一括資料ー	230
(3) 調査区における江戸時代屋敷割の想定ーIII～V期の遺構と遺物ー	236
V. 付篇と考察	
(1) 府内城三ノ丸遺跡出土の陶磁器類について(吉田寛)	241
(2) 府内城三ノ丸遺跡出土の上師質・瓦質土器について(占田寛)	247
(3) 府内城三ノ丸遺跡出土の瓦の分類と編年(吉田寛)	259
(4) 府内城三ノ丸遺跡出土の前土器と茶道具について(古武牧子)	279
(5) 近世における府内城下町と府内家臣団	
ー本調査地域を中心としてー(佐藤兄洋)	283
VI. 総 括	316

図 版 目 次

第1図	府内藩の領域	2	第38図	SK19 a 出土遺物②	54
第2図	府内城城下町と周辺地形図	3	第39図	SK19 a 出土遺物③	55
第3図	府内城城下町と調査区位置図	5・6	第40図	SK19 a 出土遺物④	56
第4図	第1次調査区全体図	9・10	第41図	SK19 a 出土遺物⑤	57
第5図	第2次調査区全体図	12	第42図	SK19 a 出土遺物⑥	58
第6図	SK20・SK23実測図	14	第43図	SK19 b 出土遺物①	60
第7図	SK14・SK15・SK33・ SK34実測図	15	第44図	SK19 b 出土遺物②	61
第8図	SK19 a 実測図	16	第45図	SK12・SK38出土遺物	62
第9図	SE1・SE2実測図	17	第46図	SK25出土遺物	63
第10図	SA2・SX1実測図	18	第47図	SK26出土遺物①	64
第11図	上層遺構実測図	19・20	第48図	SK26出土遺物②	65
第12図	SK30・SK23出土遺物	23	第49図	SK26出土遺物③	66
第13図	SK20・SK32・SK29・SK35・ SK42・SK36・SK31出土遺物	25	第50図	SK26出土遺物④	67
第14図	SK8出土遺物	26	第51図	SK2出土遺物①	69
第15図	SK11出土遺物	27	第52図	SK2出土遺物②	70
第16図	SK14・15出土遺物①	29	第53図	SK2出土遺物③	71
第17図	SK14・15出土遺物②	31	第54図	SK2出土遺物④	72
第18図	SK14・15出土遺物③	32	第55図	SK2出土遺物⑤	73
第19図	SK14・15出土遺物④	33	第56図	SK3出土遺物①	75
第20図	SK14・15出土遺物⑤	35	第57図	SK3出土遺物②	76
第21図	SK14・15出土遺物⑥	36	第58図	SK3出土遺物③	77
第22図	SK14・15出土遺物⑦	37	第59図	SK5出土遺物	78
第23図	SK14・15出土遺物⑧	38	第60図	SK7出土遺物①	79
第24図	SK14・15出土遺物⑨	39	第61図	SK7出土遺物②	80
第25図	SK14・15出土遺物⑩	40	第62図	SK10出土遺物	82
第26図	SK14・15出土遺物⑪	42	第63図	SK16・SK22出土遺物	83
第27図	SK14・15出土遺物⑫	43	第64図	SK39出土遺物	83
第28図	SK14・15出土遺物⑬	44	第65図	SK44出土遺物①	84
第29図	SK14・15出土遺物⑭	45	第66図	SK44出土遺物②	85
第30図	SK14・15出土遺物⑮	46	第67図	SK44出土遺物③	86
第31図	SK14・15出土遺物⑯	47	第68図	SK45出土遺物	87
第32図	SK14・15出土遺物⑰	48	第69図	SK33出土遺物①	89
第33図	SK14・15出土遺物⑱	49	第70図	SK33出土遺物②	90
第34図	SK4・SK1出土遺物	50	第71図	SK33出土遺物③	91
第35図	SK9出土遺物①	51	第72図	SK33出土遺物④	92
第36図	SK9出土遺物②	52	第73図	SK33出土遺物⑤	93
第37図	SK19 a 出土遺物①	53	第74図	SK33出土遺物⑥	94
			第75図	SK33川土遺物⑦	95
			第76図	SK33出土遺物⑧	96

第 77図	SK33出土遺物⑨	97
第 78図	SK33出土遺物⑩	98
第 79図	SK33出土遺物⑪	101
第 80図	SK33出土遺物⑫	102
第 81図	SK33出土遺物⑬	103
第 82図	SK33出土遺物⑭	104
第 83図	SK33出土遺物⑮	105
第 84図	SK33出土遺物⑯	106
第 85図	SK33出土遺物⑰	107
第 86図	SK33出土遺物⑱	109
第 87図	SK33出土遺物⑲	110
第 88図	SK33出土遺物⑳	111
第 89図	SK33出土遺物㉑	112
第 90図	SK33出土遺物㉒	113
第 91図	SK33出土遺物㉓	114
第 92図	SK33出土遺物㉔	115
第 93図	SK33出土遺物㉕	116
第 94図	SK33出土遺物㉖	117
第 95図	SK33出土遺物㉗	118
第 96図	SK33出土遺物㉘	120
第 97図	SK34出土遺物①	121
第 98図	SK34出土遺物②	122
第 99図	SK34出土遺物③	123
第100図	SK34出土遺物④	124
第101図	SK34出土遺物⑤	126
第102図	SK34出土遺物⑥	128
第103図	SK34出土遺物⑦	129
第104図	SK34出土遺物⑧	130
第105図	SK34出土遺物⑨	131
第106図	SK34出土遺物⑩	132
第107図	SK34出土遺物⑪	133
第108図	SK34出土遺物⑫	134
第109図	SK34出土遺物⑬	135
第110図	SK41出土遺物①	136
第111図	SK41出土遺物②	137
第112図	SK21出土遺物①	139
第113図	SK21出土遺物②	140
第114図	SK21出土遺物③	141
第115図	SK17出土遺物①	143
第116図	SK17出土遺物②	144
第117図	SK17出土遺物③	145

第118図	SK24・SK40出土遺物	146
第119図	SK43出土遺物	146
第120図	SP2・埋塞遺構・SX1 出土遺物	147
第121図	上層遺構出土遺物①	149
第122図	上層遺構出土遺物②	150
第123図	上層遺構出土遺物③	151
第124図	試掘段階・排土中出土遺物	152
第125図	磁器製品・土製品	191
第126図	ガラス製品	192
第127図	銅銭	192
第128図	銅製品・鉄製品	194
第129図	石製品①	196
第130図	石製品②	197
第131図	石製品③	198
第132図	石製品④	199
第133図	骨・角製品	200
第134図	軒平瓦文様細部の名称	201
第135図	軒平瓦A～D類	202
第136図	軒平瓦E類	203
第137図	軒平瓦F・G類	204
第138図	軒平瓦H～M・X類ほか	206
第139図	軒丸瓦TA～TG類	208
第140図	軒丸瓦TH～TM類	209
第141図	軒丸瓦KA・KB類、鳥袋瓦	210
第142図	面戸瓦・文字を有する平瓦	211
第143図	伏間瓦	212
第144図	鬼瓦①	213
第145図	鬼瓦②	214
第146図	SK20・SK23出土一括遺物	225
第147図	焼塩蔵参考資料	226
第148図	土師質土器の口径	227
第149図	寛保の大火による被災範囲	231
第150図	SK14・15主要出土遺物	233・234
第151図	府内城下復元図と発掘調査区	237
第152図	出土遺物からみた第1次調査区 の居数割	238
第153図	陶磁器類の統計比	243
第154図	豊後地域における江戸時代 陶器播鉢	245
第155図	豊後における焙烙鉢の変遷	248

第156図	徳川氏大坂城期の焼焙と D類把手の形態……………	249
第157図	豊前「高村焼」の土師質土器……………	251
第158図	SK14・15出土火鉢と関連資料……………	252
第159図	在地で生産された可能性の高い 土師質・瓦質土器……………	253
第160図	焼炉a 関連資料……………	254
第161図	焼炉bの変遷……………	255
第162図	土師質土器小皿の変遷……………	256
第163図	軒平瓦型式一覽……………	260
第164図	軒平瓦型式一覽①……………	261
第165図	軒平瓦型式一覽②……………	262
第166図	府内城三ノ丸遺跡軒平瓦の 主要型式の編年……………	263・264
第167図	軒平瓦E類関連資料①……………	266
第168図	軒平瓦E類関連資料②……………	267
第169図	元禄年間までの瓦の刻印・文字……………	268
第170図	「惣左」の刻印がみられる 厚手の平瓦……………	269
第171図	府内城系列軒平瓦の 推定製作年代……………	270
第172図	軒平瓦B・D-1類関連資料……………	272

第173図	18世紀後半以降の瓦に みられる刻印……………	275
第174図	前土器の使用法……………	279
第175図	前土器のたて方……………	279
第176図	府内城三ノ丸遺跡出土の前土器……………	280
第177図	弘入・保全・前土器の「素」印……………	280
第178図	府内城三ノ丸遺跡出土の 茶道具……………	281
第179図	府内城下町絵図……………	285
第180図	豊後府内城之絵図……………	288
第181図	府内城図……………	288
第182図	府内城図……………	289
第183図	府内城下町絵図……………	290
第184図	享和年間における府内城下町 三ノ丸武家屋敷……………	300
第185図	府内藩家格毎の屋敷構造……………	302
第186図	福寿院図……………	304
第187図	御先代様中津留御殿敷絵図……………	309
第188図	白雉城之図……………	309
第189図	清水流規矩元法分間絵図……………	313
第190図	豊後府内藩御家中名前付……………	313

表 目 次

第1表	調査地点付近の変遷……………	8
第2表	土坑一覽……………	13
第3表	SK30出土土器・陶磁器類観察表……………	153
第4表	SK23出土土器・陶磁器類観察表……………	153
第5表	SK20出土土器・陶磁器類観察表……………	153
第6表	SK32出土土器・陶磁器類観察表……………	154
第7表	SK29出土土器・陶磁器類観察表……………	154
第8表	SK35出土土器・陶磁器類観察表……………	154
第9表	SK42出土土器・陶磁器類観察表……………	154
第10表	SK36出土土器・陶磁器類観察表……………	154
第11表	SK31出土土器・陶磁器類観察表……………	154
第12表	SK8出土土器・陶磁器類観察表……………	155
第13表	SK11出土土器・陶磁器類観察表……………	155
第14表	SK14・15出土土器・ 陶磁器類観察表……………	156

第15表	SK4出土土器・陶磁器類観察表……………	159
第16表	SK1出土土器・陶磁器類観察表……………	160
第17表	SK9出土土器・陶磁器類観察表……………	160
第18表	SK19a出土土器・陶磁器類観察表……………	160
第19表	SK19b出土土器・陶磁器類観察表……………	162
第20表	SK12出土土器・陶磁器類観察表……………	164
第21表	SK38出土土器・陶磁器類観察表……………	164
第22表	SK25出土土器・陶磁器類観察表……………	164
第23表	SK26出土土器・陶磁器類観察表……………	164
第24表	SK2出土土器・陶磁器類観察表……………	166
第25表	SK3出土土器・陶磁器類観察表……………	167
第26表	SK5出土土器・陶磁器類観察表……………	169
第27表	SK7出土土器・陶磁器類観察表……………	169
第28表	SK10出土土器・陶磁器類観察表……………	170
第29表	SK16出土土器・陶磁器類観察表……………	171

第30表	SK22出土土器・陶磁器類観察表	171
第31表	SK39出土土器・陶磁器類観察表	171
第32表	SK44出土土器・陶磁器類観察表	171
第33表	SK45出土土器・陶磁器類観察表	172
第34表	SK33出土土器・陶磁器類観察表	173
第35表	SK34出土土器・陶磁器類観察表	181
第36表	SK41出土土器・陶磁器類観察表	185
第37表	SK21出土土器・陶磁器類観察表	186
第38表	SK17出土土器・陶磁器類観察表	187
第39表	SK24出土土器・陶磁器類観察表	188
第40表	SK40出土土器・陶磁器類観察表	188
第41表	SK43出土土器・陶磁器類観察表	189
第42表	SP1出土土器・陶磁器類観察表	189
第43表	埋差遺構出土土器・陶磁器類観察表	189
第44表	SX1出土土器・陶磁器類観察表	189
第45表	上層遺構出土土器・陶磁器類観察表	189
第46表	試掘段階・排土中出土土器・ 陶磁器類観察表	190

第47表	骨・角製品に刻まれた東海道 53次の地名と距離	199
第48表	遺構の所属年代	224
第49表	慶長年間における府内城および 城下の築造過程	229
第50表	「府内藩日記」に見える大火	231
第51表	17世紀後半から18世紀中葉前後の 木村家の動向	235
第52表	陶磁器類の分類項目	241
第53表	主要遺構出土遺物組成表	242
第54表	出土瓦型式・覧	259
第55表	府内城下町を描いた絵図	286
第56表	大船松平府内藩主一覧	291
第57表	府内藩制の変遷	296
第58表	府内城下町三ノ丸の町	299
第59表	家臣の禄高と屋敷地規模	301
第60表	家臣の家格による屋敷規模	301

写真図版

図版1	①調査区全景 ②土坑集中部 ③上層遺構 ④埋差遺構 ⑤上層遺構S D1近景
図版2	①SA2 ②井戸SE1 ③SE1断ち割り ④井戸SE2
図版3	①SX1 ②SK30 ③SK29 ④SK23 ⑤SK14・15 ⑥SK7・SK8・SK21 ⑦SK2 ⑧SK2遺物出土状況
図版4	①SK19a ②SK19a土層断面 ③SK16 ④SK11・SK12 ⑤SK26
図版5	①SK3 ②SK3青銅製品出土状況 ③SK4・SK5 ④SK22 ⑤SK22瓦出土状況
図版6	①SK1遺物出土状況 ②SK1遺物出土状況近景 ③SK10 ④SK33調査風景 ⑤SK33 ⑥SK33鬼丸出土状況 ⑦SK41遺物出土状況 ⑧SK17

図版7	出土遺物①
図版8	出土遺物②
図版9	出土遺物③
図版10	出土遺物④
図版11	出土遺物⑤
図版12	出土遺物⑥
図版13	出土遺物⑦
図版14	出土遺物⑧
図版15	出土遺物⑨
図版16	出土遺物⑩
図版17	出土遺物⑪

フリガナ	フ ナイジウウサン ノ マル イ ナキ
書 名	府内城三ノ丸遺跡
副 書 名	大分県共同庁舎(仮称)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編著者名	吉田 寛・古武敦子・佐藤晃洋
編集機関	大分県教育委員会
所 在 地	〒 870 大分県大分市府内町 3 丁目10番 1 号
発行年月日	西暦 1993 年 3 月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
フ ナイジウウ 府内城 サンノマル 三ノ丸	オオイトケン オオイテマチ 大分市大乎町 3 丁目 1 番 1 号			33°14'20"	131°36'55"	19910401 19910630	2,120	共同庁舎 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
府内城 三ノ丸		中～近世	土坑 46基 井戸 2基 柱穴 2基 埋蔵遺構 5 石列遺構 2 石組み溝 1 不明遺構 1	陶磁器類ほか	調査区は江戸時代の 武家屋敷(木村の 家)および寺院(福 寿院)跡。

I. 調査に至る経過

大分県では昭和63年（1988）度より、大分県大分市大手町3丁目1番1号に所在する大分県企業局の建物を取り壊し、その場所に新たに大分県共同庁舎（仮称）を建設する計画を進めていた。この計画は、現在の議会棟と県庁舎が手狭となり、加えて建設予定地に立っている企業局庁舎が老朽化したため、建て替えを兼ねて新共同庁舎を建設することになったものである。新共同庁舎は、計画では地下2階、地上15階となり、高さは約74mを測る鉄筋の高層ビルとなる。建物完成後には、県議会・知事部局・企業局・県警の部署が置かれる予定である。平成3年（1991）3月になり、老朽化した旧企業局の建物の取り壊しが開始された。そして建物の取り壊しがほぼ完了した後の3月中旬には、新共同庁舎建設へ向けての起工式が執り行われた。

さて、新庁舎の建設予定地は江戸時代府内藩の城下町である府内城三ノ丸の一面に当たる。この場所は府内城大手門から東側約100mの地点で、文献・絵図などと照合すると、江戸時代には城主大給松平氏の祈禱所から発展した福寿院という寺院や府内藩の家老・用人などを務めた上級武士である木村家の武家屋敷が存在した地点であった。そこで大分県教育庁文化課では、起工式後の3月下旬から、工事と併行して地下遺構確認のための立会い調査と試掘調査を開始した。調査開始後数日して、一部深掘りを行ったトレンチの断面で、後にSK22とする瓦溜りが確認され、またその周辺から近世陶磁器などの出土が認められた。この段階で、近世の遺構が存在していることが確実となり、遺跡の本調査を行う必要性が生じた。この試掘調査の結果を受けて、大分県総務部総務課と大分県教育庁文化課は幾度か協議を重ね、建設工事の計画の一部を変更し、遺跡の発掘調査を行う準備に入った。3月29日には大分県知事より、文化財保護法第57条の3に基づき遺跡発掘通知が提出された。

新庁舎建設予定地はとりあえず「府内城三ノ丸遺跡」と命名され、発掘調査は大分県教育委員会が主体となり、工事の進捗状況を勘案して次の2次に渡って実施された。第1次調査は庁舎建設予定地の北側約1,800㎡の地点で、平成3年（1991）4月上旬から5月末日まで現地での発掘調査を行った。また、第2次調査は建設予定地の東側約320㎡の地点で、6月上旬から末日まで調査を行った。いずれの調査地点でも近世陶磁器や瓦類の多量の出土が認められ、江戸時代の生活の具体相を考える上で貴重な資料となった。調査終了後、調査地点は記録保存となり、新庁舎建設の本格的な工事が再開された。

なお、今回遺跡名として採用した「府内城三ノ丸」の名称は、当然本地点のみに留まるものではなく、当調査地点を含む広い範囲に及ぶものである。従って将来、府内城三ノ丸における別地点での考古学的調査が増加した場合、本調査地点は「府内城三ノ丸遺跡－大手町3丁目1番1号地点－」などと命名し、他の調査地点と弁別する必要があることが予測されよう。

Ⅱ. 発掘調査区の位置 と歴史的環境

江戸時代の幕末段階における大分県は八藩七領に分割されており、いわゆる「小藩分立」の状況を呈していた。八藩の内容は以下の通りである。すなわち奥平氏10万石の中津藩、能見松平氏3.2万石の杵築藩、木下氏2.5万石の日出藩、大給松平氏2.22万石の府内藩、久留島氏1.25万石の森藩、稲葉氏5万石余の臼杵藩、毛利氏2万石の佐伯藩、中川氏7万石の岡藩である。



第1図 府内藩の領域(分知領を含む)

このうち今回問題とする府内藩は、分知領を含め、現在の行政区分の大分市・別府市・狭間町・庄内町の一部を領有していた(第1図)。この府内藩の歴史を瞥見してみたい。

府内大分は、中世段階においては戦国大名大友氏の統治する地域であった。文禄2年(1593)大友義統(古統)は文禄の役における朝鮮半島での失態を理由に、豊臣秀吉より豊後国を除国されることになる。この後、直ちに太閤検地が実施され、秀吉は豊後国を白らの直轄地(太閤蔵入地)として、豊臣系の武将達を大名兼蔵入地代官として各地へ入部させることとなる。大分郡には早川長敏が入部し、当初家島の地に仮館を構え、その後「大友屋形」を修理して移り住んだといわれる。長敏の在任期間は短く、慶長2年(1597)には、豊後木付(現在の杵築市)に移されている。その後、石田三成の妹婿である福原直高が府内に入部し、府内城の築城などの事業を行った。しかし、直高は慶長4年(1599)の慶長の役の際に軍監(軍事の監督をする役)として出陣したが、その役務に不公平があったとして、徳川家康から改易を命じられた。そして、その後任に再び早川長敏が府内に入ったが、長敏は慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いで西軍方につき、滅亡した。慶長6年(1601)になり、豊後高田から竹中重利が府内に入部した。重利は府内城の増修築と城下町の建設を行い、慶長13年(1608)年には領内の検地を実施している。竹中重利の子重義は、寛永11年(1634)長崎奉行在職中の不正を理由に江戸で切腹を命じられ、竹中氏も滅亡する。同年、下野国(栃木県)壬生城主日根野吉明が府内に入り、浜の市の再興、豪商守田弥之助(山弥長者)一族の処刑、初瀬井路の掘削など、積極的な領国経営を行った。吉明は明暦2年(1656)に病死したが、嗣子がなかったため日根野家も断絶する。その後府内城は江戸幕府の管理下に置かれ、2年間杵築城主松平英親・日出藩主木下俊治・

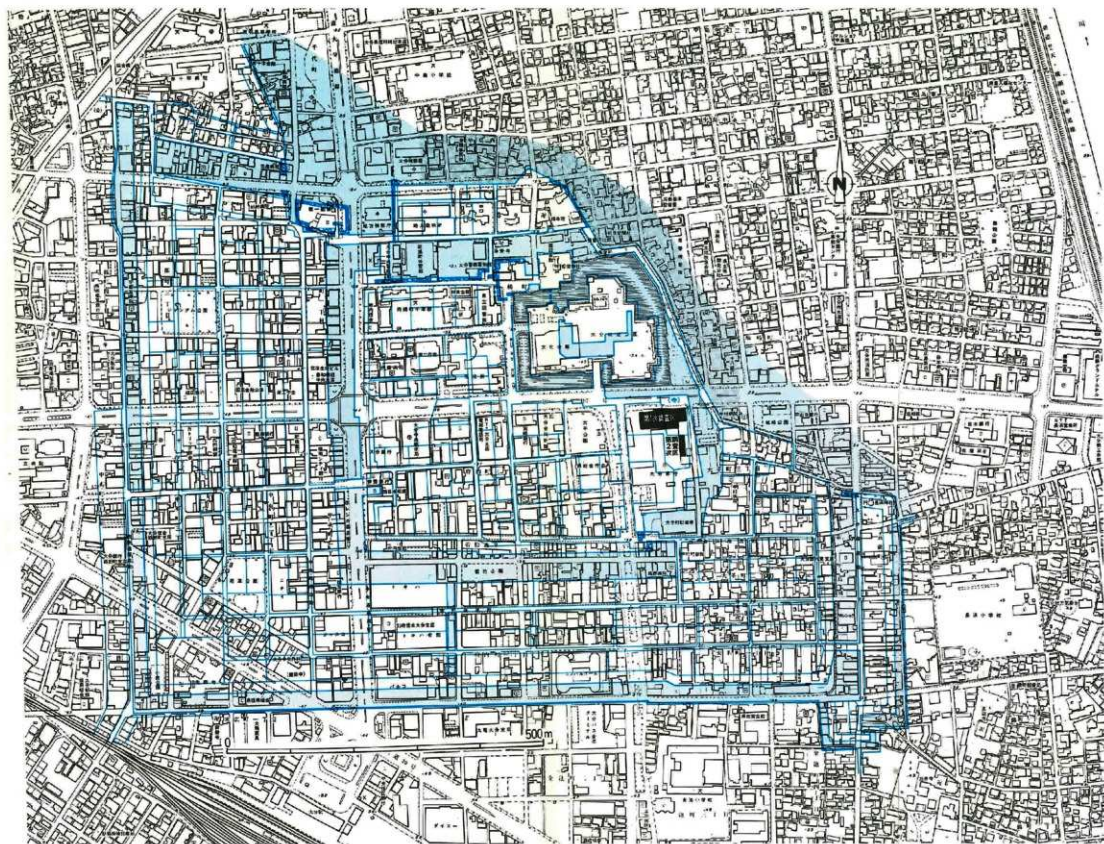


第2図 府内城城下町と周辺地形図 (S=1/25,000)

臼杵藩主稲葉信通が順番で城代を務める。このように17世紀前半代の府内藩は、次々とめまぐるしく城主が替わる混乱の時期であった。そしてこの後、万治元年（1658）豊後高松にいた大給松平忠昭が新藩主となり、以後廃藩置県が行われる明治4年（1871）まで、約210年間10代にわたり大給松平氏が府内藩を領有することとなる。大給松平氏の歴代藩主やその家臣団については、V-（5）を参照されたい。

次に、府内城とその城下町についての歴史を概観しておきたい。前述のように、府内城の築城は慶長2年（1597）における福原直高の府内入部に始まる。直高は入部後すぐに家臣生島新助を伴って、現在の大分市上野の飯盛塚から城地を望み、北方の河畔で俗に「荷落」と呼称されていた場所を築城地と定めた。直高は直ちに築城にとりかかったが、慶長の役で朝鮮半島に出兵し、工事が一時中断する。慶長3年（1598）府内に戻った直高は工事を再開し、慶長4年（1599）には二ノ丸東三重櫓と三ノ丸家臣居敷を完成させている。これに伴い、築城地の地名の「荷落」を「荷揚」と改め、新城を「荷揚城」と命名した。直高の改易後は、竹中重利が府内城の築城を引き継ぐ形となる。慶長6年（1601）府内に入部した重利は、先ず徳川家康の許可を得て府内城の増修築に取りかかる。石垣の築造に当たっては加藤清正に数十人の石工の派遣を願い、大阪や京都伏見から大工や瓦師を招いている。そして、慶長7年（1602）には四層の天守閣と諸櫓・門・三ノ丸堀・後に山里丸となる北西砦が完成して、府内城の中心部分の全容がほぼ完成した。その後は城下町の建設に移り、慶長10年（1605）に外堀を掘削、さらに慶長12年（1607）には城下への入口として笠和口・堀川口・堀九升口の三口御門が設けられた。また慶長13年（1608）には、海上交通の拠点として城下の西北に堀川を掘削し、京泊と命名した。これによって、府内城とその城下町およびその関連施設はほぼ完成を見たことになる。

ここで、府内城三ノ丸や城下町についても簡単に触れておきたい（第3図）。前述の通り、慶長10年（1605）竹中重利により、城下町の外側に外堀が掘削された。これによって、府内城下には合計4つの堀が存在することになった。最も内側の堀は本丸を囲むもので、現在は城址公園内に埋没している。2番目は西丸・東丸を囲む内堀で、現在もその大部分が残存しているものである。3番目の中堀は三ノ丸を囲むもので、南北長256間（約512m）・幅22間（約40m）、東西長269間（約538m）、最大幅21間（約42m）を測る。城下町全体を囲む外堀は「惣構堀」と呼ばれ、南北長8町19間（約946m）・幅19間（約38m）、東西長10町35間（約1,210m）、最大幅15間半（約42m）を測る。府内城城下町は三ノ丸（侍町）の外側の東西10町（約1,100m）、南北9町（約1,000m）の範囲を長方形に区画した町割りをを行っている。町人町数は門内に47町、門外に5町の合計52町を数える。町屋部分の道幅は、一部を除き表通りが約6m、裏通りが約4mを測る。それに対して、府内城三ノ丸（侍町）部分の道幅は最大約20mから最小約2mと画一性がなく、屋敷割りも町屋部分と比較して、やや複雑で不統一な地割を呈している。これらは防衛上の理由からであろう。



第3図 府内城下町と調査区位置図 (S=1/6,000)

府内城下を描いた現存する絵図の中で、最も精緻なものは大分大学付属図書館の所蔵する慶長10年（1605）に作成された「府内城下絵図」（この後、慶長絵図と略称）である。しかもこれは現存する絵図の中で、最も古い時期に製作されたものでもある。今回の発掘調査地点は、この慶長絵図でいえば府内城三ノ丸北東端部の「寺」と書かれた部分とそれに隣接するやや変則的な屋敷割りをも有する部分に相当する（第3図参照）。文久3年（1863）製作と伝えられる「豊後府内藩御家中名前付」を参考にすると、この「寺」は福寿院、屋敷は府内藩用人木村秀馬の武家屋敷であったことが判明する。ここで注意しなければならないことは、慶長絵図が作成されたとされる慶長10年（1605）は竹中重利の治世下に相当しており、この時期には福寿院は当該地点に存在していない。慶長絵図に「寺」と書かれている地点は『関本家文書』所収の「豊後府内三ノ丸屋敷間数覚」によると、竹中時代には駒井庄助という武士の屋敷であったことが記されており、文献と絵図との記載の間に食い違いがみられる。慶長絵図の製作時期を記した「慶長拾年十一月」の文字が、実は付箋で貼り込まれていることや絵図に描かれた屋敷割りが、後の大給松平氏の治世時のものと基本的には細部に至るまでよく一致していることなどと考え併せて、この絵図の製作年代についてはさらに今後の検討が必要であろう⁽¹⁾。また府内城下町を描いた絵図の問題についても、V-（5）の佐藤晃洋論文も併せて参照されたい。

以上、ごく簡単であるが府内藩の歴史と府内城およびその城下町の状況を概観してきた。今回の発掘調査は、府内城下に初めて発掘調査のメスを入れたものであり、文献の記載を傍証したり、文献に現れない近世の生活の具体像を知るうえで多大な成果が得られている。近世遺跡の調査に共通の問題であるが、遺跡の領域が現在の市街地とほぼ重複することから、現場での発掘調査には困難が多いが、今後とも近世遺跡の考古学的な調査を蓄積することが重要であると考えている。

註(1) 慶長絵図の問題については佐藤晃洋氏、玉永光洋氏より多大な御教示を受けた。

（参考文献）大分市史編纂審議会編『大分市史』上・下巻（1955年）

大分県総務部総務課『大分県史』近世篇Ⅱ（1985）

大分市史編さん委員会『大分市史』中（1987年）

株式会社大分放送『大分歴史事典』（1990年）

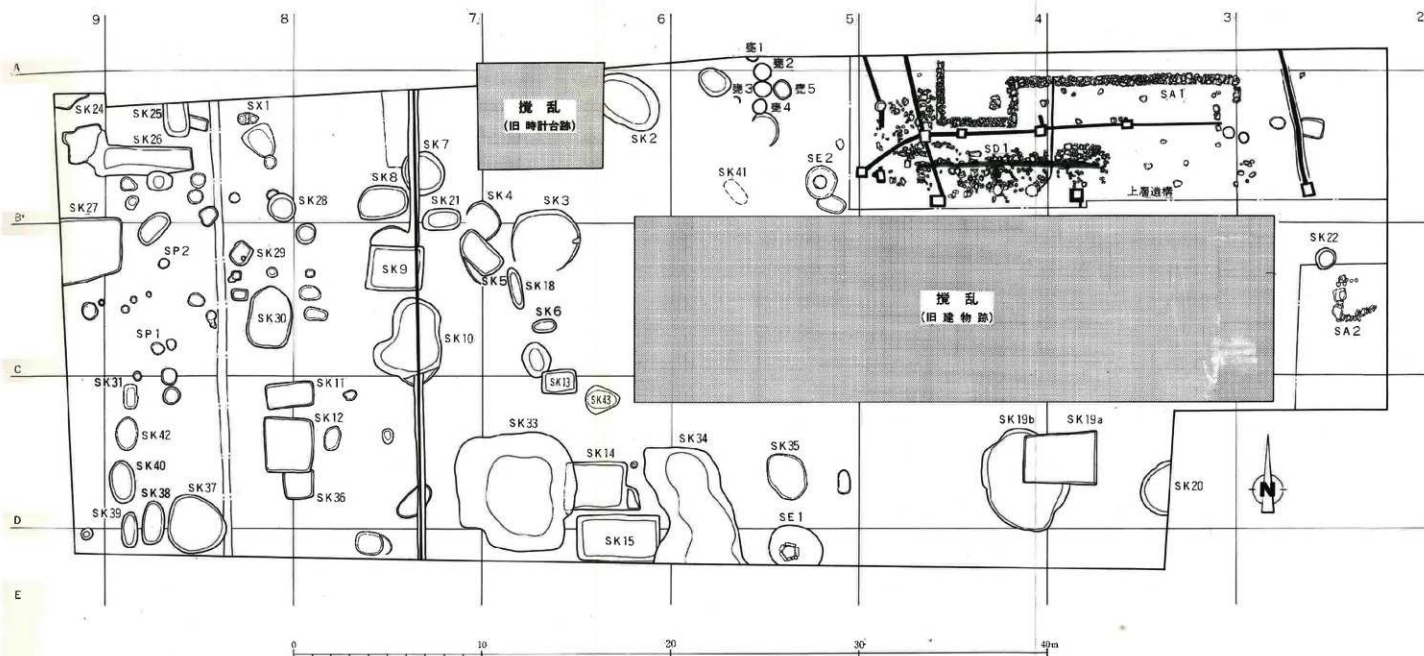
Ⅲ. 発掘調査の成果

(1) 調査の概要

慶長10年(1605)作成といわれる「府内城下絵図」(大分大学付属図書館蔵)および文久3年(1863)作成といわれる「豊後府内藩御家中名前付」を参考にと、今回の調査地点は府内城三ノ丸の中でも、藩主大給松平氏の祈祷所から発展した福寿院という寺院や府内藩の上級武士木村氏の武家屋敷が存在した場所であったことが判明する。福寿院や木村家の詳細については、V-(5)の佐藤見洋論文を参照願いたい。竹中時代・日根野時代を含めて本調査地点付近の沿革を概観すると、第1表のようになる。

木村家武家屋敷	福 寿 院
1601-1633頃 不破茂左衛門 1634-1657頃 中村内匠	1601-1633頃(竹中時代) 勝井庄助 1634-1657頃(日根野時代) 片田友右衛門 1657頃 三輪市兵衛
1658-1675頃 松平空之助	万治元年(1658) 福寿院本調査地点 付近に移転する。
延宝4年(1676) 木村主水成備、 本調査地点付近に 屋敷替えとなる。	(参考) 万治元年(1658)木村又三郎 松平忠昭入府に当たり、 三ノ丸内に屋敷を構える。 (現在の宮崎銀行付近)
宝永4年(1707) 宝永大地震で被災 門などが倒れる。	宝永4年(1707) 宝永大地震で被災。
寛保3年(1743) 寛保大火で被災。	寛保3年(1743) 寛保大火で被災。
享保4年(1804) 文化2年(1805)	木村蔵人屋敷地の一部を福寿院9世丁義上人の隠宅にする。 丁義上人入寂により隠宅を取り壊す。 屋敷地は木村家に戻る。
この頃木村家 屋敷引き払い	明治2年(1869) 阪神奉還により藩主が城外に屋敷地を設けること となり、福寿院がその候補となる。 明治3年(1870) 福寿院移転
明治9年(1876)	大分県師範学校設立。
明治18年(1885)	師範学校北隣に大分県立大分中学校設立。
明治33年(1900)	大分県高等女学校設立。
明治41年(1908)	大分県女子師範学校が大分県高等女学校に並立する。
昭和5年(1930)	大分県立第一高等女学校・第二高等女学校設立。
昭和20年(1945)	戦災により女学校校舎などが焼失。
昭和29年(1954)	大分県電気局庁舎設立。

第1表 調査地点付近の変遷



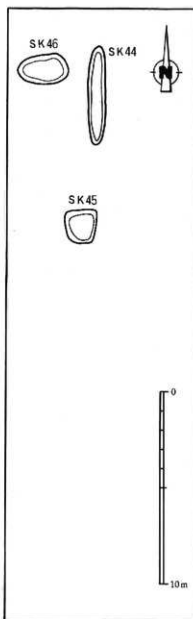
第4図 第1次調査区全体図 (S=1/200)

発掘調査は新庁舎建設工事の計画を勘案して、2次に分けて行った。第1次調査区は庁舎建設予定地北側部分に当たり、調査面積は約1,800㎡である。第1次調査区は調査区全体の測量と遺構実測の便をはかるため、建設予定の建物の主軸方向に沿って10m×8mのメッシュを設定した。そして、メッシュ1区画を東西方向では東側より1～9、南北方向では北側よりA～Eの名称を与えた。これによって第1次調査区の小区画は、例えばB-7区、C-4区などと呼称されることになる。この地区の表土剥ぎは、大型重機を搬入して調査区の東側より開始した。この結果、旧企業局建物が存在したC-3～5区付近および旧時計台が存在したB-6区付近は大きく攪乱を受けている状況であった。しかし、B-3・4区およびC-2区では表土下約20～30cmの深さで石列と思われる遺構(SA1・SA2)を検出したため、表土剥ぎをとりあえずこの深さで留めた。第1回目の表土剥ぎ終了後は人力による石列遺構SA1・SA2の精査と調査区の数箇所に任意のトレンチを設定して調査区全体の土層の検討とを併行して行った。調査が進行するに従って、石列遺構SA1上面にはコンクリートが使用されていることが判明し、現代以降の遺構である可能性が高くなった。またSA1の検出過程で、石組みの溝SD1を検出した。SD1はこの段階では構築時期を明確にすることができなかったが、周辺の出土遺物から幕末以前に遡る可能性が考えられた。これらの遺構のうち、B-3・4区に存在するSA1・SD1などは、この後「上層遺構」と呼称することにする。次に人力によるトレンチ調査では、上層遺構の存在する地点を除いて、近代以降の所産になる遺物やコンクリートなどを含む層が以外に厚く、江戸時代以前と思われる層は、表土下約1m付近の砂質土層のみであった。以上の調査所見から、再び大型重機を搬入して、上層遺構の検出された地点を除いて砂質土層上面のレベルまでの層を取り除いた。その後人力による遺構検出を行ったところ、近代以降のガス管や掘り込みによる攪乱を数箇所であらわしたものの、土坑43基、井戸2基のほか柱穴などを検出した。後述するが、これらの遺構のうちSK33およびSK34からの出土遺物には「木村」の焼印文字を有するものが認められ、当該遺構の存在する地点付近が木村氏の武家屋敷であることが傍証された。このSK33およびSK34の出土遺物には磁器のほかにも土瓶類や行平鍋などが大量に認められ、これらは陶磁器類の生産された年代観から、明治初年以降の木村家の屋敷引き払いに伴うものである可能性が高い。また、SK14・15から出土した遺物には大皿や複数個体で1セットとなる猪口や皿類および中国産の陶磁器類が多数出土した。しかもその出土遺物の大部分は高熱による変形や溶着が認められ、これらは遺物の年代観から寛保3年(1743)に起こった「寛保の大火」と呼ばれる大火災に関連付けられる可能性が高いものと考えられる。第1次調査区では、絵図などの検討によると、福寿院と木村氏の武家屋敷の境界部分が存在するはずであるが、その境界を遺構として明瞭につかむことはできていない。ただ遺物の接合関係や遺構の分布の状況から、調査区の4～5区間の南北ライン付近がその境界に相当する可能性が高い。このことについてはIV-(3)で、詳述したい。

第2次調査区は庁舎建設予定地東側部分に当たり、調査面積は約320㎡である。調査面積が狭く、検出された遺構も少ないので、第1次調査区で行ったような小区割りは設定していない。第1次調査区での所見より、大型重機を搬入して砂質土層上面までの層の除去を行った。当調査区は削平が著しく、調査区北半部において土坑3基を検出したに留まる。ただし、この土坑の中のひとつであるSK44より「モロ 木村九郎次様」と判読できる可能性の高い焼継文字を有する肥前産の染付角鉢が出土している。調査区の位置とも考え併せて、SK44付近が木村家の裏屋敷部分であることを傍証するものであろう。

以上が府内城三ノ丸遺跡での調査の概要であるが、今一度各調査区で出土した遺構数をまとめると、以下のようになる。

- | | |
|--------|-----------------------------|
| 第1次調査区 | 土坑43基 (SK1~43) |
| | 井戸2基 (SE1・2) |
| | 柱穴2 (SP1・2) |
| | 埋甕遺構5 |
| | 石列遺構2 (SA1・2) |
| | 石組み溝1 (SD1) |
| | 不明遺構 (SX1) |
| | このうちSA1・SD1は上層遺構と呼称することがある。 |
| 第2次調査区 | 土坑3基 (SK44~46) |



第5図 第2次調査区全体図(S=1/200)

(2) 遺構

①土坑 土坑は第1次調査区において44基、第2次調査区において3基が検出されている。

土坑の所属年代は埋土中に含まれる土器・陶磁器類の製作年代を基本として、次の7期8小期に分類した。

0期 江戸時代以前（当遺跡では13世紀後半の遺物が相当する。）

I期 16世紀末から17世紀初頭 II期 17世紀前半から後半

III期 17世紀末から18世紀中頃 IV期 18世紀後半

Va期 18世紀末から19世紀前半 Vb期 19世紀前半から中頃

VI期 19世紀後半以降

土坑埋土中より一括遺物として得られたものの中には、製作年代に新古の混ざりが認められるものかなり存在する。その場合は考古学の基本にもとづいて、明らかに混入と考えられるものを除き、製作年代が最も新しい遺物の年代を土坑の所属年代とした。また出土遺物の総量が少ないために、詳細な時期を特定できない土坑も存在する。以下、いくつかの土坑についての記述を行うが、紙幅の関係で個々の土坑すべての解説や大縮尺の実測図の提示ができていない。記述に漏れた土坑の詳細は、第4・5図に示した調査区全体図や第2表の記載に譲りたい。

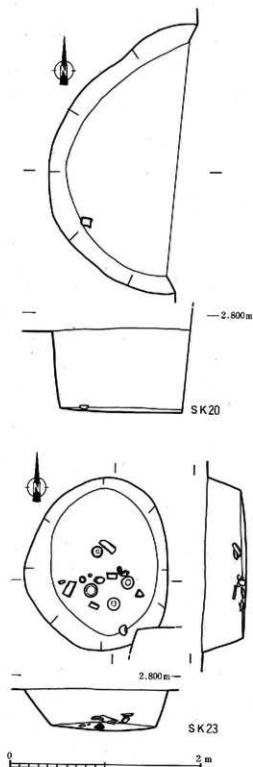
時期	土坑番号	位置	規模(m)	深さ(m)	埋土・性状・土坑の性格
0	SK30	C-8	3.2×2.3	0.3	不明
I	SK20	D-3	径2.8	0.85	不明
	SK23	D-6-D-6	1.8×1.5	0.45	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
II	SK29	C-8	1.2×1.05	0.2	土坑蓋?
	SK31	D-8	1.35×0.7	0.5	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK32	A-5-B-5	1.7×1.3	0.25	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK35	D-5	2.5×2	0.2	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK36	D-7-D-8	1.6×1.5	0.2	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK42	D-8	2.95×2.05	0.15	樹木の根を多量に含む木の板か?
	SK8	B-7-C-7	2.7×1.7	0.25	焼土含む・火災処理土坑?
	SK11	D-7-D-8	2.5×1.3	0.4	焼土含む・火災処理土坑?
III	SK14	D-5-D-6	3.3×2.3	0.2	焼土含む・火災処理土坑
	SK15	D-5-D-6 E-5-E-6	4.4×2.3	0.25	焼土含む・火災処理土坑
IV	SK1	A-5-B-5	径1.5	0.2	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK4	B-6-B-7 C-6-C-7	径2	0.1	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK9	C-7	3×2.4	0.35	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK12	D-7-D-6	3×2.5	0.35	焼土含む・火災処理土坑?
	SK19a	D-3-D-4	3.85×2.6	0.6	墓ト蓋?
	SK19b	D-3-D-4	5.2×4.7	0.6	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK25	B-8	1.4×1.35	0.2	焼土含む・火災処理土坑?
	SK26+	B-9-B-9	5.5×1.5	0.6	焼土含む・火災処理土坑?
	SK38	D-8-E-8	2.3×2	0.15	遺物少量 廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
V	SK2	B-6	3.5×2.5	0.5	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK3	B-6-C-6	径3.5	0.2	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
Vb	SK5	C-6-C-7	3×1.6	0.2	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK7	B-7	径2.3	0.75	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK10	C-7	4×3.6	0.5	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK16	B-2	0.8×0.7	0.2	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK22	C-2	径1.1	0.9	瓦を多量に含む・不明
	SK33	D-6-D-7	6.2×5.5	0.9	木村家屋敷引き払いに伴う 廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK34	D-5-E-5	6.3×5.1	0.4	木村家屋敷引き払いに伴う 廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK39	D-8-E-8	1.8×0.7	0.25	遺物少量 廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK44	第2次調査区	5.3×0.9	0.3	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK45	第2次調査区	1.8×1.6	0.3	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
VI	SK13	C-6-D-6	1.85×1.3	0.45	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK17	B-2	1.5×1.1	0.3	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK18	C-6	2.25×0.65	0.4	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK21	B-7-C-7	2×1.2	0.35	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK27	B-8-B-9	3.5×3	0.4	コンクリート含む・廃棄土坑?
	SK37	D-8-E-8	2.2×2	0.3	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK41	B-5	不明	不明	不明
	SK46	C-6	1.25×0.65	0.2	遺物少量 廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK24	A-9-B-9	2×0.7	0.2	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
	SK28	B-8	径1.45	0.6	遺物少量・不明
VII	SK40	D-8	2.4×2.65	0.4	樹木の根を多量に含む木の板か?
	SK42	D-6	1.85×1.55	0.3	廃棄土坑(ゴミ捨て穴)
第2次調査区	SK46	第2次調査区	2.6×1.6	0.3	廃棄土坑(ゴミ捨て穴) 瓦を含む

第2表 土坑一覧

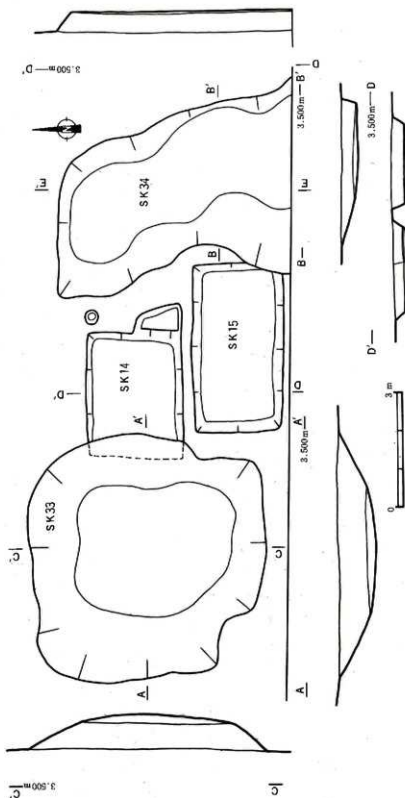
SK20 (第6図) はD-3区に位置する平面形態が略円形を呈する土坑である。調査区の制限より遺構全体の2分の1程度での検出に留まっている。土坑の規模は径2.8m、深さ0.85mを測る。土坑底面から福岡産と思われる陶器壺、埋土中から「手捏ね」手法による土師質土器が出土している。出土遺物の年代から、I期に位置づけられる土坑である。出土遺物については25頁参照。

SK23 (第6図) はC-6・D-6区に位置する平面形態が略楕円形を呈する土坑である。南東隅は近代以降の遺構であるSK13から切られている。長軸1.8m、短軸1.5m、深さ0.45mを測る。土坑底面近くから「手捏ね」手法による土師質土器や焼塩壺、唐津系陶器皿、備前系陶器大平鉢、丸瓦破片等が出土している。I期の良好な資料である。出土遺物については23頁参照。

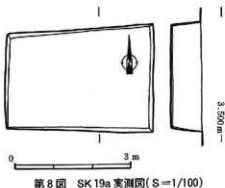
SK14・15 (第7図) はIII期に属する土坑である。SK14はD-5・D-6区に位置しており、平面形態は長方形を呈する。長辺3.3m、短辺2.3m、深さ0.2mを測り、西辺は幕末前後の時期の遺物を多く含むSK33から切られている。SK15はD-5・D-6・E-5・E-6区に位置しており、平面形態はやはり長方形を呈する。長辺4.4m、短辺2.3m、深さ0.25mを測り、南東隅はやはり幕末前後の時期の遺物を多く含むSK34から切られている。両者の埋土は単一の焼土層である。出土遺物は陶磁器・瓦類が多量に認められるが、両土坑で出土したものが相互に接合するものが多く、その大半が二次的な被熱を受けている。陶磁器類は複数個体で一組みとなる猪口



第6図 SK20・SK23実測図(S=1/40)



第7圖 SK 14・SK 15・SK 33・SK 34実測図(S=1/100)



第8図 SK19a 実測図(S=1/100)

SK19a(第8図)・19bは、D-3・D-4区に位置する切り合い関係にある2つの土坑である。構築順序はSK19a→SK19bとなるが、両者の出土遺物には明確な様相の違いは認められない。このうちSK19aは平面形態が長方形を呈し、長辺3.85m、短辺2.6m、深さ0.8mを測る。埋土は単一の粘質黒色土で、多量の炭化物を含んでいる。土坑の平面形態は比較的整っており、当該遺構は本遺跡で多くみられる単なる廃棄土坑(ゴミ捨て穴)とは異なり、「地下室」あるいは「地下式土坑」、「地下式坑」と呼ばれる火穴である可能性が高い。SK19aとSK19bとが切り合い関係にある部位では、両者の埋土は明瞭な不整合をなしており、いずれの埋土中からも多量の陶磁器類・瓦類の出土が認められる。土坑の時期はⅣ期に属する。出土遺物については52頁参照。

SK33(第7図)は、D-6・D-7・E-6・E-7区に位置する大型の土坑である。長軸6.2m、短軸5.5m、深さ0.9mを測る。西側ではSK14と切り合い関係を有している。埋土中には多量の陶磁器類・瓦類が認められる。陶磁器類には幕末前後に比定される遺物が多く、その中には焼継のあるものも認められる。焼継のあるものの一部には、内底部に朱書きによる「木村」の焼継文字が認められるものも存在する。この資料から、当該遺構付近に府内藩の上級武士である木村家屋敷地の存在を考古学的に裏づけることになった。また、陶磁器類には急須・土瓶類や行平鍋などの個体数が極めて多いことも特徴的である。土坑の時期はⅤb期に属する。陶磁器類の年代観や数量およびその組成から、この遺構は明治初年以降の木村家屋敷引き払いに伴う廃棄土坑である可能性が高い。出土遺物の詳細については88頁参照。また木村家の沿革の詳細については、Ⅴ-(5)参照。

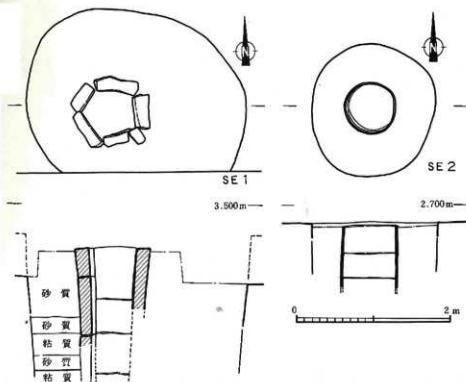
SK34(第7図)は、D-5・E-5区に位置する大型の土坑である。調査区の制限により、土坑全体を検出していない。検出部分の長軸6.3m、短軸5.1m、深さ0.4mを測る。埋土中には多量の陶磁器類・瓦類が認められる。出土遺物の様相は幕末前後のものが多く、また「木村」の焼継文字が認められる資料も存在する。この土坑もSK33と同様Ⅴb期に属し、明治初年以降の木村家屋敷引き払いに伴う廃棄土坑である可能性が高い。出土遺物の詳細については120頁参照。

や火皿、および中国産のものなどが認められ、いわゆる「上手物」といわれる比較的高級なものも認められる。皿類や猪口の中には、高温により数個が重ねられた状況で溶着したものも存在する。陶磁器類の年代からみて、当該遺構は寛保3年(1743)に発生した「寛保の大火」と呼ばれる火災の処理に伴う土坑である可能性が高い。出土遺物の詳細については28頁参照。

SK44は、第2次調査区に位置する平面形態が略楕円形を呈する土坑である。長軸5.3m、短軸0.9m、深さ0.3mを測る。埋土中には多量の陶磁器・瓦類が出土しており、陶磁器の中には「モロ 木村九郎次様」と判読できる可能性の高い焼継文字を持つ肥前産角鉢なども認められる。この資料の存在により、第2次調査地点付近が木村家の裏屋敷部分であったことを裏付けている。土坑の時期はVb期に属する。出土遺物については84頁参照。

②井戸 井戸は第1次調査区において、2基が検出されている。

SE1(第9図) E-5区で検出した井戸である。検出面での掘方は、直径約2.9mを測る不整形形を呈する。井戸側は掘方中央よりやや西に偏して検出され、砂岩系の板状加工材を6枚、部位によっては7枚配置し、六角形状の水溜部を形成している。掘方と井戸側の間には、砂質土と粘質土を交互につぎ込んで板状加工材の安定を図っている。検出面より約1.2m掘り下げたところで湧水が著しくなり、また井戸側石材の崩落の危険が生じたため、人力による掘り下げと図面の作成を断念した。その後、重機による断ち割り調査を行ったところ、井戸側の石材は6段に渡って組まれており、その下部に木材を組んだ水溜部が存在することを確認した。しかし周辺の土層が極めて脆弱であることや木製の水溜部が検出面より約3.2mの深さに位置するため、調査員の安全性を最優先に考え、追加の図面作成は行っていない。井戸側内部や掘方埋土中からの出土遺物はなく、構築時期は確定できていないが、幕末以前に遡る可能性は残る。



第9図 SE1・SE2実測図(S=1/50)

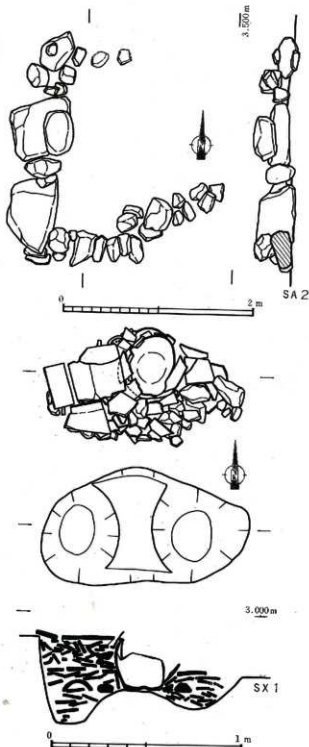
SE 2 (第9図) B-5区で
検出した井戸である。掘方は直径約
1.6mを測る円形を呈する。井戸側は
掘方中央で検出され、その径は0.65
mを測る。井戸側には素焼の円筒が
三段以上組まれているのを確認した
が、それ以下の掘り下げを行ってい
ない。井戸側内部からは明治以降の
陶磁器少量のほか、コンクリートブ
ロックなどが出土した。Ⅵ期以降に
比定される遺構である。

③石列遺構 SA 2 (第10図)

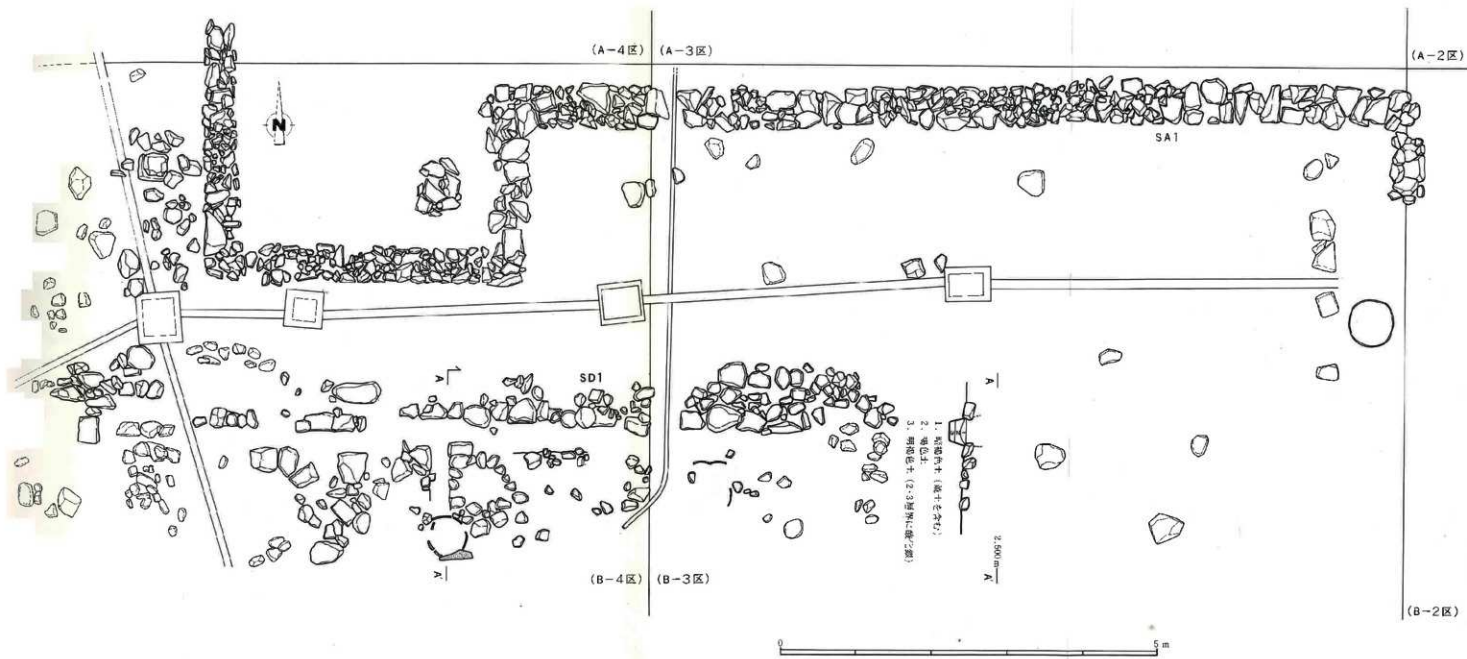
C-2区に位置する川原礫をコの字
状に並べた石列遺構である。周辺か
らの出土遺物に良好なものはなく、
幕末以前のものが多く認められる傾
向があるが、近代以降の遺物も出土
している。遺構の年代は特定できな
いが、幕末以前に遡るものであれば、
その位置関係から、福寿院の何等か
の施設である可能性も考えられる。

④不明遺構

SX 1 (第10図) B-8区に
位置する遺構である。ピットがふた
つ連結したような平面形態を有する
掘方中央部に、合わせ口にした陶器
の甕と鉢を設置する遺構である。掘
方と甕の間には、陶器を固定するた
めに瓦や礫を充填している。鉢の底
部には穿孔を有する。遺構の性格は
明らかにできていない。出土した陶
器の製作年代はⅥ期以降である。出
土遺物については、147頁参照。



第10図 SA 2・SX 1実測図
(SA 2は1/40、SK 1は1/20)



第11图 上層遺構実測図

⑤埋壺遺構 A-5・B-5区で集中して5基発見された。いずれも最大径1.2m前後を測る大壺を正位で埋置した遺構である。大壺は上面を削平され、口縁部の残存するものは認められなかった。また壺自体も劣化が著しく、取り上げ時や洗浄時に破損して復元不可能となっており、実測図を提示できていない。ただ壺5の内部からは、ほぼ完形に復元される陶器の浅瓶が出土している（実測図は120図参照）。遺構や出土遺物の状況から、「便所」遺構と推定される。詳細な時期決定はできないが、Ⅵ期以降に比定されるものであろう。

⑥ピット 柱穴と思われる遺構で、出土遺物が認められるものはB-8区で検出された2基に留まる。SP1は径0.1m、深さ0.6mを測り、埋土中より川原石と図化不能の須恵器破片が出土した。SP2は径0.1m、深さ0.8mを測り、埋土中より土師質土器が出土した。土師質土器の特徴より、Ⅰ～Ⅱ期に位置づけられる遺構と思われる。出土遺物については、147頁参照。

⑦上層遺構 整地層上に造営された遺構群である。この遺構面には石組み遺構や埋壺、石列などが認められ、17世紀後半以降第二次世界大戦前後までの遺物が出土している（出土遺物は148頁参照）。整地層の造営年代は、出土遺物の量的な検討から幕末以降に位置づけられる。近年の土管等の造営で攪乱を受けている部分が多く、遺構の残存状況は良好とは言えない。本項で紹介する遺構は、石列遺構SA1、石組み溝SD1である。

SA1（第11図） A・B-2・3・4区に位置する角礫を並べた石列遺構である。平面形態は柄杓状を呈するもので、幅約0.5m、総延長約23mを測る。石列上面には、一部にコンクリートの付着が認められる部分が存在する。何等かの建物の基礎に相当する部分と思われるが、その性格を明らかにすることはできなかった。コンクリートの使用から、Ⅵ期以降に位置づけられるものであろう。

SD1（第11図） B-3・B-4区に位置する頭大の川原礫を並べた石組み溝である。石組みは本来数段の石を組んでいたものと思われるが、上面が削平を受け、一段のみが残存する部分がほとんどである。土管などの構築による攪乱を受け、残存状況は良好とはいえないが、内法幅約0.5m、深さ0.35m、延長約12mを測る。また、B-3・4区の境界ラインより西へ約4mの所でT字状に屈曲する部位があり、その部分の残存長は0.9mを測る。また、溝の周辺には瓦や拳人の石を円形に囲った遺構なども認められたが、その性格を明らかにすることはできなかった。溝の埋土は大きく3層に分層され、上層は焼土・炭化物の混入層、中層は暗褐色砂質土、下層は茶褐色粘質土である。中層下面と下層上面の間には酸化鉄が付着しており、埋土の性状を合わせて考えると、流水が認められた可能性が高い。埋土中からは陶磁器類や瓦の破片が少量出土しているが、図化できるものはない。ただ出土遺物中に幕末以降のものは認められないようであり、SD1の構築時期はⅤ期前後に比定できる可能性が高い。この想定が正しいとすると、遺構の検出位置の関係から、当該遺構は福寿院の何等かの建物に伴う雨落ち溝のような機能が想定されるが、最終的にそれを断定する材料を得ることはできなかった。

(3) 出土遺物

①土器・陶磁器類

土坑 前述の通り、土坑出土遺物をⅠ期からⅥ期の合計7期8小期に大別している。重複を恐れずに、各期の内容を示す次の通りとなる。

Ⅰ期	13世紀後半代	Ⅱ期	16世紀末から17世紀初頭
Ⅲ期	17世紀前半から後半	Ⅳ期	17世紀末から18世紀中頃
Ⅴa期	18世紀末から19世紀前半	Ⅴb期	19世紀前半から中頃
Ⅵ期	19世紀後半以降		

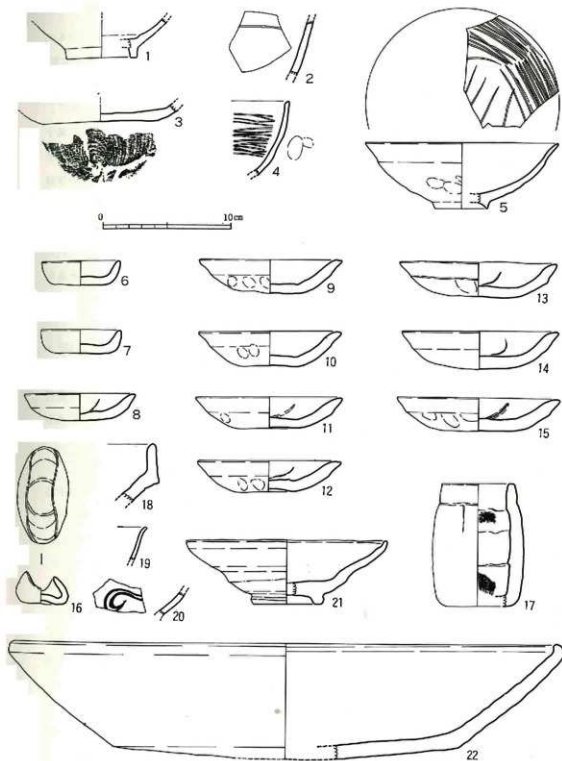
以下、年代順に土坑出土の土器・陶磁器類の紹介を行う。

【Ⅰ期（13世紀後半代）】

SK30 第12図-1は中国産青磁碗底部。底部付近の内面に段を有し、高台部は露胎となる。2は中国産青磁碗の胴部破片。内面に片彫り文様の一部が認められる。3は土師質土器杯の底部。外面には右回転の糸切り痕を有する。4は瓦器碗の口縁部。内面にヘラミガキ、外面に指頭痕が認められる。調整や胎土のあり方から在地産のものである可能性が高い。5も瓦器碗で、形態の特徴は和泉型瓦器碗に類似する。ただし胎土や器面調整の細部などは、典型的な畿内産の瓦器碗と比較するとやや乱雑であることは否めず、産地の比定は保留しておきたい。内面にはやや乱雑なヘラミガキ、見込み部分には平行線状のヘラミガキが施され、口縁外周付近にもわずかにヘラミガキが認められる。胴部外面には指頭痕が目立つ。高台は三角形状になる。尾上実⁽¹⁾による和泉型瓦器碗の編年を参照すると、器形や器面調整の特徴はⅡ-2期に属する13世紀中葉以降のものに類似する。以上、SK30の出土遺物は13世紀中葉から後半代に収まる。

【Ⅱ期（16世紀末から17世紀初頭）】

SK23 第12図-6-15は、土師質土器小皿。いずれも底部に糸切り痕を有することのない、いわゆる「手捏ね」手法による整形によるものである。口径より4類に分類される。A類(6・7)は口径6.3cm前後、器高1.8cm前後を測る最も小型のもので、底部よりやや開き気味に口縁が立ち上がるものである。B類(8)は、口径8.8cm前後、器高2.1cm前後を測る。口縁部付近に強いナデを施すため、胴部との境が段となって残る。内面には「手捏ね」手法に特有にみられるナデの終点が痕跡として残る。C類(9-12)の特徴はB類と同様であるが、口径11.2-11.6cm、器高2.4-2.6cm前後とやや大きめの器形となる。D類(13-15)は、B・C類よりさらに大きく、口径12.4-12.6cm、器高2.6-2.9cm前後を測る。この土坑で得られた一括資料では、A～C類には内面にススの付着が認められず、D類のみにそれが認められた。従って土師質土器A～C類は「食器」として使用され、D類は「灯明皿」として使用されていたものであろう。土師質土器小皿は口径が半割以上残存するもののみを图示したが、これ以外にも



第12図 SK 30・SK 23出土遺物 (S=1/3)

1～5 SK 30 6～22 SK 23 (SK 30は0期、SK 23はⅠ期)

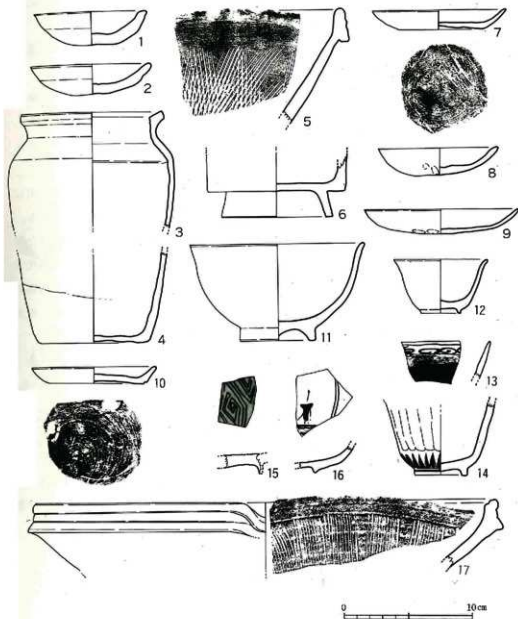
A類が1片、B類が10片、D類が4片認められるほか、いずれの分類に属するのか不明のものが数片存在する。16は耳皿の完形品で、「箸置」としての機能を持つものである。17は焼塩壺。上部部がややすぼまる筒状の胴部を有し、そこから口縁が直線的に立ち上がる器形となる。口縁部から底部までが残存するが、全体の3分の1程度の破片である。渡辺誠によるA類⁽²⁾、両角まりによるA-a 1類⁽³⁾、小林謙一によるI a期⁽⁴⁾、田中一廣によるI段階⁽⁵⁾に属するもので、残存部に刻印は認められず、無刻印の焼塩壺である可能性が高い。製作年代は16世紀末から17世紀初頭に比定される。他に別個体の小破片が数個存在する。18は備前系陶器掬鉢の口縁部で、16世紀代の製品である。19は中国産白磁碗の口縁部で、これも16世紀代の製品。20は肥前唐津系陶器鉄銚皿である。製作年代は1580～1610年代。21は肥前唐津系陶器皿。見込みに目積みの痕跡が認められないが、おそらく胎土目積みのものであろう。1580～1610年代に比定される⁽⁶⁾。22は備前系陶器の平鉢である。S K 23の出土資料は、小片で混入品である可能性がある18・19を除き、製作年代の比定できるものはすべて17世紀初頭までで収まる。これらの資料の意義については、IV-(1)でさらに検討したい。遺構の詳細は、14頁参照。

S K 20 第13図-1・2は、土師質土器小皿。口径はそれぞれ8.9cm・9.4cm、器高は2.4cm・9.4cmである。「手捏ね」手法による整形で、器形・調整の特徴はS K 23で検出されたものと同様である。内面に僅かではあるがスガが付着しており、灯明皿として使用された可能性が高い。3・4は福岡産の陶器壺。接合しないが、同一個体であろう。製作年代は16世紀末から17世紀初頭に位置づけられる。遺構の詳細については、14頁参照。

【II期（17世紀前半から後半）】

S K 32 第13図-5は、陶器の掬鉢である。内面には7本一単位の櫛状工具で、交差するように掻目をつけている。製作地は不詳であるが、福岡産のものである可能性が高い。製作年代は17世紀前半代に位置づけられる。6～9は土師質土器であるが、個体ごとに特徴が異なる。6は口縁部を欠損するが、台付の鉢形を呈するものと思われる。仕上げの調整が非常に丁寧で、特に外面は光沢を持つほどにミガキ上げられている。7はロクロ整形の小皿である。ロクロの回転方向は右回転で、糸切り痕のほかに圧痕が認められる。8は「手捏ね」手法による整形の小皿である。口縁外面のナデが弱いので、口縁部と胴部の境の段を形成するに至っていないが、基本的にはS K 23やS K 20などで出土したものと同様のものである。9も非ロクロ整形の小皿であるが、7と比較すると器壁が薄く、口縁部と胴部の境の段も認められない。従って、S K 23やS K 20などの「手捏ね」手法による整形の土師質土器とは別系統のものであろうと思われる⁽⁷⁾。他に図示できていないが、外面に鉄釉と白化粧土を施した火容れと思われる唐津系陶器の底部（17世紀代の製品）が出土している。S K 32からの出土資料で製作年代を確定できるものは5のみであるが、他の遺物もおおむね17世紀前半代に位置づけられよう。

S K 29 第13図-10は、土師質土器小皿。口径9.8cm、器高1.3cm、底径7.4cm。底部には右



第13図 SK 20・SK 32・SK 29・SK 35・SK 42・SK 36・SK 31出土遺物(S=1/3)
 1～4 SK 20 5～9 SK 32 10 SK 29 11 SK 35 12 SK 42 13・14 SK 36 15～17 SK 31
 (SK 20はⅠ期、他はⅡ期)

回転の糸切り痕が認められる。中世のものである可能性も残るが、10cm前後の口径を持つことから、当該時期に位置づけた。

SK 35 第13図-11は肥前唐津系陶器碗で、いわゆる「呉器手碗」と呼ばれる形態を呈する。高台疊付部に三箇所の砂目積みが認められ、製作年代は1600～1630年代に比定される。佐

賀県藤津郡嬉野町内野山北窯 S M025-2・3 陶⁽⁸⁾ (内野山Ⅰ期=17世紀前半)に類例がある。

S K 35からの出土遺物で、図化できるものは当該資料のみである。

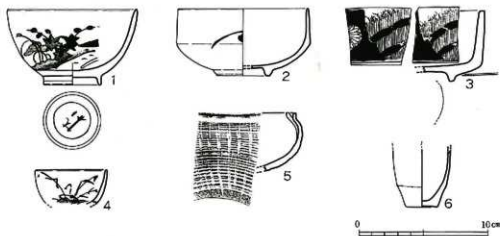
S K 42 第13図-12は肥前白磁小坏で、17世紀後半の製品である。S K 42からの出土遺物で、図化できるものは当該資料のみである。

S K 36 第13図-13は肥前染付碗の口縁部。外面には透明釉と鉄釉をかけ分けて、装飾を施している。製作年代は1630～1650年代。14は肥前染付小坏で、製作年代は1630～1640年代。S K 36からの出土遺物は図示した2点以外認められず、遺構の年代としては17世紀中頃前後を考えておきたい。

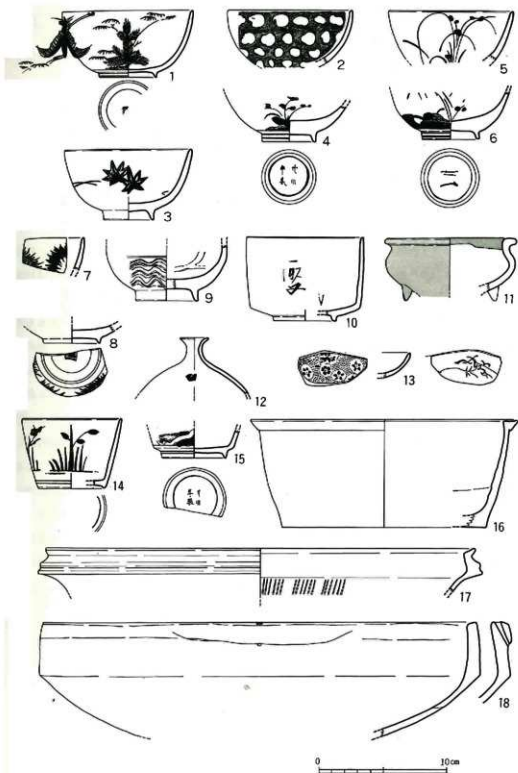
S K 31 第13図-15は肥前青磁皿底部。見込み部分に型打ち整形によって偕文を打ち出している。1630～1640年代の製品である。16は肥前染付皿底部。高台・疊付部のみが露胎となる。製作年代は1640～1660年代に比定される。17は内面に12本一単位の櫛状工具で掻目をつけた備前系掻鉢。製作年代は17世紀代に位置づけられる。S K 31より出土した遺物は少量で、図化できるものも少ない。図示した以外のものでは、茶器の可能性のある備前あるいは丹波系陶器の水指しや切り高台を有する上野・高取系陶器碗の底部(17世紀代)なども出土している。出土遺物の大半が17世紀後半以前で収まる。

〔Ⅲ期(17世紀末～18世紀中頃)〕

S K 8 第14図-1は肥前染付碗。外面の文様はコンニャク印判と手描きを併用している。内底部には一重圓線の中に「大明年製」銘を描く。製作年代は1690～1740年代。器壁は二次的な被熱を受けており、荒れている。2は関西系陶器碗で、これも二次的な被熱を受けている。製作年代は18世紀前半代。3は肥前色絵蓋物。外面の菊文と柴垣文以外を赤絵で描いている。製作年代は1690～1740年代。4は肥前染付小坏。製作年代は1690～1740年代。器壁は二次的な被熱を受けている。5は関西系陶器鉢。外面の文様は型作りにによって、形成されている。茶器



第14図 SK 8出土遺物(S=1/3)

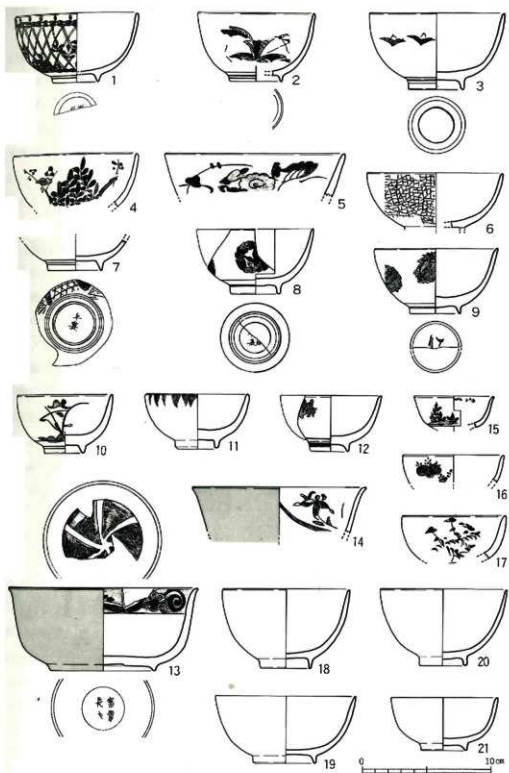


第15図 SK11出土遺物 (S=1/3)

である可能性が高い。18世紀代の製品である。6は瀬戸美濃産陶器茶入れで、18世紀代に比定される。他に磁器人形や肥前青磁染付火容れなどが出土しているが、図示できていない。また19世紀代に比定される肥前産の磁器も若干認められるが、量的に少量であるため、混入と考えられる。SK8の出土資料は、量的に少量であるが、18世紀前半までの製品が量的に多く、ここではⅢ期に位置づけておきたい。

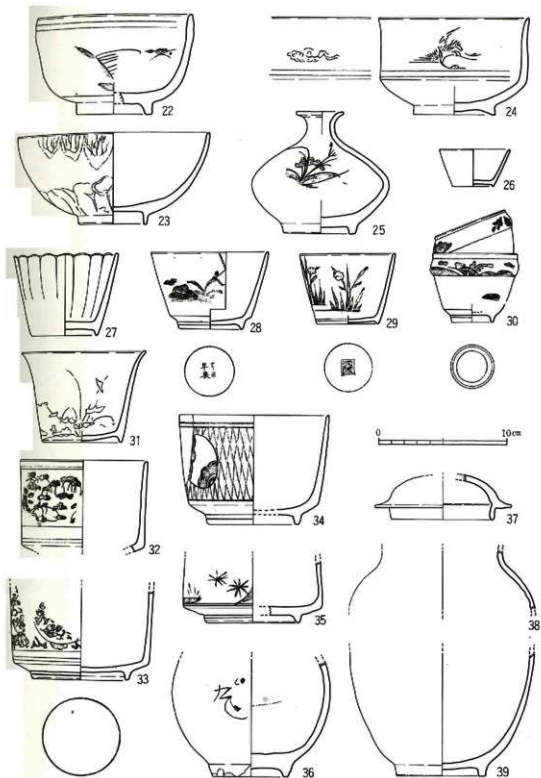
SK11 第15図-1～8は肥前染付碗。1の内底部には一部欠損しているが、一重圈線の内方に方形枠を有する渦福を描く。3の外面文様はコンニャク印判と手描きを併用している。4の内底部には一重圈線の中に「大明年製」銘を描く。5・6は接合しないが同一個体と思われ、内底部には一重圈線の中に大明年製崩れ銘を有する。7・8も同一個体と思われ、内底部には一重圈線の中に方形枠を有する渦福を描く。1～8の製作年代は、1690～1740年代に比定される。9は肥前唐津系陶器刷毛目碗で、製作年代は17世紀後半から18世紀代の中に収まる。10は筒形を呈する関西系陶器碗で、18世紀代の製品である。11は肥前青磁香炉で、製作年代は1690～1740年代。12は肥前染付油壺。火災による熱で器表面が荒れ、変形している部分も認められる。製作年代は1690～1740年代。13は肥前染付皿の口縁部。内面の文様は型紙摺りによるものである。製作年代は18世紀前半代。14は肥前染付猪口。底部の大半を欠損しているが、他の土坑出土の同一規格例のものから、一重圈線の中に二重方角を持つ渦福を描くものと思われる。15も肥前染付猪口。内底部には一重圈線の中に「大明年製」銘を有する。14・15の製作年代は1690～1740年代に比定される。16は福岡産の陶器鉢で、製作年代は17世紀代に比定される。17は丹波系陶器搥鉢である。内面には6本一単位の櫛状工具で掻目をつけている。口縁部外面には鉄泥漿は認められない。尾梓による分類のⅣ類、長谷川真によるⅡB₂b類、松澤修によるⅣ類⁽⁹⁾に属する。また兵庫県下相模郡の調査成果を援用すればⅤ型式に属し、18世紀前葉に比定されている⁽¹⁰⁾。18は土師質土器鍋で、いわゆる焙烙鍋と呼ばれるもの。口縁部には二箇所に把手状の粘土貼り付け部が認められ、その部位に貫通孔を有する。この種のものは難波洋三によるD類に属し、把手はa1類に分類される⁽¹¹⁾。その他、図示していないが、口縁端部を欠損し、二次的な被熱を受けた土師質土器小皿などが認められる。SK11の出土遺物はその大半が18世紀前半代までで収まる。

SK14・15 SK14・15の出土遺物はほとんどのものがⅢ期以前に属し、また各々の土坑より出土した破片が互いに接合するものが多いため、ここでは両者を一括して紹介する。遺構の項で示したように(14頁参照)、出土遺物のほとんどが火災による二次的な被熱を受けている。第16図-1～8は、肥前染付碗。1の内底部には、欠損しているが「大明成化年製」銘の一部が認められる。7の内底部には二重圈線内に「年製」銘が描かれている⁽¹²⁾。8の外面文様はコンニャク印判によるものである。この文様は比較的複雑であり、コンニャク印判の存続期間の中でも古い段階に位置づけられるものである。内底部には一重圈線の中に「大明成化年

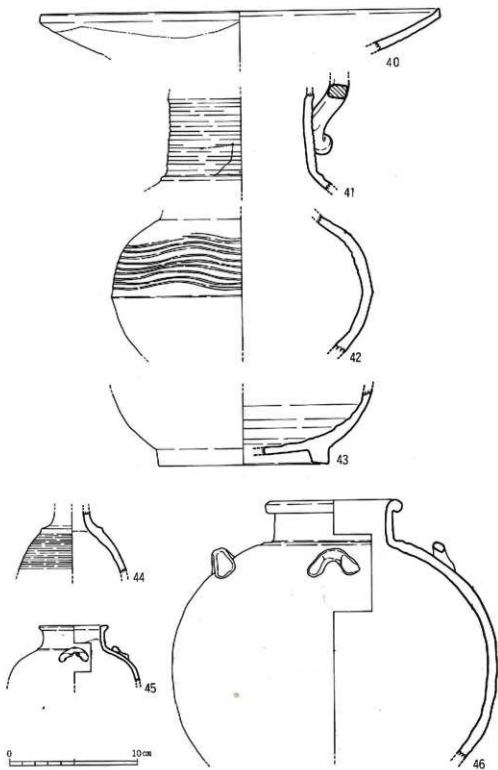


第16圖 SK 14・15出土遺物①(S=1/3)

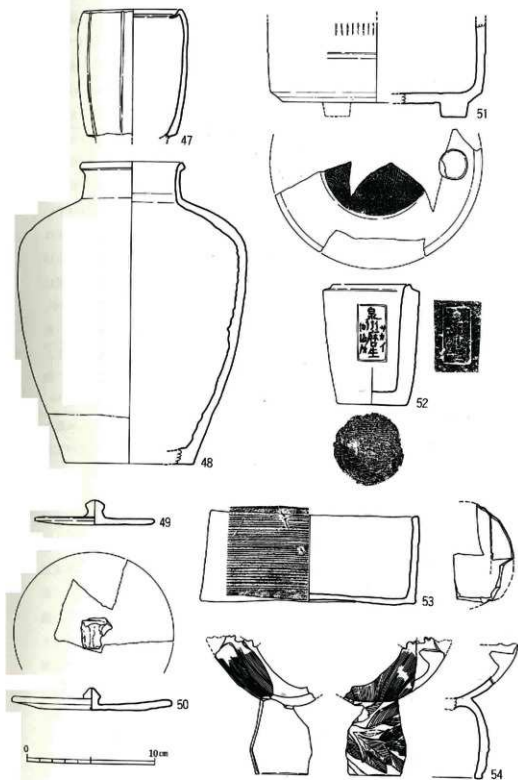
製」銘の一部が認められる。9の外面文様もコンニャク印判によるものであるが、文様は比較的単純であり、コンニャク印判の存続期間の中では新しい段階に位置づけられるものである。内底部には「大明年製」崩れ銘が認められる。10～12はやや小振りの碗で、11の雨降り櫛文は濃み筆によるものである。12は外面に新しい段階に位置づけられるコンニャク印判の文様を持つものであるが、施文時の状態が悪く、文様の詳細を読み取れない。1～8・10・11の製作年代は1690～1740年代、9・12は18世紀前半から中頃に比定される。13・14は肥前青磁染付碗。13は蛇ノ目凹形高台で、内底部には「富貴長春」銘を有する。13・14の製作年代は18世紀前半から中頃に比定される。15～17は肥前染付小坏。16の桐葉文は型紙摺りによるものである。15～17の製作年代は、いずれも18世紀前半までで収まる。18～21は肥前白磁碗。18～19のような中型の碗は、複数個体で1セットとなるものであり、図示した以外にも同一規格のものが最低5個体認められる。製作年代は17世紀末から18世紀前半代。第17図～22は肥前陶胎染付碗。当該資料は通常見られる陶胎染付と比較して、焼成・文様とも洗練された印象を受けるものである。製作年代は18世紀前半代に比定できよう。23は唐津系陶器碗で、製作年代は17世紀後半から18世紀初頭に比定される。24は陶器碗で、外面文様の鶴と流雲は呉須で描き、その下の圈線は白化粧土を埋め込む象嵌技法を採用している。茶陶である可能性が高い。類例が少なく産地は不明であるが、肥前産あるいは関西産の可能性を考えておきたい。製作年代は17世紀後半から18世紀代に比定される。25は肥前染付油壺で、製作年代は1690～1740年代。26は肥前白磁小坏で、1690～1740年代の製品である。27は肥前白磁猪口で、型打ち整形による上手のものである。これも複数個体で1セットとなるものであり、図示した以外にも同一規格同一形態のものが最低6個体認められる。製作年代は17世紀末から18世紀初頭。28・29は肥前染付猪口で、28の内底部には一重圈線の中に「大明年製」銘、29の内底部には一重圈線の中に方形枠を持つ渦幅を有する。いずれも製作年代は1690～1740年代に比定される。なお、28は同一規格同一形態のものがS K 11でも出土している（第15図～15）。30も肥前染付猪口で、同一規格同一形態のものが火災による二次的な被熱を受け、溶着している。製作年代は1660～1680年代。31は肥前色絵猪口。二次的な被熱を受け、色絵が飛んでしまっており、本来の色彩を窺うことができない。胎土の素地や施文などは、いわゆる柿右衛門様式と呼ばれる上手物の様相を呈している。柿右衛門窯の存在する肥前南川原窯跡群のいずれかで焼成されたものであろう。製作年代は1690～1740年代に比定される。32～34は肥前染付蓋物。32・33は同一個体あるいは同一規格同一形態の可能性もあるが、接合していない。32・33の製作年代は1690～1740年代、34の製作年代は1690～1710年代に比定される。35は肥前色絵蓋物。やはり二次的な被熱を受け、文様本来の色彩を窺うことができない。1690～1710年代の製品である。36は肥前染付蓋物の胴部下半から底部で、製作年代は1630～1640年代に比定される。37～39は肥前唐津系陶器壺とその蓋である。いずれも火災による被熱で、器壁が荒れている。38・39は同一個体であるが、接合していない。



第17図 SK14・15出土遺物② (S=1/3)

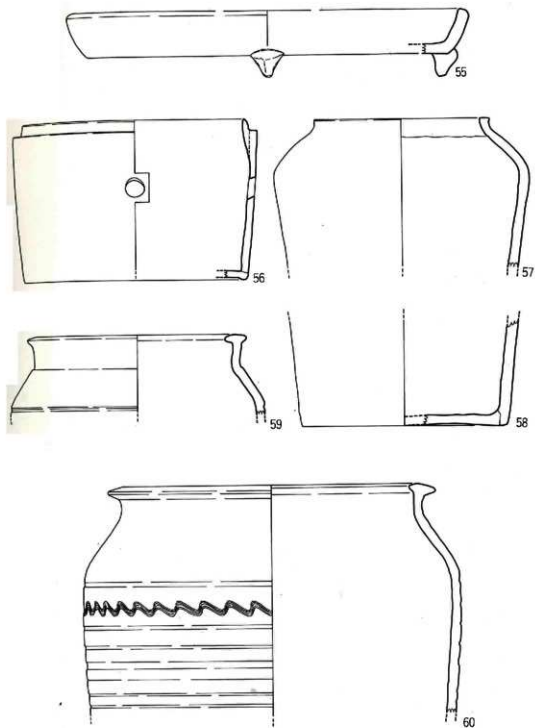


第18図 SK14・15出土遺物③ (S=1/3)

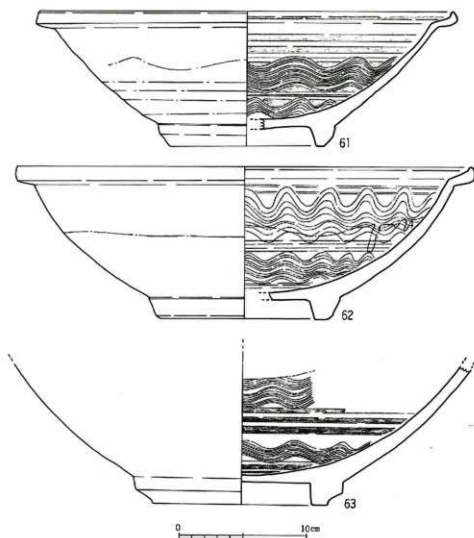


第19図 SK 14・15出土遺物④ (S=1/3)

製作年代は17世紀後半から18世紀前半代。第18図—40—43は肥前唐津系陶器壺で、同一個体と思われるが接合していない。胴部外面に刷毛目による文様を施し、頸部付近には把手を有する。製作年代は17世紀後半から18世紀初頭に比定される。44は陶器徳利で、備前あるいは丹波産のものであろう。17世紀後半から18世紀前半代に比定される。45は信楽産陶器四耳壺で、17—18世紀代の製品。46も陶器四耳壺で、二次的な被熱により器壁や胎土の素地が本来の様相を留めておらず、産地は不詳であるが、福岡産の可能性を考えておきたい。茶陶である可能性も考えられるものである。17世紀から18世紀前半代の製品である。第19図—47は陶器壺で、外面に藁灰釉を施す。これも産地は不明であるが、福岡産のものであろうか。製作年代は17世紀代に比定される。48も陶器壺で、外面の口縁部と胴部の大半に鉄釉、底部付近に灰釉をかけ分けている。17世紀代に比定され、産地は不明であるが、九州産のものである可能性が高い。49・50は陶器壺で、焼成や釉の発色の状況から京焼である可能性が高い。製作年代は17世紀後半から18世紀前半代に比定される。51は外面に藁灰釉を施す陶器の底部で、器形は不明である。底部付近と内面は露胎となる。また底部外面に右回転の糸切り痕を有する。他に図示できていないが、同一個体と思われる胴部の破片があり、略半円形を呈する透かしが認められるものがある。産地は不明であるが、福岡ないしは熊本産の可能性を考えておきたい。17世紀代の製品である。52は焼塩壺である。器壁が増減しており、読み取りにくい。体部に「サカイ 泉州磨生 御塩所」の刻印を有する。隅角まり分類のC1—b—1類でⅧ期、小林謙一のⅤ期に相当する⁽¹³⁾。小林の年代観では、1720—1740年代に位置づけられている。53は陶器で、茶道具である灰器と思われるものである。産地は備前あるいは丹波と推定される。これも二次的な被熱を受けており、本来正円形であったと思われる平面形態が楕円形に歪んでいる。17世紀代の製品。54は焼き締め陶器の特殊品で、福岡ないし熊本産のものと推定されるものである。類例が少なく、製作年代は不明である。第20図—55は土師質土器火鉢である。小破片から口径復元をしているため、復元口径に誤差を生じている可能性もある。口縁部付近に白化粧土を施している部分も認められる。56は瓦質土器火鉢（火舎）である。胴部のはば中央に、穿孔を1個有する。本来瓦質土器のような黒灰色を呈していたものと思われるが、二次的な被熱を受け、一部を残して赤褐色に変色している。このような器形の土師質土器火鉢は大坂や堺、あるいは京都といった畿内地方で、16世紀末から17世紀前半代にかけて盛行するものである。ただし、当該資料は胎土や細かな整形技法が畿内産のものとは異なり、搬入品ではない可能性が高い⁽¹⁴⁾。従って、製作年代と産地は保留しておきたい。57・58は土師質土器の壺で、「火消し壺」などと称されるものである。同一個体と思われるが接合していない。なおこれに対応すると思われる土師質土器蓋も認められるが、破片の大半が切り合い関係にあるS K 33から出土しているため、ここでは図示していない。この土師質土器蓋については第96図—226（120頁）を参照されたい。59・60は肥前唐津系陶器壺。60の肩部には、構描き波状文を有する。器壁は、二次的な被熱を受

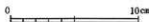
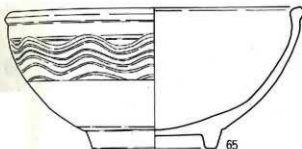
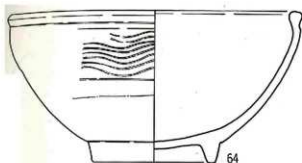


第20図 SK14・15出土遺物⑤ (S=1/4)



第21図 SK 14・15出土遺物⑥ (S=1/3)

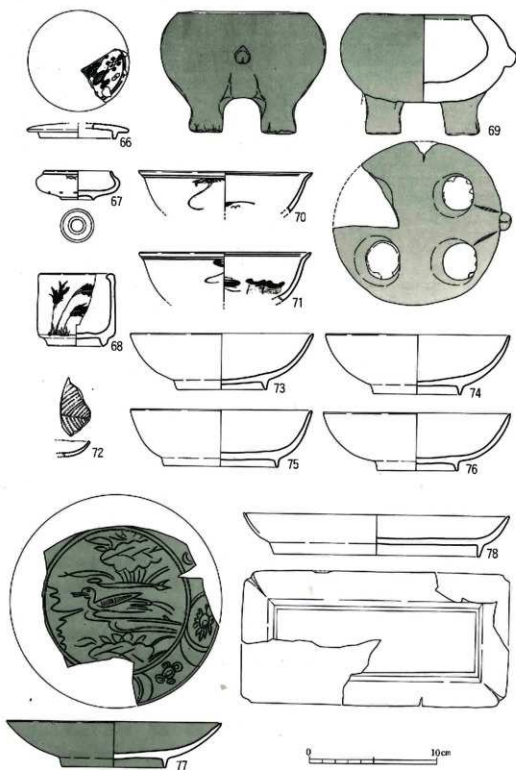
けて荒れが著しい。製作年代はいずれも17世紀後半から18世紀前半代に比定される。第21図—61～63および第22図—64・65は肥前唐津系陶器鉢。61～63はいわゆる「二彩手」と呼ばれる唐津系の陶器鉢で、内面に刷毛目文様を有し、高台端部に削りを施す。このような高台の形態は、18世紀前葉以降に認められる特徴である。第22図—64・65は外面に刷毛目による文様を施す。製作年代は17世紀後半から18世紀前半代に比定される。第23図—66～71・77は中国産の陶磁器類。66は中国産染付蓋、67は中国産染付合子である。いずれも二次的な被熱を強く受けている。65の内底部には、呉須による二重圈線が認められる。66・67の製作年代は16世紀末から17世紀前半代に比定される。68は中国産染付香炉。製作年代は16世紀末から17世紀前半代。69は中国産青磁香炉で、いわゆる「獅子香炉」と呼ばれる形態の下半部である。製作年代は、やはり16



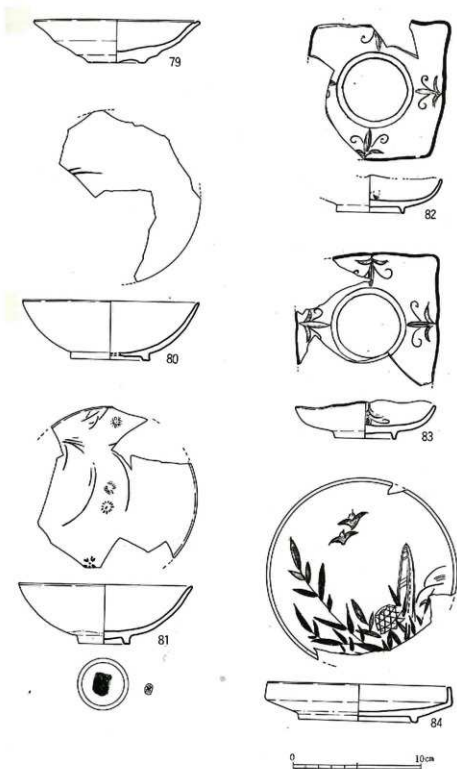
第22図 SK 14・15出土遺物⑦ (S=1/3)

世紀末から17世紀前半代に比定される。70・71は中国産染付皿で、製作年代は17世紀前半代に比定される。すべてを図示できていないが、同一形態同一型式のものが少なくとも7個体出土している。また、接合しないが底部と思われる破片も多数出土しており、それらは高台内が無釉となり、放射状のカナ削り痕が認められる。77は中国産陶器三彩皿。内面には線影りの文様を施す。見込みの文様は、水鳥をモチーフとしている。同一規格同一形態のものが少なくとも8個体出土している。また図

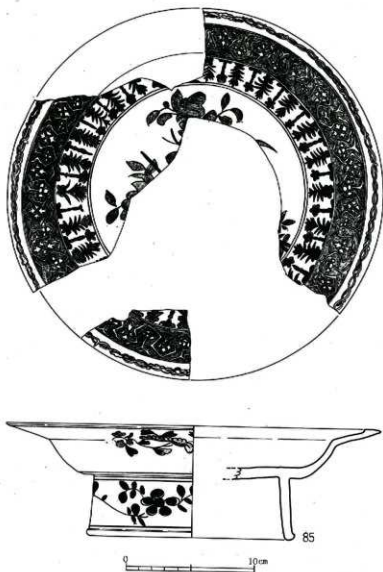
示できていないが、当該資料より口径がひとまわり小さいものも少数認められる。明末の三彩で、製作年代は16世紀後半から17世紀前半に比定される。SK 14・15から出土した中国産の陶磁器類は、二次的な被熱を強く受けており、加えて碗・皿類は同一規格同一形態のものが複数出土することが特徴的である。製作年代も16世紀代に遡るものが認められ、当該遺構出土のものとしては比較的早く位置づけられるものである。72は肥前白磁皿。型打ち整形によるもので、製作年代は1640～1650年代に比定される。73～76も肥前白磁皿。高台径が比較的広く、胎土の素地がやや荒いもの（73～75）と、これらと比較して高台径が小さく、洗練された胎土の素地を持つもの（76）に大別できる。後者は、肥前南川原窯跡群の柿右衛門窯などの製品と類似する上手のものである。両者とも同一規格同一形態のものが多数出土しており、最少出土個体数は前者が6個、後者が5個を数える。製作年代は17世紀末から18世紀初頭。78は肥前白磁長皿で、これも上手の製品である。同一規格同一形態のものが多数出土しており、最少個体数6個が認められる。二次的な被熱により、複数個体が重なった状態で溶着しているものも存在する。製作年代は1690～1740年代に比定される。第24図～79は肥前唐津焼陶器津縁皿で、見込み部分に砂目をも有するもの。灰釉を施釉しており、高台部付近は露胎となる。製作年代は1600～1630年代に比定される。当該遺物は二次的な被熱を受けておらず、また当該遺構出土遺物としては製作年代がやや古いものであることから、混入品である可能性もある。80・81は京焼の陶器皿。80は内底部に小さな円圈を有し、見込みに草花文を描いている。81は内底部に意図的につけた



第23圖 SK14・15出土遺物⑧ (S=1/3)



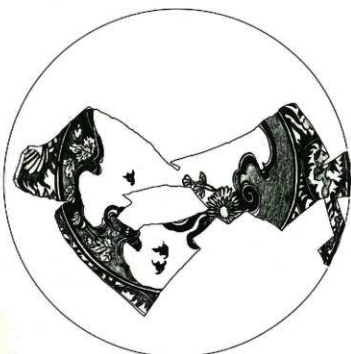
第24図 SK 14・15出土遺物 ⑤ (S=1/3)



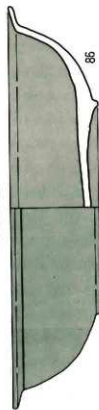
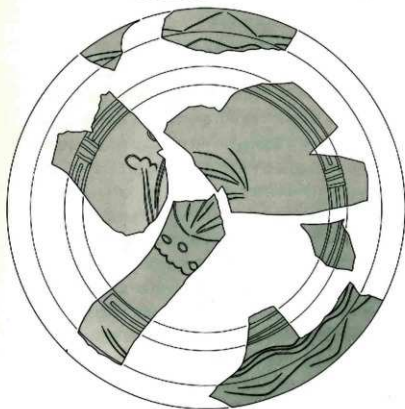
第25図 SK14・15出土遺物⑩ (S=1/3)

と思われる指痕痕を有し、さらにその上から小判型の外枠を持つ刻印を施している。刻印の文字は「京」と認める可能性が高い。両者とも二次的な被熱を強く受けており、見込み文様の色彩は変色してしまっている。いずれも製作年代は17世紀後半から18世紀前半に比定され、鈴木重治による「京焼第Ⅱa期」に属するものである⁽¹⁵⁾。82～84は関西系陶器皿で、これらも京焼である可能性が高い。製作年代はいずれも17世紀末から18世紀前半代。同一規格同一形態のものが複数認められ、82・83は最低個体数3個、84も最低個体数3個を数える。第25図-85は肥前楽付台付鉢で、上手のものである。二次的な被熱を受け、変形している部分が認められる。被熱のため、本来の胎土の素地や釉薬を窺うことができず、中国産である可能性も考えられる。

当該資料が肥前産のものであれば、その製作年代は1690～1710年代に比定される。第26図～86は肥前青磁大皿。内面の文様はヘラ彫りであり、高台は軸剥ぎして鉄錆を塗り、蛇の目状になる。製作年代は1650～1670年代に比定される。87は肥前染付菊流水文大皿。欠損部分が多いが、内底部には「大明成化年製」銘が認められる。製作年代は1690～1710年代に比定される。第27図～88は肥前染付大皿。内面の文様は菊と唐草文である。外底部には、二重方形枠を持つ渦福を描く。この資料の破片の大半はS K 3より出土したもので、同一個体と思われるが、接合しない小破片がS K 15より検出されている。また、当該資料は二次的な被熱を受けておらず、本来的にS K 14・15に帰属するものであるかどうかは保留しておきたい。製作年代は1690～1740年代に比定される。89は肥前染付芙蓉手花盆文大皿。S K 14・15とS K 26から出土したものが接合している。図示した以外にも同一個体と思われる小破片が出土しているが、接合していない。製作年代は1690～1740年代。第28図～90は肥前染付大皿で、内面の文様は竹と蔓草をモチーフとするものである。外底部は欠損部分が大きい、「大明成化年製」銘の一部が認められる。製作年代は1690～1740年代。91は肥前染付樓閣山水文輪花皿。製作年代は1690～1710年代。92は肥前色絵染錦手輪花皿。複数個体で1セットとなるものであり、同一規格同一形態のものが最低6個体認められる。1690～1740年代の製品である。第29図～93は肥前染付芙蓉手花鳥文輪花大皿。類別は佐賀県有田市長古谷窯⁽¹⁶⁾や中白川窯物原3層⁽¹⁷⁾に認められる。製作年代は、長古谷窯の存続年代である1655～1680年代に比定される。第30図～94は肥前染付皿。内底部には「大明年製」銘を有する。見込みの五弁花文はコンニャク印判によるものである。内面の文様の一部には墨弾きによる部分も認められる。同一規格同一形態のものが最低8個体認められ、複数個体で1セットとなるものである。製作年代は1690～1710年代。95も肥前染付皿で、製作年代は1690～1740年代に比定される。96・97は肥前染付芙蓉手花虫文皿。これも同一規格同一形態のものが最低6個体認められ、また後述するS K 3でも同様のものが出土している。製作年代は1680～1700年代。第31図～98・99は肥前染付皿で、製作年代はいずれも1660～1680年代。また、98は同一規格同一形態のものがS K 26でも出土している。100・101も肥前染付皿で、同一規格同一形態のものが複数認められるものである。最少出土個体数は100が11個、101が10個を数える。100は内底部に「大明年製」銘を有する。見込みの五弁花文は手描きによるものである。またS K 12でも同様のものが出土している。製作年代は100が1690～1740年代、101が1660～1680年代。102も肥前染付皿である。内底部に「大明年製」銘を描き、内面文様は型紙摺りによるものである。S K 26でも同一規格同一形態のものが出土している。製作年代は1690～1740年代。103は肥前色絵皿。見込み部分の色絵は、二次的な被熱を受け本来の色彩を失っている。内底部の一重圈線は、呉須によるものである。製作年代は、やはり1690～1740年代に比定される。第32図に示した肥前染付の変形皿は、いずれも糸切り細工による整形によるもので、複数個体で1セットとなるものである。最少出土個体数は104・105が12個、106・107が10



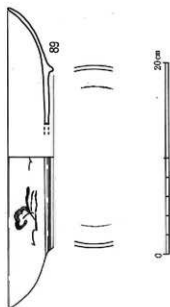
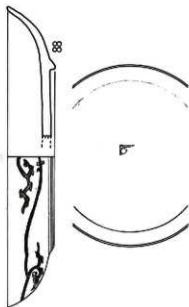
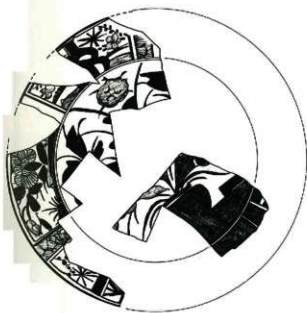
87



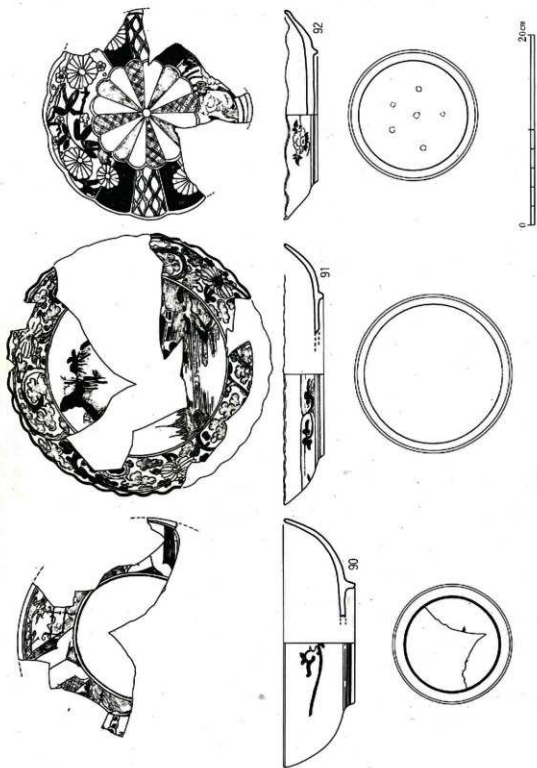
86



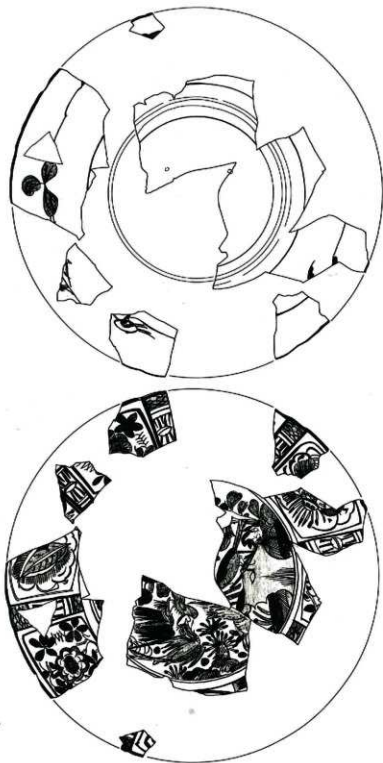
第26圖 SK 14・15出土遺物① (S=1/4)



第27図 SK 14・15出土遺物② (S=1/4)



第28図 SK 14・15出土遺物③ (S=1/4)

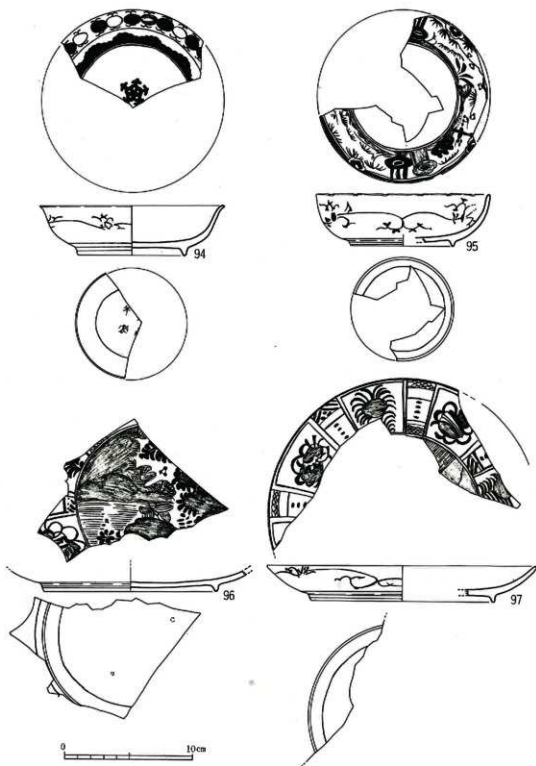


0 20 cm

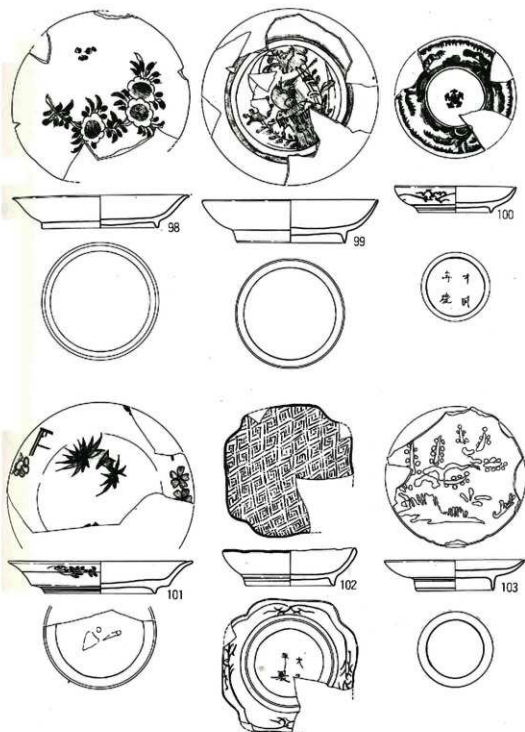
第29圖 SK 14・15出土遺物④ (S=1/4)



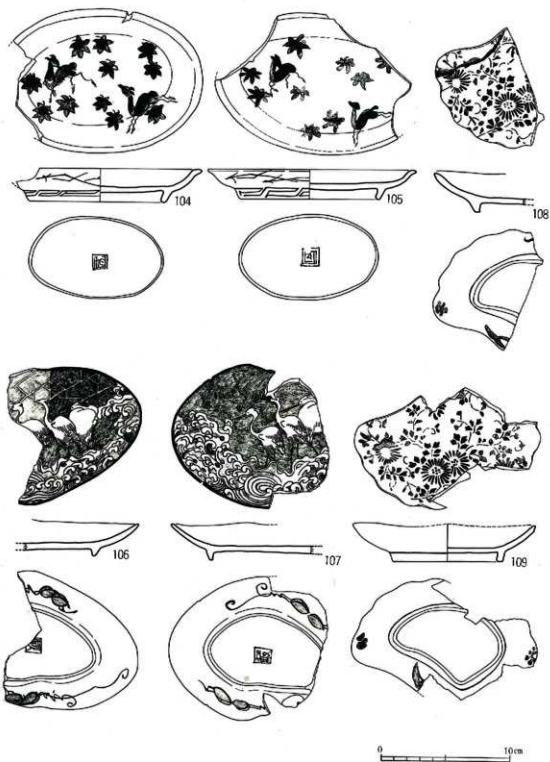
93



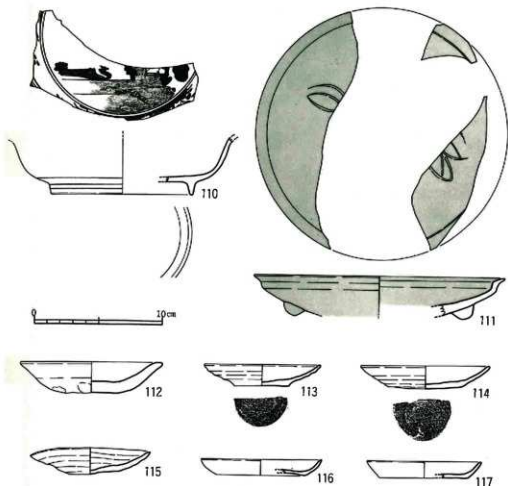
第30図 SK14・15出土遺物 ⑤ (S=1/3)



第31図 SK14・15出土遺物④ (S=1/3)



第32図 SK14・15出土遺物⑦ (S=1/3)



第33図 SK 14・15出土遺物⑩ (S=1/3)

個、108・109が8個を数える。104・105の内面には鹿紅染文、内底部には変形文字を描く。104・105の内面には波鶴文、内底部には変形の「福」字を描いている。108・109の内面文様は型紙摺りによるものである。製作年代は104・105が1660～1680年代、106・107が1660～1670年代、108・109が1690～1740年代に比定される。第33図-110は肥前青付鉢で、内面に楼閣山水文を描くものである。製作年代は1690～1740年代。111は肥前青磁皿。底部を欠損するが、碁笥底になるものと思われる。内面の文様はへう彫りである。製作年代は1630～1650年代に比定される。112～117は土師質土器小皿である。112が「手摺ね」手法による整形であるほかは、すべて底部に回転糸切り痕を有するロクロ整形によるものである。回転糸切りの方向は、すべて右回転である。115は二次的な被熱を受け、大きく変形している。以上がSK 14・15の出土遺物である。これらは陶磁器類の年代観から、18世紀中葉以前に製作されたものが大半を占める。また出土遺物の大部分が火災による二次的な被熱を受けており、その中には多数の個体が重ねられた状態のまま溶着して出土したのも認められる。陶磁器類の年代観と符合する火災の記録を史料

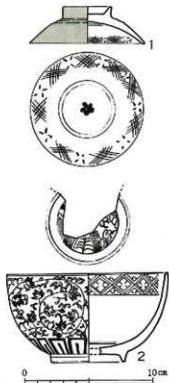
中より検索すれば、寛保3年(1743)あるいは宝暦6年(1756)の大火が浮かび上がってくる。出土遺物からはどちらの火災に相当するのかを明確には断定できないが、火災の規模や調査地点の位置を考慮すれば、当該遺構は前者の寛保の大火に伴う火災処理土坑である可能性が高いと考える。出土遺物の位置づけや土坑の解釈などは、Ⅳ-(2)でさらに検討することとしたい。

〔Ⅳ期(18世紀後半代)〕

SK 4 第34図-1は肥前青磁染付蓋。口縁内面に崩れた四方樺文、見込みにコンニャク印判による崩れた五弁花文を有する。製作年代は18世紀後半代。SK 4は出土遺物が少なく、図示した以外のものでは唐津系播鉢の破片や混入と思われる12世紀代の中国産白磁の玉縁口縁などが存在する。

SK 1 第34図-2は肥前染付碗で、やや大ぶりのものである。外面に牡丹唐草文、口縁内面に四方樺文を描く。製作年代は18世紀後半に比定される。SK 1からの出土遺物で、図示できたものは2のみである。その他、17世紀代の製品である信楽産陶器壺と思われる破片が認められる。

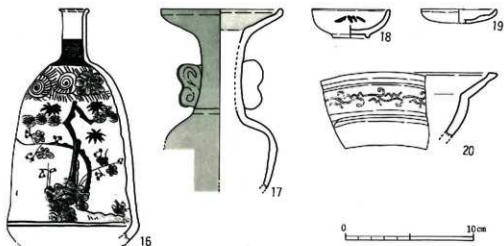
SK 9 第35図-1~4は肥前染付碗。1~3の外面文様はコンニャク印判によるものである。2の内底部には「大明年製」崩れ銘を有する。製作年代は1~3が18世紀前半から中頃、4が18世紀後半に比定される。5は肥前青磁染付碗で、製作年代は18世紀後半代。6は肥前染付筒形碗で、見込みの五弁花文は手描きによるものである。製作年代は18世紀後半から末。7は陶器の筒形碗で、18世紀代の製品である。生産地は肥前である可能性が高い。8は肥前青磁香炉。蛇ノ目凹形高台で、内面は露胎となる。製作年代は18世紀後半代。9は肥前染付蓋物。口縁端部付近が露胎となるもので、製作年代は18世紀代に比定される。10~13は肥前染付皿。11は蛇ノ目凹形高台、12の内底部には一重方形枠内に渦福を描く。12の見込みの五弁花文は残存部分が少ないため、手描きかコンニャク印判かは不明である。口唇部は口鏤となる。製作年代は10・11が18世紀後半代、12・13が18世紀前半から中頃に比定される。14は陶器急須で、生産地は肥前あるいは九州産のものであろう。製作年代は18世紀前半から19世紀前半代。15は肥前染付猪口で、型打ち整形によるものである。製作年代は17世紀後半代。第36図-16は肥前染付瓶類で、徳利である。製作年代は18世紀中葉から後半代。17は肥前青磁煮類。この形態のものは花生と称されることもある。製作年代は18世紀代。18は肥前染付紅皿で、製作年代はやは



第34図 SK 4・SK 1出土遺物
(S=1/3)
1 SK 4 2 SK 1



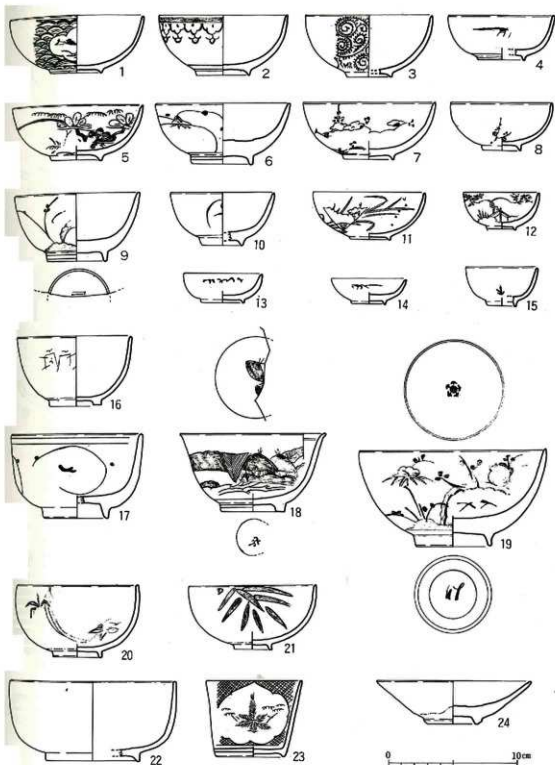
第35図 SK 9出土遺物 ① (S=1/3)



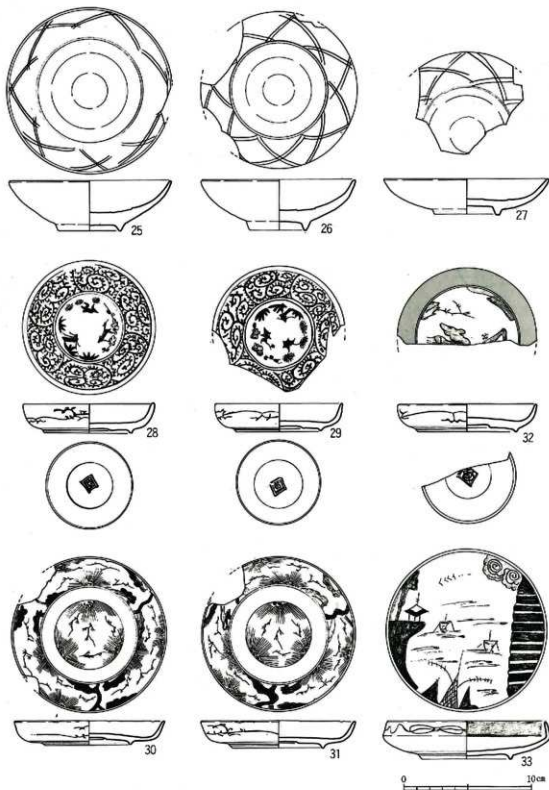
第36図 SK9 出土遺物② (S=1/3)

り18世紀代に比定される。19は土師質土器小皿で、底部に糸切り痕の認められない非口クロ整形によるものである。20は唐津系陶器鉢で、内面の連続唐草文は象嵌技法により白化粧土を埋め込んでいる。製作年代は17世紀代。SK9の出土遺物には、6や14など製作年代がやや新しいものも認められるが、これらも含めて18世紀後半代までの製品が大半を占める。

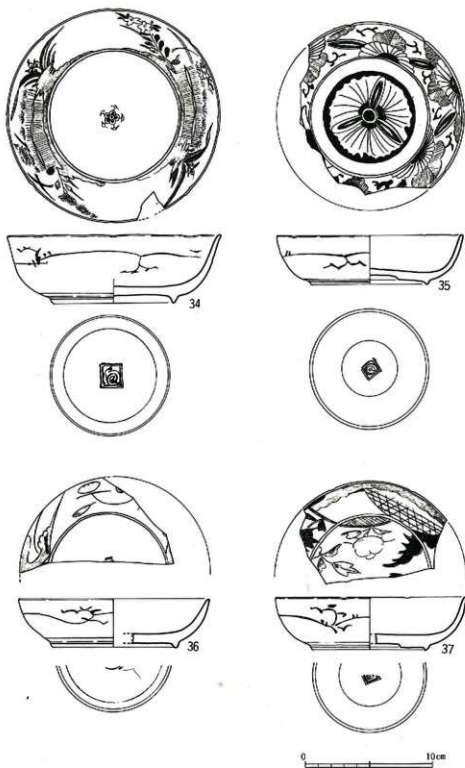
SK19a 第37図-1～10は肥前染付碗。6の見込みは蛇の目軸刺ぎとなり、9の内底部には大明年製崩れ銘の一部が認められる。製作年代はいずれも18世紀後半代。11・12は肥前色絵碗で、やはり18世紀後半代の製品である。13～15は肥前染付紅皿で、18世紀後半から19世紀前半までに生産されたものである。16・20は関西系陶器碗で、高台付近は露胎となる。製作年代はいずれも18世紀後半代。17は肥前陶胎染付碗で、18世紀前半から中頃の製品である。18は肥前染付碗で、見込みに栗の文様を有し、高台畳付部を幅広に作るもの。製作年代は18世紀後半から末に比定される。19は肥前染付碗で、やや大振りのものである。見込みにコンニャク印判による五弁花文、内底部には大明年製崩れ銘を有する。18世紀後半代に比定される。21は関西系陶器色絵碗。外面に赤色と緑色で笹文を描く。18世紀後半以降の製品である。22は肥前白磁蓋物。見込みは欠損部分が大きい。蛇の目軸刺ぎとなる可能性が高い。製作年代は1690～1740年代。23は肥前染付猪口で、18世紀後半代に比定される。24は中国産白磁皿で、見込み部分は蛇の目軸刺ぎとなる。高台付近は露胎である。16世紀末から17世紀前半代の製品である。第38図-25～31は肥前染付皿。25～27はいずれも内面に斜格子文を有し、見込み部分は蛇の目軸刺ぎとなるものであるが、口径や微妙な釉色が個体ごとに異なり、セットとなるものではない。それに対して、蛇の目円形高台で内底部に「筒江」銘を有する28・29、同じく蛇の目円形高台で内面に松樹文を描く30・31は複数個体で1セットとなるものと思われる。図示したものを含め、前者は最低出土個体数4個、後者は最低出土個体数3個を数える。25～31の製作年代は18世紀



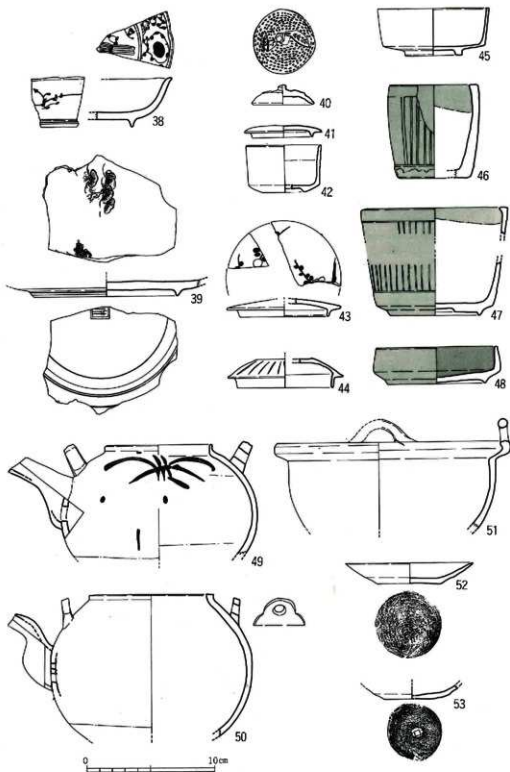
第37图 SK 19a 出土遗物 ① (S=1/3)



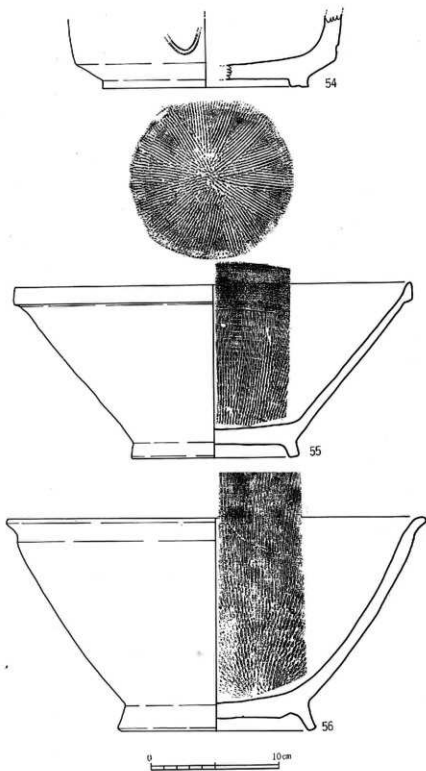
第38图 SK19a出土遺物② (S=1/3)



第39図 SK 19a出土遺物③ (S=1/3)

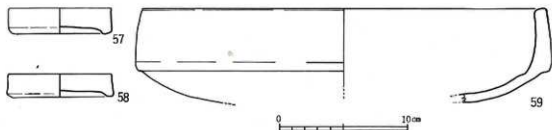


第40圖 SK19a出土遺物④ (S=1/3)



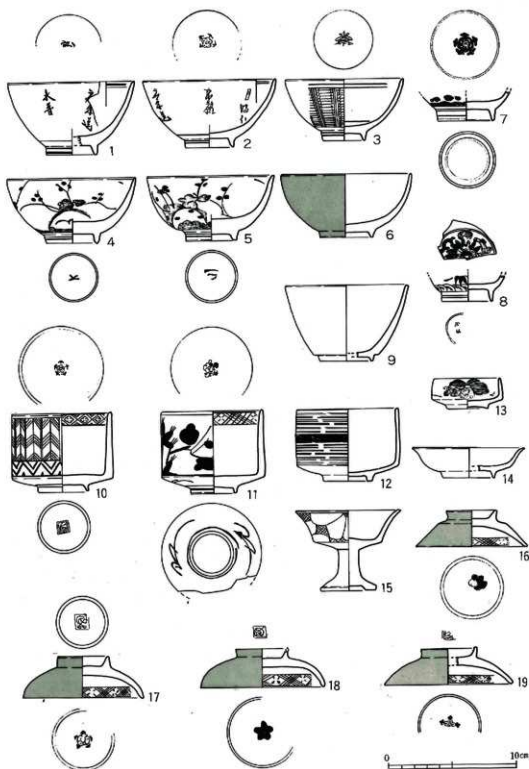
第41図 SK19a出土遺物⑤ (S=1/3)

後半代に比定される。32は肥前青磁染付皿。これも蛇ノ目凹形高台で、内底部に方形枠を有する渦福を描く。18世紀中頃の製品である。33も肥前染付皿で、製作年代は18世紀前半から中頃に比定される。第39図-34-37は肥前染付皿である。34の見込みの五弁花文は手描きによるものであり、また内底部に二重方形枠を有する渦福を描く。35は蛇ノ目凹形高台で、内底部には同様の渦福を描く。36の内底部の渦福は方形枠を持たないものである。また、見込みにはコンニャク印判の五弁花文を有する。37も蛇ノ目凹形高台で、内底部には「筒江」銘を有する。第39図に示した皿の製作年代は、いずれも18世紀後半代である。第40図-38・39も肥前染付皿。38は口縁部に輪花となるもので、製作年代は18世紀前半代。39は二次的な被熱を受けているもので、内底部には角福とハリ支えの痕跡が認められる。製作年代は1660-1680年代に比定され、当該遺構の国産陶磁器の中では最も古い製品である。40は関西系陶器蓋。型打ち整形により柑橘類をかたどったものである。41・42は関西系陶器で、合子とその蓋と思われるものである。40-42の製作年代は18世紀代。43・44も関西系陶器蓋で、18世紀後半以降の製品である。45も関西系陶器香炉あるいは灰落しで、やはり18世紀後半以降の製品。46は肥前青磁灰落し、47は肥前青磁火容れ、48は肥前青磁皿で、製作年代はいずれも18世紀代に比定される。48の内底部は青磁釉を一部掻き取り、蛇の目状とする。49・50は肥前産の可能性が高い陶器土瓶。49の外面には鉄絵と銅緑釉による文様が認められる。50の外面には鉄釉を施す。注口部に通じる胴部の貫通孔は49が3個、50が4個を数える。製作年代はいずれも18世紀後半以降である。51は関西系陶器土鍋で、外面に鉄釉を施す。これも18世紀後半以降の製品である。52・53は、いずれも右回転の糸切り痕を有する土師質土器小皿である。52には焼成後の穿孔が認められ、穿孔の平面形態は略方形を呈する。第41図-54は植木鉢と思われる陶器である。産地は瀬戸美濃周辺である可能性が高い。内底部は露胎となる。18世紀後半以降の製品である。55・56は唐津系陶器描鉢である。大橋編年のⅣ・Ⅴ期に類似の器形が存在している⁽¹⁸⁾。第42図-57・58は焼塩壺の蓋である。当該遺構からは焼塩壺の身は出土していないが、18世紀後半代に比定されている「泉湊伊織」の刻印を持つものに対応するものと思われる。59は土師質土器鍋で、焙烙鍋と称されるものである。難波洋三のD類⁽¹⁹⁾に属する。以上、SK19aの出土遺物はⅣ期以前に位置づけられるものが若干認められるが、その大半が18世紀末以前に製作されたものである。

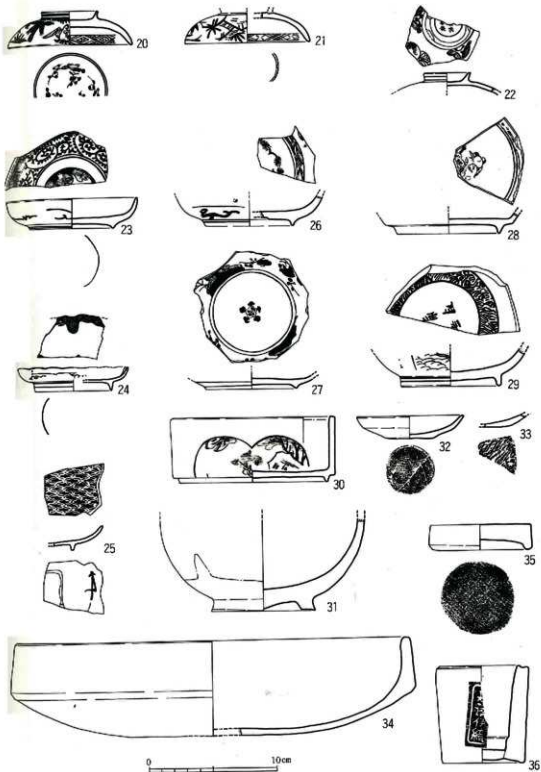


第42図 SK19a出土遺物⑥ (S=1/3)

SK19b 第43図-1～5は肥前染付碗。1～3はいわゆる「小広東碗」と呼ばれる器形を呈するものである。1・2の見込みには手描きによる藍化した五弁花文を、3の見込みには昆虫文⁽²⁰⁾を描く。4・5はいわゆる「くらわんか」手のもので、内底部には大明年製崩れ銘が認められる。1～5の製作年代は、いずれも18世紀後半代に比定される。6は外面に青磁釉、内面に透明釉を施す肥前産の青磁碗であるが、焼成不良で本来の発色が現れていない。18世紀代の製品である。7・8も肥前染付碗である。7は内底部に二重圈線、8は「□□珍玩」銘の一部が描かれている。18世紀前半代の製品である。9は関西系陶器碗で、18世紀後半以降の製品。10～12は肥前染付筒形碗。10と11の見込みの崩れた五弁花文は、いずれも手描きによるものである。また、10の内底部には二重方形枠を持つ渦福を描く。10～12の製作年代は、18世紀後半代に比定される。13は肥前色絵紅皿で、文様は赤絵で描かれている。製作年代は18世紀代。14は磁器皿で、産地は不詳である。胎土の茶地、秣調などからみて、在地産の可能性もある。18世紀代の製品である。15は肥前染付仏飯器で、これも製作年代は18世紀代に比定される。16～19は肥前青磁染付蓋。五弁花文は16・18がコンニャク印判、17・19が手描きによるものである。コンニャク印判によるものは押印の段階でつぶれており、文様の詳細が読み取れない。また、17～19の内底部には一重方形枠を持つ渦福を描く。製作年代は、いずれも18世紀後半代に比定される。第44図-20～22は肥前染付蓋である。20の内底部には二重方形枠を有する渦福、見込みには松竹梅円形文を描く。22の内底部には「大明成化年製」銘が認められる。製作年代は20・21が18世紀後半代、22が1690～1740年代に比定される。23は肥前染付皿で、18世紀後半代の製品。24・25は糸切り細工による小型の肥前染付皿で、製作年代は1690～1740年代に比定される。25の内面文様は型紙摺りによるものである。26は肥前色絵皿で、底部は蛇ノ目凹形高台となる。外面文様には呉須のほかは赤色、内面文様には緑色が使用されている。製作年代は18世紀後半代。27は手描きによる五弁花文を有する肥前染付皿で、製作年代は1690～1740年代に比定される。28は肥前色絵蓋物の底部で、内面文様には呉須のほかは赤、緑、黄色が使用されている。製作年代は18世紀前半代に比定される。29は中国産肥前染付皿の底部で、見込みには「永楽年製」の文字の一部が認められる。内底部にも施釉されており、放射状のカナ削り痕が認められる。製作年代は16世紀末から17世紀前半代に比定される。30は関西系陶器段重で、18世紀代の製品。31は肥前唐津系陶器鉢の底部で、製作年代は17世紀前半代である。32は土師質土器小皿で、底部には右回転の糸切り痕を有する。33は土師質土器小皿の底部で、圧痕の認められるものである。34は難波洋三のD類⁽²¹⁾に分類される焙烙鍋である。35・36は焼塩釜。両者は⁽²²⁾時期的には合致するものであるが、個体としてはセットとなるものではない。36は両角まり分類のC2-c-ho⁽²²⁾に属し、18世紀後半代に比定される。SK19bの出土遺物はその大半が18世紀後半代ないしそれ以前に取まる。SK19aとの切り合い関係も考慮した上で、遺構の所属年代はⅣ期の中で考えておきたい。



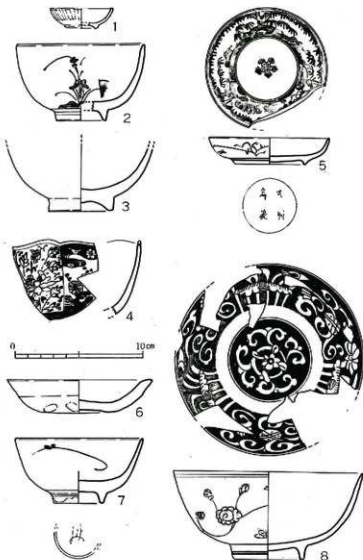
第43図 SK19b出土遺物① (S=1/3)



第44図 SK 19b出土遺物② (S=1/3)

SK12 第45図-1

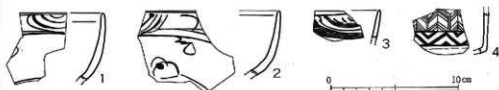
は肥前白磁紅皿。菊花をかたどった型打ち整形による小型のものである。18世紀後半以降の製品である。2は肥前染付碗で、製作年代は1690～1740年代に比定される。3は肥前京焼風陶器器手碗の底部である。製作年代は17世紀後半から18世紀前半代に比定される。4は肥前染付猪口で、この形態のものは向付と称されることもある。型打ち整形による上手のものである。製作年代は、1690～1710年代に比定される。5は肥前染付皿である。見込みには手描きによる五弁花文を描く。内底部には「大明年製」銘が認められる。SK14・15やSK26出土のものと同じ規格同一形態のものである。



第45図 SK12・SK38出土遺物 (S=1/3)
1～5 SK12 6～8 SK38

る。SK12からの出土遺物は少量で、他に15世紀後半から16世紀前半代に比定できる中国産龍泉系青磁碗底部などが混入している。ほとんどの遺物の製作年代が18世紀前半代までで収まるが、1はやや新しく、遺構の最終埋没年代は18世紀後半代としておく。

SK38 第45図-6は土師質土器小皿。SK23などから出土したものと同様の「手捏ね」手法による整形である。7は肥前産染付碗で、いわゆる「くらわんか」手のものである。内底部には人明年製崩れ銘を描く。製作年代は18世紀後半代。8は中国産染付碗。内底部には、中国産染付の整形技法に特徴的な放射状のカナナ削り痕が認められる。大橋康二による碗B-2類、上田秀夫による碗A-V類⁽²³⁾に属し、製作年代は16世紀末から17世紀前半代に比定



第46図 SK 25出土遺物 (S=1/3)

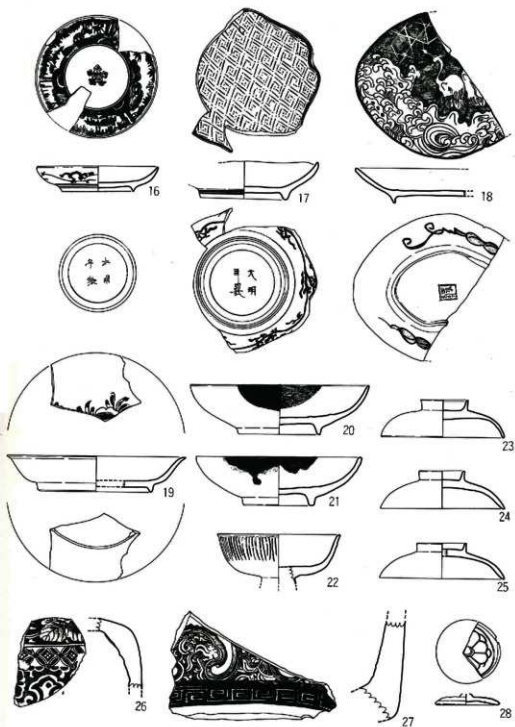
される。オランダ東インド会社の貿易船で、1613年に東南アジア、セントヘレナ島ジェームスタウン湾に沈没したピッテ・レウ号からの引き揚げ資料の中にも類品が見られる⁽²⁴⁾。SK 38からの出土遺物は少なく、7が遺構の年代を示すものと考ええる。6や8は混入品である可能性がある。

SK 25 第46図-1～3は中国産染付碗。二次的な被熱で器表面が著しく荒れており、変形している部分が認められる。大橋康二による碗D類、上田秀次による碗C～V類に属し、製作年代は16世紀末から17世紀前半代に比定される。小破片で図示していないものが数個体あり、これらは断定はできないが、1～3のいずれかと同一規格同一形態のものである可能性がある。またこの種の中国産染付碗は、近年では元和6・7年(1620～1621)銘の本簡を伴出した大阪城下町魚市場跡の整地層からも出土しており⁽²⁵⁾、その帰属年代を推定できる。4は肥前染付筒形碗の破片で、製作年代は18世紀後半代に比定される。以上、SK 25からは出土遺物が少ない。図示したもので1～3は製作年代が古いものであるが、4のような18世紀後半代の遺物と共存している。

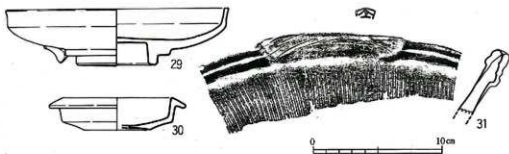
SK 26 第47図-1は肥前染付碗である。内底部には二重方形枠内に渦福を描く。製作年代は1690～1740年代に比定される。2も肥前染付碗で、外面に二重網目文を描くものである。製作年代は18世紀後半代。3は18世紀前半から中頃に比定される肥前陶胎染付碗である。4は関西系陶器色絵碗。内底部には浅く小さな門形の削りを有する。18世紀後半以降の製品である。5は唐津系陶器刷毛目碗で、製作年代は17世紀後半から18世紀前半代。6・7はやや小振りの肥前染付碗で、6の外面の雨降り柳文は濃み筆によって描かれている。6・7の製作年代は1690～1740年代に比定される。8は肥前染付小杯で、製作年代は1690～1740年代。9は肥前染付筒形碗で、やや小型のものである。製作年代は18世紀後半代に比定される。10・11は肥前染付猪口で、SK 14・15にも同一規格同一形態のものがある。1690～1740年代の製品である。12は肥前染付蓋物で、SK 26とSK 2で出土した破片が接合している。内底部には、一部を欠損しているが「宣徳年製」銘が認められる。製作年代は17世紀後半代⁽²⁶⁾。また小片で図示していないが、SK 2からこの蓋物に対応すると思われる肥前染付蓋物の破片も出土している。13は肥前染付火容れで、製作年代は18世紀前半代。14は肥前染付瓶類で、油壺の頸部の破片である。製作年代は1690～1740年代に比定される。15は肥前染付牡丹文輪花大皿で、内底部には圈線とハリ支えの痕跡が認められる。製作年代は1690～1710年代。第48図-16～19は肥前染付皿で、



第47回 SK 26出土遺物 ① (S=1/3)

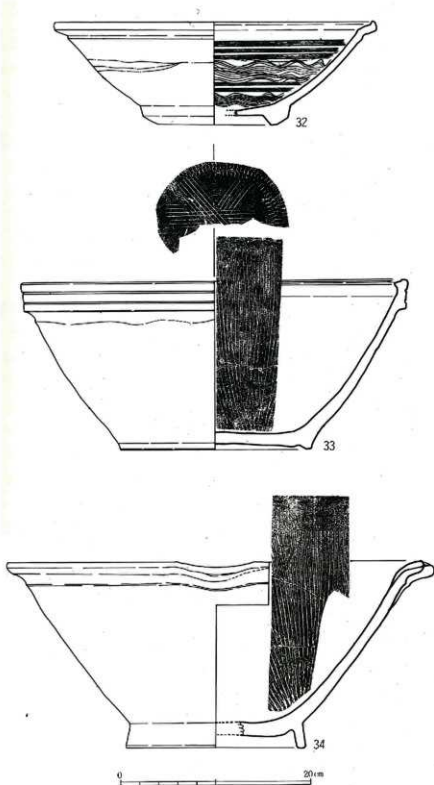


第48圖 SK 26出土遺物 ② (S=1/3)



第49図 SK 26 出土遺物③ (S=1/3)

いずれも S K 14・15にも同一規格同一形態のものが存在する。製作年代は16・17が1690～1740年代、18が1660～1670年代、19が1660～1680年代に比定される。20・21は肥前産の磁器皿で、内外面の一部に鉄釉を施すもの。見込みは蛇の目軸刺ぎとなる。同一形態のものが、図示したものも含めて最低6個体認められる。製作年代は18世紀後半に比定される。22は肥前染付仏飯器で、18世紀前半代の製品である。二次的な被熱を受け、器表面がかなり荒れている。23～25は肥前白磁蓋で、製作年代は1690～1740年代。26・27は産地不詳の磁器染付火鉢。同一個体と思われるが、接合しない。残存部の内面は露胎となり、その一部には布目が認められる。釉色や文様の施文技法などからみて、近・現代に製作されたものであろう。従って、混入品である可能性が高い。28は土師質土器壺である。外面には型打ち整形によって花文を形成している。詳細な製作年代は不明であるが、18世紀後半代のものと思われる。第49図-29は肥前あるいは福岡産の陶器鉢である。内外面に鉄釉を施し、見込みは蛇の目軸刺ぎとなる。製作年代は18世紀に比定される。30は関西系陶器土飯蓋で、外面に透明釉を施すもの。18世紀後半以降の製品である。31および第50図-33は堺産陶器搥鉢。両者は接合していないが、同一個体である可能性を考えておきたい。注口部には図示したような刻印を有する。白神典之によるⅠ型式2段階⁽²⁷⁾、堀内秀樹によるⅡ-a類⁽²⁸⁾に属する。製作年代は18世紀前半から中葉に比定される。32は肥前唐津系陶器刷毛目鉢で、いわゆる「二彩手」といわれるもの。製作年代は18世紀前半に比定される。34は肥前唐津系陶器搥鉢である。大橋康二による福年のⅣ・Ⅴ期(1690～1860年代)の中に類似する器形が認められる⁽²⁹⁾。18世紀中葉から後半に比定しておくのが穏当であろう。以上、S K 26の出土遺物は製作時期の新しいものが若干混入しているものの、18世紀後半代の遺物が一定量認められ、遺構の所属年代を示している。また18世紀前半以前に製作されたものの中には、二次的な被熱を受けたものが認められ、それらは S K 14・15の出土遺物と共通点が多いことを注意しておきたい。



第50図 SK 26出土遺物 ④ (S=1/4)

【V a 期（18世紀末から19世紀前半）】

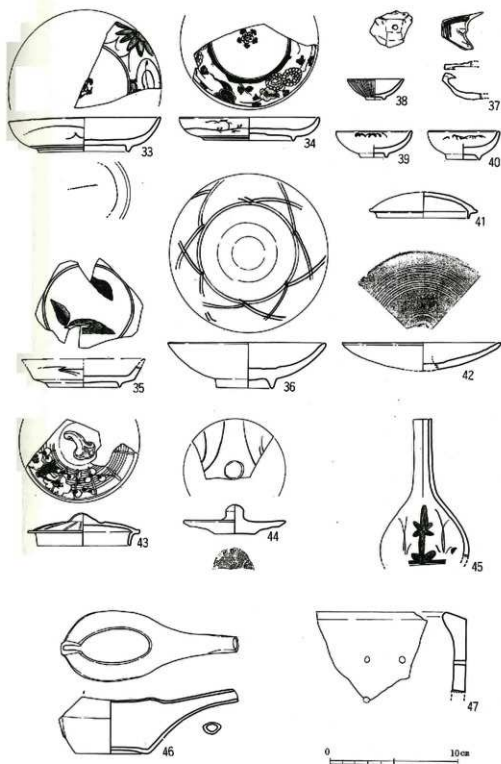
SK 2 第51図-1・2は関西系陶器碗で、18世紀後半以降の製品である。1の外面には、鉄絵による文様がみられる。3は関西系陶器色絵碗で、これも18世紀後半以降の製品。外面の文様には赤色と緑色が使用されている。4-17は肥前染付碗である。4はやや大振りのもので、内底部には一重圈線の中に「大明年製」銘を有する。5-7はいわゆる「くらわんか手」のもので、7の内底部には大明年製崩れ銘を有する。10・11はやや小振りのもので、おそらく紅皿などとして使用されたものである可能性が高い。13・14は接合しないが同一個体と思われ、内底部には二重方形枠を持つ渦福を描く。15の内底部には「富貴長春」銘一部が認められる。4-15の製作年代は18世紀後半代。16の内底部には、一重圈線の中に「宜明年製」銘の一部が認められる。この種の銘は1660-1680年代製作のものに見られる⁽³⁰⁾。17も肥前染付碗で、製作年代は18世紀後半から末に比定される。18は肥前陶胎染付碗で、18世紀前半から中頃に比定される。19は肥前染付皿の底部で、内外面にルリ釉を施すもの。内底部には一重圈線内に「化年製」銘が見られ、この種の銘も1660-1680年代製作のものに限定されるという⁽³¹⁾。第52図-20は関西系陶器碗で、やや深めの形態を呈するもの。製作年代は18世紀代に比定される。21は肥前青磁灰落して、製作年代はやはり18世紀代。22は肥前色絵碗で、1780-1820年代の製品である。23-26は肥前染付筒形碗。見込みの五弁花文はすべて手描きによるものである。27は肥前青磁染付筒形碗。見込みには一重圈線と手描きによる五弁花文、内底部には二重方形枠内に渦福を描く。23-27の製作年代はいずれも18世紀後半代。28は肥前白磁小坏で、1690-1740年代の製品である。29は肥前白磁仏飯器、30は肥前青磁仏飯器である。製作年代は29が17世紀後半から18世紀前半代、30が18世紀中葉から末に比定される。31は肥前染付皿で、内底部にはハリ支えの痕跡が認められる。製作年代は18世紀後半から19世紀前半代。32は肥前色絵皿。高台は蛇ノ目凹形高台となる。製作年代は18世紀末から19世紀前半代に比定される。第53図-33-36は肥前染付皿。33・34の見込みには手描きによる五弁花文、36の見込みは蛇ノ目触刺ぎとなる。また33の内底部には「大明成化年製」銘の一部が確認でき、34の底部は蛇ノ目凹形高台である。製作年代は33が18世紀前半代、34・36が18世紀後半代、35が18世紀前半から中頃に比定される。37は肥前染付の特殊品で、器種は不明であるが、水滴である可能性を考えておきたい。製作年代は18世紀代。38は肥前白磁紅皿で、製作年代は18世紀後半から19世紀前半代に比定される。39・40は肥前染付紅皿で、これらも製作年代は18世紀後半から19世紀前半代に比定される。41は肥前白磁蓋で、17世紀後半から18世紀前半代の製品。42は備前系陶器蓋で、製作年代は18世紀代に比定される。43は関西系陶器蓋で、18世紀後半以降の製品。44は肥前染付蓋で、底部には右回転の糸切り痕を有する。SK 3からも同一個体の破片が出土しており、両者は接合する（第57図-31参照）。製作年代は17世紀中頃。45は肥前染付瓶類で、18世紀後半以降の製品。46は産地不詳の白磁薬飲み。把手部を欠損する。製作年代は不明であるが、近・現代の



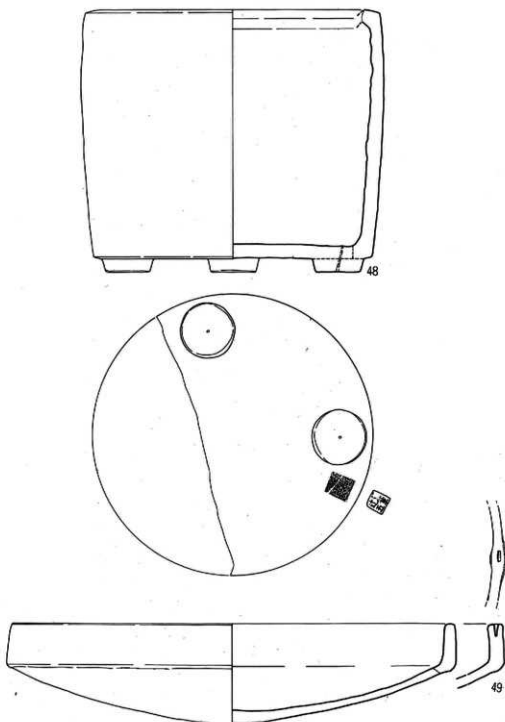
第51圖 SK2出土遺物① (S=1/3)



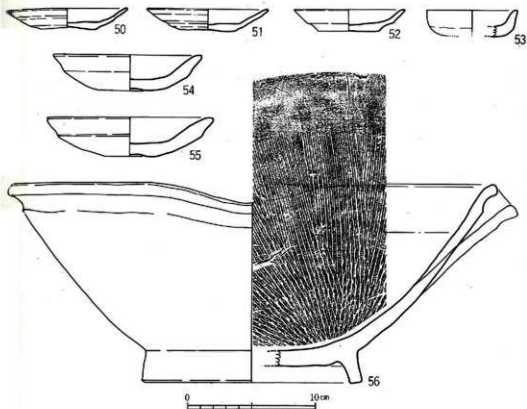
第52図 SK2 出土遺物 ② (S=1/3)



第53図 SK2出土遺物③ (S=1/3)



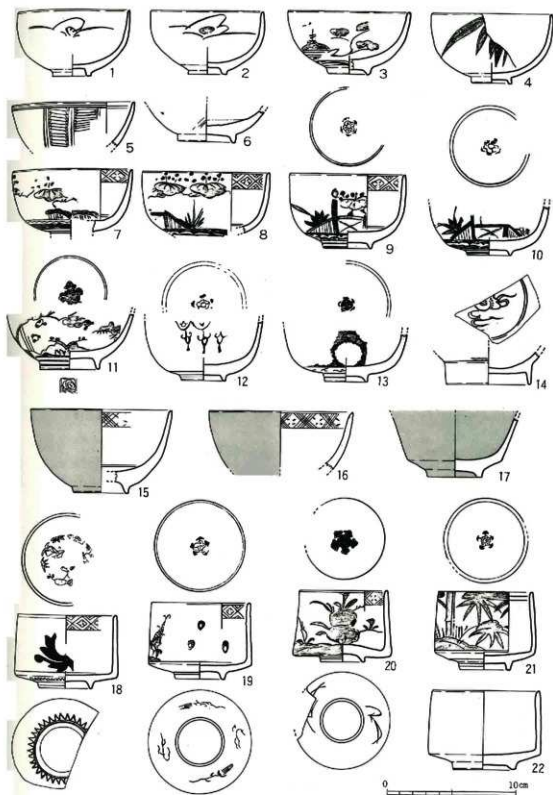
第54図 SK 2 出土遺物④ (S=1/3)



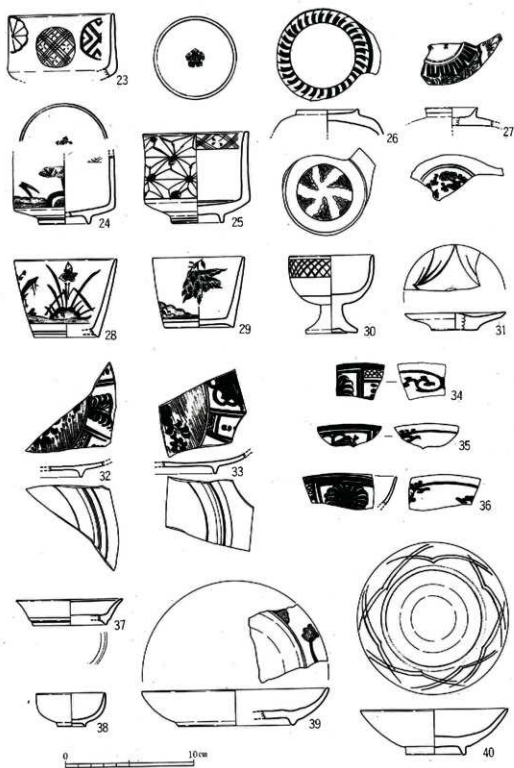
第55図 SK2出土遺物⑤ (S=1/3)

所産と思われ、混入品である可能性が高い。47は瓦質土器焼炉の口縁部で、残存部に3箇所の穿孔が認められる。第54図-48は京都深草焼の土師質土器甕が。欠損しているが、本来内筒部と胴部下半に窓部を有するものと思われ、小川望・小俣悟による②d類⁽³²⁾、小林謙一によるⅡe類⁽³³⁾に分類される器形である。底部には円盤状の3足(2個のみ残存)を有し、そのひとつの足部の近くに「深草辻五」と読める刻印が押されている。製作年代は19世紀前半代である⁽³⁴⁾。49は土師質土器焙烙鍋。難波洋三によるD類で、口縁部にはb2類に分類される把手を2箇所に有する⁽³⁵⁾。第55図-50-55は土師質土器小皿。50-52は底部に右回転の糸切り痕が認められる口ク口整形によるものである。53-55はSK23やSK20に見られるような「手捏ね」手法による整形によるものである。56は唐津系陶器搦鉢。製作年代は18世紀後半から19世紀前半代に比定される。SK2からの出土遺物には、製作年代が19世紀前半代に下るものが認められるが、肥前産の磁器碗などの大半は18世紀後半代のものである。遺物の年代としてはV a期としておきたい。

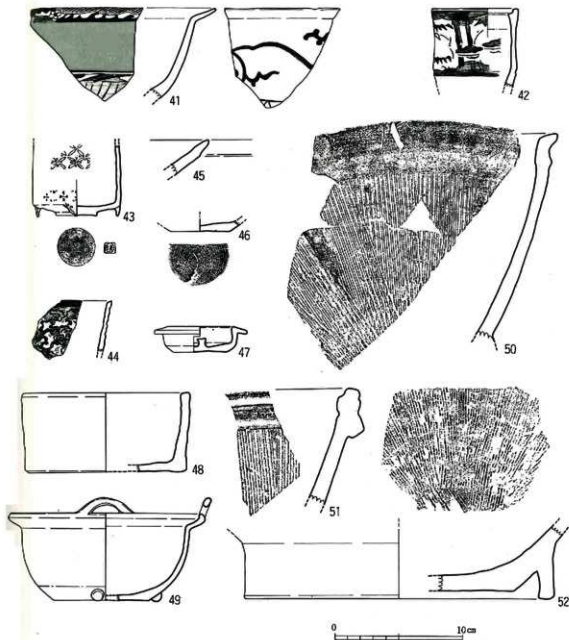
SK3 Fig.56-1・2は関西系陶器碗で、外面に鉄銹による文様を施すもの。18世紀後半以降の製品である。4は関西系陶器色絵碗で、外面に緑色と赤色で笹文を描く。これも18世紀後半以降に比定される。3・5～14は肥前染付碗。5はいわゆる「小広東碗」と呼ばれる器形を呈するもの。6の見込みは蛇の目軸刺ぎとなる。7～10は同一規格同一形態のもので、複数個体で1セットとなるものである可能性が高い。見込みの五弁花文は手描きによるものである。図示したものを含め、最低出土個体数は6個を数える。11は見込みにコンニャク印判による五弁花文、内底部に二重方形枠を有する渦福を描く。12・13の五弁花文は手描きによるものである。14は広東碗と称されるタイプの底部破片。製作年代は3・13が1690～1740年代、5～12が18世紀後半、14が1780～1820年代に比定される。15～17は肥前青磁染付碗で、製作年代は18世紀後半。18～21・第57図-23～25は肥前染付筒形碗。見込みの五弁花文は20・25がコンニャク印判、19・21・24が手描きによるものである。また18は外面文様の中心部に不自然な空白部分が認められ、色絵の素地であった可能性が高い。18～21・23～25の製作年代は、18世紀後半に比定される。22は瀬戸美濃系陶器筒形碗で、18世紀代の製品。26・27は肥前染付蓋で、製作年代は18世紀後半。27の内底部に当たる部分には「富貴長春」銘の一部が認められる。28・29は肥前染付猪口で、製作年代は1690～1740年代。30は肥前染付仏飯器で、18世紀代の製品。31は肥前染付蓋で、SK2から出土した破片（第53図-44）と接合するもの。底部には右回転の糸切り痕を有する。17世紀中頃の製品である。32～36は肥前染付芙蓉手花虫文皿。いずれも同一規格同一形態のものであるが、接合しない。二次的な被熱を受け、器壁が荒れている。SK14・15からも出土例がある。製作年代は1680～1700年代。37は肥前染付皿で、18世紀前半から中頃に比定される。38は肥前白磁紅皿で、18世紀代の製品である。39・40は肥前染付皿。見込みは蛇の目軸刺ぎとなる。製作年代は18世紀後半。第58図-41は肥前青磁染付鉢で、製作年代は18世紀後半に比定される。42は肥前染付の壺あるいは瓶類で、竹をかたどったやや特殊な器形を呈する。18世紀代の製品である。43は関西系陶器色絵香炉で、京焼である可能性が高いもの。外面文様には赤色と金色を使用している。底部には方形枠と円形枠を組み合わせた枠の中に「清」字の刻印が認められる。製作年代は18世紀代に比定される。44は肥前白磁灰落し。型打ち整形によるもので、17世紀代の製品である。45は土師質土器小皿の口縁部破片で、「手捏ね」手法による整形のもの。46はロクロ整形による土師質土器小皿の底部で、右回転の回転糸切り痕が認められる。47は関西系陶器蓋で、外面に鉄銹を施す。18世紀後半以降の製品。48は陶器火容れあるいは灰落として、備前あるいは丹波産のものである可能性が高い。18世紀から19世紀にかけての製品である。49は関西系陶器土鍋で、内外面に鉄銹を施す。18世紀後半以降の製品である。50・52は唐津系陶器摺鉢で、これも18世紀後半以降の製品。51は堺産陶器摺鉢。小破片であるため、型式の同定が困難であるが、白神典之によるⅡ型式2段階、堀内秀樹によるⅥ～Ⅶ期のいずれかに比定できるものである⁽³⁶⁾。製作年代は18世紀後半



第56图 SK3出土遺物① (S=1/3)

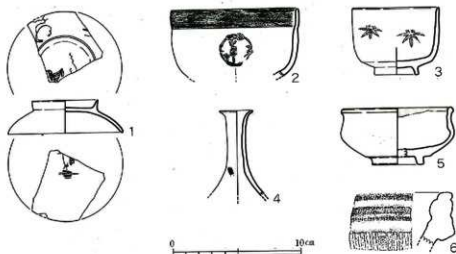


第57図 SK 3 出土遺物 ② (S=1/3)



第58図 SK3 出土遺物 ③ (S=1/3)

から19世紀前半代。以上がSK3より出土した代表的な出土遺物である。芙蓉手花虫文皿(32~36)などはSK14・15の出土遺物と共通点が多く、Ⅲ期のものが混入したと考えられる。碗については、18世紀後半代の肥前産磁器碗や関西系陶器碗が主体を占めるが、1780年以降に製作が開始される広東碗の底部が1個体のみ認められる。また、1820年以降に生産される端反碗は出土していない。従って、遺構の年代はⅤa期に位置づけておきたい。

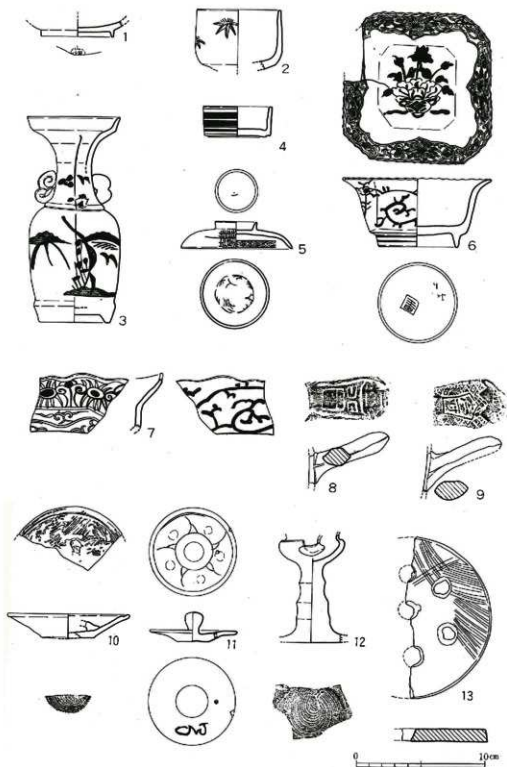


第59図 SK 5出土遺物 (S=1/3)

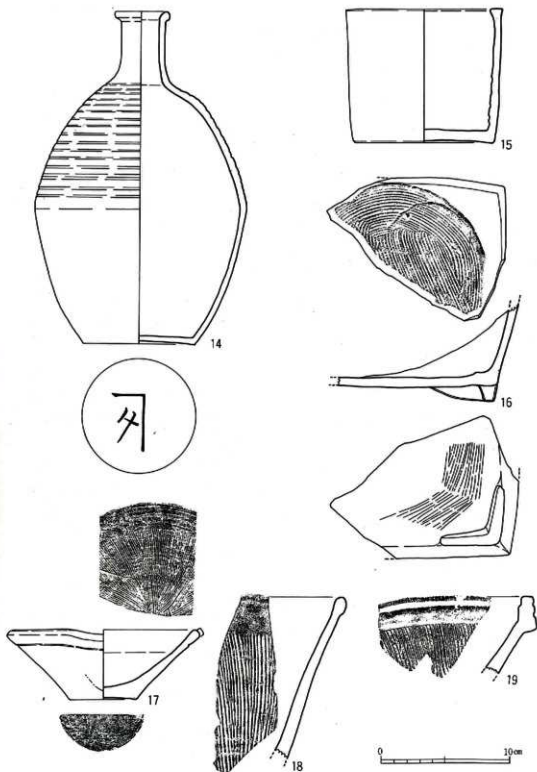
〔Vb期 (19世紀前半から中頃)〕

SK 5 第59図-1は肥前染付蓋。見込みに相当する部位に鷲文を描く。広東碗に対応する蓋である。製作年代は1780～1820年代。蛇足ながら、見込みに鴛文を描く広東碗やそれに対応する蓋は佐賀県西松浦郡有田町広瀬向2号窯物原3・4層⁽³⁷⁾に出土例があり、産地と時期を推定できる。2は肥前染付碗で、外面に松竹梅円形文を描く。製作年代は1820～1860年代。3も肥前染付碗で、小型の丸形湯呑碗である。製作年代はやはり1820～1860年代に比定される。4は肥前染付瓶類で、18世紀後半以降の製品。5は肥前青磁香炉で、製作年代は18世紀後半代に比定される。6は堺産陶器播鉢で、18世紀後半以降の製品である。以上、SK 5よりの出土遺物は比較的少量であるが、その製作年代はすべて18世紀後半代から幕末までで収まる。

SK 7 第60図-1は肥前京焼風陶器碗の底部である。内底部には「山原住」の刻印を有する。製作年代は17世紀後半代⁽³⁸⁾。2は肥前染付碗で、製作年代は1820～1860年代。3は肥前染付瓶類で、「花生」とも称されるもの。18世紀後半代以降の製品である。4は肥前染付段重で、製作年代は18世紀後半から19世紀前半代。5は肥前染付蓋で、破損部には焼継が見られる。また、内底部に相当する部位に焼継記号が朱で描かれている。端反碗に対応する蓋と思われる。製作年代は1820～1860年代に比定される。6・7は肥前染付角鉢。6の破損部には焼継が認められる。内底部には鼻須による図示したような落款銘と朱による焼継文字が見られる。焼継文字は判読できない。7は口縁部の破片で、これも破損部には焼継が認められる。6・7の製作年代は1820～1860年代。8・9は関西系陶器行平鍋の把手。型押しによって、「寿」字あるいはそれを図案化した文様が施されている。18世紀後半以降の製品である。10・11は関西系陶器の土版蓋。10の底部には右回転の糸切り痕を有する。11は外面から内面にかけて空気通しのための貫通孔が一箇所認められるが、その穿孔部を透明釉が覆っており、穿孔の機能を果た



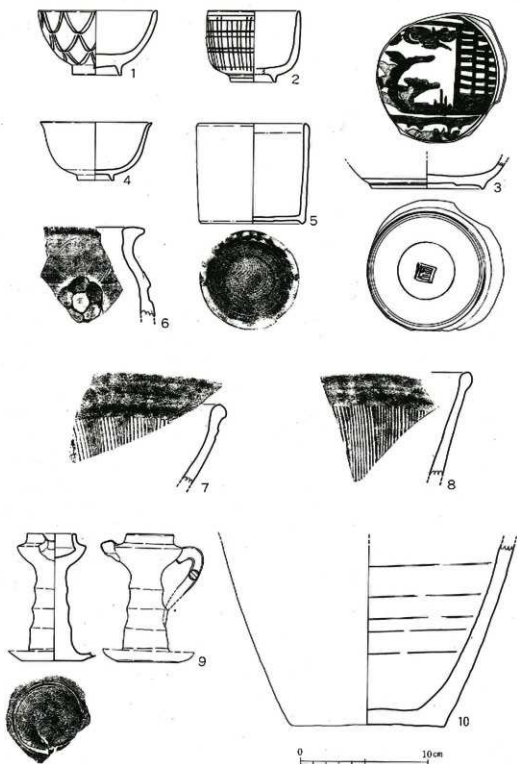
第60図 SK 7出土遺物 ① (S=1/3)



第61图 SK 7 出土遺物② (S=1/3)

していない。裏面には図示したような墨書が認められる。10・11はいずれも製作年代は18世紀後半以降に比定される。12は陶器灯火具で、外面に鉄軸を施すもの。九州産のものと思われ、底部には右回転の糸切り痕が認められる。SK 10に同一形態のものが出土している⁽³⁹⁾。製作年代は明確でないが、19世紀前半代と思われる。13は土師質土器多孔皿状土製品で、「サナ」と呼ばれる土師質・瓦質製硯炉のオプション（付属品）である。この種の土製品は小林隆一の縄文編年Ⅳ期（19世紀前半～中葉）⁽⁴⁰⁾以降に出現するものである。第61図-14は陶器徳利で、備前あるいは丹波産のものである。底部には墨書による酒屋の屋号と思われる記号が描かれている。18世紀から19世紀にかけての製品である。15は瓦質土器火鉢で、比較的小型のものである。「火容れ」あるいは「灰落し」と呼称されるような機能を持つものと推定される。口縁部周辺には使用時につけられたと思われる敲打痕が認められ、例えば煙管などをたたきつけた際に現れる痕跡である可能性が高い。16は瓦質土器硯炉で、小川・小俣による②d類、小林によるⅡe類に分類されるもの⁽⁴¹⁾である。底部内外面は荒い刷毛状工具で調整されており、外面には板状の足を有する。19世紀前半以降の製品である。17・18は肥前唐津系陶器摺鉢。17はやや小型のもので、底部には右回転の糸切り痕を有する。18は玉縁状の口縁を有するもので、大橋康二による編年ではⅣ期（1690～1780年代）前半⁽⁴²⁾に類似のものがある。19は堺産陶器摺鉢で、口縁部の形態は白神典之のⅡ型式⁽⁴³⁾である。製作年代は18世紀後半から19世紀代に比定される。以上、SK 7の出土遺物は1のような製作年代がやや古い京焼風陶器などの混入が認められるものの、出土遺物の大半は18世紀後半代あるいは19世紀前半から中頃に比定され、幕末以降に製作されたものは存在しない。

SK 10 第62図-1・2は肥前染付碗。1は外面に二重割目文を描くもので、製作年代は18世紀後半代に比定される。2は小型の丸形湯呑み碗で、製作年代は1820～1860年代。3は肥前青磁染付皿。底部は蛇ノ目凹形高台で、内底部には「簡江」銘を有する。製作年代は18世紀後半代に比定される。4は関西系陶器碗。高台部付近は露胎となる。18世紀後半以降の製品である。5は関西系陶器で、「火容れ」あるいは「灰落し」といわれる形態を呈する。底部には右回転の糸切り痕を施した後、中央部分を除いてナデ仕上げを行っている。外面には透明釉を施している。18世紀から19世紀にかけての製品であろう。6は唐津系陶器碗の口縁部である。製作年代は18世紀後半から19世紀代に比定される。7・8は唐津系陶器摺鉢の口縁部で、いずれも18世紀後半以降の製品である。9は陶器灯火具で、外面に鉄軸を施すもの。九州産のものと思われ、底部には右回転の糸切り痕が認められる。SK 7に同一形態のものが出土している。19世紀前半代の製品である。10は陶器壺の底部。生産地は備前である可能性が高い。18世紀から19世紀にかけての製品である。以上、SK 10の出土遺物は18世紀後半から19世紀中頃に比定され、すべてが幕末までに収まるものである。



第62図 SK10出土遺物 (S=1/3)



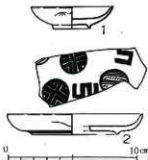
第63図 SK 16・SK 22出土遺物 (S=1/3) 1 SK 16 2・3 SK 22

SK 16 第63図-1は肥前染付碗。小型の丸形湯呑み碗で、製作年代は1820～1860年代に比定される。SK 16からの出土遺物は、この染付碗1個のみであった。

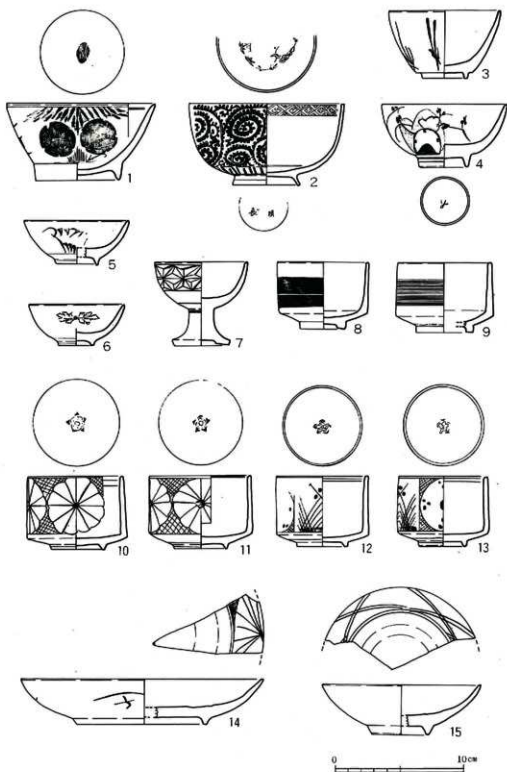
SK 22 第63図-2は肥前染付端反碗の口縁部で、製作年代は1820～1860年代に比定される。3は肥前染付輪花皿の口縁部で、製作年代は18世紀後半代である。SK 22の内部には多量の瓦が充填されたような状態で検出されており、埋土の量より瓦の量の方が多いような状況であった。それに対して、陶磁器類の出土量はごく少ない。2が遺構の所属年代を示すものであろう。

SK 39 第64図-1は肥前染付紅皿、2は肥前染付皿である。いずれも製作年代は18世紀後半以降に比定される。SK 39からの出土遺物はごく少量であり、図示したものは18世紀後半代に比定されるものである。ただし小破片ではあるが、外面に線描きによって文様を施した肥前染付碗（1820～1860年代の製品）が認められ、この遺物が遺構の所属年代を示すものと考えている。

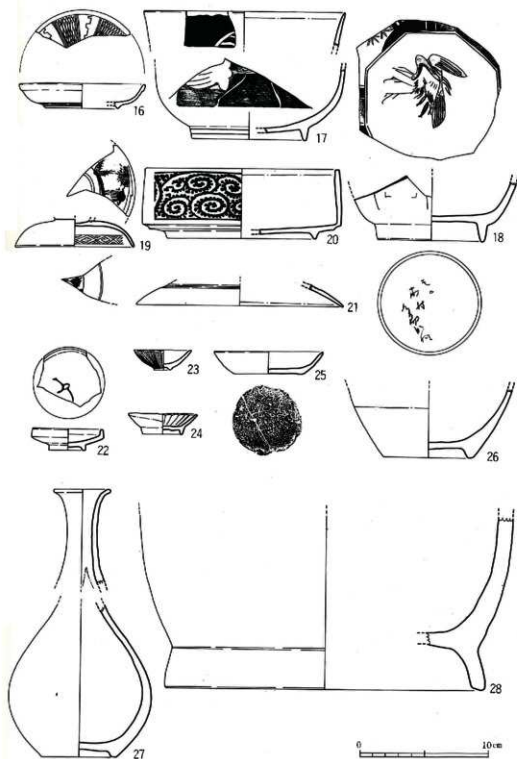
SK 44 第二次調査区に位置する土坑である。第65図-1は肥前染付広底碗。製作年代は1780～1820年代に比定される。2は肥前染付碗で、内底部には「大明年製」銘の一部が認められる。18世紀後半代の製品である。3は関西系陶器で、いわゆる小杉碗といわれる形態を呈するもの。18世紀後半以降の製品。4は肥前染付碗で、いわゆる「くらわんか」手のものである。製作年代は18世紀後半代に比定される。5・6は肥前染付小杯。紅皿として使用された可能性もある。6の外面文様はコンニャク印判である。製作年代は5が18世紀後半代、6が18世紀前半から中頃に比定される。7は肥前染付仏飯器で、18世紀代の製品である。8・9は関西系陶器の筒形碗で、図示した以外にも別個体の破片が存在している。18世紀代の製品である。10～13は肥前染付筒形碗。見込みの崩れた五弁花文はすべて手描きによるものである。10・11、12・13は同一形態で類似文様を有するものであり、本来セットであった可能性を考えたい。図示したものを含めて、最低出土個体数は前者が4個体、後者が3個体を数える。また12・13については、近接しているSK 45でも類似形態のものが出土している。10～13の製作年代は18世紀後半から19世紀初頭に比定される。14・15はいずれも見込みが蛇の目軸剥ぎとなる肥前染付皿。18世紀後半代の製品である。



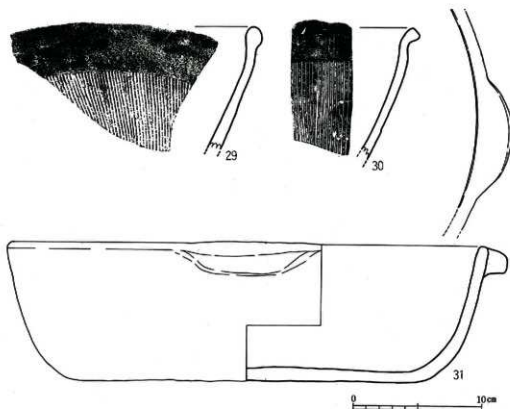
第64図 SK 39出土遺物 (S=1/3)



第65图 SK44出土遗物① (S=1/3)

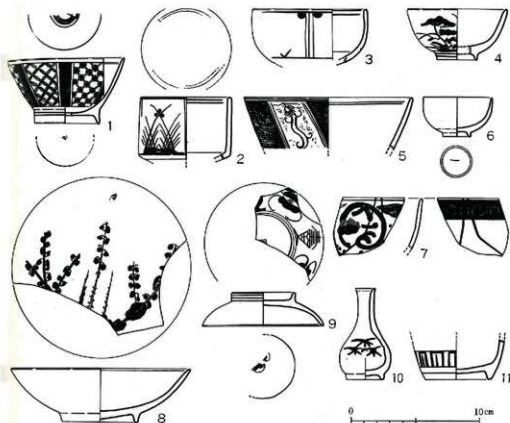


第66図 SK 44 出土遺物(2) (S=1/3)



第67図 SK 44出土遺物③ (S=1/3)

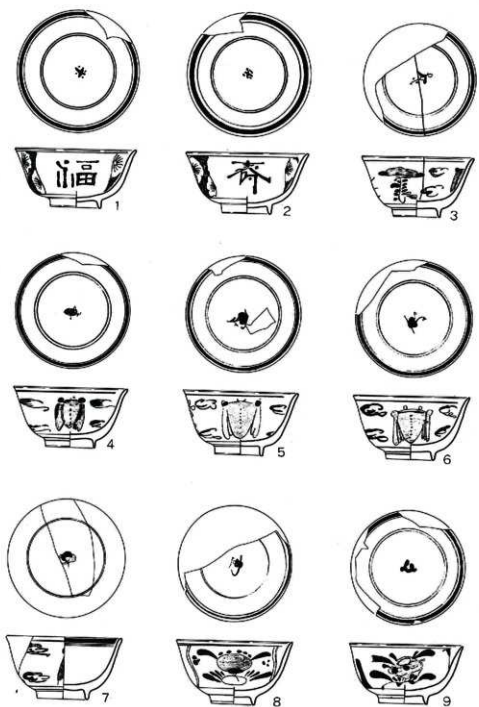
第66図-16も肥前染付皿で、製作年代は18世紀後半から19世紀前半代。17は肥前染付蓋物で、焼継が認められる。口縁部と底部は接合していないが、同一個体である可能性が高い。18世紀後半以降の製品である。18は肥前染付角皿。焼継と焼継文字が認められる。内底部にみられる焼継文字は「モロ 木村九郎次様」と判読しておきたい。この資料の存在によって、当該遺構の存在する地点付近が、府内藩用人木村寿馬の炭屋敷部分に当たる可能性を考古学的に傍証したことになる。製作年代は18世紀後半から19世紀中頃に比定される。19は肥前染付蓋で、18世紀後半代の製品である。20は肥前染付段重で、製作年代は18世紀後半から19世紀前半代に比定される。21は関西系陶器蓋で、18世紀後半以降の製品。22も関西系陶器の小型皿で、内面に鉄軸による文様を施す。18世紀代の製品である。23・24は肥前白磁缸皿で、製作年代は23が18世紀後半以降、24が17世紀後半から18世紀前半に比定される。25は土師質土器小皿で、底部には右回転の糸切り痕が認められる。26は陶器底部で、備前系のものである。27は肥前陶器瓶類である。26・27はいずれも18～19世紀にかけての製品。28は土師質土器の底部で、火鉢類の底部と思われる。第67図-29・30は唐津系陶器挿鉢で、18世紀後半以降の製品である。31は土師質土器火鉢で、口縁部の2箇所に略半円形の把手を有する。SK 44の出土遺物には製作年代が19世紀代に下るものがあり、また焼継が認められるものなども存在する。遺構の最終埋没年代は19世紀前半代に考えておきたい。



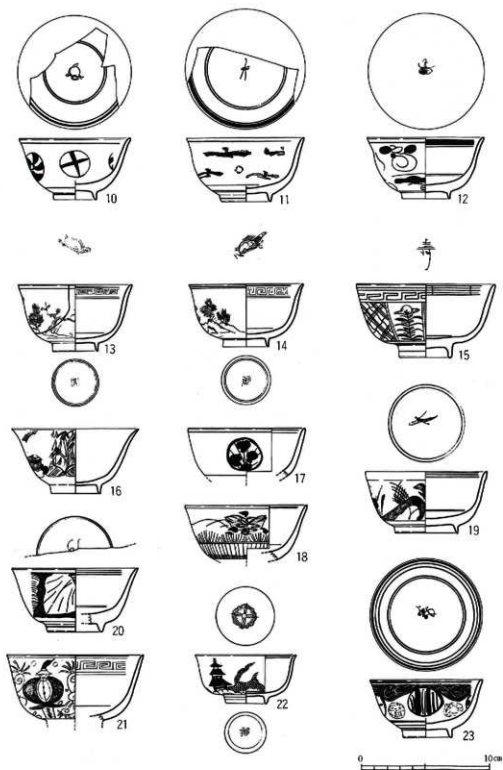
第68図 SK45出土遺物（S=1/3）

SK45 第二次調査区に位置する土坑である。第68図-1は肥前染付広東碗。製作年代は1780～1820年代に比定される。2は肥前染付筒形碗。SK44で同一器形・文様のものが出土している。18世紀後半の製品。3は肥前染付碗で、製作年代は1820～1860年代。4は肥前染付小坏。製作年代は18世紀後半。5は肥前染付広東碗で、1780～1820年代の製品。6は関西系陶器小坏である。高台部付近が露胎となり、内底部には墨書が認められる。製作年代は18世紀代に比定される。7は肥前染付端反碗の口縁部で、焼継が認められる。製作年代は1820～1860年代。8は中国産の染付皿。内底部は露胎となり、カンナ削り痕が認められる。製作年代は16世紀末から17世紀前半。9は肥前染付盞で、端反碗に対応するものである可能性が高いもの。1820～1860年代の製品である。10・11は肥前染付瓶類で、製作年代は18世紀後半から19世紀前半に比定される。SK45の出土遺物は多量とはいえないが、出土遺物の大半が18世紀後半から幕末までで収まるものである。製作年代の古い中国産染付皿である8は、混入でなければ伝世品である可能性が高い。

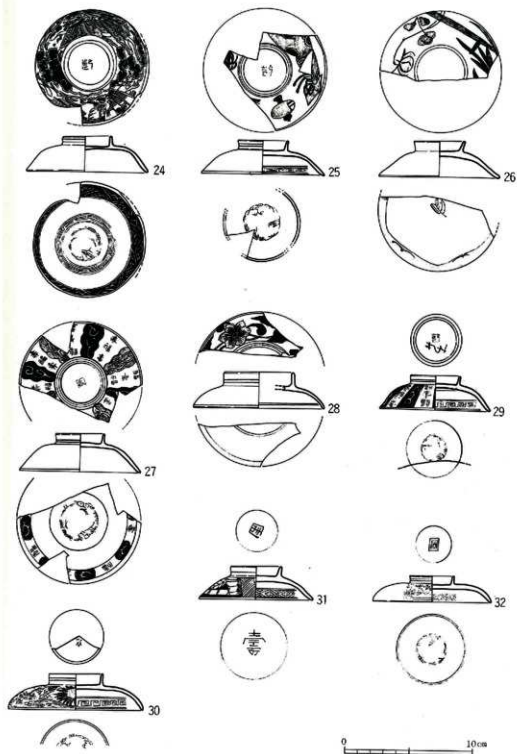
SK33 第69図-1~9・第70図-10~22は磁器の染付端反碗である。このうち1~10・12・16・17・20は瀬戸美濃産、11・13~15・18・19・21は肥前産のものである。瀬戸美濃産の磁器碗は肥前産のものと比較して、文様の呉須の部分を指でさわるとやや盛り上がりて感じられることや磁肌不光ぐあい⁽⁴⁴⁾などから、明瞭に判別できる。1・2、3~7、13・14はそれぞれ同一規格同一形態であり、複数個体で1セットとなるものである。図示したものを含めて、最低出土個体は1・2が3個、3~7が7個、13・14が4個認められる。13には焼継と朱描きの焼継文字が認められる。焼継文字は判読できない。23は磁器色絵端反碗で、これも瀬戸美濃産である可能性が高い。外面文様には呉須のほかに、赤・黄・緑の三色が使用されている。第71図-24~32は端反碗に対応する肥前染付蓋である。26は図示したほかにも、同一形態のものが最低3個出土している。24・25・27・29の内底部には「乾」字、31の見込みには「壽」字を描く。29には焼継と朱描きの焼継文字が認められ、内底部の焼継文字は「木村」と判読できる。この資料の存在によって、当該遺構の存在する地点付近が、府内の上級武士であった木村家の屋敷地であったことを考古学的に傍証したことになる。30にも焼継と焼継記号が認められる。1~32の製作年代は1820~1860年代に比定される。第72図-33・34および35・36は器形・文様からみて、セットとなる肥前染付の丸形碗と蓋である。34には焼継と朱描きの焼継文字あるいは焼継記号が認められる。焼継文字あるいは焼継記号は判読できない。33・34の製作年代は18世紀後半から19世紀中頃、35・36の製作年代は19世紀前半から中頃に比定される。37は内底部に「乾」字を有する肥前染付蓋。端反碗に対応するもので、製作年代は1820~1860年代に比定される。38は19世紀前半に比定される瀬戸美濃染付碗の底部である。39~42は肥前染付碗。41には焼継と朱描きの焼継文字が認められる。焼継文字は「ケ廿六」と判読できる。39・40・42は18世紀後半、41は19世紀前半に比定される。43は磁器染付碗で、胎土の素地や釉調からみて肥前以外の地方窯の製品と思われる。製作年代は18世紀末から19世紀前半に比定される。第73図-44~51は肥前染付碗。44~46・48~50の外面文様は、線描きによるものである。また45・50には焼継が、48・51には焼継と朱描きの焼継文字が認められる。48の焼継文字は「九郎次様」と判読しておきたい。51の焼継文字は判読できないが、「木村」である可能性もある。50の内底部には「乾」字が描かれている。44~46・48~50の製作年代は19世紀前半、47・51は18世紀後半以降に比定される。52は肥前色絵碗の底部で、焼継と朱で描かれた「木村」の焼継文字が認められる。文様は赤色が使用されている。製作年代は1820~1860年代。53は肥前染付筒形碗で、18世紀後半の製品である。54~56および第74図-57~63は肥前染付碗。このうち55~59・60~63は同一規格のものが複数認められる。図示したものを含め、最低出土個体数は前者が7個、後者が5個を数える。製作年代は54が明治以降の可能性が高いほか、その他の55~63が18世紀末から19世紀前半に比定される。64~70は小型の肥前染付丸形湯呑み碗である。類似した器形・文様を呈するものであるが、セットとなるものではない。70は高台量



第69圖 SK33出土遺物① (S=1/3)



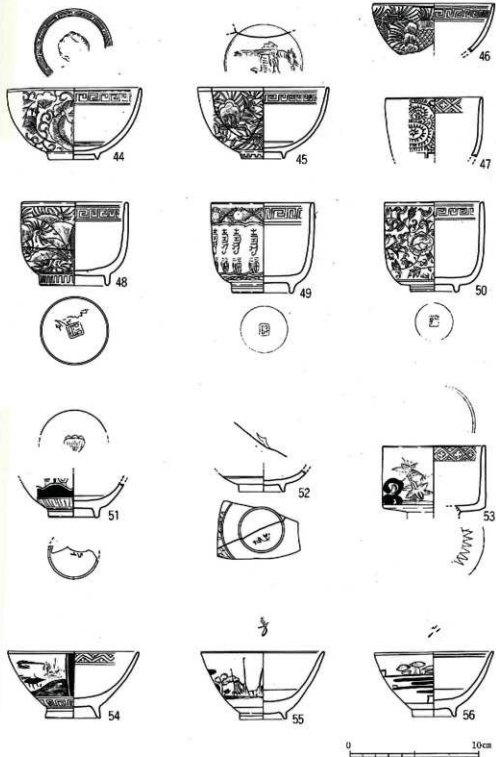
第70図 SK33 出土遺物② (S=1/3)



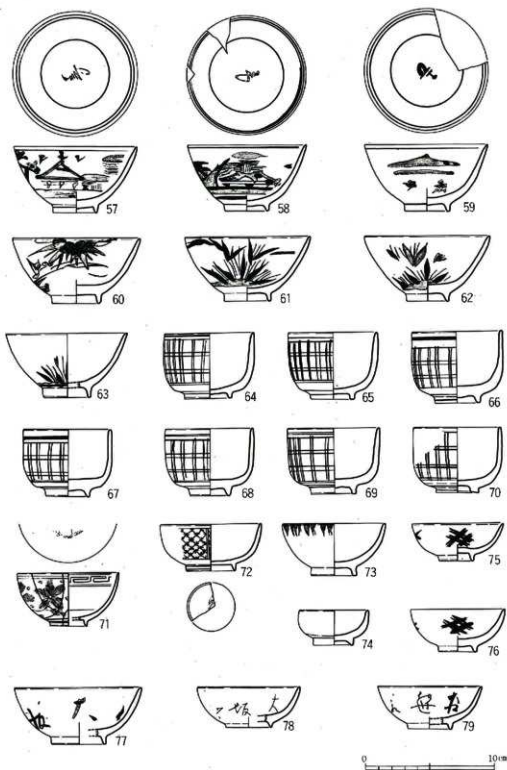
第71图 SK33出土遺物③ (S=1/3)



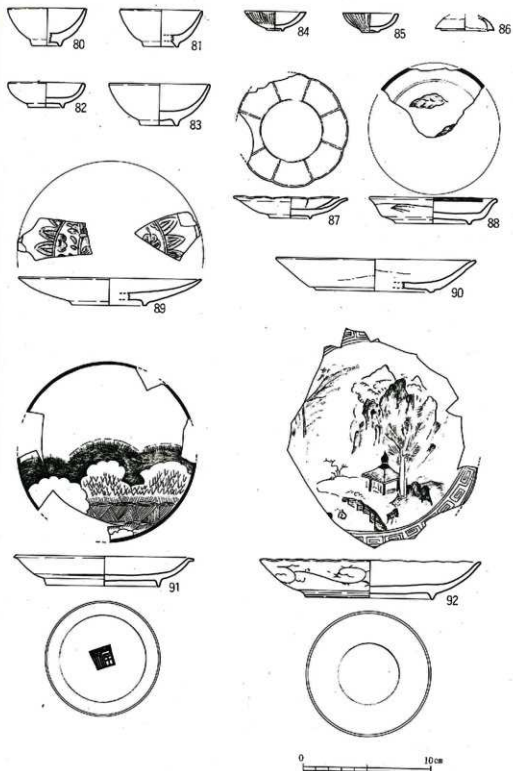
第72図 SK 33 出土遺物④ (S=1/3)



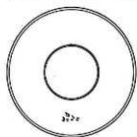
第73図 SK33出土遺物⑤ (S=1/3)



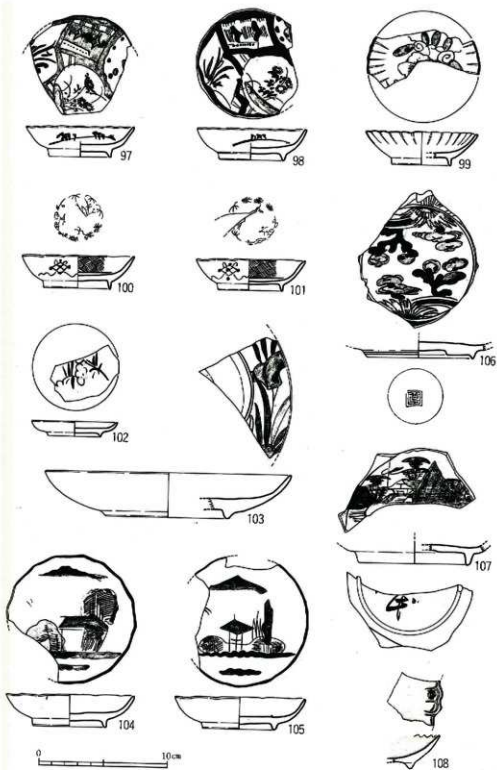
第74図 SK33 出土遺物⑥ (S=1/3)



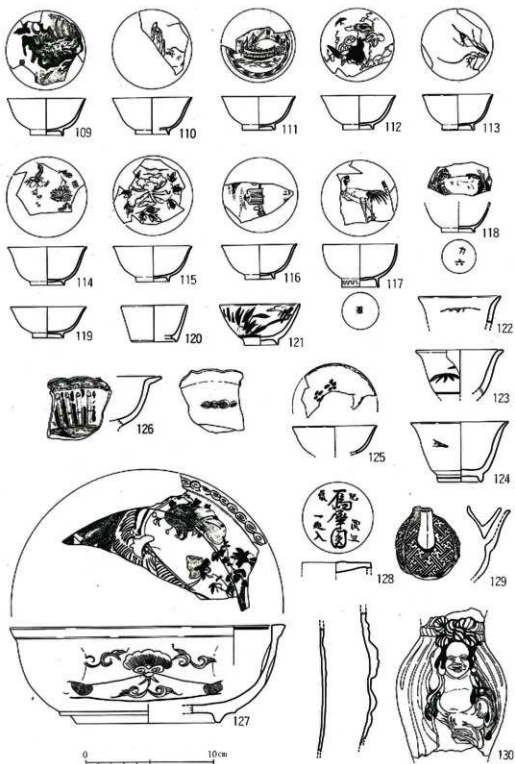
第75図 SK33出土遺物⑦ (S=1/3)



第76図 SK33出土遺物⑧ (S=1/3)



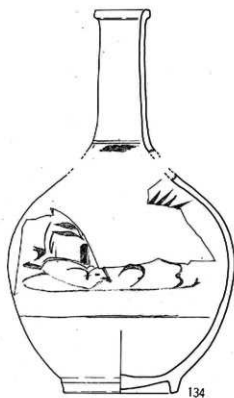
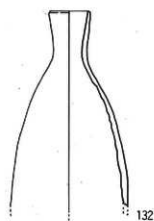
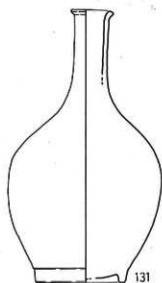
第77图 SK33 出土遗物⑨ (S=1/3)



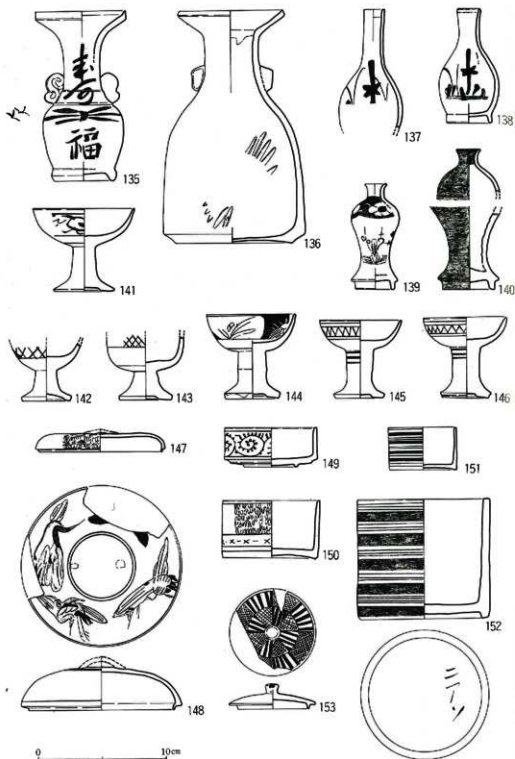
第78回 SK33出土遺物 ⑩ (S=1/3)

付け部をやや幅広くに製作している。製作年代はいずれも1820～1860年代。71～73は肥前染付碗である。71は焼継、72は焼継と朱描きの焼継文字を有する。72の焼継文字は判読できないが、48に書かれたものと類似しており、「九郎次様」と読める可能性がある。73は濃み筆による雨降り柳文を描くものであるが、製作年代が古く混入品であろう。71・72は18世紀後半から19世紀前半代、73は1690～1740年代に比定される。74は陶器紅皿で、19世紀以降の製品。産地は瀬戸美濃であろう。75～79は肥前染付紅皿。77～79の外面には、呉須による「大坂新町お笹紅」の文字が書かれている⁽⁴⁵⁾。大坂の有名化粧品店によって販売された「紅」を入れた容器で、当時の文献などに「紅猪口」などと記されていたものである。容器自体は長崎県西彼郡長与町長与窯跡で焼成されたものである⁽⁴⁶⁾。75～79の製作年代は18世紀後半から19世紀中頃に比定される。第75図～80～86は肥前白磁紅皿で、製作年代はいずれも18世紀後半から19世紀中頃に比定される。84・85は型打ち整形により菊花をかたどったものである。87は肥前白磁皿で、これも型打ち整形によるものである。17世紀後半代の製品である。88・89は肥前染付皿で、製作年代は89が1660～1680年代、88が18世紀前半から中頃に比定される。88は類似形態のものがSK2・SK9でも出土している（第53図～35、第35図～13参照）。90は中国産白磁皿で、製作年代は16世紀末から17世紀前半代である。91は肥前染付皿で、内底部に角福を描く。製作年代は1660～1680年代に比定され、伝世品あるいは混入品である可能性が高い。92も肥前染付皿で、内面に楼閣山水文を描く。19世紀前半から中頃に比定される。第76図～93～96は蛇ノ目凹形高台を持つ肥前染付皿で、18世紀後半代に比定されるもの。93・94は焼継と朱描きの焼継文字が認められるが、焼継文字は判読できない。95・96は器形・文様とも同一であるため、複数個体で1セットであったものである可能性が高い。図示したものを含め、同一規格同一形態のものが最低4個体認められる。第77図～97～107も肥前染付皿である。97・98および100・101は同一器形同一文様を持つものであるが、本来セットであったものかどうかは不明である。104・105の口唇部は口鏤となる。106は内底部に「筒江」銘がみられる。107は蛇の目凹形高台のものであるが、焼継と朱描きの焼継文字が認められる。ただし欠損のため、焼継文字は判読できない。製作年代は97～102・104・105・107が18世紀後半から19世紀中頃、103・106が18世紀後半代に比定される。108は青磁小皿で、兵庫県三田市で製作されたいわゆる「三田青磁」と呼ばれるものである。高台は貼付け高台で、これは三田青磁に特徴的にみられる成形技法である。製作年代は19世紀前半代。第78図～109～119・125は薄手の器壁を持つ磁器小杯で、関西産の可能性が高いものである。112・113・115・117・118の内面文様は色絵である。118は残存部には焼継が認められないが、内底部に「カハ」と判読できる朱描きの焼継文字がみられる。製作年代は、いずれも19世紀前半から中頃に比定される。120は肥前白磁小杯で、1690～1740年代の製品。SK14・15やSK2でも類似形態のものが出土している（第17図～26、第52図～28参照）。121～124は肥前染付小杯で、製作年代はいずれも18世紀代に比定される。126・127は肥前色絵鉢で

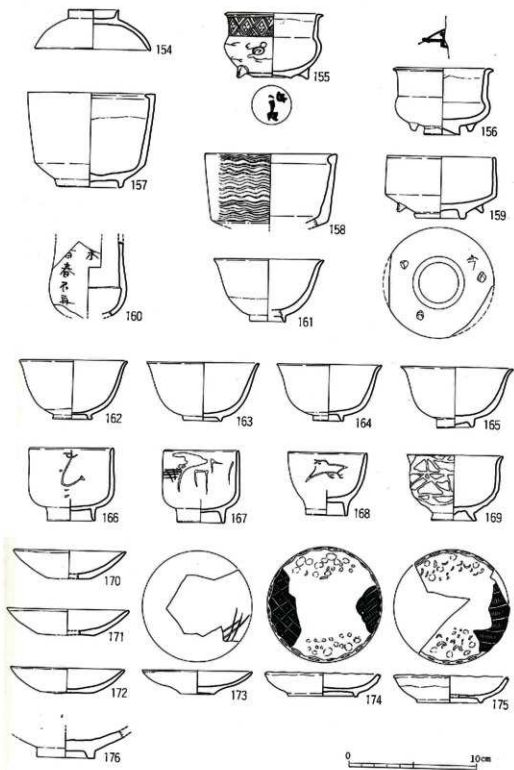
ある。127には焼継が認められ、見込みの煙文を赤絵で描いている。製作年代は126が18世紀末から19世紀前半代、127が19世紀前半から中頃に比定される。128は肥前染付合子蓋で、外面には「肥後 波辺 一処入 島屋」の文字が認められる。漢方薬を入れた薬盒の蓋で、「島屋」は薬名である⁽⁴⁷⁾。19世紀前半代の製品。類例の探索が非常に不十分であるが、類例が山口県間田片川遺跡⁽⁴⁸⁾等で発見されている。129は肥前磁器の特殊品で、醤油差しのような用途を持つものであろう。内面は無釉である。胎土の素地・釉調・作行などから、長崎県佐世保市三川内焼の可能性が高い。また断定できないが、後述する第84図～198の蓋とセットになる可能性も考えられる。製作年代は19世紀代に比定される。130は肥前染付掛花生。型打ち整形により、布袋像を打ち出している。製作年代は19世紀前半から中頃に比定される。第79図～131は肥前磁器類で、徳利である。残存部に呉須による文様は認められない。約5合の容量を有する。18世紀後半以降の製品である。132は陶器徳利で、いわゆる割徳利といわれる形態を呈する。製作年代は19世紀前半から中頃である。133・134は肥前染付瓶類で、徳利である。容量は約1升を測る。134は接合していないが釉調や文様、および両者ともに焼継が認められることから、同一製体と判断した。132～134の製作年代は、いずれも18世紀後半から19世紀中頃に比定される。第80図～135は肥前染付瓶類で、花生である。外面には呉須によって、文様とともに「寿福」の文字を描いている。18世紀後半から19世紀中頃に比定される製品である。136は陶器花生で、九州産のものである可能性が高い。外面には鉄釉を施す。製作年代は19世紀前半から中頃。137・138は肥前染付瓶類、139は肥前色絵瓶類である。140は肥前磁器瓶類で、ルリ釉を施すもの。接合しないが、同一製体である可能性が高い。137～140の製作年代は、いずれも18世紀後半から19世紀中頃に比定される。141～143は肥前染付仏飯器、144～146は肥前色絵仏飯器である。いずれも18世紀後半から19世紀中頃の製品である。147・148は肥前染付段重蓋、150～152は肥前染付段重で、製作年代はやはり18世紀後半から19世紀中頃。152の内底部には、判読できないが墨書が認められる。153は肥前染付蓋で、これも18世紀後半から19世紀中頃の製品である。第81図～154は肥前白磁蓋。製作年代は1690～1740年代に比定される。155～157は香炉で、155は肥前染付、156は肥前白磁、157は関西系陶器である。155には内底部に、156には見込みに、157には胴部外面下半部にそれぞれ判読できない墨書が記されている。製作年代はいずれも18世紀後半から19世紀中頃。158は肥前白磁灰落し、159は肥前唐津系陶器灰落しである。159の外面には刷毛目文様が認められる。製作年代は158が19世紀初頭から前半代、159が17世紀後半から18世紀代に比定される。160は中国産染付瓶類で、胴磨ぎ技法による整形を行っている。18世紀代の製品である。161～165は関西系陶器碗で、高台付近は露胎となる。18世紀後半以降の製品である。166～168は陶器碗。外面にはイッチン掛けによる文様を描く。肥前以外の地方窯の製品であり、在地産のものである可能性も考えられる。製作年代は19世紀代に比定される。169は萩焼陶器ピラ掛け小碗。「萩焼古窯」による長門深川焼Ⅵ-b類に相当するもので、萩焼編年第V



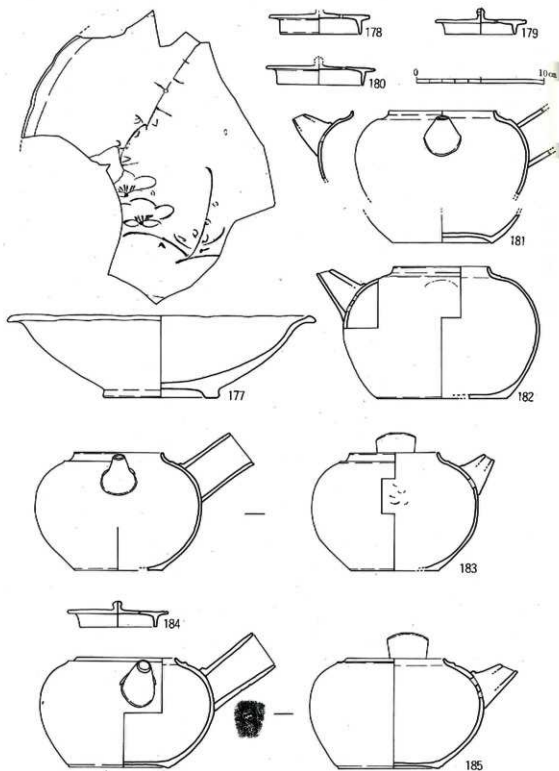
第79図 SK33出土遺物① (S=1/3)



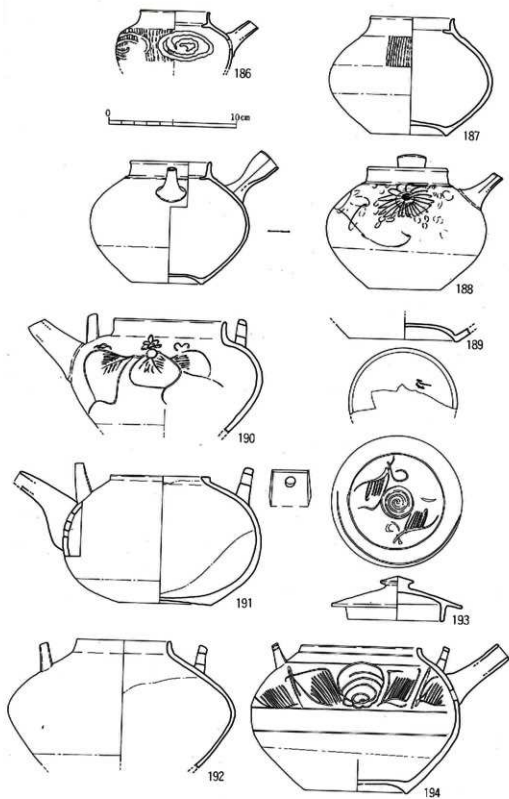
第80圖 SK 33 出土遺物④ (S=1/3)



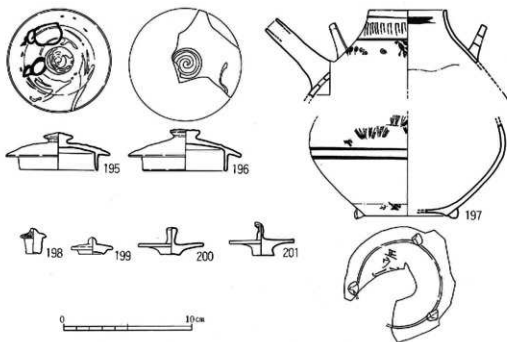
第81図 SK33出土遺物⑬ (S=1/3)



第82図 SK33出土遺物⑬ (S=1/3)

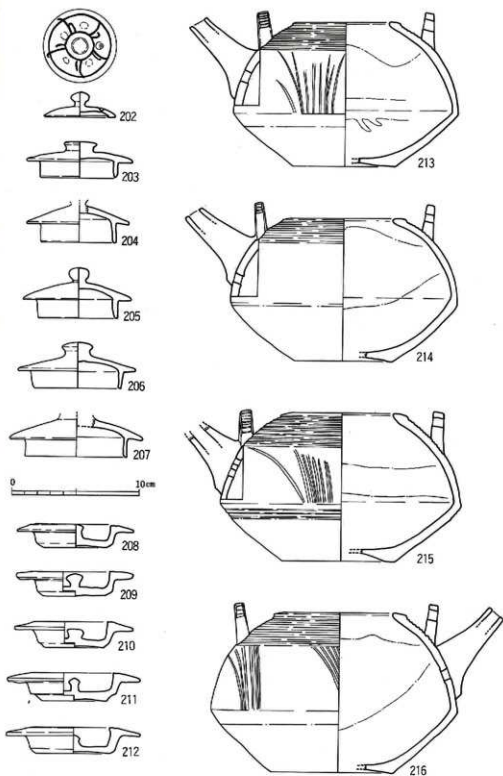


第83圖 SK33出土遺物 ⑮ (S=1/3)



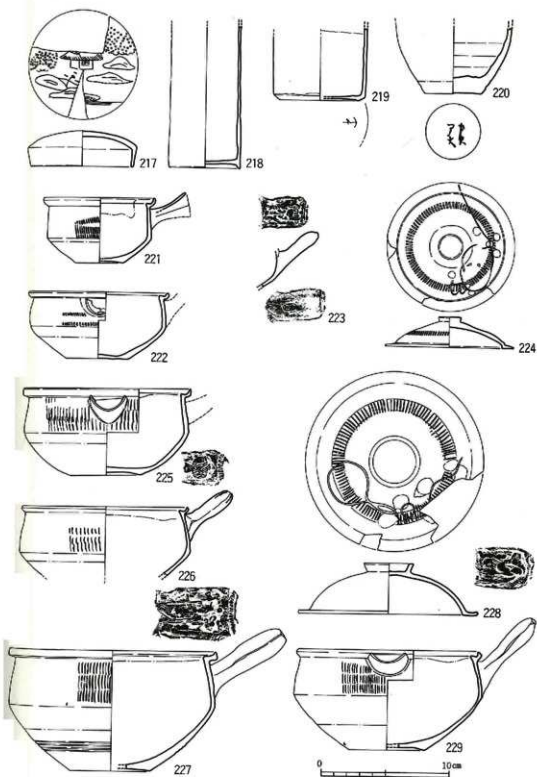
第84図 SK33出土遺物等 (S=1/3)

期(文化・文政年間～幕末=19世紀初頭～中頃)に位置づけられるものであろう⁽⁴⁹⁾。170～173は関西系陶器灯火具で、内向に透明釉を施すものである。また173の内面にはへら描きによる文様を施している。製作年代はいずれも19世紀代。174・175も関西系陶器皿で、やはり19世紀代の製品。177は肥前唐津系陶器青緑釉皿で、内野山窯周辺の製品と思われるもの。見込みは蛇の目釉刺ぎとなる。17世紀後半から18世紀前半代に比定され、当該遺構のものとしては製作年代がやや古く、底部のみの破片であることから混入品と考えられる。第82図～177は肥前唐津系陶器鉢。外面に青緑釉を施し、内面の文様は鉄絵である。製作年代は19世紀前半から中頃。179～185・第83図～186～194および第84図～195～197は関西系陶器急須とそれに組み合う蓋である。185は把手部分に六角形枠を持つ「清」の刻印を有する。186・187は外面に飛びガンナによる文様を施す。190・193～196の文様は、イッチン掛けによるものである。189は内底部に墨書が認められる。197は胴部下半部と内底部に墨書が認められるが、内底部の「正ワ」のほかは判読できない。178～197の製作年代はいずれも18世紀後半以降。198は肥前磁器蓋で、三川内焼である可能性が高いものである。前述したように、第78図～129に対応するものである可能性が考えられる。製作年代は19世紀代。199は上師質土器蓋、200・201は関西系陶器蓋である。これらの製作年代は18世紀後半以降である。第85図～202～207は関西系陶器蓋で、上瓶類の蓋である。202には空気通しの穴が1個認められるが、その上を透明釉が覆っており、本来の機能を果たしていない。204は外面に銅緑釉を施す。202～207は18世紀後半以降に比定される。208～216

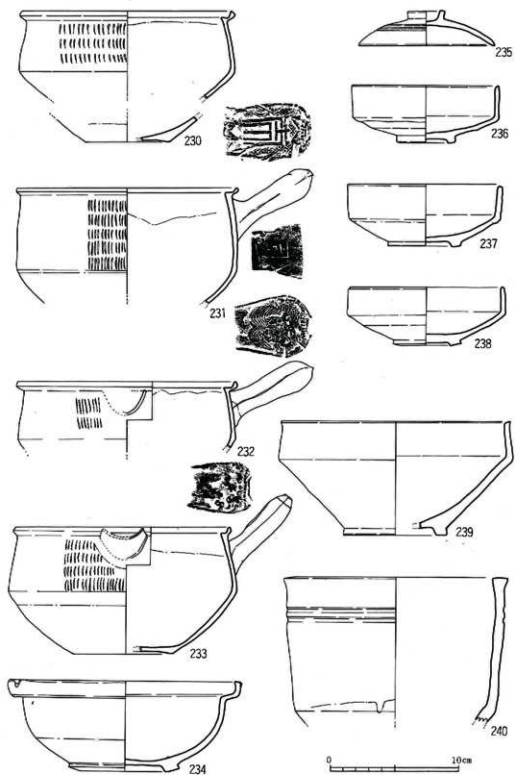


第85图 SK33 出土遺物 ⑦ (S=1/3)

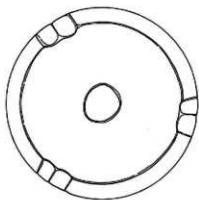
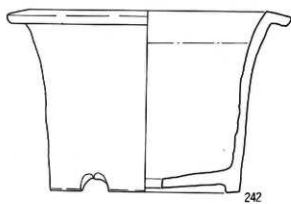
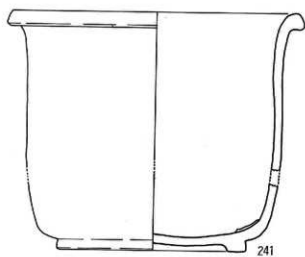
は九州産と思われる陶器土瓶とそれに対応する蓋で、外面に鉄釉を施すもの。土瓶には外面にヘラ彫りによる文様を施すもの（213・215・216）と文様を持たないもの（214）が存在する。製作年代はいずれも18世紀後半以降である。第86図-217は肥前陶器蓋で、胎土の赤地・釉調などから、長崎県長崎市現川焼の可能性が高いものである。現川焼の存続期間は元禄4年（1691）から寛延2年（1749）頃といわれている⁽⁵⁰⁾ので、当該資料が現川焼の製品であるとすれば、その製作年代は17世紀末から18世紀中頃までに比定できる。218-220は関西系陶器である。218は器種不明であるが、瓶類の可能性が高い。219は灰落し、220は甕で、内底部に墨書が記されている。また219と同一形態のものが、図示した以外に4個出土している。218-220の製作年代は18世紀後半以降に比定される。221-229・第87図-230-233は関西系陶器行平鍋とそれに対応する蓋である。228・229は釉調・作行などより、セットである可能性が高いものである。行平鍋には外面に飛びガンナによる文様を有し、大型から小型のものまで数種類の規格が認められる。鍋の底部付近には、いずれもススの付着が認められる。222の把手は筒状のもので、他の合わせ型によるものと異なるものである。223の把手外面下部には、「天三」の刻印を有する。225・229の蓋には、飛びガンナとともにイッチン掛けによる文様が認められる。221-233の製作年代は18世紀後半以降に比定される。234は関西系陶器土鍋。やはり底部付近にススの付着が認められ、口縁部の3箇所にくぼみを有する。外面には透明釉を施している。これも18世紀後半以降の製品である。235は関西系陶器蓋で、製作年代は19世紀前半以降に比定される。236-238も関西系陶器鉢で、内面および口縁部外面に鉄釉を施すもの。底部付近および胴部外面下半部は露胎となる。18世紀代の製品である。239は肥前唐津系陶器鉢で、外面に青緑釉を施すもの。製作年代は19世紀前半から中頃に比定される。240・第88図-241・242は陶器横木鉢。240は外面に鉄釉、241は青緑釉、242は透明釉を施す。また、243には底部に焼成前の穿孔を有する。生産地は240が関西系、241・242が瀬戸美濃産のものと思われ、製作年代はいずれも18世紀後半以降に比定される。第89図-243-246・第90図-247・248は肥前唐津系陶器播鉢。243・244・246-248の製作年代は、いずれも18世紀後半から19世紀中頃。大橋編年のⅣ・Ⅴ期⁽⁵¹⁾に類似の器形が認められる。245は外面に格子目状の叩き、内面にやや荒い6条一単位の櫛目を施すもので、口縁部は折り返しによって形成されている。S K 14・15から出土した破片とS K 33からの破片が接合している。18世紀後半から19世紀中頃に生産された播鉢にこの形態のものではなく、本来S K 14・15に帰属するものである可能性も考えられる。第91図-249は瓦質土器火鉢。いわゆる「箱火鉢」と称される器形を呈するもので、外面には木目瓦痕が認められる。同様の形態のものが、S K 34からも出土している。250は土師質土器火鉢。口縁部には平面形態が略半円形を呈する把手が2箇所設けられている。やはり同様の形態のものがS K 44から出土している。249・250の製作年代は19世紀前半から中頃に比定される。第92図-251は関西系陶器火鉢あるいは灰落しといわれる形態を呈するもの。外面には透明釉を施し、底部付



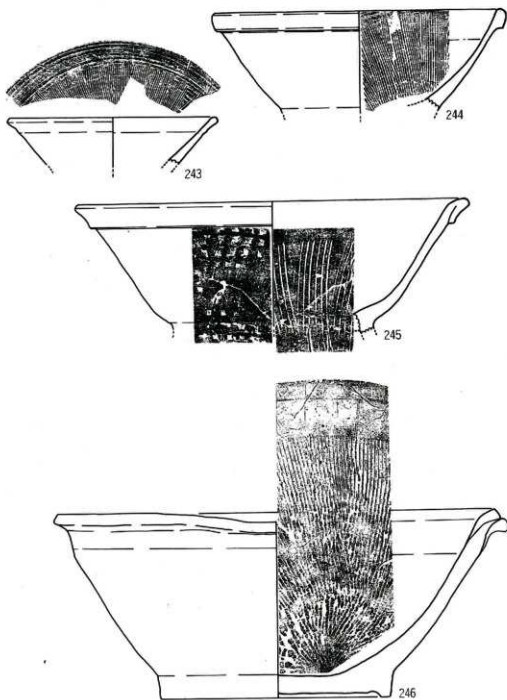
第86図 SK 33 出土遺物 ⑩ (S=1/3)



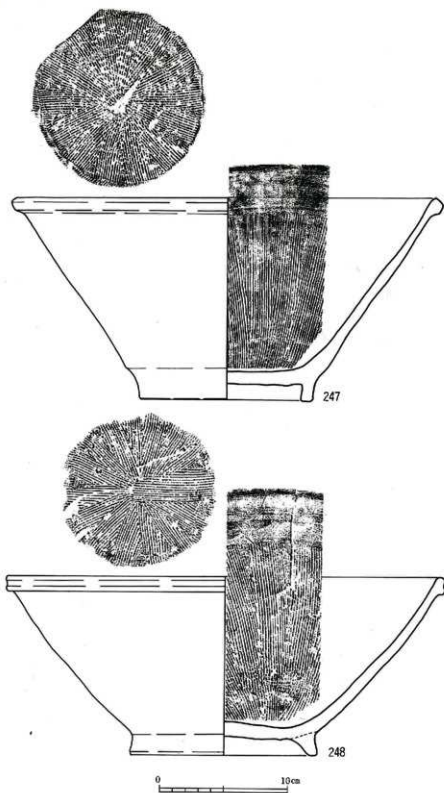
第87図 SK33 出土遺物 ④ (S=1/3)



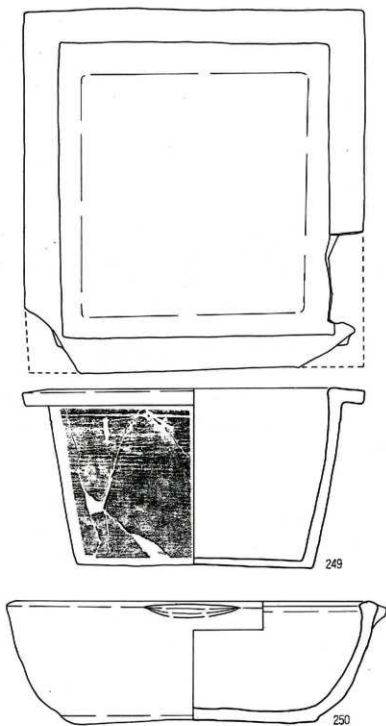
第88図 SK33出土遺物 ㊦ (S=1/4)



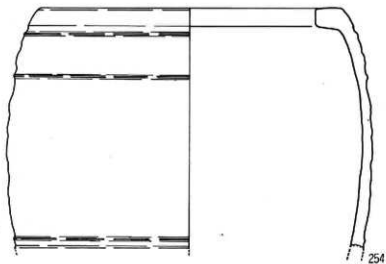
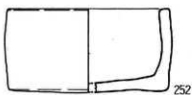
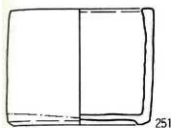
第89図 SK33出土遺物④ (S=1/3)



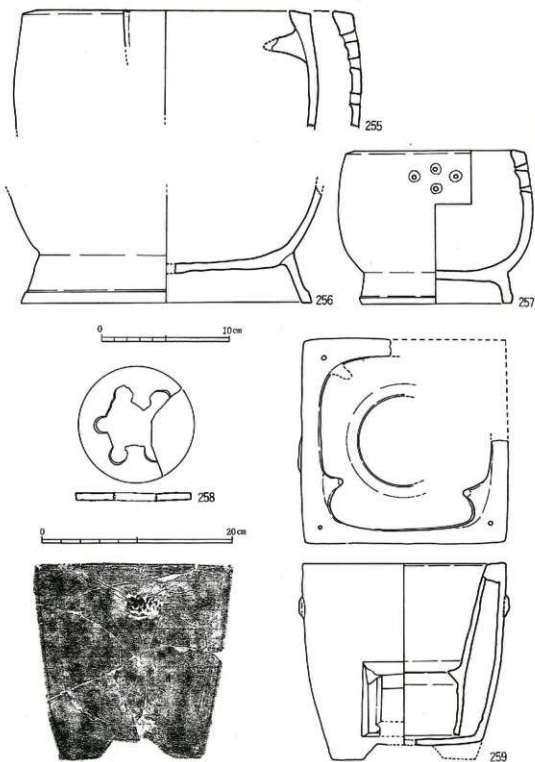
第90図 SK33出土遺物② (S=1/3)



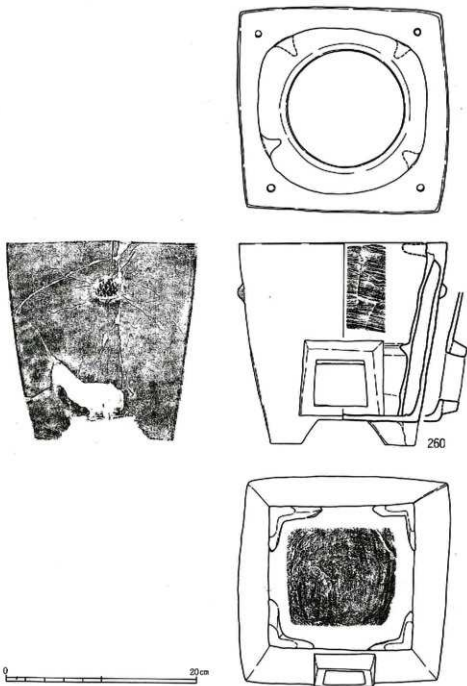
第91圖 SK33出土遺物㊦ (S=1/3)



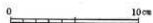
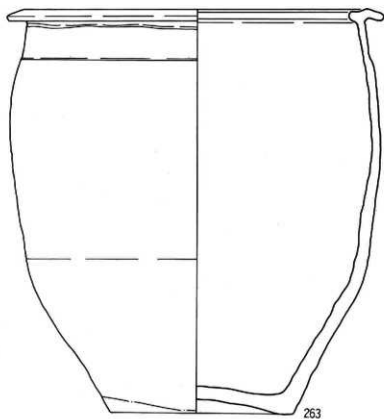
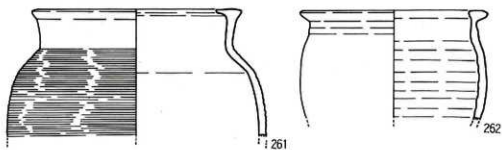
第92図 SK33出土遺物② (S=1/3)



第93図 SK33出土遺物㊦ (255～257はS=1/3, 258・259はS=1/4)

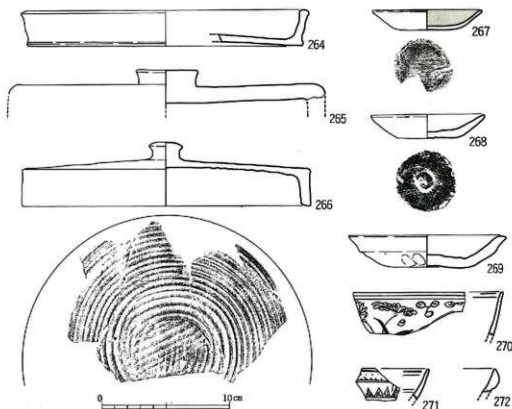


第94図 SK33出土遺物㊟ (S=1/4)



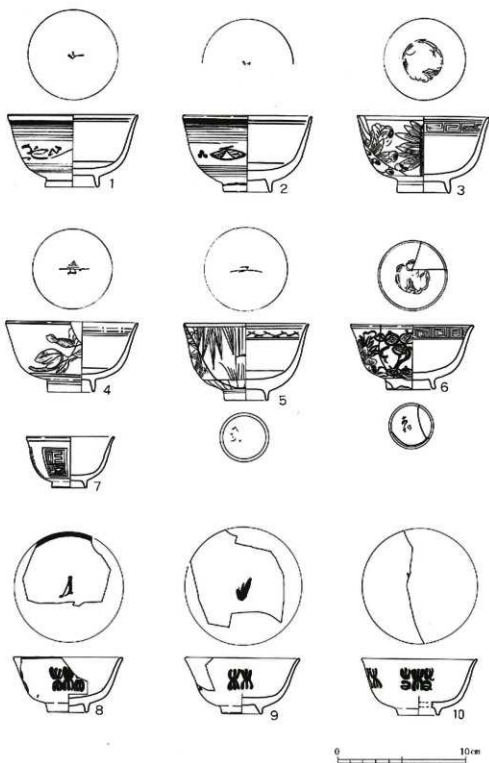
第95図 SK33出土遺物㊦ (S=1/3)

近と内面は露胎となる。18世紀後半以降の製品である。252・253は焼締め陶器の火容れあるいは灰落しである。252は備前あるいは丹波産のものと思われ、類似する器形を呈するものがSK 3でも出土している（第58図-48）。253は産地不明で、口径復元ができない口縁部破片であるが、外面に「上」字の刻印が認められる。252・253は18世紀から19世紀代の製品である。254は瓦質土器火鉢で、外面の文様は型押しによるものである。製作年代は18世紀後半から19世紀中頃に推定される。第93図-255～257は瓦質土器焔炉。255・256は大型、257は小型であるが、器形は類似するものである。口縁部に大きな窓部を有し、胴部の上半部には風通しのための穿孔を255は7個、257は4個有する。内面には3箇所の突起が認められ、高台は輪高台である。当該資料では高台の残存部に穿孔が認められないが、SK 34などの出土資料（第108図-114）を参考にすれば、高台部の2箇所に穿孔を有していた可能性が高い。このような形態の焔炉は小林謙一や小川望の分類⁽⁵²⁾の中には類例を見いだすことができないものである。255～257は、いずれも19世紀前半から中頃の製品であろう。SK 2、SK 34、上層遺構などで、類似形態の焔炉が出土している。259は瓦質土師質土器多孔皿状製品で、「サナ」と呼称されるもの。後述する259や260などの焔炉のオプション（付属品）である。最も残りのよいものを1個体のみ図示しているが、破片で10個体以上の出土が認められる。259・第94図-260は小川望・小俣悟による②d類、小林謙一によるⅡc類に分類される瓦質土器焔炉⁽⁵³⁾である。19世紀前半から中頃に比定されている。第95図-261～263は陶器甕で、いずれも肥前唐津系あるいは九州産のものであろう。18世紀後半以降の製品である。第96図-264は瓦質土器焙烙である。外面は黒褐色を呈し、底部は平底となる。265・266は土師質土器蓋で、いわゆる火消し壺に対応する蓋⁽⁵⁴⁾である。SK 14・15より、土師質土器火消し壺の出土が認められること（第20図-57・58）を勘案すれば、当該資料が本来SK 14・15に帰属する可能性も考えられる。267～269は土師質土器小皿である。268は内面に柿釉を施し、他の土師質土器と比較して、胎土・焼成ともに洗練された印象を受けるものである。底部には通常見られる回転軸糸切り痕ではなく、幅1ミリ強の渦巻状の溝（右回転）が認められる。19世紀前半以降の製品である⁽⁵⁵⁾。268は右回転の糸切り痕を有するもので、底部付近には粘土紐巻き上げ痕が比較的明瞭に認められる。269は「手捏ね」手法によるものである。271～273は混入品と思われる中国産磁器。270は染付碗、271は染付皿で、15世紀後半から16世紀前半代の製品。272は玉縁口縁を有する白磁碗で、12世紀代に比定されるものである。以上がSK 33の出土遺物である。当該遺構からの出土遺物はきわめて多量で、特に須須・土甕類や行平鍋などの多量の出土が特徴的である。時期の決め手となる磁器碗は1820～1860年代に比定される端反碗がその大半を占めており、肥前産のものほかに瀬戸美濃産のものが一定量見られる。当該遺構の一括資料は、後述するSK 34の出土遺物とともに明治初年以降の木村家の屋敷引き払いに伴う廃棄土坑である可能性が高い。Vb期の中ではやや新しい時期に位置づけられよう。

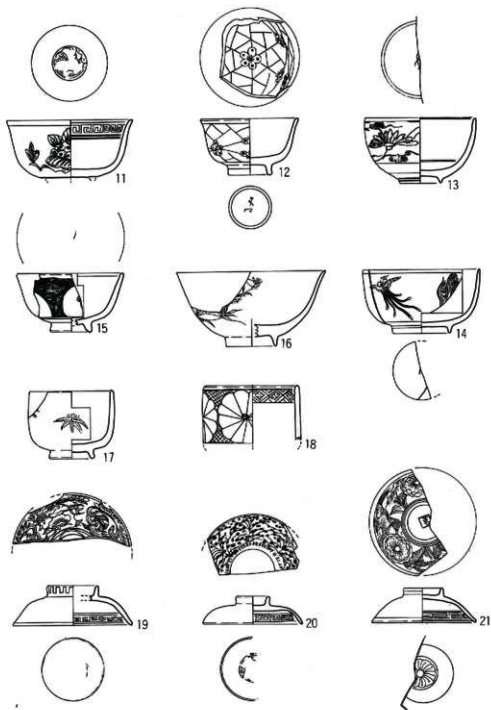


第96図 SK33出土遺物④ (S=1/3)

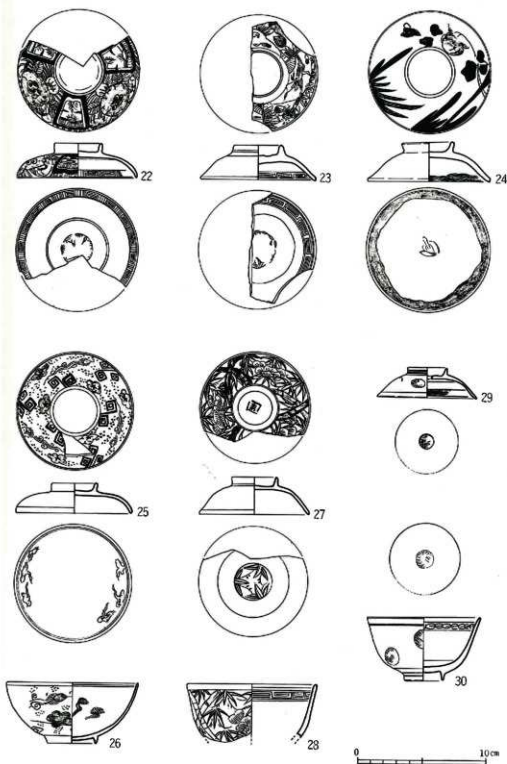
SK34 第97図-1~7は肥前染付端反碗である。5・6には焼継と朱描きの焼継文字が認められる。5の焼継文字は判読できないが、6の焼継文字は「木村」であり、SK33の出土資料に見られるものと同じである。この資料の存在によって、SK34付近も府内藩用人木村為馬の屋敷地内であったことを示している。7の外面文様は圖案化した文字を描いたものであり、中国の清朝磁器の影響を受けたものである。1~7の製作年代は、1820~1860年代に比定される。8~10は瀬戸美濃染付端反碗で、類似した器形・文様を有するものであるが、セットとして製作されたものではない。いずれも1820~1860年代の製品である。第98図-11・12も肥前染付端反碗で、これらも1820~1860年代の製品である。12の内底部には「木村」と記された朱描きの焼継文字が認められる。13は肥前染付碗で、18世紀後半代の製品である。14は肥前染付蓋物で、焼継と焼継文字が認められる。朱描きの焼継文字は判読できない。製作年代は18世紀後半から19世紀前半代に比定される。15は瀬戸美濃色絵端反碗で、外面と見込みの文様は赤絵である。16は肥前色絵端反碗で、外面文様の色絵は劣化しており、本来の色彩を失っている。17は肥前染付碗で、小型の丸型湯呑み碗である。15~17の製作年代は1820~1860年代に比定される。18は肥前染付筒形碗で、18世紀後半代の製品である。19~21・第99図-22~24は肥前染付蓋で、端反碗に対応するものである。24はSK33にも同一形態のものが出土している(第71図



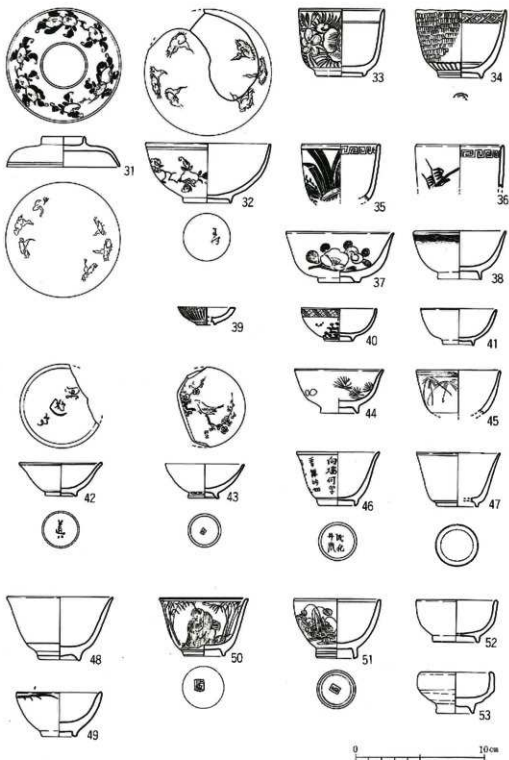
第97図 SK 34 出土遺物 ① (S=1/3)



第98圖 SK34 出土遺物② (S=1/3)

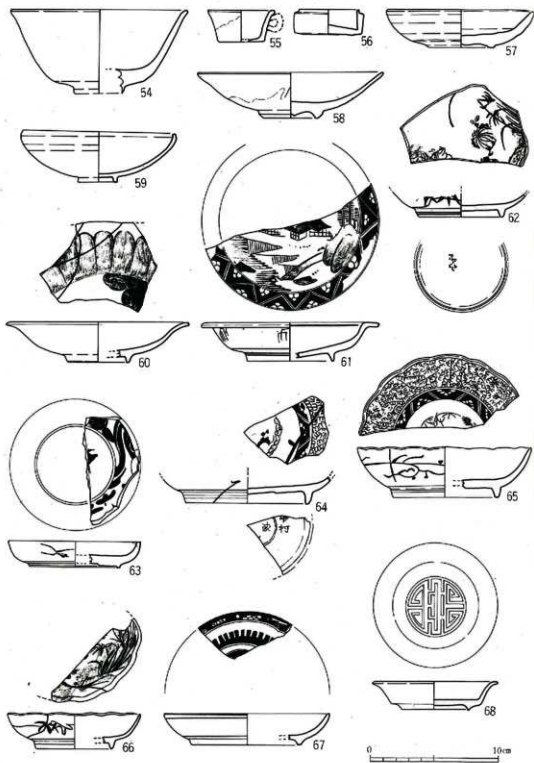


第99回 SK.34出土遺物③ (S=1/3)



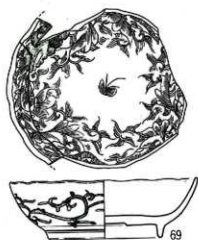
第100図 SK34 出土遺物④ (S=1/3)

—26)。25・26、27・28、29・30、第100図—31・32は器形と文様からみて、セットと思われる染付碗と蓋である。26・32が丸碗、28・30・32が端反碗である。32には焼継と「木村」と判読できる朱描きの焼継文字を有する。製作年代は29～30が1820～1860年代、25・26・31・32が18世紀後半から19世紀中頃に比定される。33～36も肥前染付碗で、やや深めの器高を持つものである。33の外面文様は、線描きである。いずれも19世紀前半以降に比定される。37は瀬戸美濃染付紅皿、38・40は肥前染付紅皿、39は肥前白磁紅皿である。製作年代は37が18世紀末から19世紀前半代、38・40は18世紀後半から19世紀前半代、39が18世紀後半以降に比定される。37・38の内面には、紅と思われる赤色顔料の残存がみられる。41～43は薄手の器壁を有する関西系の磁器小杯で、41は白磁、42・43は色絵である。42の内底部には呉須による「道八」の文字が描かれており、これは京焼の陶工である仁阿弥道八（高橋道八＝1783～1855）を意味するもの⁽⁵⁶⁾、あるいはそれを意識したものであろう。当該資料は京焼系の磁器である可能性が高い。41～43はいずれも19世紀前半から中頃に比定できる。44～50は肥前染付小杯である。46の内底部には「成化年製」銘が見られる。製作年代は44～46・49・50が18世紀末から19世紀中頃、48が18世紀後半代に比定される。47は呉須の発色がコバルト色を呈しており、明治10年（1878）前後まで下る製品と思われる。51は関西系磁器小杯で、18世紀後半以降の製品である。52・53は瀬戸美濃産陶器紅皿で、19世紀前半代に比定される。第101図—54は肥前唐津系陶器碗で、見込みや高台費付けの一部に砂目積みが認められる。製作年代は1600～1630年代に比定される。当該遺構の出土遺物としては製作年代がやや古く、また全形の3分の1程度の破片であることから、混入品と解釈したい。55は肥前白磁烏餌入れ⁽⁵⁷⁾で、底部付近は露胎となる。胴部のほぼ中央に小型の円形把手を有するものと思われるが、欠損している。19世紀前半代の製品である。56は肥前白磁合子で、19世紀前半から中頃の製品。57・58は肥前唐津系陶器皿である。いずれも製作年代が古く、混入と思われる。57は外面に灰釉を施し、見込みに目積みの跡が認められず、胎土目積みのものであろうと推定される。製作年代は1580～1610年代に比定される。58も外面に灰釉を施し、見込みに蛇の目釉割きとなる。17世紀後半から18世紀前半代の製品である。59は関西系陶器皿で、製作年代は19世紀前半から中葉に比定される。60は肥前染付皿で、焼継が認められる。18世紀末から19世紀前半代の製品。61は磁器染付皿で、内面に桜間山本文を描くものである。胎土の素地や釉調などからみて、肥前産でも瀬戸美濃産でもなく、それ以外の地方窯の製品である可能性が高い。62～66は肥前染付皿。62の内底部には、「木村」と判読できる朱描きの焼継文字が認められる。63～65は蛇の目凹形高台を有するもので、64の内底部には「□□年製」銘の一部が認められる。また65には焼継が、64には焼継と「木村」と判読できる朱描きの焼継文字が認められる。64・65は同一形態で、類似文様を持つものであるが、セットとして製作されたものではないようである。製作年代は62・64～66が18世紀末から19世紀前半代、63が18世紀後半代に比定される。67は明治20年代（1888）以降に盛行する銅版転写



第101図 SK 34出土遺物⑤ (S=1/3)

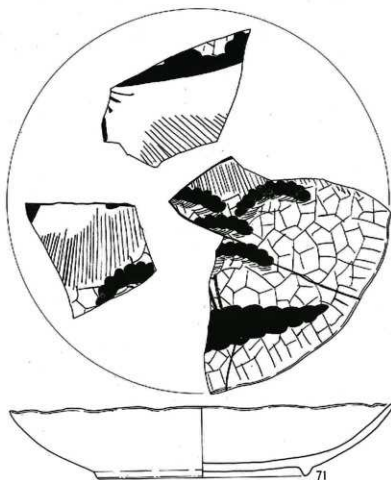
技法による染付皿である。埋土最上面で検出されたもので、本来的にはS K 34の一括資料に属するものではない。産地は肥前あるいは肥前系のもと思われる。68は見込みに「寿」字を図案化したスタンプを有する瀬戸美濃産白磁皿である。当該資料は愛知県土岐市肥田で生産されたいわゆる「壽文皿」で、製作年代の上限は1855年に求められるという⁽⁵⁸⁾。第102図-69・70は蛇ノ目凹形高台を有する肥前染付皿である。69の内面文様は線描きによって描かれている。また、破損面の一部には焼継も認められる。製作年代は19世紀前半代に比定される。70は類似形態で、類似文様を有するものが、S K 33でも出土している（第76図-95・96）。71は肥前染付水裂地文に松樹文輪花大皿である。破損面には焼継が認められる。内面軸下には白化粘土が施され、口縁部外面の端部近くにそのよだれの跡が認められる。また、残存部の内底部にはハリ支えの痕跡が見られる。以上のような特徴的な技法を持つ染付大皿は、佐賀県藤津郡塩田町志田焼の製品に認められるものである⁽⁵⁹⁾。当該資料も志田焼であり、製作年代は1820～1860年代に比定される。第103図-72～74は肥前染付鉢で、18世紀後半から19世紀前半代に製品である。74は蛇ノ目凹形高台となる。75は肥前色絵段重蓋。呉須のほかに、赤色・黄色・緑色が使用されている。製作年代は1690～1740年代に比定される。76・77は肥前染付段重で、セットとして製作されたものである可能性が高い。76には焼継が施されている。製作年代は18世紀末から19世紀前半代に比定される。78は肥前染付香炉。胴部内面と高台付近は露胎となる。19世紀前半代の製品である。79は関西系陶器鉢で、口縁部内外面と胴部外面に鉄釉を施す。外面の胴部以下は露胎となる。18世紀代の製品である。80～82は関西系陶器土瓶蓋。82の把手は亀をかたどったものである。80～82は18世紀後半以降の製品である。83は陶器の特殊品で、兩であろうか。関西産のものである可能性がある。製作年代は19世紀以降に位置づけておきたい。84は肥前染付猪口で、内底部には落款銘の一部が認められるが、欠損のため判読できない。18世紀後半代の製品である。85は関西系陶器灯火具。底部には右回転の糸切り痕が認められる。製作年代は19世紀前半代に比定される。86・87は関西系陶器灰落しで、18世紀後半以降の製品である。第104図-88は肥前陶器瓶類で、花生である。口縁部と胴部以下は接合していないが、同一個体である可能性が高い。外面と口縁部内面には銅緑釉を施す。製作年代は19世紀前半代に比定される。89は白磁瓶類で、口縁部を欠損する。製作時期および産地は不詳であるが、19世紀以降の肥前産のものである可能性が最も高い。90は肥前染付瓶類で、容量約1升を測る徳利である。製作年代は18世紀後半から19世紀中頃に比定される。91は関西系陶器壺で、18世紀後半以降の製品である。92は土師質土器急須である。外面には布目圧痕と顕著な指頭痕が認められる。'兵庫県伊丹市有岡城跡・伊丹郷町S D 2上層で、類似のものが出土している⁽⁶⁰⁾。18世紀後半以降の製品である。93は関西系陶器土瓶で、注口部を欠損している。これも18世紀後半以降の製品である。第105図-94～99は土師質土器小皿。94・95は外面に指頭圧痕を有するが、口縁部には強いナデが認められないものである。いわゆる「手捏ね」手法によるもので、S K



69



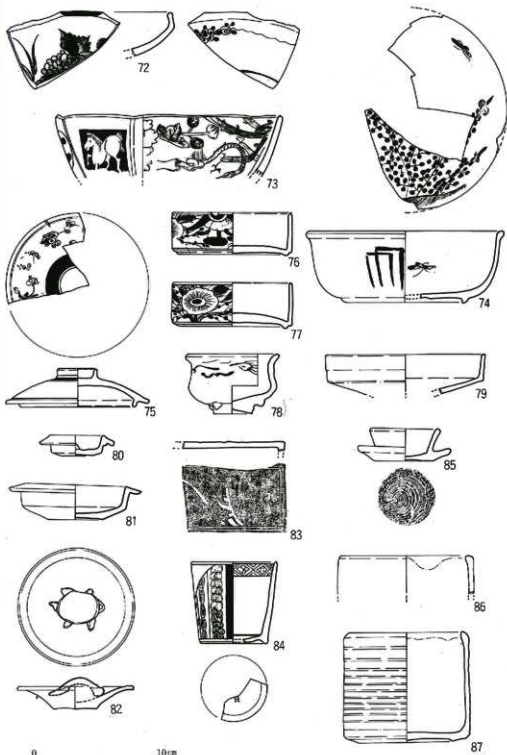
70



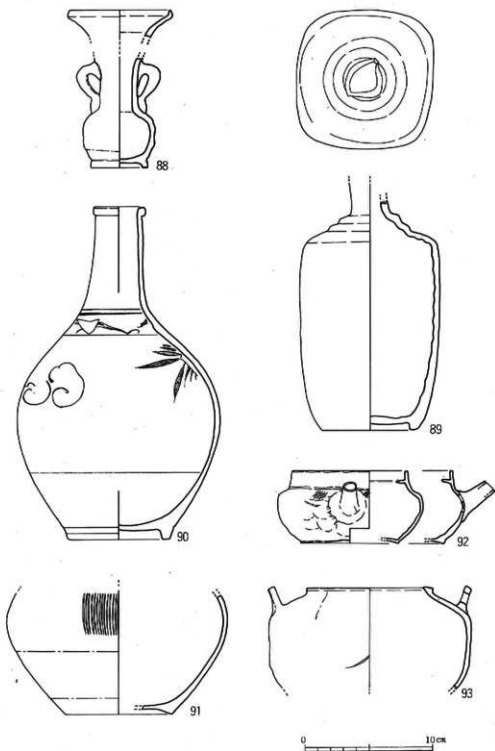
71



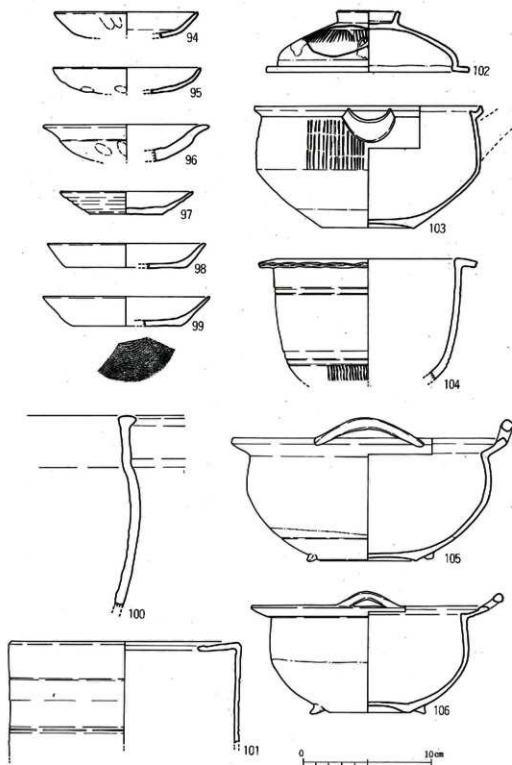
第102図 SK34出土遺物⑥ (S=1/3)



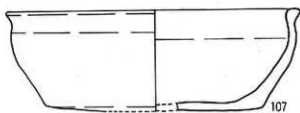
第103図 SK34出土遺物⑦ (S=1/3)



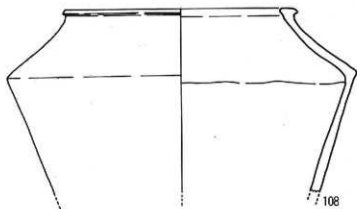
第104図 SK 34 出土遺物 ⑧ (S=1/3)



第105図 SK34 出土遺物 ⑨ (S=1/3)



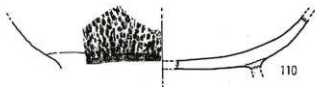
107



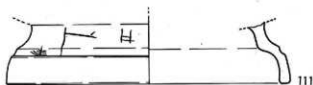
108



109



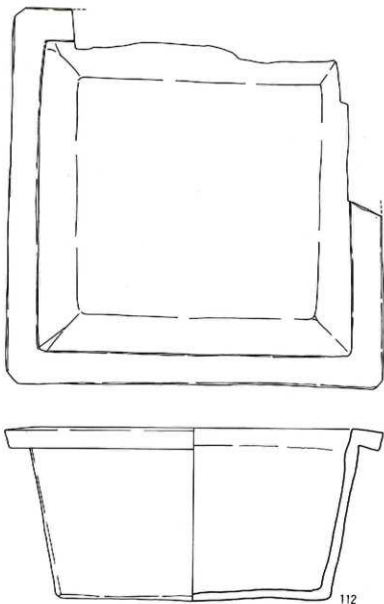
110



111

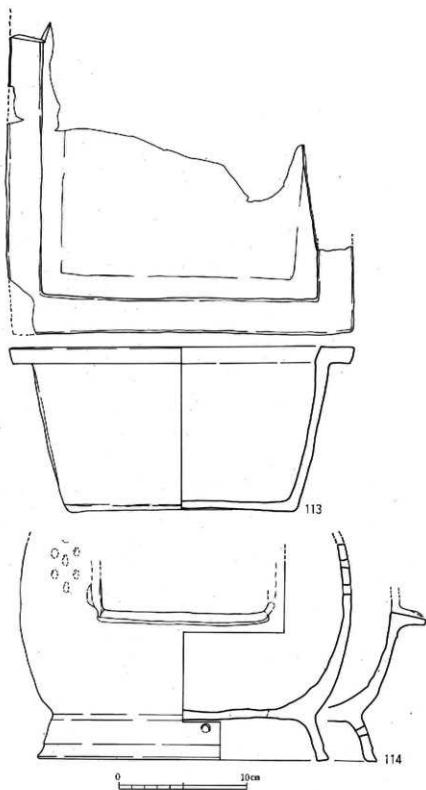


第106図 SK34 出土遺物 ⑩ (S=1/3)

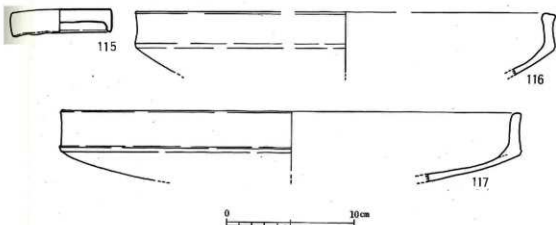


第107図 SK34出土遺物 ⑪ (S=1/3)

32出土資料に類似のもの（第13図-9）が認められる。96も「手捏ね」手法によるもので、口縁部に強いナデを施すものである。SK23などに類例が認められる。97・98はロクロ整形によるもので、底部に右回転の糸切り痕を有する。99もロクロ整形のものであるが、底部には糸切り痕ではなく、幅1ミリ強の渦巻状の溝（回転方向不明）が認められる。100は九州産あるいは肥前唐津系陶器製で、製作年代は18世紀後半から19世紀前半代に比定される。101は福岡産陶器水指しで、17世紀代の製品である。102・103は関西系陶器行平鍋の蓋と身である。102の外面

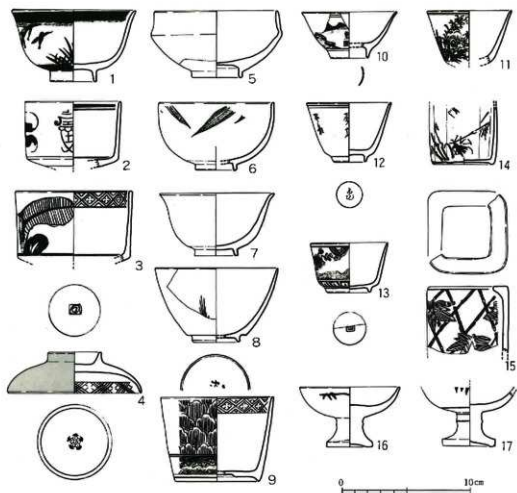


第108図 SK 34 出土遺物 ⑫ (S=1/3)



第109図 SK34出土遺物⑬ (S=1/3)

には飛びガンナとイッチン掛けによる文様、103には飛びガンナによる文様が施されている。製作年代は18世紀後半以降に比定される。104は関西系陶器植木鉢で、外面に鉄釉を施す。やはり18世紀後半以降の製品である。105・106は関西系陶器土鍋。いずれも外面に透明釉を施し、底部に三足を有する。底部外面付近にはススの付着が認められる。これらも、製作年代は18世紀後半以降に比定される。第106図～107は土師質土器火鉢、108は瓦質土器火消し壺、109～111は瓦質土器火鉢である。109・110は同一個体と思われ、外面にはローラー状の原体による回転印文を施す。把手部は型打ち整形による獅子頭である。底部と高台の接合部には櫛目状の刻目を入れ、接合を強化する工夫を行っている。111の高台外面には、焼成後に小刀などによって記号が施されている。107～111の製作年代は19世紀前半から中頃に比定しておきたい。第107図～112・第108図～113も瓦質土器火鉢で、「箱火鉢」といわれる形態を呈するもの。114は瓦質土器焼炉である。胴部の上半部には大きな窓部と風通しのための穿孔が7個設けられている。高台は輪高台で、一對2個の穿孔が存在する。第109図～115は焼塩釜の釜で、内面には布目圧痕を有する。18世紀後半以降の製品。116は瓦質土器焙烙、117は土師質土器焙烙である。口縁部の立ち上がりが比較的低くなっていることに注意しておきたい。以上がSK34の代表的な出土遺物である。遺物の中には混入と思われるものが若干認められるが、その大半が幕末までに製作されたものである。磁器碗は1820～1860年代に比定される端反碗が主体を占め、「木村」の焼継文字が認められるものも存在する。また瀬戸美濃産の寿文皿(68)は製作の上限年代が1855年に設定されており、当該遺構の上限をこの年代に求めることが可能である。以上のことから、SK34もSK33と同様の明治初年以降の木村家の屋敷引き払いに伴う廃棄土坑と解釈できる可能性が高い。Vb期の中ではやや新しい時期に比定できであろう。

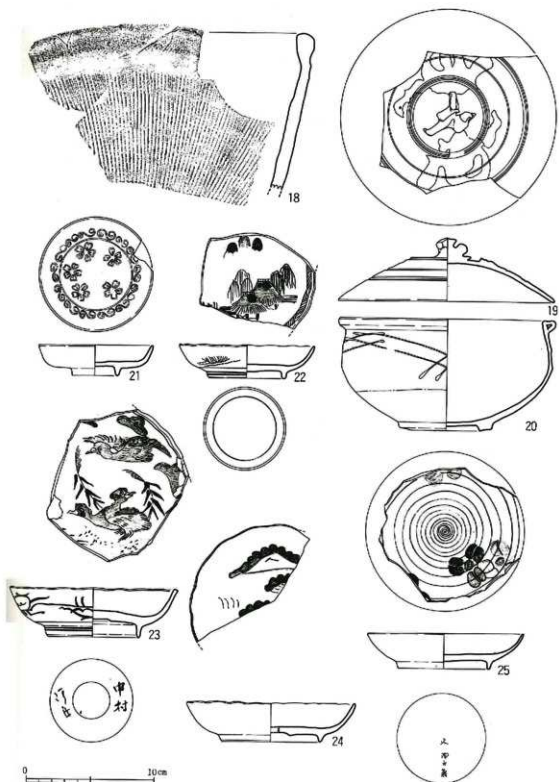


第110図 SK 41 出土遺物① (S=1/3)

〔Ⅵ期 (19世紀後半以降)〕

紙幅の関係で、Ⅵ期のものは比較的良好で多量の遺物を出土したSK 41・SK 21・SK 17のものを紹介する。

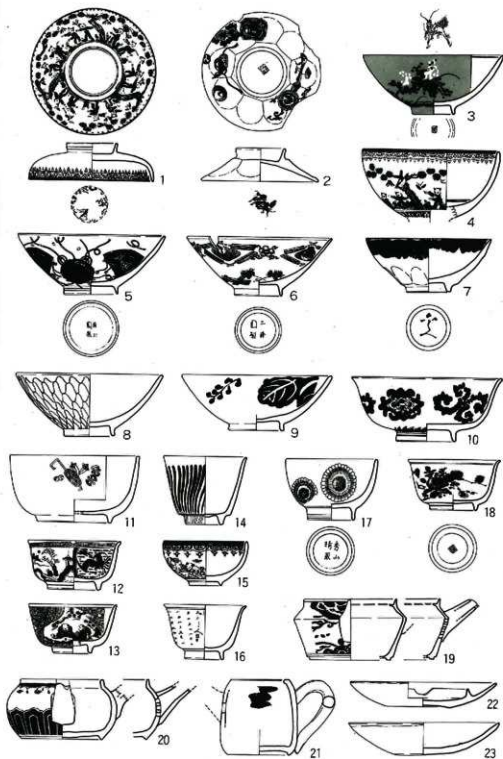
SK 41 発掘調査の比較初期の段階で、ややまとまった状態で陶磁器類の出土が認められた。出土状況から、陶磁器類は土坑の埋土中に廃棄されたものと思われたが、調査手順の不手際も災いして、土坑の掘り込み面や炭模などは確認できなかった。そこでとりあえず、出土遺物をB 5土器群として取り上げ、報告書の作成の過程で土坑番号SK 41の名称を与えた。第110図-1は肥前染付端反碗。端反碗は1820年以降に生産されるものであるが、当該資料は染付の軸色がコバルトの青みを帯びており、製作年代は幕末から明治時代初頭に比定される可能性が高い。2・3は肥前染付筒形碗で、18世紀後半代の製品である。4は肥前古磁染付蓋で、見込みに手描きによる五弁花文、内底部に渦幅を描く。製作年代は18世紀後半代に比定される。5は肥前京焼風陶磁碗で、18世紀前半代の製品。二次的な被熱を受けている。6は関西系陶器



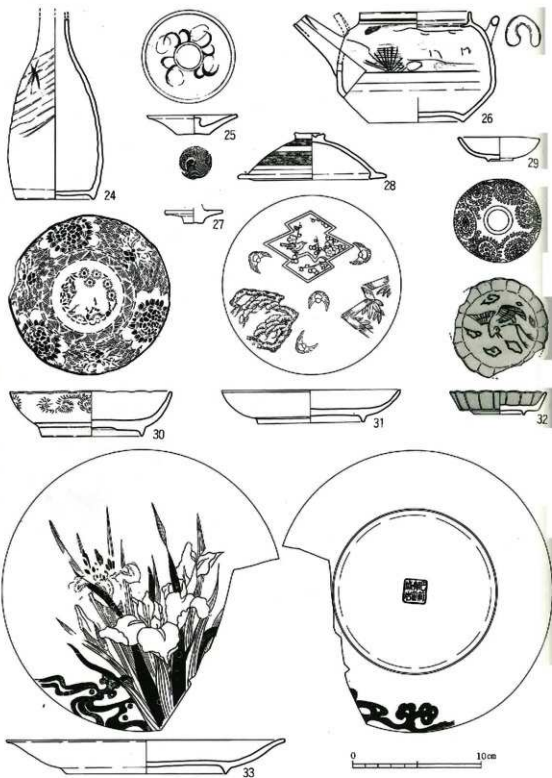
第111図 SK41 出土遺物② (S=1/3)

色絵碗で、文様は緑色が使用されている。7・8は関西系の陶器碗で、7は端反の形態、8はいわゆる小杉碗と言われる形態を呈する。6～8の製作年代は18世紀後半以降に比定される。9は肥前染付猪口で、蛇ノ目凹形高台を有するもの。見込みの五弁花文は手描きによるものである。18世紀後半代の製品。10～13は磁器染付小坏で、いずれもコバルトの青みの強い呉須が使用されている。明治時代初頭から前半の製品である。14は磁器染付瓶類で、型紙摺りによる文様を施す。製作年代は明治時代初頭から前半に比定される。15は肥前染付瓶類で、破損面には漆継ぎによる補修の痕跡が認められる。製作年代は18世紀後半代である。16・17は肥前染付仏飯器で、製作年代は16が18世紀後半から19世紀中頃、17が1690～1740年代である。17は二次的な被熱を受けている。第111図～18は肥前唐津系陶器播鉢で、18世紀以降の製品。19は関西系陶器蓋、20は関西系陶器土鍋で、18世紀後半以降の製品である。20の文様はイチチン掛けによる。21は陶器皿で、内面の文様は象嵌技法によるものである。幕末から明治初頭の製品で、九州産のものであろう。大分県下では杵築市馬場尾遺跡⁽⁶¹⁾で類例が出土している。22～24は肥前染付皿。23には内底部に朱描きの焼継文字が認められ、「中村」ほかの文字が判読できる。いずれも19世紀前半以降の製品である。25は軸下彩の肥前磁器皿である。内底部には、呉須による記号と「源之製」の文字が描かれている。近代以降の製品であり、当該遺構ではこの時期のものは他に認められないことから、混入品である可能性が高い。SK41では混入品である25と製作年代がやや古く二次的な被熱を受けた5・17を除けば、出土遺物の製作年代は18世紀後半から明治時代前半までのものに限られる。明治20年(1888)代以降に出現するとされる銅版転写技法によるものは出土遺物の中に認められないことから、当該遺構の最終埋没年代を明治時代前半までの19世紀後半代の中で考えておきたい。

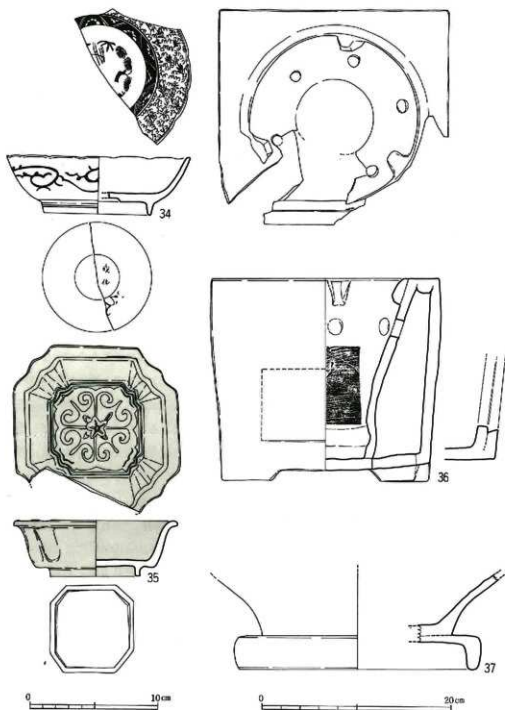
SK21 第112図～1・2は磁器染付蓋。1は型紙摺り、2は銅版転写技法による文様が施されている。2の内底部には、一重方格の中に「松月□製」の文字が描かれている。1は明治初年以降⁽⁶²⁾、2は明治20年(1888)代以降の製品。3～10は磁器碗。3は軸下彩の色絵を持つクロム青磁、7・9は軸下彩の色絵である。その他は染付で4・10は型紙摺り、5は銅版転写技法、8は手描きによるものである。また8の外表面文様は一重網目文であり、擬古調のものであろうか。また5の内底部には「清玉園製」、6の内底部には「三峰園製」の文字がみられる。製作年代は3・5～9が明治20年代以降、4・10が明治初年以降に比定される。11は磁器蓋物で、口縁端部付近が露胎となる。製作年代は明治20年代以降。12・13・15・16・18は磁器染付小坏、14は陶器小坏、17は色絵小坏である。17は銅版転写技法によるもので、内底部には「秀山精製」の文字が呉須で描かれている。製作年代は12・13・15・16が明治初年以降、14・17・18が明治20年代以降に比定される。19・20は磁器急須、21は軸下彩の磁器醬油さしである。時期・産地とも不明であるが、明治時代後半以降のものであろうか。22・23は関西系陶器灯火具で、22が受皿、23が油皿と称されるもの。幕末から明治時代前半の製品と思われる。第113図



第112回 SK21 出土遺物① (S=1/3)



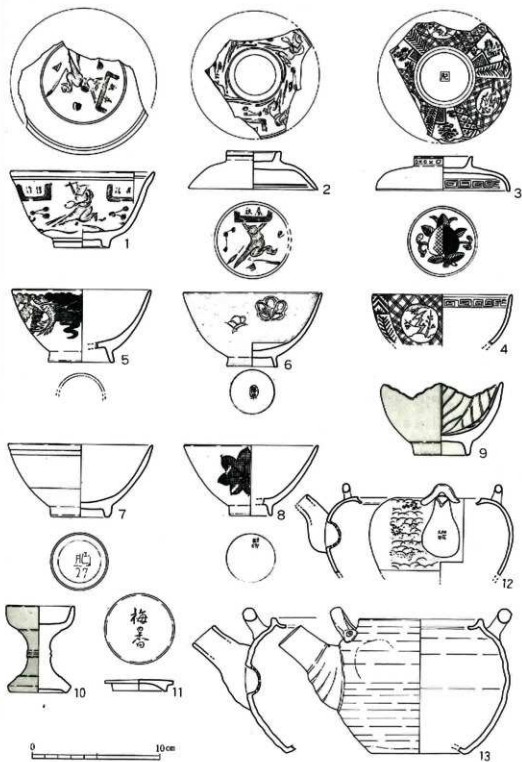
第113図 SK21 出土遺物② (S=1/3)



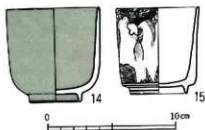
第114図 SK21 出土遺物 ③ (34・35はS=1/3、36・37はS=1/4)

—24は関西系陶器色絵燗徳利で、明治時代前半までの製品。25・26は関西系陶器土瓶である。27も関西系陶器蓋で、摘み部を欠損するほかは完存である。28も関西系陶器蓋で、行平鍋の蓋と思われる。29は白磁紅皿で、型打ち整形により、連続唐草文を打ち出している。25～29の製作年代は幕末から明治時代前半に比定される。30・31は磁器染付皿で、30は型紙摺り、31は手描きによるものである。製作年代は前者が明治初年以降、後者が明治時代後半である。32はクロム青磁の小皿で、内面の文様は型打ちによるものである。製作年代は明治時代前半に比定される。33は肥前色絵皿で、内底部には「肥前有田城岩」銘が認められる。「城岩」は佐賀県有田の陶工「城島岩太郎」（安政2年—大正15年＝1855—1926）⁽⁶³⁾のことで、当該資料は城島岩太郎の活動の最盛期である明治20年代（1888）後半から大正時代にかけての製品であろうと思われる。第114図—34は肥前染付皿で、蛇ノ目凹形高台の内底部には「成化年製」銘の一部と朱描きの焼継文字が認められる。焼継文字は判読できない。18世紀後半以降の製品であるが、焼継が行われている可能性が高いことから、19世紀中頃前後まで伝世したものであろう。ただ当該遺構の出土品の中では製作年代がやや古く、混入の可能性もある。35はクロム青磁鉢で、19世紀後半代の製品である。36は硬質の土師質土器熨鉢で、引付付きの窓部を有するものである。小林謙一によるⅧ類に分類され、Ⅷ期（19世紀末葉～20世紀＝明治時代後半）に編年されるものである⁽⁶⁴⁾。37は陶器で、外面に鉄釉を施し、輪高台となる底部である。これも熨鉢である可能性が高い。SK 21からの出土遺物は、一部を除いて江戸時代に通るものが少なく、主体となるものは明治初年以降に出現するとされる型紙摺り技法によるものと明治20年（1888）代以降に出現するとされる銅板転写技法によるものである。また城島岩太郎の落款のある磁器皿は、この一括資料の実年代を考える上で、大きな手がかりとなるものである。従って、土坑の最終埋没年代は、明治時代後半から大正時代にかけての19世紀末から20世紀初頭前後に考えておきたい。

SK 17 第115図—1・2は肥前染付端反碗とそれに伴う蓋である。身・蓋ともに類似のモチーフを採用しており、見込み部分には「春秋」、外面には「詩経」「易経」「書経」「礼記」（すなわち、「五経」の内容）の文字が認められる。製作年代は1820～1860年代に比定される可能性が高いが、19世紀後半以降に製作された擬古調のものである可能性も考えておきたい。図示したほかにも同一規格同一形態の身が2個体出土している。この資料と類似モチーフの文様を描いた端反碗が、東京都千代田区紀尾井町遺跡SK R 22⁽⁶⁵⁾で出土しているが、当該遺構出土のものより文様が委縮している。後述のように、当該遺構の出土遺物は昭和20年（1945）代を下限とする一括資料であり、この端反碗が幕末までに製作されたものとなると、これらは製作年代がやや古いものとなる。しかしこの端反碗は数客で1セットとなるものが、一括して当該遺構に廃棄された可能性が高く、ここでは昭和時代の前半まで伝世していたものと考えておきたい。3・4は肥前色絵金欄手の碗と蓋である。3の見込み部分の文様は輪郭を金彩で縁

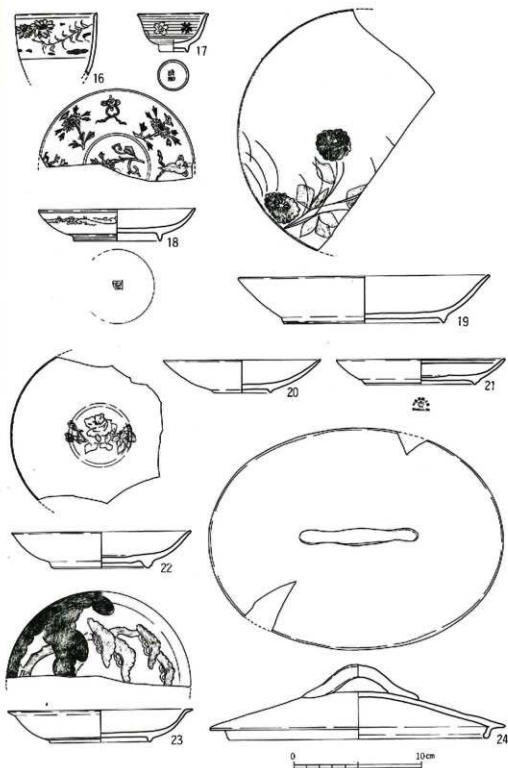


第115圖 SK17出土遺物① (S=1/3)



第116図 SK17出土遺物② (S=1/3)

取っており、内底部には「肥」字が認められる。これも複数で1セットとなるものと思われ、身に関しては同一形態のものが図示した以外にも1個体認められる。これも瀬古調のものであり、20世紀前半代の製品と思われる。5～8は昭和時代前半代に生産された磁器碗である。このうち、5の外表面文様はゴム印と濃み筆を併用して描かれている。6の内底部には「勝泉」と判読できる小判形の印鑑が押されている。また7の内底部には緑色スタンプによる「肥27」が、8の内底部には型押しによる「岐671」（陽刻）が認められる。これは戦時統制下における陶磁器生産業者の統制番号を意味するもので、「肥」は肥前地域、「岐」は岐阜地域を意味する記号で⁽⁶⁶⁾、昭和20年（1945）を生産の下限とするものである。このうち「肥27」の登録商標を持つものは、佐賀県藤津郡塩田町志田焼上福窯跡で採集されており⁽⁶⁷⁾、生産地が推定できる。9はクロム青磁の割山椒向付、10もクロム青磁の仏飯器で、明治時代の製品。11は陶器合子釜で、外面にゴム印による「梅の香」の文字がプリントされている。梅干し入れの容器の釜であろうか。12は九谷焼の土瓶で、外面文様は色絵となる。注口部には赤絵具で「加賀九谷」の文字が見られる。13は関西系陶器土瓶で、外面に薬灰釉を施すものである。11～13は大正時代から昭和時代初期にかけての製品であろう。第116図～14・15は磁器の円筒形の湯呑碗で、14はクロム青磁、15は筆絵で文様を施している。第117図～16は磁器色絵で、小型の碗と思われるもの。文様の輪郭を金彩で縁取りしている。17は磁器小坏で、内底部には型押しによる「岐180」（陽刻）が認められる。18～23は磁器皿である。18は瀬古調のものであるが、一見して釉調や文様の細かい特徴などが極めて新しい印象を受けるものである。20の口唇部には口紅を施す。21の内底部には「東洋陶器会社」「TOUYOUTOUKIKAKISHA」の文字とマークが見られる。22は器形の特徴から、コーヒーカップの受け皿であろう。23の内面文様の松樹文は、極めて図式化している印象を受けるものである。同一形態のものが図示したもののほかに最低6個体認められる。24は白磁壺で、用途は不明であるが洋食器の壺である可能性を考えておきたい。SK17の出土遺物の中には大正時代末から昭和初期にかけて出現したゴム印による装飾技法による磁器碗が認められる。また製作年代を比較的明瞭な形で示すことのできる遺物は、戦時統制下における陶器製造業社の番号を記した7・8・17で、昭和20年（1945）を生産の下限とするものである。6の「勝泉」印を押圧するものも、おおむねこの時期に生産された可能性が高い⁽⁶⁸⁾。他の遺物については、詳細に検討できない現状にあるが、一応当該遺物の最終埋没年代を昭和20年（1945）を下限とする20世紀前半代に考えておきたい。



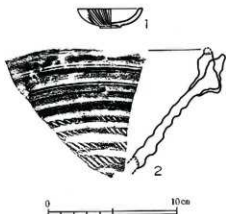
第117図 SK17出土遺物③ (S=1/3)

【時期不詳】

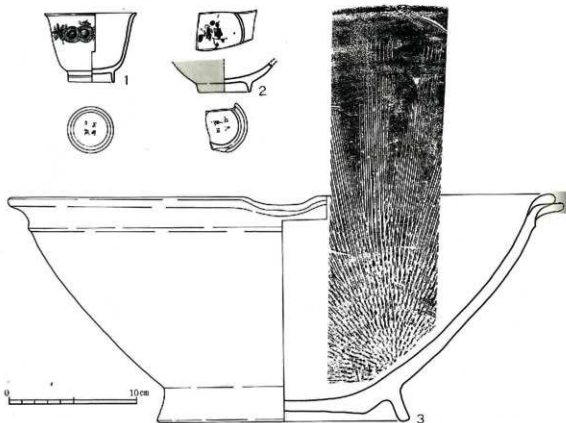
以下に紹介するのは、土坑からの出土遺物が少量であるため、今回設定したⅠ～Ⅴ期のいずれかに特定できないものである。

SK 24 第118図-1は肥前白磁紅皿で、18世紀後半から19世紀中頃の製品である。SK 24からの出土遺物はごく少量で、図化できるものはこの資料1個のみである。土坑の時期はⅣ期ないしⅤ期に比定できるものと思われるが、いずれかは特定できない。

SK 40 第118図-2は16世紀代に比定される備前焼陶器掻鉢の口縁部である。SK 40は埋土の性状などから中世の遺構とは思われず、この出土遺物も混入品であろう。土坑の時期は特定できない。



第118図 SK 24・SK 40出土遺物(S=1/3)
1 SK 24 2 SK 40



第119図 SK 43 出土遺物 (S=1/3)

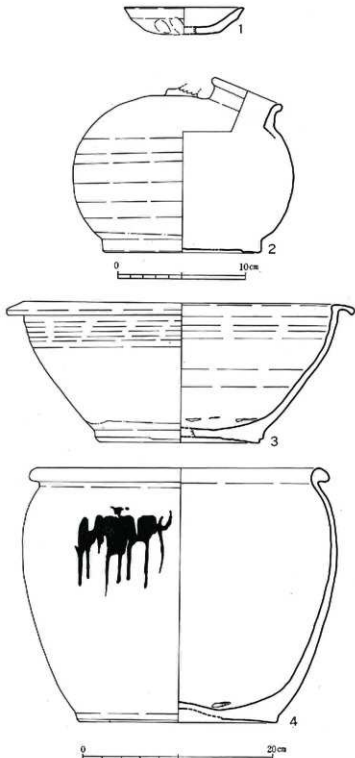
SK 43 第119図一

1は肥前染付小坏。内底部に「宣明年製」銘を有する。1660～1680年代の製品⁽⁶⁹⁾である。2は肥前青磁染付碗。内底部には「大明年製」銘が認められる。製作年代は1690～1740年代に比定される。3は肥前唐津系陶器 播鉢で、18世紀後半以降の製品である。SK 43の出土遺物は図化した3個体のみである。1・2の製作年代はやや古いもので、土坑の時期を示すものは3である。土坑の所属年代としてはⅣ期以降に比定されようが、詳細な時期は特定できない。

柱穴

SP 2 第120図一

1は土師質土器小皿。柱穴埋土中より出土した「手捏ね」手法による整形によるものである。SP 2からの出土遺物はこの小皿のみであり、遺構の詳細な時期を決定することはできないが、この種の土器の盛行年代から、Ⅰ期ないしⅡ期に位置づけられる可能性が高い。

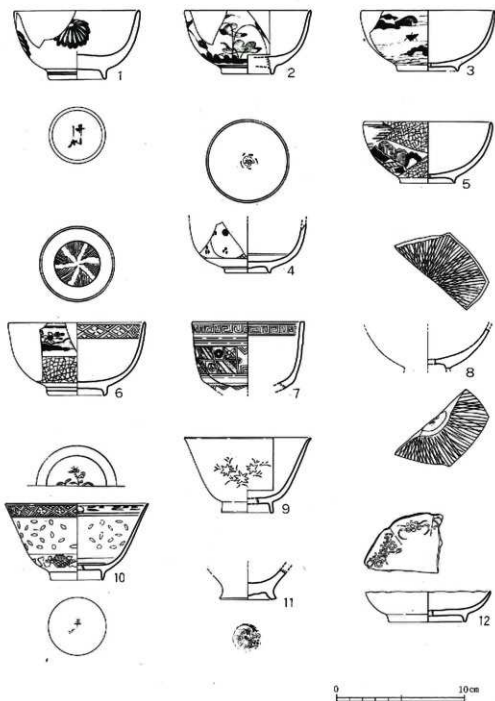


第120図 SP2・埋塞遺構・SX1 出土遺物(1・2はS=1/3、3・4はS=1/4)
1 SP2 2 埋塞遺構 3・4 SX1

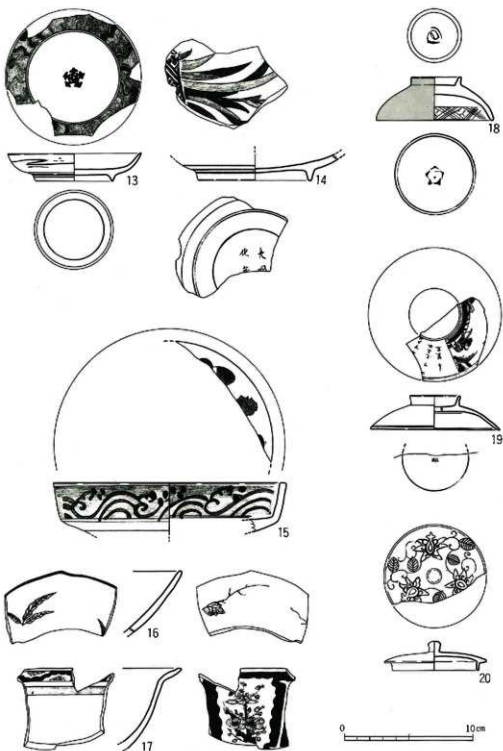
埋壺遺構 第120図-2は陶器浅瓶で、産地は不明であるが、九州産のものである可能性が高い。埋壺5の内部より出土している。製作年代は19世紀前半以降に比定されるが、本遺跡での時期区分ではⅦ期に位置づけられる可能性が最も高い。

SX1 第120図-3は陶器鉢で、丹波産の可能性が高いもの。底部に焼成後の穿孔が1個認められる。4は陶器甕で、こちらは九州産の可能性の高いものである。外面に鉄釉を施している。3・4はいずれもⅦ期の明治時代前半に比定できるものであろう。遺構については18頁参照。

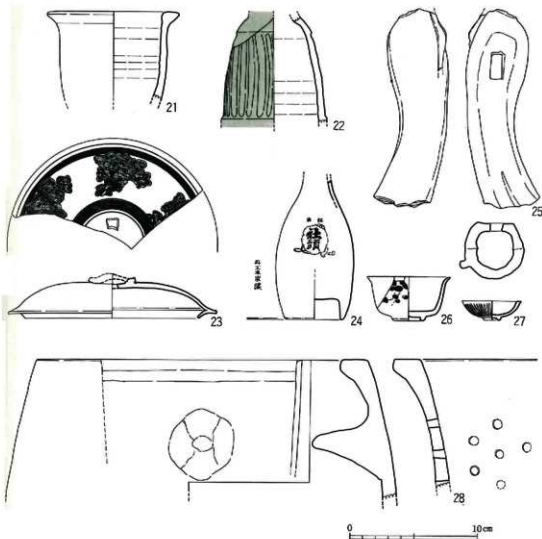
上層遺構 上層遺構周辺からの出土遺物を、以下紹介する。第121図-1～8は肥前染付碗である。1は外面にコンニャク印判による菊文を施し、内底部にはやや崩れた「大明年製」銘を有する。2はいわゆるくらわんか手のものである。4の見込みには、手描きによる崩れた五弁花文を描く。7には焼継が認められる。8の内底部には呉須による「波6□」の記号が認められる。「波6□」は戦時統制下の長崎県波左見地域における陶磁器生産業者の統制番号を意味するものである⁽⁷⁰⁾。1～8の製作年代は1が18世紀前半から中葉、2・3・5・6が18世紀後半、4が18世紀後半から19世紀前半、7が1820～1860年代、8が昭和20年(1945)代以前に比定される。9は肥前白磁碗である。外面文様は、白化粘土によって形成されたものである。製作年代は18世紀前半に比定される。10は中国産の磁器染付碗で、いわゆる「堂手」と呼ばれるもの。内底部には「□□年製」銘が認められる。18世紀代に生産された清朝磁器である。11は「錦光山」の刻印を有する京焼陶器碗の底部である。外面に灰釉を施している。製作年代は17世紀後半から18世紀初頭に比定される。12は肥前白磁皿で、梨打ち整形により文様を打ち出している。口唇部は口鎊となる。製作年代は1690～1740年代に比定される。第122図-13・14は肥前染付皿。13の内面文様は墨弾きによるもので、見込みの五弁花文はコンニャク印判によるものである。14の内底部には「大明成化年製」銘の一部が認められる。いずれも1690～1740年代に比定される。15は肥前染付皿で、釉の発色から明治時代前半以降の製品と思われる。16は肥前染付皿の口縁部で、胎土の素地や文様の描き方などから上手の製品であろうと推定される。また内面文様の一部に塗りつぶされていない部分が認められ、色絵の素地であった可能性も考えられる。製作年代は17世紀後半から18世紀初頭に比定される。17は肥前染付鉢で、破損面に焼継が認められる。19世紀前半から中頃の製品である。18は肥前青磁染付蓋で、見込みには手描きによる五弁花文、内底部には渦裾が描かれているが、五弁花文・渦裾ともかなり脱化している。製作年代は18世紀後半である。19は肥前染付蓋で、見込みには「□□□製」銘が描かれている。製作年代は19世紀前半から中頃に比定される。20は釉下彩の磁器染付蓋で、近代以降の製品である。第123図-21は外面に薬灰釉を施す陶器瓶類、22は肥前青磁瓶類である。いずれも18世紀後半以降の製品である。23は肥前染付段重蓋で、外面の主文様はコンニャク印判によるものである。製作年代は1690～1740年代に比定される。24は近代以降の磁器網徳利で、



第121図 上層遺構出土遺物① (S=1/3)



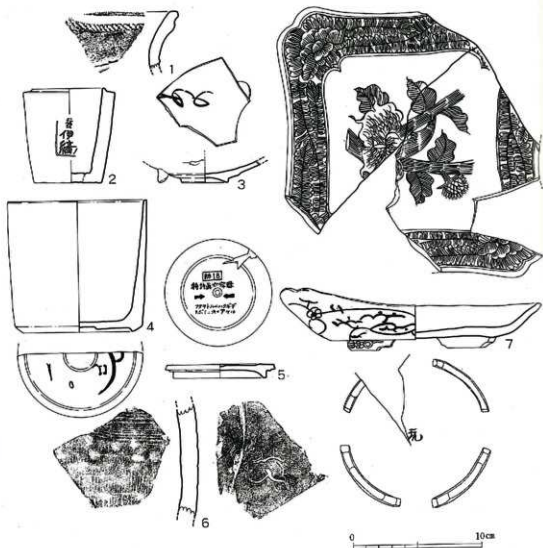
第122図 上層遺構出土遺物② (S=1/3)



第123図 上層遺構出土遺物 ③ (S=1/3)

外面に酒の銘柄を示す「酒銘 社頭」および生産業者を示す「丹生本家醸」の文字が見られる。25は時期・用途とも不明の陶器。26は中国産の磁器小杯で、内底部は無釉となる。製作年代は16世紀末から17世紀前半代に比定される。27は肥前白磁紅皿で、18世紀後半から19世紀中頃の製品。28は土師質土器焼炉。口縁部に大きな窓部を有し、内面には3箇所突起を持つ。風通しの穴は本来7個と思われるが、6個が残存している。

試掘段階および排土中に採集した遺物 以下に紹介するものは、試掘段階および表土剥ぎ段階の排土中より採集した遺物である。第124図-1は縄文土器で、縄文後期前半の所産になる小池原上層式に比定されるものである。2は「泉湊伊織」の刻印を有する焼塩竈。風化により、器壁がかなり磨滅しており、刻印が僅かに読み取れる程度の残存状況にある。18世紀後半代に



第124図 試掘段階・排土中出土遺物 (S=1/3)

比定される。3は肥前染付香炉で、見込みに墨書を有するもの。18世紀後半から19世紀前半代の製品である。4は肥前白磁蓋物で、蛇ノ目凹形高台を有するもの。内底部に墨書が認められるが、判読できない。明治時代以降の製品と思われる。5は磁器製食料品詰容器の蓋で、外面には「防18 特許真空容器 フタヲトルニハクギデ クボミニ穴ヲアケル」の文字がプリントされている。昭和10年(1935)年代後半の製品であることがわかっている⁽⁷¹⁾。6は瓦質土器火鉢の胴部と思われる破片である。外面にはヘラ描きによる馬の絵が描かれている。単独出土であるため、製作年代は不明である。7は肥前染付角皿である。内面の文様は線描きによって描かれており、内底部には「玩」字が認められる⁽⁷²⁾。また、破損面は焼継によって補修が施されている。製作年代は19世紀前半から中頃に比定される。

第3表 SK30出土土器・陶磁器類観察表

(0期=13世紀後半)

群	器種	法量(cm)			底形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・絵文	文 様	装飾特徴					
13-1	磁器碗	—	—	5.7	口クロ	青 磁	—	—	—	中国(越前県)	13C		23
2	磁器碗	—	—	—	口クロ	青 磁	割花文?	片 脚 子 様	—	中国(越前県)	13C		
3	土師環	—	—	9.0	口クロ	—	—	—	糸切り(若)	在 地			
4	瓦器碗	—	—	—	巻き上 17製作	—	—	—	—	在 地			
5	瓦器碗	15.2	5.2	4.2	巻き上 17製作	—	—	—	—	和泉?	13C中～後		

第4表 SK23出土土器・陶磁器類観察表

(1期=16世紀末～17世紀初頭)

群	器種	法量(cm)			底形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・絵文	文 様	装飾特徴					
13-6	土 師 小 碗	6.3	1.8	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			23
7	土 師 小 碗	6.3	1.9	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			
8	土 師 小 碗	8.8	2.1	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			
9	土 師 小 碗	11.2	2.8	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			
10	土 師 小 碗	11.3	2.7	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			
11	土 師 小 碗	11.6	2.5	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			
12	土 師 小 碗	11.3	2.5	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			
13	土 師 小 碗	12.4	2.7	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			
14	土 師 小 碗	12.4	3.0	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			
15	土 師 小 碗	12.4	2.6	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			
16	土 師 小 碗	—	—	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			
17	土 師 小 碗	(5.8)	9.5	(5.2)	口クロ	—	—	—	—	関 西	16C末～17C初	外底に直取り	
18	陶器鉢	—	—	—	口クロ	—	—	—	—	備 前	16C	胎土目?	
19	磁器皿	—	—	—	口クロ	白 磁	—	—	—	中 国	16C		
20	陶器皿	—	—	—	口クロ	鉄 絵	歌手状文	—	—	肥 前	1580～1610年代		
21	陶器皿	15.8	5.0	5.4	口クロ	鉄 絵	—	—	—	肥 前	1580～1610年代		
22	陶器鉢	(43.6)	(26.8)	(9.0)	口クロ	—	—	—	—	備 前	16C末～17C初		

第5表 SK20出土土器・陶磁器類観察表

(1期=16世紀末～17世紀初頭)

群	器種	法量(cm)			底形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・絵文	文 様	装飾特徴					
13-1	土 師 小 碗	8.9	2.7	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			25
2	土 師 小 碗	9.4	2.4	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			
3・4	陶器碗	11.2	—	8.6	口クロ	鉄 絵	—	—	—	需 胎 福 岡	1580～1610年代		

第6表 SK32出土土器・陶磁器類観察表

(Ⅱ期=17世紀前半～後半)

坪 図	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	図録頁
		口徑	器高	底径		絵付・ 刷・捺	文 様	装飾特徴					
13-5	陶 器 鉢	—	—	—	ロクロ	—	—	—	—	肥 前	17C前半		25
6	土 器 土付鉢	—	—	8.8	ロクロ	—	—	—	—	在 地			
7	土 器 小 鉢	10.4	1.5	6.7	ロクロ	—	—	—	糸切り(右)	在 地			
8	土 器 小 鉢	9.4	2.1	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			
9	土 器 小 鉢	12.0	2.0	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			

第7表 SK29出土土器・陶磁器類観察表

(Ⅱ期=17世紀前半～後半)

坪 図	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	図録頁
		口徑	器高	底径		絵付・ 刷・捺	文 様	装飾特徴					
13-10	土 器 小 鉢	9.8	1.3	7.4	ロクロ	—	—	—	糸切り(右)	在 地			25

第8表 SK35出土土器・陶磁器類観察表

(Ⅱ期=17世紀前半～後半)

坪 図	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	図録頁
		口徑	器高	底径		絵付・ 刷・捺	文 様	装飾特徴					
13-11	陶磁器	13.8	7.6	6.0	透明	—	—	—	—	肥 前	1600~1630年代	いわゆる古器 手廻の器形	25

第9表 SK42出土土器・陶磁器類観察表

(Ⅱ期=17世紀前半～後半)

坪 図	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	図録頁
		口徑	器高	底径		絵付・ 刷・捺	文 様	装飾特徴					
13-12	陶 器 小 鉢	7.4	4.3	3.0	ロクロ	白 磁	—	—	—	肥 前	17C後半		25

第10表 SK36出土土器・陶磁器類観察表

(Ⅱ期=17世紀前半～後半)

坪 図	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	図録頁
		口徑	器高	底径		絵付・ 刷・捺	文 様	装飾特徴					
13-13	陶磁器	—	—	—	ロクロ	透 明・ 付 録	外:うまのめ状文	—	—	肥 前	1630~1650年代	透明釉と鉄繪を かけわけ	25
14	土 器 小 鉢	—	—	—	ロクロ	塗 付	外:唐弁	—	—	肥 前	1630~1640年代		

第11表 SK31出土土器・陶磁器類観察表

(Ⅱ期=17世紀前半～後半)

坪 図	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	図録頁
		口徑	器高	底径		絵付・ 刷・捺	文 様	装飾特徴					
13-15	陶磁器	—	—	—	ロクロ 打	青 磁	内:逆段装文	—	—	肥 前	1630~1640年代		25
16	陶磁器	—	—	—	ロクロ	塗 付	内:帆唐弁	—	—	肥 前	1640~1650年代		
17	陶 器 鉢	(36.3)	—	—	ロクロ	—	—	—	—	—	17C代		

第12表 SK8出土土器・陶磁器類観察表

(Ⅲ期=17世紀末～18世紀中頃)

件 号	器 種	法 量 (cm)			成 形	装 飾			底 面・内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	図 録 頁
		口 径	器 高	底 径		模 写・文 様	文 様	装 飾 特 徴					
13-1	磁器碗	10.2	5.9	4.5	口クロ	染 付 明	外：秋草と楓	コンニャク印	大 平 明 製	肥 前	1690～1740年代	二次的焼熟	36
2	陶器碗	10.3	5.3	4.2	口クロ	染 付 明	外：山木墨し	—	—	肥 前	18C前半	二次的焼熟	
3	磁 器 碗	—	5.5	—	口クロ	染 付 明	外：菊と紫垣	—	—	肥 前	1690～1740年代		
4	磁 器 碗	5.7	—	—	口クロ	染 付 明	外：秋草	—	—	肥 前	1690～1740年代	二次的焼熟	
5	陶器鉢	—	—	—	型 打	染 付 明	—	—	—	肥 前	18C代	二次的焼熟	
6	陶 器 鉢	—	—	2.6	口クロ	鉄 印	—	—	—	肥 前	18C代	二次的焼熟	

第13表 SK11出土土器・陶磁器類観察表

(Ⅲ期=17世紀末～18世紀中頃)

件 号	器 種	法 量 (cm)			成 形	装 飾			底 面・内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	図 録 頁
		口 径	器 高	底 径		模 写・文 様	文 様	装 飾 特 徴					
13-1	磁器碗	10.3	5.3	4.5	口クロ	染 付 明	外：菊と若松	—	湯 漏	肥 前	1690～1740年代		27
2	磁器碗	9.8	—	—	口クロ	染 付 明	外：雪輪墨丸	—	—	肥 前	1690～1740年代		
3	磁器碗	10.0	5.5	4.0	口クロ	染 付 明	外：楓と薔草	—	—	肥 前	1690～1740年代		
4	磁器碗	—	—	4.2	口クロ	染 付 明	外：秋草	—	大 平 明 製	肥 前	1690～1740年代		
5	磁器碗	9.9	—	—	口クロ	染 付 明	外：秋草	—	—	肥 前	1690～1740年代		
6	磁器碗	4.5	—	—	口クロ	染 付 明	外：秋草	—	大 平 明 製	肥 前	1690～1740年代	5-6は同一個体小	
7	磁器碗	—	—	—	口クロ	染 付 明	外：唐草	—	—	肥 前	1690～1740年代		
8	磁器碗	—	—	4.3	口クロ	染 付 明	外：唐草	—	湯 漏	肥 前	1690～1740年代	7-8は同一個体小	
9	陶器碗	—	—	5.0	口クロ	白 鉄 印	網毛目	—	—	肥 前	17C後半～18C		
10	陶器碗	9.3	6.5	5.0	口クロ	染 付 明	外：詩歌	口 髹	湯 漏	肥 前	18C		
11	磁 器 碗	10.4	—	—	口クロ	青 絵	—	—	—	肥 前	1690～1740年代		
12	磁 器 碗	2.3	—	—	口クロ	染 付 明	外：不明	—	—	肥 前	1690～1740年代	二次的焼熟	
13	磁器皿	—	—	—	口クロ	染 付 明	外：唐草と薔草	型取留り	—	肥 前	1690～1740年代		
14	磁 器 皿	7.8	5.4	5.1	口クロ	染 付 明	外：あやめ	—	大 平 明 製	肥 前	1690～1740年代		
15	磁 器 皿	—	—	5.0	口クロ	染 付 明	外：横物	—	大 平 明 製	肥 前	1690～1740年代		
16	陶器鉢	(21.0)	8.4	(16.0)	口クロ	鉄 印	—	—	—	肥 前	17C代		
17	陶 器 鉢	(33.6)	—	—	口クロ	—	—	—	—	丹 波	18C前半		
18	土 器 鉢	34	—	—	口クロ	—	—	—	—	在地?			

第14表 SK14・15出土土器・陶磁器類観察表

(冊期=17世紀末~18世紀中頃)

種 別	器 種	法量 (cm)			成 形	装 飾			底面・底	製作地	製 作 年 代	備 考	出 土 所
		口径	器高	底径		図形・文様	文 様	交脚特徴					
16-1	磁器碗	9.8	5.5	3.6	口ク口	染透 付明	外：二重網目に植物	—	大正 明治 文化年表	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	20
2	磁器碗	9.2	5.4	4.0	口ク口	染透 付明	外：半曲	—	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
3	磁器碗	10.7	6.0	4.3	口ク口	染透 付明	外：鳥	—	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
4	磁器碗	(10.0)	—	—	口ク口	染透 付明	外：葉	—	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
5	磁器碗	14.2	—	—	口ク口	染透 付明	外：花卉	—	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
6	磁器碗	(10.8)	—	—	口ク口	染透 付明	外：水雲	—	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
7	磁器碗	—	—	4.2	口ク口	染透 付明	外：不明	—	年 製	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
8	磁器碗	(9.2)	5.1	3.8	口ク口	染透 付明	外：磁状葉	コンニャク印	大正 明治 開製	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
9	磁器碗	9.7	5.1	4.0	口ク口	染透 付明	外：菊花	コンニャク印	大正 明治	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
10	磁器碗	7.5	4.6	3.0	口ク口	染透 付明	外：草花	—	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
11	磁器碗	8.1	4.3	3.3	口ク口	染透 付明	外：雨降り柳	—	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
12	磁器碗	8.0	4.3	3.0	口ク口	染透 付明	外：不明	コンニャク印	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
13	磁器碗	14.8	6.5	8.2	口ク口	染透 付明	内：花唐草 見込：竹垣	—	大正 明治	肥 前	18C前半から 中頃	二次的被熱 純ノ目田島藩台	
14	磁器碗	13.8	—	—	口ク口	染透 付明	内：あやめ	—	—	肥 前	18C前半から 中頃	二次的被熱	
15	磁器碗	6.2	—	—	口ク口	染透 付明	内・外：葉	—	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
16	磁器碗	8.0	—	—	口ク口	染透 付明	外：桐葉	コンニャク印	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
17	磁器碗	8.2	—	—	口ク口	染透 付明	外：秋草	—	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
18	磁器碗	10.0	6.3	3.9	口ク口	白 磁	—	—	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
19	磁器碗	11.1	5.3	4.9	口ク口	白 磁	—	—	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
20	磁器碗	10.0	6.1	3.6	口ク口	白 磁	—	—	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
21	磁器碗	8.3	4.2	4.4	口ク口	白 磁	—	—	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
17-22	陶胎碗	12.2	7.9	5.9	口ク口	染透 付明	外：半曲	—	—	肥 前	18C前半	二次的被熱	31
23	陶胎碗	15.2	7.2	5.2	口ク口	白 磁	裏で縞毛目	—	—	肥 前	17C後半~18C初	二次的被熱	
24	陶胎碗	11.8	7.7	6.4	口ク口	呉 須	外：鶴と流雲	一部象嵌	—	肥前 or 関西	17C後半~18C代	二次的被熱 茶陶	
25	磁器碗	3.8	9.6	5.7	口ク口	染透 付明	外：草花	—	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
26	磁器碗	5.6	2.9	3.3	口ク口	白 磁	—	—	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
27	磁器碗	8.4	6.5	5.3	口ク口	白 磁	—	—	—	肥 前	17C末~18C初	二次的被熱	
28	磁器碗	9.2	6.0	5.0	口ク口	染透 付明	外：植物	—	大正 明治	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
29	磁器碗	7.6	5.5	4.8	口ク口	染透 付明	外：あやめ	—	大正 明治	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	
30	磁器碗	6.8	5.4	3.3	口ク口	染透 付明	外：水車ほか	—	—	肥 前	1690~1680年代	二次的被熱	
31	磁器碗	10.0	7.1	6.3	口ク口	染透 付明	外：草花	—	—	肥 前	1690~1740年代	二次的被熱	

図番	器種	法量 (cm)			成 形	装 飾			底面・ 内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	出 典
		口径	器高	底径		絵付・ 刺 垂	文 様	装飾特徴					
17-32	磁器 磁物	10.2	—	—	口クロ	金透	外：牡丹唐草	—	—	肥 前	1690～1740年代	二次の被熱	31
33	磁器 磁物	—	—	7.7	口クロ	金透	外：牡丹唐草	—	—	肥 前	1690～1740年代	二次の被熱	
34	磁器 磁物	11.8	8.6	7.0	口クロ	金透	外：網目・丸	—	—	肥 前	1690～1710年代	二次の被熱	
35	磁器 磁物	—	—	(7.2)	口クロ	金透	外：楓ほか	—	—	肥 前	1690～1710年代	二次の被熱	
36	磁器 磁物	—	—	6.0	口クロ	金透	外：草花	—	—	肥 前	1630～1640年代	二次の被熱	
37	陶器 磁器	(8.0)	—	—	口クロ	透 明	—	—	—	肥 前	17C後半～ 18C前半	二次の被熱	
38	陶器 磁器	—	—	—	口クロ	透 明	—	—	—	肥 前	17C後半～ 18C前半	二次の被熱	
39	陶器 磁器	—	—	7.0	口クロ	透 明	—	—	—	肥 前	17C後半～ 18C前半	二次の被熱	
18-40	陶器 磁器	(31.0)	—	—	口クロ	鉄 軸	—	—	—	肥 前	17C後半～ 18C初頃	二次の被熱	32
41	陶器 磁器	—	—	—	口クロ	鉄 軸	—	—	—	肥 前	17C後半～ 18C初頃	二次の被熱	
42	陶器 磁器	—	—	—	口クロ	白鉄 器軸	外：刷毛目	—	—	肥 前	17C後半～ 18C初頃	二次の被熱	
43	陶器 磁器	—	—	13.3	口クロ	鉄 軸	—	—	—	肥 前	17C後半～ 18C初頃	二次の被熱	
44	陶器 磁器	—	—	—	口クロ	—	—	—	—	備前or 丹波	17C後半～ 18C前半	二次の被熱	
45	陶器 磁器	5.4	—	—	口クロ	透 明	—	—	—	信 楽	17～18C	二次の被熱	
46	陶器 磁器	10.8	—	—	口クロ	灰 軸	—	—	—	福岡	17～18C前半	二次の被熱	
19-47	陶器 磁器	7.8	—	—	口クロ	窯 灰	—	—	—	福岡?	17C	二次の被熱	33
48	陶器 磁器	(8.0)	23.4	(10.0)	口クロ	透 明	—	—	—	九州?	17C	熱軸と透明軸を 分け二次の被熱	
49	陶器 磁器	9.4	2.0	—	口クロ	透 明	—	—	—	京 焼	17C後半～ 18C前半	二次の被熱	
50	陶器 磁器	12.5	1.8	—	口クロ	透 明	—	—	—	京 焼	17C後半～ 18C前半	二次の被熱	
51	陶器 磁器	—	—	(16.6)	口クロ	窯 灰	—	—	未切り	備前or 丹波?	17C	二次の被熱	
52	土器 磁器	6.2	9.4	5.6	口クロ	無作り 内底有目	—	—	—	佐 賀	1720～1740年代	「サカイ京州徳生 磁物」一次の被熱	
53	陶器 磁器	16.2	6.8	16.6	口クロ	—	—	—	—	備前or 丹波	17C代	二次の被熱	
54	陶器 磁器	—	—	—	口クロ	—	花 卉	—	—	備前or 熊本	?	二次の被熱	
20-55	土器 磁器	(40.4)	4.8	(37.6)	口クロ	—	—	—	—	不 明	?	一部に白化磁土 二次の被熱	35
56	土器 磁器	(23.2)	16.5	(23.2)	口クロ	—	—	—	—	不 明	?	二次の被熱	
57	土器 磁器	18.0	—	—	口クロ	—	—	—	—	不 明	?	二次の被熱	
58	土器 磁器	—	—	21.0	口クロ	—	—	—	—	不 明	?	二次の被熱	
59	陶器 磁器	22.8	—	—	口クロ	鉄 軸	—	—	—	肥 前	17C後半～ 18C前半	二次の被熱	
60	陶器 磁器	36.0	—	—	口クロ	鉄 軸	外：櫛掻き波状	—	—	肥 前	17C後半～ 18C前半	二次の被熱	
21-61	陶器 磁器	32.3	10.6	11.9	口クロ	白鉄 器軸	内：刷毛目	—	—	肥 前	18C前半	二次の被熱	36
62	陶器 磁器	36.0	12.0	13.2	口クロ	白鉄 器軸	内：刷毛目	—	—	肥 前	18C前半	二次の被熱	

洋 器 種	法量 (cm)			成 形	装 飾			底面・内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	目録頁
	口径	器高	底径		底付・ 脚 文	文 様	装飾特徴					
21 —63	陶器鉢	—	—	13.5	口クロ	白 漆 内：刷毛目	—	—	肥 前	18C前半	二次的被熱	36
22 —64	陶器鉢	22.4	12.0	9.5	口クロ	白 漆 外：刷毛目	—	—	肥 前	17C後半— 18C前半	二次的被熱	37
65	陶器鉢	22.7	11.0	9.5	口クロ	白 漆 外：刷毛目	—	—	肥 前	17C後半— 18C前半	二次的被熱	
23 —64	磁器蓋	(6.0)	—	—	口クロ	金 漆 付 明 外：幾何学	—	—	中 国	16C末— 17C前半	二次的被熱	38
67	磁 器 蓋	5.0	2.2	2.4	口クロ	金 漆 付 明 外：幾何学	—	—	中 国	16C末— 17C前半	二次的被熱	
68	磁 器 蓋	5.8	5.7	4.2	口クロ	金 漆 付 明 外：植物	—	—	中 国	16C末— 17C前半	二次的被熱	
69	磁 器 蓋	10.3	9.6	—	口クロ	青 磁 —	—	—	中 国	16C末— 17C前半	いわゆる「獅子香 炉」二次的被熱	
70	磁器皿	(13.6)	—	—	口クロ	金 漆 付 明 外：雲文 内：不明	—	—	中 国	17C前半	二次的被熱	
71	磁器皿	(13.4)	—	—	口クロ	金 漆 付 明 外：雲文 内：不明	—	—	中 国	17C前半	二次的被熱	
72	磁器皿	—	—	—	口クロ	白 磁 内：紫斑(黒斑)	—	—	肥 前	1630—1650年代	二次的被熱	
73	磁器皿	14.5	4.7	7.0	口クロ	白 磁 —	—	—	肥 前	17C末— 18C初頭	二次的被熱	
74	磁器皿	14.6	4.8	6.9	口クロ	白 磁 —	—	—	肥 前	17C末— 18C初頭	二次的被熱	
75	磁器皿	14.4	4.6	9.0	口クロ	白 磁 —	—	—	肥 前	17C末— 18C初頭	二次的被熱	
76	磁器皿	14.8	4.8	6.4	口クロ	白 磁 —	—	—	肥 前	17C末— 18C初頭	二次的被熱	
77	陶器皿	16.8	3.6	8.2	口クロ	三 彩 内：水鳥	片 彫り	—	中 国	18C後半— 17C前半	二次的被熱	
78	磁器皿	21.0 10.5	3.2	16.0 5.4	口クロ	白 磁 —	—	—	肥 前	1690—1740年代	二次的被熱	
24 —79	陶器皿	13.0	3.4	4.6	口クロ	灰 釉 —	—	—	肥 前	1600—1630年代	砂目 いわゆる陶磁器	39
80	陶器皿	13.8	4.6	6.2	口クロ	灰 釉 内：植物	—	—	京 越	17C後半— 18C前半	二次的被熱	
81	陶器皿	13.6	4.7	4.0	口クロ	灰 釉 内：ひなげし・ 桜花	—	—	京 越	17C後半— 18C前半	二次的被熱	
82	陶器皿	10.8	3.0	5.3	口クロ	灰 釉 内：葉	口 縁	—	肥 前 (京越)	17C末— 18C前半	二次的被熱	
83	陶器皿	11.0	2.9	4.8	口クロ	灰 釉 内：葉	口 縁	—	肥 前 (京越)	17C末— 18C前半	二次的被熱	
84	陶器皿	15.0	2.9	9.4	口クロ	灰 釉 内：水鳥・舟・植物	—	—	肥 前 (京越)	17C末— 18C前半	二次的被熱	
25 —85	磁 器 蓋付皿	29.2	8.8	16.0	口クロ	金 漆 付 明 内：在方 外：花唐草	—	—	肥 前	1690—1710年代	二次的被熱	40
26 —86	磁器皿	42.0	9.4	22.0	口クロ	青 磁 内：雲文・花卉	片 彫り	—	肥 前	1650—1670年代	二次的被熱	42
87	磁器皿	36.2	6.5	21.2	口クロ	金 漆 付 明 内：唐草・竹 外：唐草・竹	—	—	肥 前	1690—1710年代	二次的被熱	
27 —88	磁器皿	31.3	4.9	18.8	口クロ	金 漆 付 明 内：唐草・竹 外：唐草・竹	—	—	肥 前	1690—1740年代	SK 3 に破片出土	43
89	磁器皿	31.4	4.8	18.8	口クロ	金 漆 付 明 内：唐草・竹 外：唐草・竹	—	—	肥 前	1690—1740年代	SK 25 出土破片と 被熱二次的被熱	
28 —90	磁器皿	(26.0)	7.5	(12.4)	口クロ	金 漆 付 明 内：唐草・竹 外：唐草・竹	—	—	肥 前	1690—1740年代	二次的被熱	44
91	磁器皿	27.2	4.1	(16.7)	口クロ	金 漆 付 明 内：唐草・竹 外：唐草・竹	—	—	肥 前	1690—1710年代	二次的被熱	
92	磁器皿	22.0	3.3	13.6	口クロ	金 漆 付 明 内：唐草・竹 外：唐草・竹	口 縁	—	肥 前	1690—1740年代	二次的被熱	
29 —93	磁器皿	(39.0)	4.5	(19.0)	口クロ	金 漆 付 明 内：唐草・竹 外：唐草・竹	—	—	肥 前	1655—1680年代	二次的被熱	45

種別	器種	法量 (cm)			成形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	図録頁
		口径	器高	底径		絵付・文 様	装飾特徴						
30-94	磁器皿	14.4	3.9	8.4	ロクロ	染付・文様 内：梅・松・竹・文様 外：蓮華文様	コンニャク印・赤文字	大 年 明 製	肥 前	1690～1740年代	二次的被熱	46	
	磁器皿	13.5	4.0	8.0	ロクロ	染付・文様 内：竹・松・文様 外：蓮華文様	—	—	肥 前	1690～1740年代	二次的被熱		
	磁器皿	—	—	(13.6)	ロクロ	染付・文様 内：花虫(天竺手) 外：蓮華文様	—	—	肥 前	1680～1700年代	二次的被熱		
	磁器皿	(21.2)	2.8	(14.4)	ロクロ	染付・文様 内：花虫(天竺手) 外：蓮華文様	—	—	肥 前	1680～1700年代	二次的被熱		
31-38	磁器皿	14.0	2.6	9.4	ロクロ	染付・文様 内：梅	—	—	肥 前	1690～1680年代	二次的被熱	47	
	磁器皿	14.0	3.4	8.6	ロクロ	染付・文様 内：花鳥	—	—	肥 前	1660～1680年代	二次的被熱		
	磁器皿	9.6	2.1	5.8	ロクロ	染付・文様 内：竹・松・文様 外：蓮華文様	—	大 年 明 製	肥 前	1690～1740年代	二次的被熱		
	磁器皿	14.6	2.5	8.8	ロクロ	染付・文様 内：松・梅・文様 外：蓮華文様	—	—	肥 前	1660～1680年代	二次的被熱		
102	磁器皿	10.6	2.8	7.0	型 打	色 絵 内：海龍・文様(雷文) 外：蓮華文様	雲龍・文様	大 年 明 製	肥 前	1690～1740年代	二次的被熱		
	磁器皿	11.0	2.4	6.0	ロクロ	色 絵 内：梅樹?	—	—	肥 前	1690～1740年代	二次的被熱		
	磁器皿	16.0	2.6	10.8	糸切り 上 工	染付・文様 内：海と紅雲 外：草花・雷文	—	変形字	肥 前	1660～1680年代	二次的被熱	48	
	磁器皿	16.4	2.3	11.0	糸切り 上 工	染付・文様 内：海と紅雲 外：草花・雷文	—	変形字	肥 前	1660～1680年代	二次的被熱		
106	磁器皿	—	2.8	—	糸切り 上 工	染付・文様 内：松・竹・文様 外：蓮華文様	口 銘	変形字	肥 前	1660～1670年代	二次的被熱		
	磁器皿	—	2.9	—	糸切り 上 工	染付・文様 内：松・竹・文様 外：蓮華文様	口 銘	変形字	肥 前	1660～1670年代	二次的被熱		
	磁器皿	—	3.1	—	糸切り 上 工	染付・文様 内：花散らし 外：花・文様	型紙張り	—	肥 前	1690～1740年代	二次的被熱		
	磁器皿	(14.5)	3.0	8.5	糸切り 上 工	染付・文様 内：花散らし 外：花・文様	型紙張り	—	肥 前	1690～1740年代	二次的被熱		
33-110	磁器鉢	—	—	11.2	ロクロ	染付・文様 内：横間山水	—	—	肥 前	1690～1740年代		49	
	磁器皿	(19.8)	—	—	ロクロ	青 磁 内：群花文	片 彫 り	—	肥 前	1630～1650年代	二次的被熱		
	土 器 鉢	11.2	2.4	—	手捏ね	—	—	—	在 地				
	土 器 鉢	9.2	1.7	4.1	ロクロ	—	—	糸切り (右)	在 地				
114	土 器 鉢	10.2	1.8	5.8	ロクロ	—	—	糸切り (右)	在 地				
	土 器 鉢	9.5	2.1	4.0	ロクロ	—	—	糸切り (右)	在 地		二次的被熱		
	土 器 鉢	(9.5)	1.2	(6.9)	ロクロ	—	—	糸切り (右)	在 地				
	土 器 鉢	(9.0)	1.3	(7.0)	ロクロ	—	—	糸切り (右)	在 地				

第15表 SK4 出土土器・陶磁器類観察表

(Ⅳ期=18世紀後半)

種別	器種	法量(cm)			成形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	図録頁	
		口徑	器高	底径		絵付・ 施 文	文 様	装飾特徴						
34-1	磁器蓋	9.2	2.8	3.8	ロクロ	青 磁	付 文	内：四方梅 文様・五葉花	コンニャク 印	—	肥 前	18C後半		50

第16表 SK1出土土器・陶磁器類観察表

(IV期=18世紀後半)

坪田	器種	法量(cm)			成形	装飾			底面・内底	製作地	製作年代	備考	出資者
		口径	器高	底径		絵付・文様	文様	装飾特徴					
34-2	磁器碗	12.7	6.9	5.8	口タ口	絵付・文様	外：牡丹・文様 内：牡丹・文様 見込：牡丹・文様	—	—	肥前	18C後半		50

第17表 SK9出土土器・陶磁器類観察表

(IV期=18世紀後半)

坪田	器種	法量(cm)			成形	装飾			底面・内底	製作地	製作年代	備考	出資者
		口径	器高	底径		絵付・文様	文様	装飾特徴					
35-1	磁器碗	(8.8)	—	—	口タ口	絵付・文様	外：陶器・若松	コンニャク印	—	肥前	1690~1740年代		51
2	磁器碗	9.6	5.5	4.0	口タ口	絵付・文様	外：菊花	コンニャク印	太田 明	肥前	18C前半~後半		
3	磁器碗	9.5	4.8	3.1	口タ口	絵付・文様	外：開	コンニャク印	—	肥前	1690~1740年代		
4	磁器碗	11.0	5.9	4.5	口タ口	絵付・文様	外：七宝・文様 内：西方・文様 見込：花卉	—	—	肥前	18C後半		
5	磁器碗	(11.2)	—	—	口タ口	絵付・文様	内：西方・文様	—	—	肥前	18C後半		
6	磁器碗	7.7	6.0	3.7	口タ口	絵付・文様	外：牡丹・文様 内：西方・文様 見込：花卉	—	—	肥前	18C後半から末		
7	磁器碗	8.3	6.4	5.0	口タ口	絵付・文様	外：抽象文	—	—	肥前	18C		
8	磁器碗	9.0	4.2	5.4	口タ口	青磁	—	—	—	肥前	18C後半	蛇ノ目形高台	
9	磁器碗	(11.6)	—	—	口タ口	絵付・文様	外：花卉	—	—	肥前	18C		
10	磁器碗	10.5	1.9	6.4	口タ口	絵付・文様	内：高麗 外：蓮花・光	—	—	肥前	18C後半		
11	磁器碗	(10.5)	1.7	(6.6)	口タ口	絵付・文様	内：高麗 外：蓮花・光 見込：五弁花	—	—	肥前	18C後半	蛇ノ目形高台	
12	磁器碗	(14.0)	3.3	(8.3)	口タ口	絵付・文様	内：牡丹・文様 外：蓮花・光 見込：五弁花	口 罽 福	肥前	18C前半~中頃			
13	磁器碗	(9.4)	2.0	(5.4)	口タ口	絵付・文様	内：蓮花 外：牡丹・文様	—	—	肥前	18C前半~中頃		
14	陶器碗	—	—	—	口タ口	透明	—	—	—	肥前	18C前半~19C前半		
15	磁器碗	(10.0)	6.4	3.6	打	絵付・文様	外：ひなげし・宝	—	—	肥前	17C後半		
36-16	磁器碗	2.3	—	—	口タ口	絵付・文様	外：桜花・草・梅	—	—	肥前	18C中葉~後半		52
17	磁器碗	9.6	—	—	口タ口	青磁	—	—	—	肥前	18C		
18	磁器碗	6.2	2.3	2.8	口タ口	絵付・文様	外：葉	—	—	肥前	18C		
19	土小皿	(6.0)	(1.1)	—	手捏ね	—	—	—	土 痕	不明			
20	陶器鉢	—	—	—	口タ口	白 陶	内：蓮花・草・梅 外：牡丹	—	—	肥前	17C		

第18表 SK19a出土土器・陶磁器類観察表

(IV期=18世紀後半)

坪田	器種	法量(cm)			成形	装飾			底面・内底	製作地	製作年代	備考	出資者
		口径	器高	底径		絵付・文様	文様	装飾特徴					
37-1	磁器碗	10.7	4.6	4.0	口タ口	絵付・文様	外：青海流・意・風雲	—	—	肥前	18C後半		53
2	磁器碗	10.2	4.8	4.2	口タ口	絵付・文様	外：輪文・草	—	—	肥前	18C後半		
3	磁器碗	10.0	4.9	3.5	口タ口	絵付・文様	外：牡丹・草	—	—	肥前	18C後半		

種別	器種	流量(cm)			成形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	通記頁
		口径	器高	底径		材料・文 様	装飾特徴						
37-4	磁器碗	(8.4)	3.5	(3.7)	口クロ	染透 付明	外：笹？	—	—	肥 前	18C後半		53
	5 磁器碗	(10.4)	4.4	4.0	口クロ	染透 付明	外：梅樹・笹	—	—	肥 前	18C後半		
	6 磁器碗	10.5	4.8	4.8	口クロ	染透 付明	外：唐草	—	—	肥 前	18C後半	見込み蛇ノ目 縁割き	
	7 磁器碗	10.4	4.5	3.9	口クロ	染透 付明	外：梅樹	—	—	肥 前	18C後半		
	8 磁器碗	8.0	3.8	3.0	口クロ	染透 付明	外：梅樹	—	—	肥 前	18C後半		
	9 磁器碗	10.0	5.3	4.7	口クロ	染透 付明	外：梅樹・写輪	—	大 明 肥 前	18C後半			
	10 磁器碗	(8.2)	4.2	3.0	口クロ	染透 付明	外：菱草	—	—	肥 前	18C後半		
	11 磁器碗	8.9	3.8	3.2	口クロ	染透 付明	外：扇・秋草	—	—	肥 前	18C後半		
	12 磁器碗	6.0	2.9	2.4	口クロ	染透 付明	外：探樹	—	—	肥 前	18C後半		
	13 磁器碗	6.2	2.3	3.4	口クロ	染透 付明	外：笹	—	—	肥 前	18C後半		
	14 磁器碗	6.0	2.0	2.7	口クロ	染透 付明	外：笹	—	—	肥 前	18C後半		
	15 磁器碗	(5.8)	3.1	(2.2)	口クロ	染透 付明	外：植物	—	—	肥 前	18C後半		
	16 磁器碗	9.1	5.5	4.1	口クロ	染透 付明	外：幾何学	—	—	関 西	18C後半		
	17 陶器碗	(10.6)	6.6	(5.0)	口クロ	染透 付明	外：唐草	—	—	肥 前	18C前半～中頃		
	38-25	18 磁器碗	11.4	6.1	5.0	口クロ	染透 付明	外：半唐 見込：葉	—	？	肥 前	18C後半～末	
19 磁器碗		14.7	7.5	5.8	口クロ	染透 付明	外：梅樹・写輪 見込：五弁花	コンニャク 大 明 肥 前	18C後半				
20 陶器碗		9.7	5.6	3.8	口クロ	染透 付明	外：植物	—	—	関 西	18C後半		
21 陶器碗		10.0	5.0	3.0	口クロ	染透 付明	外：笹	—	—	関 西	18C後半		
22 磁器碗		(13.0)	6.3	(7.4)	口クロ	白 磁	—	—	—	肥 前	1690～1740年代	見込み蛇ノ目 縁割き？	
23 磁器碗		7.5	6.0	5.4	口クロ	染透 付明	外：斜格子地に 忍若松・笹	—	—	肥 前	18C後半	見込み蛇ノ目 縁割き	
24 磁器皿		12.1	3.4	4.0	口クロ	白 磁	—	—	—	中 国	16C末～ 17C前半		
25 磁器皿		12.8	3.9	5.0	口クロ	染透 付明	内：斜交線	—	—	肥 前	18C後半	見込み蛇ノ目 縁割き	
26 磁器皿		12.2	4.0	4.4	口クロ	染透 付明	内：斜交線	—	—	肥 前	18C後半	見込み蛇ノ目 縁割き	
27 磁器皿		13.0	2.8	5.2	口クロ	染透 付明	内：斜交線	—	—	肥 前	18C後半	見込み蛇ノ目 縁割き	
39-34	28 磁器皿	10.4	2.3	6.8	口クロ	染透 付明	内：蛇窓・ 見込：松竹唐草 外：唐草	—	関 西	肥 前	18C後半	蛇ノ目形高台	
	29 磁器皿	10.1	2.2	6.6	口クロ	染透 付明	内：蛇窓・ 見込：松竹唐草 外：唐草	—	関 西	肥 前	18C後半	蛇ノ目形高台	
	30 磁器皿	12.0	1.9	6.8	口クロ	染透 付明	内：赤松 外：流紋唐草	—	—	肥 前	18C後半		
	31 磁器皿	12.2	2.1	7.1	口クロ	染透 付明	内：赤松 外：流紋唐草	—	—	肥 前	18C後半		
	32 磁器皿	11.0	2.3	7.8	口クロ	染透 付明	内：梅樹 外：流紋唐草	—	高 福	肥 前	18C後半		
	33 磁器皿	12.6	3.0	7.0	口クロ	染透 付明	内：唐草・唐草 外：花唐草	—	—	肥 前	18C前半～中頃		
	34 磁器皿	16.8	5.3	9.6	口クロ	染透 付明	内：唐草・生垣 外：流紋唐草	—	高 福	肥 前	18C後半		

種別	器種	法量(cm)			成形	装飾			底面・内底	製作地	製作年代	備考	出典
		口径	器高	底径		絵付・施文	文様	装飾特徴					
39-35	磁器皿	14.6	3.8	9.2	ロクロ	施文	内：梅竹 外：三つ葉文 外：海松竹草	—	渦巻	肥前	18C後半	蛇ノ目凹形高台	55
36	磁器皿	(15.0)	3.8	(9.8)	ロクロ	施文	内：草花 外：五弁花 外：海松竹草	コンニャク印	渦巻	肥前	18C後半		
37	磁器皿	15.0	4.1	9.0	ロクロ	施文	内：草花 外：海松竹草	—	渦巻	肥前	18C後半	蛇ノ目凹形高台	
40-38	磁器皿	—	—	—	ロクロ	施文	内：海松竹草 外：海松竹草	—	—	肥前	18C前半		56
39	磁器皿	—	—	11.4	ロクロ	施文	内：松竹はか	—	角福	肥前	1660~1680年代	二次粉被焼	
40	陶器壺	4.8	1.6	—	型打	色絵	—	—	—	関西	18C		
41	陶器壺	4.7	0.9	—	ロクロ	鉄絵	—	—	—	関西	18C		
42	陶器壺	6.0	3.7	3.4	ロクロ	鉄絵	—	—	—	関西	18C		
43	陶器壺	(7.0)	—	—	ロクロ	鉄絵	外：梅竹	—	—	関西	18C後半		
44	陶器壺	(7.6)	—	—	ロクロ	透明	—	—	—	関西	18C後半		
45	陶器壺	8.7	3.7	4.6	ロクロ	鉄絵	—	—	—	関西	18C後半		
46	陶器壺	(7.0)	7.3	(5.6)	ロクロ	青磁	—	—	—	肥前	18C		
47	陶器壺	(7.0)	—	(11.5)	ロクロ	青磁	—	—	—	肥前	18C	蛇ノ目凹形高台	
48	磁器皿	9.6	2.9	7.8	ロクロ	青磁	—	—	—	肥前	18C		
49	陶土器	8.4	—	—	ロクロ	鉄絵	外：雲	—	—	肥前?	18C後半		
50	陶土器	9.8	—	—	ロクロ	鉄絵	—	—	—	肥前?	18C後半		
51	陶土器	18.2	—	—	ロクロ	透明	—	—	—	関西	18C後半		
52	土小	10.0	—	4.9	ロクロ	—	—	—	赤知り(右)	在地			
53	土小	—	—	4.0	ロクロ	—	—	—	赤知り(右)	在地		底部に方形の穿孔	
41-54	陶器鉢	—	—	(16.1)	ロクロ	透明	外：流水文?	片彫り	—	肥前	18C後半		57
55	陶器鉢	(32.4)	16.6	(15.4)	ロクロ	—	—	—	—	肥前	18C後半		
56	陶器鉢	(31.0)	13.4	(13.0)	ロクロ	—	—	—	—	肥前	18C後半		
48-57	土碗	8.1	2.0	7.4	板作り	—	—	—	内底	肥前	18C後半		58
58	土碗	8.2	1.8	7.8	板作り	—	—	—	内底	肥前	18C後半		
59	土碗	(32.6)	—	—	ロクロ	—	—	—	—	在地?			

第19表 SK19b出土土器・陶磁器類観察表

(Ⅳ期=18世紀後半)

種別	器種	法量(cm)			成形	装飾			底面・内底	製作地	製作年代	備考	出典
		口径	器高	底径		絵付・施文	文様	装飾特徴					
43-1	磁器碗	10.0	5.8	4.0	ロクロ	施文	外：梅竹 外：五弁花	—	—	肥前	18C後半	小広東碗	60
2	磁器碗	10.5	5.3	3.8	ロクロ	施文	外：梅竹 外：五弁花	—	—	肥前	18C後半	小広東碗	
3	磁器碗	9.4	4.9	3.3	ロクロ	施文	外：梅竹 外：五弁花	—	—	肥前	18C後半	小広東碗	

種 別	器 種	寸法(cm)			成 形	装 飾			底面・内面	製作地	製作年代	備 考	通 覧 頁
		口徑	器高	底径		絵付・彫刻	文 様	装飾特徴					
43-4	磁器碗	10.2	5.1	4.0	ロクロ	付明	外：梅樹・雪輪	—	大 厨	肥 前	18C後半	くらわんか手	60
5	磁器碗	10.0	5.0	4.0	ロクロ	付明	外：梅樹・雪輪	—	大 厨	肥 前	18C後半	くらわんか手	
6	磁器碗	10.4	5.0	4.0	ロクロ	青 磁	—	—	—	肥 前	18C	焼成不良	
7	磁器碗	4.5	—	—	ロクロ	付明	外：植物 見込：五弁花	コンニャク 印	一 厨	肥 前	18C前半		
8	磁器碗	(4.0)	—	—	ロクロ	付明	外：紫 見込：花卉?	—	□ 厨	肥 前	18C後半		
9	磁器碗	9.8	6.0	4.2	ロクロ	透 明	—	—	—	肥 前	18C後半		
10	磁器碗	7.8	6.2	4.0	ロクロ	付明	外：矢筈 見込：五弁花 内：四方唐	—	一 厨	肥 前	18C後半		
11	磁器碗	8.0	6.4	3.7	ロクロ	付明	外：松樹 見込：五弁花 内：四方唐	コンニャク 印	—	肥 前	18C後半		
12	磁器碗	8.0	5.6	3.9	ロクロ	付明	外：横線	口 紅	—	肥 前	18C後半		
13	磁器碗	5.3	2.3	3.1	ロクロ	色 染	外：花卉	—	—	肥 前	18C		
14	磁器皿	(9.0)	2.4	(4.0)	ロクロ	透 明	—	—	—	不 明	18C?		
15	磁器碗	8.3	6.3	4.3	ロクロ	付明	外：幾子地に 菊花散らし	—	—	肥 前	18C		
16	磁器皿	9.0	2.8	3.8	ロクロ	付明	内：四方唐 見込：五弁花	コンニャク 印	—	肥 前	18C後半		
17	磁器皿	9.5	3.2	4.0	ロクロ	付明	内：四方唐 見込：五弁花	—	一 厨	肥 前	18C後半		
18	磁器皿	9.8	3.0	4.1	ロクロ	付明	内：四方唐 見込：五弁花	コンニャク 印	一 厨	肥 前	18C後半		
19	磁器皿	(10.0)	2.8	(4.4)	ロクロ	付明	内：四方唐 見込：五弁花	—	一 厨	肥 前	18C後半		
44-20	磁器皿	(10.0)	2.7	(4.4)	ロクロ	付明	外：松樹・鳥 内：四方唐 見込：松竹蘭内無	—	一 厨	肥 前	18C後半		61
21	磁器皿	(9.8)	—	—	ロクロ	付明	内：幾子 内：四方唐	—	—	肥 前	18C後半		
22	磁器皿	(3.7)	—	—	ロクロ	付明	外：丸ほか	—	大 厨	肥 前	1690-1740年代		
23	磁器皿	(10.4)	2.3	6.6	ロクロ	付明	内：幾子唐 外：透網唐	—	—	肥 前	18C後半		
24	磁器皿	(8.7)	1.8	(5.0)	ロクロ	付明	内：? 外：透網唐	口 紅	—	肥 前	1690-1740年代		
25	磁器皿	—	1.9	—	ロクロ	付明	外：幾子唐 内：透網唐	—	—	肥 前	1690-1740年代		
26	磁器皿	(7.0)	—	—	ロクロ	付明	足高：松竹蘭内形 外：横線	—	—	肥 前	18C後半	蛇ノ目巴彫高台	
27	磁器皿	7.2	—	—	ロクロ	付明	内：幾子 見込：五弁花	—	—	肥 前	1690-1740年代		
28	磁器皿	—	—	(8.0)	ロクロ	付明	内：花卉	—	—	肥 前	18C前半		
29	磁器皿	—	—	(7.8)	ロクロ	付明	外：? 内：幾子唐	—	—	中 国	16C末- 17C前半	内底部に放射状 のクナナ目入り	
30	磁器皿	12.8	5.0	11.7	ロクロ	付明	外：樹木	—	—	肥 前	18C		
31	磁器鉢	—	—	8.1	ロクロ	透 明	—	—	—	肥 前	17C前半		
32	土 器	8.4	1.8	3.8	ロクロ	—	—	—	赤切り (石)	在 地		スチ付着	
33	土 器	—	—	—	ロクロ	—	—	—	圧 痕	在 地			
34	土 器	(31.0)	7.4	—	ロクロ	—	—	—	—	在 地			

序号	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	出 土 所
		口径	器高	底径		纹样・文様	文 様	裝飾特徴					
44	土 碗	8.0	2.0	7.5	板作	—	—	—	内底に点	肥 前	18C後半		61
35	土 碗	6.5	7.6	6.5	板作	—	—	—	—	肥 前	18C後半	「京湾伊織」	

第20表 SK12出土土器・陶磁器類観察表

(Ⅳ期=18世紀後半)

序号	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	出 土 所
		口径	器高	底径		纹样・文様	文 様	裝飾特徴					
45-1	磁 器 碗	3.0	1.5	2.6	型 打	白 磁	—	—	—	肥 前	18C後半		62
2	磁器碗	10.2	6.0	(4.0)	口タ口	染 付 明 透	外：草花	—	—	肥 前	1690～1740年代		
3	陶器碗	—	—	5.0	口タ口	透 明	—	—	—	肥 前	17C後半～18C前半		
4	磁 器 皿	—	—	—	型 打	染 付 明 透	外：牡丹・草花ほか	—	—	肥 前	1690～1710年代		
5	磁器皿	9.6	2.1	5.5	口タ口	染 付 明 透	内：竹葉・草花ほか 外：点描・草花ほか	—	人 形 明 透	肥 前	1690～1740年代	二次的焼成	

第21表 SK38出土土器・陶磁器類観察表

(Ⅳ期=18世紀後半)

序号	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	出 土 所
		口径	器高	底径		纹样・文様	文 様	裝飾特徴					
45-6	土 碗	11.4	2.7	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			62
7	磁器碗	10.0	5.1	3.8	口タ口	染 付 明 透	外：梅樹	—	大 厨 明 透	肥 前	18C後半	くらわんか手	
8	磁器碗	15.0	6.8	5.4	口タ口	染 付 明 透	内、外：花唐草	—	—	中 国	16C末～17C前半	内底部に放射状のクマシ線あり	

第22表 SK25出土土器・陶磁器類観察表

(Ⅳ期=18世紀後半)

序号	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	出 土 所
		口径	器高	底径		纹样・文様	文 様	裝飾特徴					
46-1	磁器碗	—	—	—	口タ口	染 付 明 透	外：雲文・草花	—	—	中 国	16C末～17C前半	二次的焼成	63
2	磁器碗	—	—	—	口タ口	染 付 明 透	外：雲文・草花	—	—	中 国	16C末～17C前半	二次的焼成	
3	磁器碗	—	—	—	口タ口	染 付 明 透	外：雲文?	—	—	中 国	16C末～17C前半	二次的焼成	
4	磁器碗	—	—	—	口タ口	染 付 明 透	外：尖舌	—	—	肥 前	18C後半		

第23表 SK26出土土器・陶磁器類観察表

(Ⅳ期=18世紀後半)

序号	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	出 土 所
		口径	器高	底径		纹样・文様	文 様	裝飾特徴					
47-1	磁器碗	9.7	5.2	4.3	口タ口	染 付 明 透	外：梅樹・竹葉	—	尚 白 明 透	肥 前	1690～1740年代		64
2	磁器碗	9.5	—	—	口タ口	染 付 明 透	内：二重雲 外：二重雲	—	—	肥 前	18C後半		
3	陶器碗	10.3	7.0	5.2	口タ口	染 付 明 透	外：唐草	—	—	肥 前	18C後半～19C		

時 区	器 種	法量 (cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	出典
		口径	器高	底径		絵柄・文 様	装飾特徴						
47-4	陶器碗	(9.4)	5.6	3.6	ロクロ	絵明 外：笹	—	—	—	関 西	18C後半	内底部分に浅い内帯彫り出し	64
5	陶器碗	11.8	7.0	(6.4)	ロクロ	白紙 内：外：刷毛目	—	—	—	肥 前	17C後半～ 18C前半		
6	磁器碗	—	—	—	ロクロ	絵明 外：雨降り模	—	—	—	肥 前	1690～1740年代	二次的焼熟	
7	磁器碗	(7.9)	4.3	(3.2)	ロクロ	絵明 外：松樹 見込：菱草・菊・蓮小	—	—	—	肥 前	1690～1740年代		
8	磁器小 鉢	(6.9)	2.7	2.7	ロクロ	絵明 外：草花	—	—	—	肥 前	1690～1740年代		
9	磁器碗	6.7	4.8	2.8	ロクロ	絵明 外：横物	—	—	—	肥 前	18C後半		
10	磁器 碗	7.4	5.5	5.0	ロクロ	絵明 外：あやめ	—	—	—	肥 前	1690～1740年代		
11	磁器 碗	9.2	6.2	4.8	ロクロ	絵明 外：横物	—	—	—	肥 前	1690～1740年代		
12	磁器 碗	6.8	7.0	6.8	ロクロ	絵明 外：紫陽花	—	—	—	肥 前	17C後半	S K 12国土 破片と接合	
13	磁器 碗	(11.7)	—	—	ロクロ	絵明 外：抽象文	—	—	—	肥 前	18C前半		
14	磁器 碗	—	—	—	ロクロ	絵明 外：不図	—	—	—	肥 前	1690～1740年代	二次的焼熟	
15	磁器碗	(24.5)	3.6	15.7	ロクロ	絵明 内：牡丹 外：流線草	—	—	—	肥 前	1690～1710年代		
16-16	磁器碗	9.6	2.0	5.6	ロクロ	絵明 内：牡丹 外：流線草	—	—	—	肥 前	1690～1740年代	二次的焼熟	65
17	磁器碗	—	3.0	6.8	型 打	絵明 内：流線草文(雷文) 外：流線草	—	—	—	肥 前	1690～1740年代		
18	磁器碗	—	2.7	—	型 打	絵明 内：流線草 外：墨草	—	—	—	肥 前	1690～1740年代	二次的焼熟	
19	磁器碗	(14.0)	2.8	(9.0)	ロクロ	絵明 内：横	—	—	—	肥 前	1690～1680年代		
20	磁器碗	(14.0)	3.8	(6.4)	ロクロ	白紙 —	—	—	—	肥 前	18C後半		
21	磁器碗	13.0	3.8	5.6	ロクロ	白紙 —	—	—	—	肥 前	18C後半		
22	磁器碗	(9.7)	—	—	ロクロ	絵明 外：紫短	—	—	—	肥 前	18C前半	二次的焼熟	
23	磁器碗	9.6	2.9	3.9	ロクロ	白紙 —	—	—	—	肥 前	1690～1740年代	二次的焼熟	
24	磁器碗	9.8	3.0	3.8	ロクロ	白紙 —	—	—	—	肥 前	1690～1740年代	二次的焼熟	
25	磁器碗	(9.9)	2.8	(4.0)	ロクロ	白紙 —	—	—	—	肥 前	1690～1740年代	二次的焼熟	
26	磁器碗	—	—	—	型 打	絵明 外：羽虫・ 七宝草	—	—	—	不 明	近・現代?		
27	磁器碗	—	—	—	型 打	絵明 外：雷文・花唐草	—	—	—	不 明	近・現代?		
28	土師器	(5.0)	—	—	型 打	—	—	—	—	不 明	18C後半?		
29-29	陶器鉢	(17.4)	4.4	6.4	ロクロ	鉄 箱	—	—	—	肥前or 關 西	18C		66
30	陶器鉢	(8.6)	2.5	(5.0)	ロクロ	流 明	—	—	—	関 西	18C後半		
31	陶器 鉢	—	—	—	ロクロ	—	—	—	—	堺	18C前半～中頃	「上」の刻印	
32-32	陶器鉢	34.0	10.8	12.0	ロクロ	白紙 内：刷毛目	—	—	—	肥 前	18C前半		67
33	陶器 鉢	(41.0)	17.8	20.4	ロクロ	—	—	—	—	堺	18C前半～中頃		
34	陶器 鉢	45.2	19.0	19.2	ロクロ	—	—	—	—	肥 前	18C後半		

第24表 SK2出土土器・陶磁器類観察表

(Va期=18世紀末~19世紀前半)

件 号	器 種	法量(m)			成 形	装 飾			高 度 内・底	製作地	製作年代	備 考	出 土 品
		口径	器高	底径		施付・ 施込	文 様	装飾特徴					
51-1	陶器碗	10.1	5.4	3.0	ロタ口	施込 刷明	外：笹	—	—	関 西	18C後半		69
2	陶器碗	9.3	5.5	2.8	ロタ口	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
3	陶器碗	(9.8)	5.6	2.8	ロタ口	施込 刷明	外：桜花・草?	—	—	関 西	18C後半		
4	磁器碗	11.4	6.2	4.7	ロタ口	施込 付明	外：草花	—	大 平 刷明	肥 前	18C後半		
5	磁器碗	(10.2)	5.4	(4.4)	ロタ口	施込 付明	外：梅樹・雪輪	—	—	肥 前	18C後半	くらわんか手	
6	磁器碗	9.8	5.0	3.7	ロタ口	施込 付明	外：草花	—	—	肥 前	18C後半	くらわんか手	
7	磁器碗	9.6	5.1	3.6	ロタ口	施込 付明	外：草花	—	大 平 刷明	肥 前	18C後半	くらわんか手	
8	磁器碗	(10.2)	4.8	3.8	ロタ口	施込 付明	内・外：牡丹唐草	—	—	肥 前	18C後半		
9	磁器碗	8.2	4.3	3.4	ロタ口	施込 付明	外：草花	—	—	肥 前	18C後半		
10	磁器碗	(8.2)	3.9	(3.4)	ロタ口	施込 付明	外：草花	—	—	肥 前	18C後半		
11	磁器碗	8.3	4.8	3.3	ロタ口	施込 付明	外：草花	—	—	肥 前	18C後半		
12	磁器碗	7.6	3.9	3.3	ロタ口	施込 付明	外：笹?	—	—	肥 前	18C後半		
13	磁器碗	(11.6)	—	—	ロタ口	施込 付明	内・外：格子地に 菊花散らし	—	—	肥 前	18C後半		
14	磁器碗	—	—	4.0	ロタ口	施込 付明	内・外：格子地に 菊花散らし	—	高 福	肥 前	18C後半		
15	磁器碗	—	—	4.9	ロタ口	施込 付明	外：京花 見込：松竹梅四季	—	富 貴 刷明	肥 前	18C後半		
16	磁器碗	—	—	(3.6)	ロタ口	施込 付明	外：矢筈?	—	大 平 刷明	肥 前	1660~1680年代		
17	磁器碗	(11.5)	7.0	4.6	ロタ口	施込 付明	外：草花? 見込：海浜?	—	—	肥 前	18C後半~末		
18	陶器碗	(10.0)	7.1	(4.2)	ロタ口	施込 付明	外：唐草	—	—	肥 前	18C後半~中頃		
19	磁器皿	—	—	5.4	ロタ口	施込 付明	内：草花	—	化年製	肥 前	1660~1680年代		
52-20	陶器碗	(9.3)	6.5	4.2	ロタ口	施込 付明	外：うまのめ 状文・唐草	—	—	関 西	18C後半		70
21	磁器碗	(6.2)	—	—	ロタ口	青 磁	—	—	—	肥 前	18C		
22	磁器碗	(8.0)	3.8	2.9	ロタ口	施込 付明	外：唐草 内：草花	—	—	肥 前	18C後半		
23	磁器碗	(8.2)	6.1	4.2	ロタ口	施込 付明	外：四方唐 草・五弁花	—	—	肥 前	18C後半		
24	磁器碗	(8.4)	6.1	4.0	ロタ口	施込 付明	外：唐草? 内：四方唐 草・五弁花	—	—	肥 前	18C後半		
25	磁器碗	(8.0)	6.0	3.8	ロタ口	施込 付明	外：唐草 内：四方唐 草・五弁花	—	—	肥 前	18C後半		
26	磁器碗	8.2	6.2	4.2	ロタ口	施込 付明	外：唐草 内：四方唐 草・五弁花	—	—	肥 前	18C後半		
27	磁器碗	8.3	5.4	4.0	ロタ口	施込 付明	内：四方唐 草・五弁花	—	高 福	肥 前	18C後半		
28	磁器碗	(5.0)	3.6	(3.0)	ロタ口	白 磁	—	—	—	肥 前	1690~1740年代		
29	磁器碗	6.6	5.4	4.0	ロタ口	白 磁	—	—	—	肥 前	18C後半~ 16C後半		
30	磁器碗	6.8	5.9	4.0	ロタ口	青 磁	—	—	—	肥 前	18C後半~末		
31	磁器碗	(22.8)	3.6	11.6	ロタ口	施込 付明	内：石目 外：青磁松葉	—	—	肥 前	18C後半~ 19C後半		

種 別	器 種	法 量 (cm)			成 形	装 飾			施 工 内 容	製作地	製作年代	備 考	目 録 頁
		口径	器高	底径		紋 樣	文 様	装飾特徴					
52-32	磁器皿	(20.4)	4.0	(10.2)	口ク口	急須	絵明	内：花唐草	—	肥 前	18C末～19C前半		70
53-33	磁器皿	(12.0)	2.6	(7.0)	口ク口	急須	付明	内：花唐草 外：唐草文	—	肥 前	18C後半		71
34	磁器皿	(11.0)	1.8	(7.0)	口ク口	急須	付明	内：唐草文 外：唐草文	—	肥 前	18C後半	地ノ目凹形高台	
35	磁器皿	(9.6)	(2.2)	5.6	口ク口	急須	付明	内：唐草 外：折枝松葉	—	肥 前	18C前半～中頃		
36	磁器皿	12.4	3.5	4.5	口ク口	急須	付明	内：斜交線	—	肥 前	18C後半	足込丸地ノ目 縁刻有	
37	磁器皿	—	—	—	板作り	急須	付明	外：不明	—	肥 前	18C		
38	磁器皿	4.5	1.6	1.5	型 打	白 磁	—	—	—	肥 前	18C後半		
39	磁器皿	6.0	2.0	2.2	口ク口	急須	付明	外：笹	—	肥 前	18C後半		
40	磁器皿	5.6	2.2	2.6	口ク口	急須	付明	外：笹	—	肥 前	18C後半		
41	磁器皿	(7.2)	—	—	口ク口	白 磁	—	—	—	肥 前	17C前半～18C前半		
42	陶器皿	(12.5)	(2.2)	—	口ク口	—	—	—	—	備 前	18C		
43	陶器皿	(7.2)	2.6	—	口ク口	急須	付明	外：梅樹	—	関 西	18C後半		
44	磁器皿	(8.0)	2.3	3.2	口ク口	急須	付明	外：草葉	—	肥 前	17C中頃	玉文 3 土曜ノ目と 組合	
45	磁器皿	1.4	—	—	口ク口	急須	付明	外：若松	—	肥 前	18C後半		
46	磁器皿	5.4	—	—	板作り	白 磁	—	—	—	不 明	近・現代?		
47	磁器皿	—	—	—	口ク口	—	—	—	—	在 地?			
54-48	土 磁 器 土 磁 器	23.0	19.4	21.7	口ク口	—	—	—	—	京 都 肥 前	19C前半	『源軍辻瓦』刷印	72
49	土 磁 器	34.4	7.8	—	口ク口	—	—	—	—	在 地			
55-50	土 磁 器 土 磁 器	9.4	1.6	4.2	口ク口	—	—	—	—	京 都 肥 前	19C前半		73
51	土 磁 器	9.4	1.7	4.4	口ク口	—	—	—	—	在 地			
52	土 磁 器	8.7	1.7	4.8	口ク口	—	—	—	—	在 地			
53	土 磁 器	(7.0)	(2.0)	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			
54	土 磁 器	11.6	2.8	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			
55	土 磁 器	13.1	3.0	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			73
56	陶 器 皿	(37.6)	15.6	(17.2)	口ク口	—	—	—	—	肥 前	18C後半		

第25表 SK3出土土器・陶磁器類観察表

(V a 期=18世紀末～19世紀前半)

種 別	器 種	法 量 (cm)			成 形	装 飾			施 工 内 容	製作地	製作年代	備 考	目 録 頁
		口径	器高	底径		紋 樣	文 様	装飾特徴					
56-1	陶器碗	8.8	5.2	3.0	口ク口	急須	絵明	外：草花	—	関 西	18C後半		75
2	陶器碗	9.0	5.0	3.0	口ク口	急須	絵明	外：草花	—	関 西	18C後半		
3	磁器碗	(9.6)	4.9	(3.2)	口ク口	急須	付明	外：松葉ほか	—	肥 前	1690～1740年代		

種 別	器 種	法量 (mm)			成 形	装 飾			美 面・ 内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	図 録 頁
		口徑	唇高	底徑		器 行・ 文	樣	裝飾特徴					
56-4	陶器碗	9.4	5.4	3.1	口ク口	色 施 明	外：紫	—	—	関 西	18C後半		75
5	磁器碗	9.8	—	—	口ク口	色 施 明	外：黄木	—	—	肥 前	18C後半	小広葉碗	
6	磁器碗	—	—	4.4	口ク口	色 施 明	外：不明	—	—	肥 前	18C後半		
7	磁器碗	9.6	—	—	口ク口	色 施 明	外：横・八ヶ嶺 内：四方樽	—	—	肥 前	18C後半		
8	磁器碗	(10.0)	—	—	口ク口	色 施 明	外：横・八ヶ嶺 内：四方樽	—	—	肥 前	18C後半		
9	磁器碗	9.0	5.8	3.8	口ク口	色 施 明	外：横・八ヶ嶺 見込：五弁花	—	—	肥 前	18C後半		
10	磁器碗	3.4	—	—	口ク口	色 施 明	外：八ヶ嶺 見込：五弁花	—	—	肥 前	18C後半		
11	磁器碗	4.6	—	—	口ク口	色 施 明	外：横 内：五弁花	コンニャク 印	森 福	肥 前	18C後半		
12	磁器碗	3.4	—	—	口ク口	色 施 明	外：横 内：五弁花	—	—	肥 前	18C後半		
13	磁器碗	—	—	3.4	口ク口	色 施 明	外：横 見込：五弁花	—	—	肥 前	1690～1740年代		
14	磁器碗 (6.6)	—	—	—	口ク口	色 施 明	外：不明 見込：横象	—	—	肥 前	1780～1820年代	広葉碗	
15	磁器碗 (11.2)	6.4	(4.4)	—	口ク口	色 施 明	内：四方樽	—	—	肥 前	18C後半		
16	磁器碗 (11.4)	—	—	—	口ク口	色 施 明	内：四方樽	—	—	肥 前	18C後半		
17	磁器碗	—	—	4.4	口ク口	色 施 明	—	—	—	肥 前	18C後半		
18	磁器碗 (7.8)	5.7	4.2	—	口ク口	色 施 明	外：横 内：四方樽 見込：松竹梅内形	—	—	肥 前	18C後半	色紙煮地か?	
19	磁器碗	7.8	5.9	3.8	口ク口	色 施 明	外：横 内：四方樽 見込：五弁花	—	—	肥 前	18C後半		
20	磁器碗	7.0	5.5	3.4	口ク口	色 施 明	外：横 内：四方樽 見込：五弁花	コンニャク 印	—	肥 前	18C後半		
21	磁器碗	7.4	6.1	3.8	口ク口	色 施 明	外：横 見込：五弁花	—	—	肥 前	18C後半		
22	陶器碗	8.4	6.1	5.0	口ク口	色 施 明	—	—	—	美 濃	18C		
57-23	磁器碗 (8.4)	—	—	—	口ク口	色 施 明	外：丸	—	—	肥 前	18C後半		76
24	磁器碗	—	—	4.0	口ク口	色 施 明	外：横 内：四方樽 見込：五弁花	—	—	肥 前	18C後半		
25	磁器碗	8.3	7.0	4.1	口ク口	色 施 明	外：横 内：四方樽 見込：五弁花	コンニャク 印	—	肥 前	18C後半		
26	磁器碗	—	—	5.0	口ク口	色 施 明	外：横 見込：横象	—	—	肥 前	18C後半		
27	磁器碗	—	—	(4.2)	口ク口	色 施 明	外：横 内：四方樽 見込：松竹梅内形	—	—	肥 前	18C後半		
28	磁器碗 (8.0)	6.1	(5.0)	—	口ク口	色 施 明	外：丸	—	—	肥 前	1690～1740年代		
29	磁器碗 (7.2)	5.4	5.4	—	口ク口	色 施 明	外：横	—	—	肥 前	1690～1740年代		
30	磁器碗 (6.7)	5.0	4.0	—	口ク口	色 施 明	外：横	—	—	肥 前	18C		
31	磁器碗 (8.0)	—	(3.6)	—	口ク口	色 施 明	外：横	—	赤切り (右)	肥 前	17C中頃	S K 2 出土破片と 接合	
32	磁器碗	—	—	—	口ク口	色 施 明	内：花虫(芙蓉手)	—	—	肥 前	1680～1700年代	二次的被熱	
33	磁器碗	—	—	—	口ク口	色 施 明	内：花虫(芙蓉手)	—	—	肥 前	1680～1700年代	二次的被熱	
34	磁器碗	—	—	—	口ク口	色 施 明	外：横 内：花虫(芙蓉手)	—	—	肥 前	1680～1700年代	二次的被熱	

群 団	器 種	法量 (cm)			成 形	装 飾			底面・内 底	製作地	製作年代	備 考	図録頁
		口徑	器高	底径		紋付・施 文	文 様	装飾特徴					
37-35	磁器皿	—	—	—	口タロ	透明	外：透磁曜石 内：花文(高砂手)	—	—	肥 前	1880～1700年代	二次的焼成	76
36	磁器皿	—	—	—	口タロ	透明	外：透磁曜石 内：花文(高砂手)	—	—	肥 前	1880～1700年代	二次的焼成	
37	磁器皿 (8.4)	2.0	(5.8)	口タロ	透明	透明	—	—	—	肥 前	18C前半～中頃	二次的焼成	
38	磁器皿	5.4	2.6	2.2	口タロ	白 磁	—	—	—	肥 前	18C		
39	磁器皿 (14.7)	2.8	(9.0)	口タロ	透明	透明	内：唐草	—	—	肥 前	18C後半	見込名所ノ目録調査	
40	磁器皿	11.6	3.5	4.7	口タロ	透明	内：斜文線	—	—	肥 前	18C後半	見込名所ノ目録調査	
41	磁器鉢	—	—	—	口タロ	透明	内：不明 外：通磁片染	—	—	肥 前	18C後半		77
42	磁器碗 (5.8)	—	—	口タロ	透明	透明	外：竹葉	—	—	肥 前	18C		
43	陶 器 鉢	—	—	3.2	口タロ	色 透	外：七宝唐草 桜花散らし	—	(西印)	京 焼	18C		
44	和 瓦 器 鉢	—	—	—	型 打	白 磁	外：御所(陽刻)	—	—	肥 前	17C		
45	土 小 鉢	—	—	—	手捏丸	—	—	—	—	在 地			
46	土 小 鉢	—	—	4.6	口タロ	—	—	—	中留り(丸)	在 地			
47	陶器蓋 (5.0)	2.0	(4.0)	口タロ	鉄 輪	—	—	—	—	関 西	18C後半		
48	陶 大 鉢	(13.0)	6.2	(12.6)	口タロ	—	—	—	—	豊前月夜 or	18～19C		
49	陶 土 器 鉢	15.0	6.8	7.2	口タロ	鉄 輪	—	—	—	関 西	18C後半		
50	陶 器 鉢	—	—	—	口タロ	—	—	—	—	肥 前	18C後半		
51	陶 器 鉢	—	—	—	口タロ	—	—	—	—	肥 前	18C後半～19C前半		
52	陶 器 鉢	—	—	(24.0)	口タロ	—	—	—	—	肥 前	18C後半		

第26表 SK 5 出土土器・陶磁器類観察表

(V b 期=19世紀前半～中頃)

群 団	器 種	法量 (cm)			成 形	装 飾			底面・内 底	製作地	製作年代	備 考	図録頁
		口徑	器高	底径		紋付・施 文	文 様	装飾特徴					
59-1	磁器碗 (9.0)	2.6	(5.2)	口タロ	透明	透明	外：四角・雲草 内：雲	—	—	肥 前	1780～1820年代		78
2	磁器碗 (10.0)	—	—	口タロ	透明	透明	外：松竹梅門形	—	—	肥 前	1830～1860年代		
3	磁器碗 (6.8)	5.2	(3.4)	口タロ	透明	透明	外：雲	—	—	肥 前	1820～1860年代		
4	磁 器 鉢	3.6	—	—	口タロ	透明	外：不明	—	—	肥 前	18C後半		
5	磁 器 鉢	(8.8)	4.5	4.0	口タロ	青 磁	—	—	—	肥 前	18C後半		
6	陶 器 鉢	—	—	—	口タロ	—	—	—	—	肥 前	18C後半		

第27表 SK 7 出土土器・陶磁器類観察表

(V b 期=19世紀前半～中頃)

群 団	器 種	法量 (cm)			成 形	装 飾			底面・内 底	製作地	製作年代	備 考	図録頁
		口徑	器高	底径		紋付・施 文	文 様	装飾特徴					
60-1	磁器鉢	—	—	(5.7)	口タロ	透 明	—	—	山屋作(刻印)	肥 前	17C後半	京焼風陶器碗	79

採 取 地	器 種	法 量 (cm)			成 形	装 飾			底面・内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	図 録 頁
		口径	器高	底径		絵柄・文様	装飾特徴						
60-2	磁器碗	(6.6)	—	—	口タ口	透 明	外：笹	—	—	肥 前	1820～1860年代		79
3	磁 器 碗	(7.3)	(16.0)	(5.6)	口タ口	染 透	外：笹竹	—	—	肥 前	18C後半		
4	磁 器 皿	5.4	2.4	4.4	口タ口	染 透	外：横縞	—	—	肥 前	18C後半— 19C前半		
5	磁器蓋	8.7	2.1	3.3	口タ口	染 透	外：花唐草 内：四方博 見込：松竹梅内面	—	—	肥 前	1820～1860年代	焼継・焼継記号	
6	磁器鉢	11.7	5.3	6.3	型 打	染 透	内：見込・花卉 外：花唐草	—	落 款	肥 前	1820～1860年代	焼継・焼継文字	
7	磁器鉢	—	—	—	型 打	染 透	内・外：連続唐草	—	—	肥 前	1820～1860年代	焼継	
8	陶 行 器	—	—	—	型 打	鉄 箱	把手：菊?	—	—	関 西	18C後半		
9	陶 行 器	—	—	—	型 打	鉄 箱	把手：菊	—	—	関 西	18C後半		
10	陶器蓋	(9.6)	1.9	(4.0)	口タ口	透 明	—	—	赤切り(右)	関 西	18C後半		
11	陶器蓋	6.8	2.3	2.4	口タ口	透 明	外：蔓草	—	—	関 西	18C後半	墨書あり	
12	陶 行 火 具	—	—	—	口タ口	鉄 箱	—	—	赤切り(右)	九 州	19C前半		
13	土 器 鉢	—	—	—	板作り	—	—	—	—	不 明			
41-14	陶 器 鉢	4.3	25.8	8.8	口タ口	鉄 箱	—	—	黒(通号)	備前丹波 or 備前丹波	18～19C		80
15	土 器 鉢	12.2	10.4	11.0	口タ口	—	—	—	—	不 明			
16	土 器 鉢	—	—	—	板作り	—	—	—	—	在 地?	19C前半		
17	陶 器 鉢	(15.4)	5.5	5.3	口タ口	—	—	—	赤切り(右)	肥 前	18C		
18	陶 器 鉢	—	—	—	口タ口	—	—	—	—	肥 前	18C		
19	陶 器 鉢	—	—	—	口タ口	—	—	—	—	堺	18C後半～19C		

第28表 SK10出土土器・陶磁器類観察表

(V b 期=19世前半～中頃)

採 取 地	器 種	法 量 (cm)			成 形	装 飾			底面・内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	図 録 頁
		口徑	器高	底径		絵柄・文 様	装飾特徴						
62-1	磁器碗	9.3	5.0	3.9	口タ口	外透 付明	外：二重黒目	—	—	肥 前	18C後半		82
2	磁器碗	7.2	5.6	3.6	口タ口	外透 付明	外：格子	—	—	肥 前	1820～1860年代		
3	磁器皿	—	—	8.8	口タ口	外透 付明	内：格子に松竹	—	筒 江	肥 前	18C後半	蛇ノ目四形高台	
4	磁器碗	8.8	4.6	2.8	口タ口	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
5	陶 器 鉢 (8.8)	7.8	8.4	口タ口	透 明	—	—	—	赤切り (右)	関 西	18～19C		
6	陶器蓋	—	—	—	口タ口	鉄 箱	—	—	—	肥 前	18C後半～19C		
7	陶 器 鉢	—	—	—	口タ口	—	—	—	—	肥 前	18C後半		
8	陶 器 鉢	—	—	—	口タ口	—	—	—	—	肥 前	18C後半		
9	陶 行 火 具 灯火具	3.9	10.0	4.6	口タ口	鉄 箱	—	—	赤切り (右)	九 州	19C前半		
10	陶器蓋	—	—	12.0	口タ口	鉄 箱	—	—	—	備前?	18～19C		

第29表 SK16出土土器・陶磁器類観察表

(V b 期=19世紀前半~中頃)

坪 図	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			表面・内面	製作地	製作年代	備 考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・彫刻	文 様	装飾特徴					
63-1	磁器碗	7.5	5.0	3.5	口タロ	絵付・彫刻	外：横線、植物	—	—	肥 前	1820~1860年代		83

第30表 SK22出土土器・陶磁器類観察表

(V b 期=19世紀前半~中頃)

坪 図	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			表面・内面	製作地	製作年代	備 考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・彫刻	文 様	装飾特徴					
63-2	磁器碗	—	—	—	口タロ	絵付・彫刻	外：不明 内：雲文	—	—	肥 前	1820~1860年代	端板破	83
3	磁器皿	—	—	—	口タロ	絵付・彫刻	外：花唐草	—	—	肥 前	18C後半		

第31表 SK39出土土器・陶磁器類観察表

(V b 期=19世紀前半~中頃)

坪 図	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			表面・内面	製作地	製作年代	備 考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・彫刻	文 様	装飾特徴					
64-1	磁器皿	(6.4)	1.7	(3.0)	口タロ	絵付・彫刻	外：雲	—	—	肥 前	18C後半		83
2	磁器皿	(6.6)	1.7	(10.6)	口タロ	絵付・彫刻	内：雲、泡唐草 外：蓮花唐草	—	—	肥 前	18C後半		

第32表 SK44出土土器・陶磁器類観察表

(V b 期=19世紀前半~中頃)

坪 図	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			表面・内面	製作地	製作年代	備 考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・彫刻	文 様	装飾特徴					
65-1	磁器碗	11.7	6.0	5.6	口タロ	絵付・彫刻	外：植物 見込：雲	—	—	肥 前	1780~1820年代	広東碗	84
2	磁器碗	(12.2)	6.3	(5.2)	口タロ	絵付・彫刻	外：泡唐草 内：松竹梅内型 見込：松竹梅内型	—	大 明 製	肥 前	18C後半		
3	陶器碗	8.8	5.3	3.4	口タロ	絵付・彫刻	外：小杉	—	—	肥 前	18C後半		
4	磁器碗	9.8	4.9	3.8	口タロ	絵付・彫刻	外：梅樹・雪輪	—	大 明 製	肥 前	18C後半	くらわんか手	
5	磁器碗	(6.3)	3.4	(3.2)	口タロ	絵付・彫刻	外：竹筴	—	—	肥 前	18C後半		
6	磁器碗	7.6	3.2	2.8	口タロ	絵付・彫刻	外：花卉	コンニャク 印	—	肥 前	18C前半~中頃		
7	磁器碗	7.4	6.5	4.3	口タロ	絵付・彫刻	外：菊花散らし	—	—	肥 前	18C		
8	陶器碗	7.3	5.2	3.4	口タロ	絵付・彫刻	外：横線	—	—	肥 前	18C		
9	陶器碗	(7.4)	5.4	(4.4)	口タロ	絵付・彫刻	外：横線	—	—	肥 前	18C		
10	磁器碗	7.5	5.8	4.2	口タロ	絵付・彫刻	外：梅子地に菊花 見込：五弁花	—	—	肥 前	18C後半		
11	磁器碗	8.0	5.7	4.2	口タロ	絵付・彫刻	外：梅子地に菊花 見込：五弁花	—	—	肥 前	18C後半		
12	磁器碗	7.3	5.5	4.0	口タロ	絵付・彫刻	外：梅子地に丸・ 交文線 見込：五弁花	—	—	肥 前	18C後半		
13	磁器碗	7.1	5.5	3.8	口タロ	絵付・彫刻	外：梅子地に丸・ 交文線 見込：五弁花	—	—	肥 前	18C後半		
14	磁器皿	(19.0)	3.5	(10.2)	口タロ	絵付・彫刻	内：菊花散らし 見込：五弁花 外：蓮花唐草	—	—	肥 前	18C後半	見込五弁花ノ目 輪割き	
15	陶器皿	(12.4)	3.8	(4.4)	口タロ	絵付・彫刻	内：斜交線	—	—	肥 前	18C後半	見込五弁花ノ目 輪割き	

種 別	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	調査員
		口径	器高	底径		胎文・ 胎 文	文 様	装飾特徴					
66-16	陶器蓋	(9.8)	2.0	(5.8)	口ク口	胎文・ 胎 文	外：不明 内：斜格子・ 幾何学	—	—	肥 前	18C後半～ 19C前半		85
17	磁器鉢	(15.7)	—	(9.0)	口ク口	胎文・ 胎 文	外：不明	—	—	肥 前	18C後半	焼継	
18	磁器鉢	—	—	8.4	型 打	胎文・ 胎 文	内：竹葉・ 見込：幾 何学・不明	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃	焼継・焼継文字	
19	磁器蓋	(9.4)	—	—	口ク口	胎文・ 胎 文	外：人物・植物 見込：幾何 学・不明	—	—	肥 前	18C後半		
20	磁 器 鉢	15.2	5.5	11.6	口ク口	胎文・ 胎 文	外：幾何学	—	—	肥 前	18C後半～ 19C前半		
21	陶器蓋	(16.2)	—	—	口ク口	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
22	陶器蓋	(5.6)	1.7	2.8	口ク口	胎文・ 胎 文	内：抽象？	—	—	関 西	18C		
23	磁 器 鉢	5.4	1.6	3.2	型 打	白 磁	—	—	—	肥 前	18C後半		
24	磁 器 鉢	4.6	1.6	1.4	型 打	白 磁	—	—	—	肥 前	17C後半～ 18C前半		
25	土 器 鉢	8.5	1.8	5.4	口ク口	—	—	—	永切リ (石)	在 地			
26	陶 器 鉢	—	—	7.0	口ク口	透 明	—	—	—	肥 前	18～19C		
27	陶 器 鉢	4.4	—	5.9	口ク口	透 明	—	—	—	肥 前	18～19C		
28	土 器 鉢	—	—	(25.0)	口ク口	—	—	—	—	在 地			
67-29	陶 器 鉢	—	—	—	口ク口	—	—	—	—	肥 前	18C後半		86
30	陶 器 鉢	—	—	—	口ク口	—	—	—	—	肥 前	18C後半		
31	陶 器 鉢	38.4	11.2	38.0	口ク口	—	—	—	—	在 地			

第33表 SK45出土土器・陶磁器類観察表

(V b 期=19世紀前半～中頃)

種 別	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	調査員
		口径	器高	底径		胎文・文 様	装飾特徴						
68-1	磁器碗	(9.2)	5.1	(5.0)	口ク口	胎文・文 様 外：七宝文・見込：太極図	—	落 款	肥 前	1780～1820年代	広東陶		87
2	磁器碗	(7.2)	—	—	口ク口	胎文・文 様 外：種子地に丸・交差線	—	—	肥 前	18C後半			
3	磁器碗	(9.0)	—	—	口ク口	胎文・文 様 外：不明	—	—	肥 前	1820～1860年代			
4	磁 器 鉢	(8.0)	4.0	(3.2)	口ク口	胎文・文 様 外：草花	—	—	肥 前	18C後半			
5	磁器碗	(13.2)	—	—	口ク口	胎文・文 様 外：竜(あるいは動物)ほか	—	—	肥 前	1780～1820年代	広東陶		
6	陶 器 鉢	(5.4)	3.0	2.3	口ク口	透 明	—	肥 前 関 西	18C				
7	磁器碗	—	—	—	口ク口	胎文・文 様 内：雲 外：幾何学	團陣文	—	肥 前	1820～1860年代	焼反碗		
8	磁器鉢	(14.0)	4.2	6.0	口ク口	胎文・文 様 内：麻葉	—	—	中 国	16C末～17C前半	内底部露出・放射状のカナナ割り瓦		
9	磁器蓋	(9.5)	2.6	(5.0)	口ク口	胎文・文 様 外：草花 見込：不明	—	落款?	肥 前	1780～1820年代			
10	磁 器 鉢	1.6	7.1	(3.0)	口ク口	胎文・文 様 外：竹葉	—	—	肥 前	18C後半～19C前半			
11	磁 器 鉢	5.2	—	—	口ク口	胎文・文 様 外：蓮弁	—	—	肥 前	18C後半～19C前半			

第34表 SK33出土土器・陶磁器類観察表

(V b 期=19世紀前半~中頃)

序 号	器 種	法 則 (cm)			成 形	装 飾			底 面・内 底	製作地	製作年代	備 考	図 録 頁
		口径	器高	底径		胎 体	文 様	装飾特徴					
69-1	磁器碗	9.4	4.5	4.0	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 見込：記号	—	—	瀬 戸 焼	1820~1860年代	端反碗	89
2	磁器碗	9.7	4.8	3.8	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 見込：記号	—	—	瀬 戸 焼	1820~1860年代	端反碗	
3	磁器碗	8.9	4.6	3.6	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 見込：花	—	—	瀬 戸 焼	1820~1860年代	端反碗	
4	磁器碗	9.0	4.7	3.9	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 見込：花	—	—	瀬 戸 焼	1820~1860年代	端反碗	
5	磁器碗	9.2	4.9	3.8	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 見込：花	—	—	瀬 戸 焼	1820~1860年代	端反碗	
6	磁器碗	9.0	4.9	3.8	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 見込：花	—	—	瀬 戸 焼	1820~1860年代	端反碗	
7	磁器碗	(9.2)	4.8	4.0	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 見込：花	—	—	瀬 戸 焼	1820~1860年代	端反碗	
8	磁器碗	9.2	5.0	3.3	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 見込：花	—	—	瀬 戸 焼	1820~1860年代	端反碗	
9	磁器碗	9.0	4.7	3.8	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 見込：花	—	—	瀬 戸 焼	1820~1860年代	端反碗	
70-10	磁器碗	8.8	4.8	3.4	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 見込：花?	—	—	瀬 戸 焼	1820~1860年代	端反碗	90
11	磁器碗	9.4	5.0	3.8	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 見込：花?	—	—	肥 前	1820~1860年代	端反碗	
12	磁器碗	9.3	4.8	3.7	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 見込：花	—	—	瀬 戸 焼	1820~1860年代	端反碗	
13	磁器碗	9.0	5.2	3.5	口ク口	胎 体 施 透	外：山形風散 内：花散	—	落 款	肥 前	1820~1860年代	端反碗 焼印・焼印文字	
14	磁器碗	9.0	4.9	3.5	口ク口	胎 体 施 透	外：山形風散 内：花散	—	落 款	肥 前	1820~1860年代	端反碗	
15	磁器碗	11.0	5.8	4.2	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 見込：花	—	—	肥 前	1820~1860年代	端反碗	
16	磁器碗	(10.0)	5.0	3.9	口ク口	胎 体 施 透	外：しだれ柳ほか	—	—	瀬 戸 焼	1820~1860年代	端反碗	
17	磁器碗	(9.2)	—	—	口ク口	胎 体 施 透	外：丸	—	—	瀬 戸 焼	1820~1860年代	端反碗	
18	磁器碗	(9.6)	—	—	口ク口	胎 体 施 透	外：植物	—	—	肥 前	1820~1860年代	端反碗	
19	磁器碗	(9.6)	4.8	5.0	口ク口	胎 体 施 透	外：植物ほか 見込：花?	—	—	肥 前	1820~1860年代	端反碗	
20	磁器碗	(10.0)	5.0	(4.2)	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 見込：不明	—	—	瀬 戸 焼	1820~1860年代	端反碗	
21	磁器碗	(10.7)	—	—	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 内：花散	—	—	肥 前	1820~1860年代	端反碗	
22	磁器碗	8.0	3.8	3.2	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 見込：花	—	配 号	肥 前	1820~1860年代	端反碗	
23	磁器碗	8.8	4.6	3.8	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 見込：花	—	—	瀬 戸 焼	1820~1860年代	端反碗	
71-24	磁器蓋	(9.7)	2.8	4.0	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 内：花散	—	乾	肥 前	1820~1860年代		91
25	磁器蓋	(9.8)	2.8	3.8	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 内：花散	—	乾	肥 前	1820~1860年代		
26	磁器蓋	(9.6)	2.8	4.0	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 内：花散	—	—	肥 前	1820~1860年代		
27	磁器蓋	(9.6)	3.0	3.9	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 内：花散	—	乾	肥 前	1820~1860年代		
28	磁器蓋	(10.4)	2.8	(5.6)	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 内：花散	—	—	肥 前	1820~1860年代		
29	磁器蓋	8.5	2.7	4.0	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 内：花散	—	乾	肥 前	1820~1860年代	焼印・焼印文字	
30	磁器蓋	(10.6)	2.8	4.2	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 内：花散	—	—	肥 前	1820~1860年代	焼印・焼印文字	
31	磁器蓋	9.0	2.6	4.0	口ク口	胎 体 施 透	外：花散上「福」 内：花散	—	落 款	肥 前	1820~1860年代		

作 用	器 種	法 量 (cm)			成 形	装 飾			底面・ 内 底	製作地	製作年代	備 考	記 録 頁
		口徑	器 高	底径		紋 付・ 文 様	装飾特徴						
73 -32	磁器碗	(9.2)	2.0	3.5	口ク口	外：唐草 見込：松竹梅四神	—	落 款	肥 前	1820～1860年代			91
72 -33	磁器碗	8.4	2.4	3.9	口ク口	外：格子・花・丸 見込：花	—	落 款	肥 前	18C後半～ 19C中頃			92
34	磁器碗	9.5	5.0	3.6	口ク口	外：格子・花・丸 見込：花	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃	焼継・焼継文字		
35	磁器碗	10.6	2.8	10.5	口ク口	外：唐草 見込：花 内：唐	縁描き	落 款	肥 前	19C前半～中頃			
36	磁器碗	11.4	5.9	4.4	口ク口	外：唐草 見込：花 内：唐	縁描き	—	肥 前	19C前半～中頃			
37	磁器碗	—	—	(4.1)	口ク口	外：花唐草 内：四方様 見込：松竹梅四神	縁描き	乾	肥 前	1820～1860年代			
38	磁器碗	—	—	(4.0)	口ク口	外：格子 見込：花	—	落 款	肥 前	19C前半			
39	磁器碗	(10.6)	5.3	3.8	口ク口	外：花唐草 内：四方様	—	—	肥 前	18C後半			
40	磁器碗	(9.8)	4.8	(4.2)	口ク口	外：唐草 見込：松竹梅四神	—	—	肥 前	18C後半			
41	磁器碗	10.0	5.7	4.2	口ク口	外：唐草 内：四方様 見込：松竹梅四神	—	—	肥 前	19C前半	焼継・焼継文字		
42	磁器碗	(10.0)	—	—	口ク口	外：二重圓目	—	—	肥 前	18C後半			
43	磁器碗	(8.7)	5.5	(3.6)	口ク口	外：松?	—	—	不 明	18C末～ 19C前半			
73 -44	磁器碗	10.6	5.6	3.8	口ク口	外：唐草 見込：唐・松竹梅四神	縁描き	—	肥 前	19C前半			93
45	磁器碗	10.3	5.6	3.3	口ク口	外：花唐草 内：唐 見込：麒麟	縁描き	—	肥 前	19C前半	焼継・焼継文字		
46	磁器碗	(9.6)	—	—	口ク口	外：花唐草 内：唐	縁描き	—	肥 前	19C前半			
47	磁器碗	(7.6)	—	—	口ク口	外：唐草 内：四方様	—	—	肥 前	18C後半			
48	磁器碗	8.4	6.5	5.4	口ク口	外：花唐草 内：唐	縁描き	落 款	肥 前	19C前半	焼継・焼継文字		
49	磁器碗	8.0	7.0	4.8	口ク口	外：「A」字 内：唐	縁描き	落 款	肥 前	19C前半			
50	磁器碗	7.8	7.0	3.8	口ク口	外：花唐草 内：唐	縁描き	乾	肥 前	19C前半			
51	磁器碗	—	—	(3.9)	口ク口	外：見込み?不明	—	—	肥 前	18C後半	焼継・焼継文字		
52	磁器碗	—	—	3.6	口ク口	外：不明 見込：麒麟	—	—	肥 前	1820～1860年代	焼継・焼継文字		
53	磁器碗	(8.0)	—	—	口ク口	外：麒麟 内：四方様	—	—	肥 前	18C後半			
54	磁器碗	(10.3)	5.2	4.2	口ク口	外：風琴 内：四方様	—	—	肥 前	明治以降?			
55	磁器碗	(9.7)	5.3	3.6	口ク口	外：風琴 見込：「寿」	—	—	肥 前	18C末～ 19C前半			
56	磁器碗	9.3	5.1	3.5	口ク口	外：風琴 見込：「寿」唐し	—	—	肥 前	18C末～ 19C前半			
74 -57	磁器碗	9.8	5.1	3.5	口ク口	外：風琴 見込：「寿」	—	—	肥 前	18C末～ 19C前半			94
58	磁器碗	9.4	5.2	3.4	口ク口	外：風琴 見込：「寿」	—	—	肥 前	18C末～ 19C前半			
59	磁器碗	9.7	5.2	3.6	口ク口	外：風琴 見込：「寿」唐し	—	—	肥 前	18C末～ 19C前半			
60	磁器碗	10.0	5.2	3.6	口ク口	外：草花	—	—	肥 前	18C末～ 19C前半			
61	磁器碗	9.9	5.1	3.5	口ク口	外：草花	—	—	肥 前	18C末～ 19C前半			
62	磁器碗	(10.0)	5.1	3.4	口ク口	外：草花	—	—	肥 前	18C末～ 19C前半			

序号	器 種	法 量 (cm)			成 形	装 飾			底面・ 内 底	製作地	製作年代	備 考	通 覧 頁
		口径	器高	底径		絵付・ 文 様	装飾特徴						
74 —83	磁器碗	(9.4)	5.0	(3.6)	口タロ	染通 付明 外：草花	—	—	肥 前	18C末— 19C前半			91
64	磁器碗	7.0	5.1	3.8	口タロ	染通 付明 外：格子	—	—	肥 前	1820—1860年代			
65	磁器碗	7.0	5.3	3.4	口タロ	染通 付明 外：格子	—	—	肥 前	1820—1860年代			
66	磁器碗	7.2	5.6	3.5	口タロ	染通 付明 外：格子	—	—	肥 前	1820—1860年代			
67	磁器碗	7.0	5.3	3.4	口タロ	染通 付明 外：格子	—	—	肥 前	1820—1860年代			
68	磁器碗	7.0	5.2	3.2	口タロ	染通 付明 外：格子	—	—	肥 前	1820—1860年代			
69	磁器碗	7.3	5.1	3.4	口タロ	染通 付明 外：格子	—	—	肥 前	1820—1860年代			
70	磁器碗	(7.0)	5.0	3.3	口タロ	染通 付明 外：格子	—	—	肥 前	1820—1860年代			
71	磁器碗	(8.0)	4.2	2.8	口タロ	染通 付明 外：唐 瓦文・松竹梅門形	—	—	肥 前	18C後半— 19C前半	焼酎		
72	磁器碗	(8.0)	3.6	3.9	口タロ	染通 付明 外：格子	—	—	肥 前	18C後半— 19C前半	焼酎・焼酎文字		
73	磁器碗	(8.2)	4.1	3.9	口タロ	染通 付明 外：開闢寺様	—	—	肥 前	1690—1740年代			
74	陶器 鉢	5.5	2.7	3.2	口タロ	透 明	—	—	慶 長 伊 豆	19C			
75	磁器 鉢	7.2	2.9	2.6	口タロ	染通 付明 外：丹粉	—	—	肥 前	18C後半— 19C中頃			
76	磁器 鉢	7.5	3.3	3.0	口タロ	染通 付明 外：丹粉	—	—	肥 前	18C後半— 19C中頃			
77	磁器 鉢	(10.0)	4.5	(4.4)	口タロ	染通 付明 外：文字	—	—	肥 前 (長号)	18C後半— 19C中頃	「大坂新町お茶缸」		
78	磁器 鉢	(8.2)	3.2	(3.4)	口タロ	染通 付明 外：文字	—	—	肥 前 (長号)	18C後半— 19C中頃	「大坂新町お茶缸」		
79	磁器 鉢	(8.2)	3.4	(3.4)	口タロ	染通 付明 外：文字	—	—	肥 前 (長号)	18C後半— 19C中頃	「大坂新町お茶缸」		
75 —80	磁器 鉢	(6.2)	3.0	(2.3)	口タロ	白 磁	—	—	肥 前	18C後半— 19C中頃			95
81	磁器 鉢	(6.5)	2.9	(2.8)	口タロ	白 磁	—	—	肥 前	18C後半— 19C中頃			
82	磁器 鉢	6.0	2.0	2.8	口タロ	白 磁	—	—	肥 前	18C後半— 19C中頃			
83	磁器 鉢	8.0	3.4	3.0	口タロ	白 磁	—	—	肥 前	18C後半— 19C中頃			
84	磁器 鉢	(4.9)	1.5	1.3	型 打	白 磁	—	—	肥 前	18C後半— 19C中頃			
85	磁器 鉢	4.4	1.5	1.4	型 打	白 磁	—	—	肥 前	18C後半— 19C中頃			
86	磁器鉢	(3.8)	—	—	口タロ	白 磁	—	—	肥 前	18C後半— 19C中頃	紅面蓋		
87	磁器鉢	9.0	1.6	3.3	型 打	白 磁	—	—	肥 前	17C			
88	磁器鉢	(10.0)	2.0	(5.8)	口タロ	染通 付明 内：唐 外：折れ松葉	—	—	肥 前	18C前半—中頃			
89	磁器鉢	(14.2)	2.2	(5.8)	口タロ	染通 付明 内：牡丹ほか	—	—	肥 前	1660—1680年代			
90	磁器鉢	(15.6)	2.6	(9.2)	口タロ	白 磁	—	—	中 国	16C末— 17C前半			
91	磁器鉢	14.2	2.3	8.9	口タロ	染通 付明 内：紫斑	—	—	角 福 肥 前	1660—1680年代			
92	磁器鉢	(17.2)	2.9	10.0	口タロ	染通 付明 内：横山山水・雪 外：虎頭山	—	—	肥 前	19C前半—中頃			
76 —93	磁器鉢	14.8	4.5	10.0	口タロ	染通 付明 内：横山山水	口 鉢	—	肥 前	18C後半	絵ノ具四角共台 焼酎・焼酎文字		96

序号	器 種	法量 (cm)			成 形	装 飾			底面・ 内 成	製作地	製 作 年 代	備 考	出 所
		口径	器高	底径		材料・ 装 飾	文 様	装飾特徴					
78 —94	磁器皿	14.0	4.3	8.6	型 打	施透 付明	内：花・竹・ 草；外：蓮 花；外：蓮	—	—	肥 前	18C後半	蛇ノ目彫高台 模範・模範文字	96
95	磁器皿	14.4	4.0	9.4	口ク口	施透 付明	内：牡丹 外：蓮花	—	—	肥 前	18C後半	蛇ノ目彫高台	
96	磁器皿	14.6	3.8	9.7	口ク口	施透 付明	内：牡丹 外：蓮花	—	—	肥 前	18C後半	蛇ノ目彫高台	
77 —97	磁器皿	(8.4)	2.4	4.8	口ク口	施透 付明	内：草花はか 外：花	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		97
98	磁器皿	8.7	2.5	5.2	口ク口	施透 付明	内：草花はか 外：花	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
99	磁器皿	8.7	2.6	4.7	型 打	施透 付明	内：花弁	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
100	磁器皿	8.8	2.5	5.2	口ク口	施透 付明	外：武田赤 内：格子 底点：松竹梅四形	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
101	磁器皿	8.6	2.4	5.1	口ク口	施透 付明	外：武田赤 内：格子 底点：松竹梅四形	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
102	磁器皿	(6.8)	1.2	(4.0)	口ク口	施透 付明	内：草花	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
103	磁器皿	(10.2)	3.5	(9.7)	口ク口	施透 付明	内：草花	—	—	肥 前	18C後半	見込丸彫ノ目 模範	
104	磁器皿	10.0	2.5	5.8	口ク口	施透 付明	内：山水家景	口 飾	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
105	磁器皿	10.3	2.4	5.8	口ク口	施透 付明	内：山水家景	口 飾	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
106	磁器皿	—	—	8.2	口ク口	施透 付明	内：松樹	—	関 江	肥 前	18C後半		
107	磁器皿	(8.7)	—	—	口ク口	施透 付明	内：山水	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃	蛇ノ目彫高台 模範・模範文字	
108	磁器皿	—	—	—	型 打	青 磁	内：花	—	—	三 田	19C前半	三田青磁	
78 —109	磁 器 鉢	6.0	2.9	2.5	口ク口	施透 付明	内：竜	—	—	関 西	19C前半～中頃		98
110	磁 器 鉢	(6.2)	2.9	(2.6)	口ク口	施透 付明	内：山水風景	—	—	関 西	19C前半～中頃		
111	磁 器 鉢	(5.8)	2.6	2.5	口ク口	施透 付明	内：帆船	—	—	関 西	19C前半～中頃		
112	磁 器 鉢	5.8	2.7	2.4	口ク口	施透 付明	内：朝顔	—	—	関 西	19C前半～中頃		
113	磁 器 鉢	5.6	2.8	2.5	口ク口	施透 付明	内：草花	—	—	関 西	19C前半～中頃		
114	磁 器 鉢	(6.2)	3.0	2.6	口ク口	施透 付明	内：梅樹ほか	—	—	関 西	19C前半～中頃		
115	磁 器 鉢	6.2	2.8	2.5	口ク口	施透 付明	内：牡丹	—	—	関 西	19C前半～中頃		
116	磁 器 鉢	(5.8)	2.6	2.3	口ク口	施透 付明	内：風景	—	—	関 西	19C前半～中頃		
117	磁 器 鉢	(5.8)	3.4	2.9	口ク口	施透 付明	内：鶏	—	京 敦	関 西	19C前半～中頃		
118	磁 器 鉢	—	—	2.6	口ク口	施透 付明	内：美人面	—	—	関 西	19C前半～中頃	模範文字	
119	磁 器 鉢	5.8	2.4	2.4	口ク口	白 磁	—	—	—	関 西	19C前半～中頃		
120	磁 器 鉢	5.2	2.8	3.4	口ク口	白 磁	—	—	—	肥 前	1690～1760年代		
121	磁 器 鉢	6.4	3.2	2.6	口ク口	施透 付明	外：草花	—	—	肥 前	18C		
122	磁 器 鉢	(6.6)	—	—	口ク口	施透 付明	外：花	—	—	肥 前	18C		
123	磁 器 鉢	(5.8)	—	—	口ク口	施透 付明	外：花	—	—	肥 前	18C		
124	磁 器 鉢	(7.6)	4.7	(3.4)	口ク口	施透 付明	外：花	—	—	肥 前	18C		

種 別	器 種	法 量 (cm)			成 形	装 飾		底 面・内 底	製 作 地	製 作 年 代	備 考	目 録 頁
		口 径	器 高	底 径		給 付・通 文	装 飾 特 徴					
78-125	根 器鉢	(6.6)	—	—	口ク口	給付・通文 外：板花散らし	—	—	関 西	19C前半～中頃		98
126	磁器鉢	—	—	—	口ク口	染通 内・外：不明	—	—	肥 前	18C末～ 19C前半		
127	磁器鉢	(21.5)	7.6	(11.3)	口ク口	染通 内：唐草 外：唐草	—	—	肥 前	19C後半～中頃	焼通	
128	磁器鉢	5.4	—	—	口ク口	染通 外：文字	—	—	肥 前	19C後半	「肥後・鹿児島・ 入 島門」	
129	磁器鉢	—	—	—	口ク口	染通 外：雷	—	—	肥 前 (三河内)	19C		
130	磁器鉢	—	—	—	型 打	染通 外：布袋	—	—	肥 前	19C前半～中頃		
79-131	磁器鉢	3.4	21.2	(7.0)	口ク口	透 明	—	—	肥 前	18C後半		101
132	磁器鉢	3.2	—	—	口ク口	透 明	—	—	關西?	19C前半～中頃		
133	磁器鉢	(5.0)	29.2	9.1	口ク口	染通 外：岩竹	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
134	磁器鉢	4.4	—	9.0	口ク口	染通 外：岩竹	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
80-135	磁器鉢	7.0	13.3	4.6	口ク口	染通 外：草花・ 「海」	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		102
136	陶器鉢	8.1	18.2	9.2	口ク口	鉄 軸	外：雲	—	九 州	19C前半～ 19C中頃		
137	磁器鉢	1.6	—	—	口ク口	染通 外：松竹梅	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
138	磁器鉢	1.8	9.0	3.6	口ク口	染通 外：松竹梅	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
139	磁器鉢	1.8	8.3	3.1	口ク口	染通 外：松竹梅	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
140	磁器鉢	1.8	—	4.1	口ク口	ルリ軸	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
141	磁器鉢	8.0	6.5	4.8	口ク口	染通 外：菱草	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
142	磁器鉢	—	—	3.8	口ク口	染通 外：斜格子	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
143	磁器鉢	—	—	4.2	口ク口	染通 外：斜格子	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
144	磁器鉢	7.0	6.6	4.2	口ク口	染通 外：草花	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
145	磁器鉢	6.5	6.1	3.6	口ク口	染通 外：露南状	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
146	磁器鉢	6.6	6.3	3.6	口ク口	染通 外：露南状	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
147	磁器鉢	9.6	—	—	口ク口	染通 外：花唐草	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
148	磁器鉢	11.4	—	—	口ク口	染通 外：鶴	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
149	磁器鉢	7.2	3.1	4.2	口ク口	染通 外：唐草	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
150	磁器鉢	7.7	4.5	7.5	口ク口	染通 外：花唐草 「一葉草」	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
151	磁器鉢	5.3	3.3	5.3	口ク口	染通 外：横縞	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
152	磁器鉢	10.5	9.3	10.4	口ク口	染通 外：横縞	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
153	磁器鉢	5.6	1.9	—	口ク口	染通 外：斜格子・縞	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
81-154	磁器鉢	(9.2)	3.1	(4.0)	口ク口	白 磁	—	—	肥 前	1690～1740年代		103
155	磁器鉢	7.8	5.1	3.0	口ク口	染通 外：四方唐草	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		

種別	器種	法量(cm)			成形	装飾			底面・内底	製作地	製作年代	備考	図録頁
		口径	器高	底径		絵付・文様	文様	装飾特徴					
81-156	磁器 花瓶	(8.0)	5.3	3.0	ロクロ	白磁	—	—	—	鹿 前	18C後半—19C中頃	見込みに墨書	103
157	陶器 花瓶	8.5	4.8	4.0	ロクロ	透明	—	—	—	関 西	18C後半—19C中頃	胴部外面下半部に所書	
158	陶器 花瓶	(10.0)	7.4	5.2	ロクロ	白磁	—	—	—	肥 前	19C初頃—前半		
159	陶器 花瓶	(10.4)	—	—	ロクロ	白磁 泥繪	外：横毛目	—	—	肥 前	17C後半—18C		
160	磁器 花瓶	—	—	—	ロクロ	金襴 竹柄	外：詩歌	—	—	中 国	18C	彫磨ぎ技法	
161	陶器 瓶	(8.7)	4.9	2.8	ロクロ	透明	—	—	—	関 西	18C後半		
162	陶器 瓶	8.5	4.6	3.0	ロクロ	透明	—	—	—	関 西	18C後半		
163	陶器 瓶	(8.8)	4.5	3.0	ロクロ	透明	—	—	—	関 西	18C後半		
164	陶器 瓶	(8.2)	4.4	2.4	ロクロ	透明	—	—	—	関 西	18C後半		
165	陶器 瓶	8.8	4.7	3.0	ロクロ	透明	—	—	—	関 西	18C後半		
166	陶器 瓶	6.8	5.7	3.7	ロクロ	透明	外：文字?	イヤチンけ	—	不 明	19C		
167	陶器 瓶	(6.0)	5.6	3.6	ロクロ	透明	外：竹林?	イヤチンけ	—	不 明	19C		
168	陶器 瓶	(6.3)	4.9	3.2	ロクロ	透明	外：鳥	イヤチンけ	—	不 明	19C		
169	陶器 瓶	7.5	5.1	3.6	ロクロ	白磁 泥繪	—	ビ掛 つけ	—	山 口 県	19C初頃—中頃		
170	陶器 灯火具	(8.8)	2.2	(3.2)	ロクロ	透明	—	—	—	関 西	19C		
171	陶器 灯火具	(9.6)	2.0	(4.0)	ロクロ	透明	—	—	—	関 西	19C		
172	陶器 灯火具	(9.0)	2.0	(4.0)	ロクロ	透明	—	—	—	関 西	19C		
173	陶器 灯火具	(8.6)	1.9	2.6	ロクロ	透明	内：草 草 (ハク抜き)	—	—	関 西	19C		
174	陶器 瓶	9.2	1.8	5.5	ロクロ	白磁 泥繪	—	—	—	関 西	19C		
175	陶器 瓶	9.0	2.1	5.1	ロクロ	白磁 泥繪	—	—	—	関 西	19C		
176	陶器 瓶	—	—	4.4	ロクロ	青緑釉	—	—	—	肥 前 (内野山)	17C後半—18C前半	見込地に「清」の刻印	
82-177	陶器 鉢	(24.0)	6.4	(9.1)	ロクロ	絵 青緑釉	内：撫磨	—	—	肥 前	19C前半—中頃		104
178	陶器 鉢	—	6.4	—	ロクロ	—	—	—	—	関 西	18C後半		
179	陶器 鉢	5.4	—	2.0	ロクロ	—	—	—	—	関 西	18C後半		
180	陶器 鉢	6.7	—	—	ロクロ	—	—	—	—	関 西	18C後半		
181	陶器 鉢	8.4	—	8.0	ロクロ	—	—	—	—	関 西	18C後半		
182	陶器 鉢	(7.6)	10.2	10.3	ロクロ	—	—	—	—	関 西	18C後半		
183	陶器 鉢	(7.0)	9.3	(7.0)	ロクロ	—	—	—	—	関 西	18C後半		
184	陶器 鉢	6.1	2.0	—	ロクロ	—	—	—	—	関 西	18C後半		
185	陶器 鉢	7.6	8.6	7.8	ロクロ	—	—	—	—	関 西	18C後半	把手部に「清」の刻印	
83-186	陶器 鉢	5.4	—	—	ロクロ	透明	外：墨びガンナ・蓋	イヤチンけ	—	関 西	18C後半		105

洋 国	器 種	法 量 (cm)			成 形	装 飾			底 面・ 内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	出 発 月
		口 径	口 高	底 径		絵 付・ 施 装	文 様	装 飾 特 徴					
83 —187	陶 器 急 須	6.6	9.2	6.0	ロクロ	透 明	外：飛びカンナ	—	—	関 西	18C後半		105
188	陶 器 急 須	6.3	9.5	5.6	ロクロ	透 明	外：花卉	イヤチン 掛	—	関 西	18C後半		
189	陶 器 急 須	—	—	(8.5)	ロクロ	—	—	—	墨 書	関 西	18C後半		
190	陶 土 急 須	8.8	—	—	ロクロ	透 明	外：花・葉	イヤチン 掛	—	関 西	18C後半		
191	陶 土 急 須	7.8	10.0	7.4	ロクロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
192	陶 土 急 須	7.5	—	—	ロクロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
193	陶器 急 須	7.5	3.4	—	ロクロ	透 明	外：鳥居し	イヤチン 掛	—	関 西	18C後半		
194	陶 土 急 須	9.6	11.4	7.9	ロクロ	透 明	外：鳥居し	イヤチン 掛	—	関 西	18C後半		
84 —195	陶器 急 須	6.2	3.0	—	ロクロ	透 明	外：抽象	イヤチン 掛	—	関 西	18C後半		106
196	陶器 急 須	(6.6)	3.2	—	ロクロ	透 明	外：渦状	イヤチン 掛	—	関 西	18C後半		
197	陶 土 急 須	(6.3)	—	6.5	ロクロ	透 明	外：草花	—	墨 書	関 西	18C後半		
198	磁器 急 須	2.0	2.0	1.2	ロクロ	透 明	—	—	—	肥 前 (三川内)	19C		
199	土器 急 須	3.3	1.3	2.0	ロクロ	—	—	—	—	不 明			
200	陶器 急 須	5.0	2.1	1.6	ロクロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
201	陶器 急 須	5.0	2.6	1.9	ロクロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
85 —202	陶器 急 須	5.6	1.9	—	ロクロ	透 明	外：蔓草	—	—	関 西	18C後半		107
203	陶器 急 須	5.8	2.8	—	ロクロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
204	陶器 急 須	(6.0)	—	—	ロクロ	青 絵	—	—	—	関 西	18C後半		
205	陶器 急 須	6.2	3.9	—	ロクロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
206	陶器 急 須	6.8	3.6	—	ロクロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
207	陶器 急 須	7.9	—	—	ロクロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
208	陶器 急 須	5.9	1.8	5.0	ロクロ	鉄 軸	—	—	—	九 州	18C後半		
209	陶器 急 須	6.0	1.9	6.0	ロクロ	鉄 軸	—	—	—	九 州	18C後半		
210	陶器 急 須	5.7	2.1	4.7	ロクロ	鉄 軸	—	—	—	九 州	18C後半		
211	陶器 急 須	6.4	2.2	5.0	ロクロ	鉄 軸	—	—	—	九 州	18C後半		
212	陶器 急 須	6.0	2.0	5.8	ロクロ	鉄 軸	—	—	—	九 州	18C後半		
213	陶 土 急 須	8.5	11.3	8.0	ロクロ	鉄 軸	外：葉	—	—	九 州	18C後半		
214	陶 土 急 須	9.8	11.1	7.5	ロクロ	鉄 軸	—	—	—	九 州	18C後半		
215	陶 土 急 須	10.0	11.6	8.8	ロクロ	鉄 軸	外：葉	—	—	九 州	18C後半		
216	陶 土 急 須	10.4	12.6	9.7	ロクロ	鉄 軸	外：葉	—	—	九 州	18C後半		
86 —217	陶器 急 須	8.0	2.7	—	ロクロ	色 遣 絵 付	外：風景	—	—	肥 前 (三川内)	1691~1749年		108

坪 国	器 種	法 量 (cm)			成 形	装 飾			底面・ 内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	出 典
		口径	器高	底径		絵付・ 文 様	文 様	裝飾特徴					
96 —218	陶 器 — 壺	—	—	5.7	ロクロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		109
219	陶 器 — 壺	—	—	(6.2)	ロクロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
220	陶器蓋	4.8	—	—	ロクロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
221	陶 器 — 壺	(8.8)	5.1	(3.8)	ロクロ	透 明	外：飛びガンナ	—	—	関 西	18C後半		
222	陶 器 — 壺	11.0	5.2	4.8	ロクロ	透 明	外：飛びガンナ	—	—	関 西	18C後半		
223	陶 器 — 壺	—	—	—	ロクロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半	「天三」刻印	
224	陶 器 — 壺	10.0	2.4	—	ロクロ	透 明	外：飛びガンナ 蔓草	イチナン 拍	—	関 西	18C後半		
225	陶 器 — 壺	13.2	6.8	5.5	ロクロ	透 明	外：飛びガンナ	—	—	関 西	18C後半		
226	陶 器 — 壺	13.2	—	—	ロクロ	透 明	外：飛びガンナ	—	—	関 西	18C後半		
227	陶 器 — 壺	(16.4)	9.4	(6.2)	ロクロ	透 明	外：飛びガンナ	—	—	関 西	18C後半		
228	陶 器 — 壺	14.2	4.0	—	ロクロ	透 明	外：飛びガンナ 蔓草	イチナン 拍	—	関 西	18C後半		
229	陶 器 — 壺	14.5	7.8	6.0	ロクロ	透 明	外：飛びガンナ	—	—	関 西	18C後半		
87 —230	陶 器 — 壺	(16.8)	—	—	ロクロ	透 明	外：飛びガンナ	—	—	関 西	18C後半		110
231	陶 器 — 壺	(17.3)	—	—	ロクロ	透 明	外：飛びガンナ	—	—	関 西	18C後半		
232	陶 器 — 壺	(17.0)	—	—	ロクロ	透 明	外：飛びガンナ	—	—	関 西	18C後半		
233	陶 器 — 壺	17.0	9.9	(7.6)	ロクロ	透 明	外：飛びガンナ	—	—	関 西	18C後半		
234	陶 器 — 壺	18.0	7.0	8.7	ロクロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
235	陶器蓋	10.6	2.6	3.0	ロクロ	透 明	—	—	—	関 西	19C前半		
236	陶器鉢	10.5	4.5	4.4	ロクロ	鉄 軸	—	—	—	関 西	18C		
237	陶器鉢	12.0	4.8	5.8	ロクロ	鉄 軸	—	—	—	関 西	18C		
238	陶器鉢	12.2	4.5	5.3	ロクロ	鉄 軸	—	—	—	関 西	18C		
239	陶器鉢	(18.0)	8.8	(8.2)	ロクロ	青緑軸	—	—	—	肥 前	19C前半～中頃		
240	陶 器 — 鉢	(17.4)	—	—	ロクロ	鉄 軸	—	—	—	関 西	18C後半		
88 —241	陶 器 — 鉢	(30.6)	—	(19.5)	ロクロ	青緑軸	—	—	—	肥 前	18C後半		111
242	陶 器 — 鉢	29.4	18.7	19.6	ロクロ	透 明	—	—	—	肥 前	18C後半		
89 —243	陶 器 — 鉢	(16.4)	—	—	ロクロ	—	—	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		112
244	陶 器 — 鉢	(24.0)	—	—	ロクロ	—	—	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
245	陶 器 — 鉢	(30.5)	—	—	ロクロ	—	—	—	—	肥 前?	?	外面叩き	
246	陶 器 — 鉢	35.6	14.5	18.0	ロクロ	—	—	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		
90 —247	陶 器 — 鉢	13.6	15.8	33.8	ロクロ	—	—	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		113
248	陶 器 — 鉢	34.2	13.9	14.6	ロクロ	—	—	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃		

序 号	器 種	法量 (cm)			底 形	装 飾			底面・内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	出土層
		口径	器高	底径		紋付・地 文	文 様	装飾特徴					
91-249	瓦 火 竈	27.0	13.7	18.4	瓶作り	—	—	—	—	在 地			114
250	瓦 火 竈	29.0	9.3	19.0	口タロ	—	—	—	—	在 地			
92-251	陶 火 竈	11.2	9.0	10.0	口タロ	造 明	—	—	—	關 西	18C後半		115
252	陶 火 竈	(12.6)	6.5	12.5	口タロ	—	—	—	—	備前・丹波	or 18C		
253	陶 火 竈	—	—	—	口タロ	—	—	—	—	不 明	?	上への割印	
254	瓦 火 竈	(23.8)	—	—	型 打	—	外：風車・雪花	—	—	不 明			
93-255	瓦 火 竈	(22.6)	—	—	口タロ	—	—	—	—	在 地			116
256	瓦 火 竈	22.5	—	—	口タロ	—	—	—	—	在 地			
257	瓦 火 竈	(14.0)	12.0	11.6	口タロ	—	—	—	—	在 地			
258	土 火 竈	12.0	0.8	—	瓶作り	—	—	—	—	在 地			
259	瓦 火 竈	21.0	20.4	16.0	口タロ 瓶作り	—	—	—	—	在 地			
94-260	瓦 火 竈	21.5	20.9	16.0	口タロ 瓶作り	—	—	—	—	在 地			117
95-261	陶 器 蓋	(16.4)	—	—	口タロ	鉄 軸	—	—	—	肥前・九州	or 18C後半		118
262	陶 器 蓋	14.7	—	—	口タロ	鉄 軸	—	—	—	肥前・九州	or 18C後半		
263	陶 器 蓋	29.4	31.1	14.4	口タロ	鉄 軸	—	—	—	肥前・九州	or 18C後半		
96-264	瓦 火 竈	(22.5)	2.8	(21.5)	口タロ	—	—	—	—	在 地?	18C後半		120
265	土 師 蓋	—	—	—	口タロ	—	—	—	—	在 地?			
266	土 師 蓋	(22.6)	—	—	口タロ	—	—	—	—	在 地?			
267	土 師 皿	8.6	1.6	4.2	口タロ	柿 軸	—	—	—	遺跡状の腐(毛)	在 地?		
268	土 師 皿	9.0	2.0	4.4	口タロ	—	—	—	—	糸切り(糸)	在 地		
269	土 師 皿	(12.3)	2.5	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			
270	磁 器 碗	—	—	—	口タロ	外：草花	—	—	—	中 国	15C後半～ 16C前半		
96-271	磁 器 皿	—	—	—	口タロ	外：菊間ほか	—	—	—	中 国	15C後半～ 16C前半		
272	磁 器 碗	—	—	—	口タロ	白 磁	—	—	—	中 国	12～13C		

第35表 SK34出土土器・陶磁器類観察表

(V b 期=19世紀前半～中頃)

序 号	器 種	法量 (cm)			底 形	装 飾			底面・内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	出土層
		口径	器高	底径		紋付・地 文	文 様	装飾特徴					
97-1	磁 器 碗	10.2	5.6	4.2	口タロ	染 付	外：染付草花 見込：地文	—	—	肥 前	1820～1860年代	磁反碗	121
2	磁 器 碗	10.2	6.0	3.8	口タロ	染 付	外：染付草花 見込：地文	—	—	肥 前	1820～1860年代	磁反碗	
3	磁 器 碗	10.4	6.0	4.2	口タロ	染 付	外：染付草花 見込：地文	—	—	肥 前	1820～1860年代	磁反碗	
4	磁 器 碗	10.4	5.5	3.7	口タロ	染 付	外：染付草花 見込：地文	—	—	肥 前	1820～1860年代	磁反碗	

種 別	器 種	法量 (cm)			成 形	装 飾			底面・内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	
		口徑	器高	底徑		絵付・文様	文 様	装飾特徴					
97-5	磁器碗	9.8	6.6	3.3	口タロ	絵付・文様	外：竹葉・見込：菊散らし	—	—	肥 前	1820～1860年代	横反碗・焼継文字	121
	磁器碗	9.5	5.0	3.9	口タロ	絵付・文様	外：植物・見込：松竹梅内形	—	—	肥 前	1820～1860年代	横反碗・焼継文字	
	磁器碗	7.0	4.0	2.7	口タロ	絵付・文様	外：印判文	—	—	肥 前	1820～1860年代	横反碗	
	磁器碗	8.6	4.3	3.2	口タロ	絵付・文様	外：建字体・内：雲	口 縁	—	奥 戸 邊	1820～1860年代	横反碗	
	磁器碗	9.1	4.4	3.2	口タロ	絵付・文様	外：建字体・内：雲	—	—	奥 戸 邊	1820～1860年代	横反碗	
98-11	磁器碗	9.0	4.4	3.4	口タロ	絵付・文様	外：建字体・内：雲	—	—	奥 戸 邊	1820～1860年代	横反碗	122
	磁器碗	10.0	—	—	口タロ	絵付・文様	外：建字体・内：雲・松竹梅内形	—	—	肥 前	1820～1860年代	横反碗	
	磁器碗	(7.7)	4.4	3.4	口タロ	絵付・文様	内・外：板花散らし	口 縁	—	肥 前	1820～1860年代	横反碗・焼継文字	
	磁器碗	8.7	5.3	3.2	口タロ	絵付・文様	外：菊花・見込：雲	口 縁	—	肥 前	18C後半		
	磁器碗	(9.2)	5.0	(4.5)	口タロ	絵付・文様	外：鳳凰ほか	—	—	肥 前	18C後半～19C前半	焼継・焼継文字	
99-22	磁器碗	(8.4)	4.6	3.4	口タロ	絵付・文様	外：雲輪	—	—	奥 戸 邊	1820～1860年代		123
	磁器碗	11.8	5.8	4.0	口タロ	絵付・文様	外：草花	—	—	肥 前	1820～1860年代		
	磁器碗	6.6	5.3	3.6	口タロ	絵付・文様	外：雲	—	—	肥 前	1820～1860年代		
	磁器碗	7.5	—	—	口タロ	絵付・文様	外：松・竹・文・花散らし・内：雲・松竹梅	—	—	肥 前	18C後半		
	磁器碗	(9.3)	3.0	(4.0)	口タロ	絵付・文様	外：雲・松・竹・文・花散らし・内：雲・松竹梅	—	横 縁	肥 前	1820～1860年代		
100-31	磁器碗	(7.8)	2.2	(2.6)	口タロ	絵付・文様	外：植物・見込：松竹梅内形	—	—	肥 前	1820～1860年代		124
	磁器碗	(8.3)	2.7	3.1	口タロ	絵付・文様	外：花散らし・内：雲・松竹梅内形	—	落 款	肥 前	1820～1860年代		
	磁器碗	9.4	2.6	3.8	口タロ	絵付・文様	外：花散らし・内：雲・松竹梅内形	—	—	肥 前	1820～1860年代		
	磁器碗	9.1	2.6	3.8	口タロ	絵付・文様	外：雲・松・竹・文・花散らし・内：雲・松竹梅内形	—	—	肥 前	1820～1860年代		
	磁器碗	9.7	3.1	4.1	口タロ	絵付・文様	外：見込：草花	—	—	肥 前	1820～1860年代		
100-31	磁器碗	9.0	2.3	3.6	口タロ	絵付・文様	外：雲・松・竹・文・花散らし・内：雲・松竹梅内形	—	—	肥 前	18C後半～19C中頃		124
	磁器碗	9.0	2.3	(3.6)	口タロ	絵付・文様	外：雲・松・竹・文・花散らし・内：雲・松竹梅内形	—	—	肥 前	18C後半～19C中頃	焼 継	
	磁器碗	8.8	2.9	(3.6)	口タロ	絵付・文様	外：雲・松・竹・文・花散らし・内：雲・松竹梅内形	—	落 款	肥 前	1820～1860年代		
	磁器碗	10.4	—	—	口タロ	絵付・文様	外：竹葉・見込：雲	—	—	肥 前	1820～1860年代	横反碗	
	磁器碗	7.8	2.3	3.3	口タロ	絵付・文様	外：見込：丸	—	—	肥 前	1820～1860年代		
100-31	磁器碗	8.9	5.0	3.0	口タロ	絵付・文様	外：見込：丸	—	—	肥 前	1820～1860年代	横反碗	124
	磁器碗	9.0	2.4	3.4	口タロ	絵付・文様	外：牡丹・見込：雲	—	—	肥 前	18C後半～19C中頃		
	磁器碗	9.8	4.6	3.8	口タロ	絵付・文様	外：牡丹・見込：雲	—	—	肥 前	18C後半～19C中頃	焼 継・焼継文字	
	磁器碗	6.7	5.3	3.8	口タロ	絵付・文様	外：花散らし・内：雲・松竹梅内形	横 縁	—	肥 前	19C前半		
	磁器碗	(7.1)	5.4	(3.4)	口タロ	絵付・文様	外：花散らし・内：雲・松竹梅内形	横 縁	—	肥 前	19C前半		
100-31	磁器碗	6.2	—	—	口タロ	絵付・文様	外：草花・見込：雲	—	—	肥 前	19C前半		124
	磁器碗	6.2	—	—	口タロ	絵付・文様	外：草花・見込：雲	—	—	肥 前	19C前半		

種別	器種	法量(cm)			成形	装飾			底面・内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵柄・文様	装飾特徴						
100-36	磁器碗	(7.0)	—	—	口タ口	外：草花 内：雲	—	—	肥前	肥前	19C前半		124
37	磁器器	8.4	4.0	3.3	口タ口	外：牡丹	—	—	肥前	肥前	18C末— 19C前半		
38	磁器器	7.2	3.7	3.4	口タ口	外：横線	—	—	肥前	肥前	18C後半— 19C前半		
39	磁器器	4.8	1.4	1.6	型打	白磁	—	—	肥前	肥前	18C後半		
40	磁器器	6.0	2.5	2.2	口タ口	外：四方唐・五葉	—	—	肥前	肥前	18C後半— 19C前半		
41	磁器器	6.0	2.8	2.4	口タ口	白磁	—	—	肥前	肥前	19C前半—中頃		
42	磁器器	6.6	2.5	2.4	口タ口	内：文字	—	—	肥前	肥前	19C前半—中頃		
43	磁器器	(6.2)	2.7	2.4	口タ口	内：ほととぎす	—	—	肥前	肥前	19C前半—中頃		
44	磁器器	7.0	3.6	3.0	口タ口	外：松葉	—	—	肥前	肥前	18C末— 19C中頃		
45	磁器器	6.7	—	—	口タ口	外：松葉	—	—	肥前	肥前	18C末— 19C中頃		
46	磁器器	6.5	4.2	3.0	口タ口	外：詩歌	—	—	肥前	肥前	18C末— 19C中頃		
47	磁器器	6.6	4.2	3.2	口タ口	—	—	—	肥前	肥前	明治10年代 (1876)		
48	磁器器	(8.4)	5.0	(3.2)	口タ口	—	—	—	肥前	肥前	18C後半		
49	磁器器	(6.8)	3.4	2.7	口タ口	外：竹篾	—	—	肥前	肥前	18C末— 19C中頃		
50	磁器器	7.0	4.5	3.2	口タ口	外：竹林に賢人	—	—	肥前	肥前	18C末— 19C中頃		
51	磁器器	6.8	4.6	3.2	口タ口	外：草花	—	—	肥前	肥前	18C後半		
52	陶器器	6.4	3.3	3.7	口タ口	—	—	—	肥前	肥前	19C前半		
53	陶器器	6.0	3.2	2.8	口タ口	—	—	—	肥前	肥前	19C前半		
101-54	陶器碗	(14.0)	6.6	(3.8)	口タ口	灰胎	—	—	肥前	肥前	1600—1630年代	砂目積み	125
55	磁器器	5.2	2.5	3.6	口タ口	白磁	—	—	肥前	肥前	19C前半		
56	磁器器	4.8	1.9	5.3	口タ口	白磁	—	—	肥前	肥前	19C前半—中頃		
57	陶器器	11.6	3.0	5.0	口タ口	灰胎	—	—	肥前	肥前	1580—1610年代	胎土目積み	
58	陶器器	14.6	3.6	4.3	口タ口	灰胎	—	—	肥前	肥前	17C後半— 18C前半		
59	陶器器	12.0	4.0	3.2	口タ口	透明	—	—	肥前	肥前	19C前半—中頃		
60	磁器器	(14.4)	3.2	(4.8)	口タ口	—	—	—	肥前	肥前	18C末— 19C前半	焼肌	
61	磁器器	(14.0)	3.0	(6.8)	口タ口	外：源氏香 内：唐草	—	—	肥前	肥前	18C末— 19C前半		
62	磁器器	—	—	(6.4)	口タ口	外：竹篾 内：草花	—	—	肥前	肥前	18C末— 19C前半	焼肌・焼文字	
63	磁器器	40.4	2.0	7.1	口タ口	外：蓮葉唐草 内：蓮花？ほか	—	—	肥前	肥前	18C後半		
64	磁器器	—	—	(9.8)	口タ口	外：蓮葉唐草 内：松竹梅内形	—	—	肥前	肥前	18C末— 19C前半	蛇ノ目内形高台 焼肌・焼文字	
65	磁器器	(13.8)	4.0	(8.2)	口タ口	外：蓮葉唐草 内：松竹梅内形	—	—	肥前	肥前	18C末— 19C前半	蛇ノ目内形高台 焼肌	
66	磁器器	(10.5)	2.8	(6.0)	口タ口	外：竹篾 内：草花	—	—	肥前	肥前	18C末— 19C前半		

序 号	器 種	寸法(cm)			成 形	装 飾			底面・内 底	製作地	製作年代	備 考	所蔵
		口徑	器高	底徑		胎・土	文 様	装飾特徴					
101-67	磁器皿	(13.0)	2.4	(8.7)	口クロ	付明	内：車輪	網 紋 等	—	肥 前	明治20年代 (1888)以降		126
68	磁器皿	9.8	2.2	5.2	型 打	白 磁	内：海(刷印)	—	—	豊 前	1855~	寿文鳳	
102-69	磁器皿	(14.8)	4.6	8.6	口クロ	付明	外：産経草 内：花鳥	—	—	肥 前	19C前半	焼 継	128
70	磁器皿	(14.6)	3.9	(9.6)	口クロ	付明	外：産経草 内：花鳥	—	—	肥 前	18C後半	蛇ノ目形高台	
71	磁器皿	30.6	5.5	16.4	口クロ	付明	内：水張地文に 松樹	—	—	肥 前 (源山)	1820~1880年代	焼 継	
103-72	磁器鉢	—	—	—	口クロ	付明	外：花鳥 内：雲龍	—	—	肥 前	18C後半~ 19C前半		129
73	磁器鉢	(18.0)	—	—	口クロ	付明	外：海松 内：松樹に竜	—	—	肥 前	18C後半~ 19C前半		
74	磁器鉢	(15.6)	5.6	(9.4)	口クロ	付明	外：道氏香 内：雲龍・松	—	—	肥 前	18C後半~ 19C前半		
75	磁器鉢	9.0	3.0	3.1	口クロ	付明	外：植物	—	—	肥 前	1690~1740年代		
76	磁器鉢	9.5	3.3	8.4	口クロ	付明	外：燕子	—	—	肥 前	18C末~ 19C前半	焼 継	
77	磁器鉢	9.4	3.4	8.4	口クロ	付明	外：燕子	—	—	肥 前	18C末~ 19C前半		
78	磁器鉢	7.4	4.7	3.2	口クロ	付明	外：磁通し	—	—	肥 前	19C前半		
79	陶器鉢	12.5	—	—	口クロ	鉄 釉	—	—	—	関 西	18C		
80	陶器鉢	4.2	1.6	4.0	口クロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
81	陶器鉢	7.8	2.7	4.2	口クロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
82	陶器鉢	9.0	1.8	3.3	口クロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
83	陶器鉢	—	—	—	板作り	—	—	—	—	関西?	19C		
84	磁器鉢	6.8	6.4	5.2	口クロ	付明	外：磁通し 内：四方様	—	?	肥 前	18C後半		
85	陶器鉢	5.6	2.5	4.6	口クロ	透 明	—	—	赤短り (有)	関 西	19C前半		
86	陶器鉢	10.6	—	—	口クロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
87	陶器鉢	9.8	8.6	7.2	口クロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
104-88	陶器鉢	8.0	—	4.4	口クロ	青緑釉	—	—	—	肥 前	19C前半		130
89	陶器鉢	—	—	7.4	口クロ	白 磁	—	—	—	肥 前	19C		
90	陶器鉢	4.0	26.0	8.0	口クロ	付明	外：岩竹	—	—	肥 前	18C後半~ 19C中頃		
91	陶器鉢	—	—	8.3	口クロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
92	陶器鉢	(9.0)	—	—	口クロ	—	—	—	—	不 明	18C後半		
93	陶土鉢	10.0	—	—	口クロ	透 明	—	—	—	関 西	18C後半		
105-94	土小鉢	11.2	—	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			131
95	土小鉢	11.6	—	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			
96	土小鉢	12.8	—	—	手捏ね	—	—	—	—	在 地			
97	土小鉢	10.4	1.8	5.6	口クロ	—	—	—	赤短り (有)	在 地			

種別	器種	法量 (cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	図録頁
		口径	器高	底径		紋付・刺・画	文 様	装飾特徴					
105-108	土小 鉢	(12.2)	1.9	(9.4)	ロクロ	—	—	—	中央リ(1)	在 地			131
99	土小 鉢	13.0	2.3	8.4	ロクロ	—	—	—	端部状の溝(1)	在 地			
100	陶器	—	—	—	ロクロ	鉄 軸	—	—	—	肥前 九州	18C後半—19C前半		
101	陶土 器	18.2	—	—	ロクロ	—	—	—	—	福 岡	17C		
102	陶土 器	15.9	4.7	5.0	ロクロ	透 明	外：幾びガンナ 蔓草	イッパン 刺 け	—	岡 西	18C後半		
103	陶土 器	17.8	9.5	7.2	ロクロ	透 明	外：幾びガンナ	—	—	岡 西	18C後半		
104	陶土 器	14.0	—	—	ロクロ	鉄 軸	—	—	—	岡 西	18C後半		
105	陶土 器	21.2	9.5	7.5	ロクロ	透 明	—	—	—	岡 西	18C後半		
106	陶土 器	18.4	8.3	6.1	ロクロ	透 明	—	—	—	岡 西	18C後半		
106-107	瓦 瓦	(22.8)	7.9	16.9	ロクロ	—	—	—	—	在 地			132
108	瓦 瓦	18.2	—	—	ロクロ	—	—	—	—	在 地			
109	瓦 瓦	22.6	—	—	ロクロ	—	外：同形印文	—	—	不 明			
110	瓦 瓦	—	—	—	ロクロ	—	外：同形印文	—	—	不 明			
111	瓦 瓦	—	—	(32.0)	ロクロ	—	—	—	—	不 明			
107-112	瓦 瓦	29.6	13.5	21.4	板作り	—	—	—	—	在 地			133
108-113	瓦 瓦	27.0	12.6	17.6	板作り	—	—	—	—	在 地			134
114	瓦 瓦	—	—	22.7	ロクロ	—	—	—	—	在 地			
109-115	土 土	8.0	1.9	—	板作り	—	—	—	—	増			135
116	土 土	(33.0)	—	—	ロクロ	—	—	—	—	在 地			
117	土 土	(36.0)	—	—	ロクロ	—	—	—	—	在 地			

第36表 SK41出土土器・陶磁器類観察表

(V期=19世紀後半以降)

種別	器種	法量 (cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	図録頁
		口径	器高	底径		紋付・刺・画	文 様	装飾特徴					
116-1	磁器碗	9.7	5.7	3.1	ロクロ	透 明	外：植物	—	—	肥 前	19C中葉		136
2	磁器碗	(7.6)	—	—	ロクロ	透 明	外：寿草	—	—	肥 前	18C後半		
3	磁器碗	(9.2)	—	—	ロクロ	透 明	外：平巻 内：西刀鎌	—	—	肥 前	18C後半		
4	磁器蓋	10.4	3.2	4.2	ロクロ	透 明	内：西刀鎌 外：五弁花	—	—	肥 前	18C後半		
5	陶器碗	9.6	5.3	4.0	ロクロ	透 明	—	—	—	肥 前	18C前半	二志の雄略 京焼陶器類	
6	陶器碗	(9.0)	5.3	3.4	ロクロ	透 明	外：雲	—	—	岡 西	18C後半		
7	陶器碗	(9.0)	4.9	(3.4)	ロクロ	透 明	—	—	—	岡 西	18C後半		
8	陶器碗	9.6	5.8	3.8	ロクロ	透 明	外：雲松	—	—	岡 西	18C後半		

群 号	器 種	注 量 (cm)			成 形	装 飾			底面・内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	図 録 頁 数
		口径	器高	底径		絵付・文 様	装飾特徴						
110-9	磁 器 鉢	(9.0)	6.6	(5.6)	口クロ	施通 付明 外：牡丹・花 内：四方 底：蓮華	—	—	肥 前	18C後半	蛇ノ目形高台		130
10	磁 器 鉢	(7.5)	3.6	3.0	口クロ	施通 付明 外：山水ほか	—	—	不 明	明治前半			
11	磁 器 鉢	(6.6)	—	—	口クロ	施通 付明 外：牡丹	—	—	不 明	明治前半			
12	磁 器 鉢	6.6	4.6	2.6	口クロ	施通 付明 外：詩歌	—	落 款	不 明	明治前半			
13	磁 器 鉢	6.0	3.9	3.4	口クロ	施通 付明 外：花・雀	—	落 款	不 明	明治前半			
14	磁 器 鉢	(4.8)	—	—	口クロ	施通 付明 外：竹笹	型紙摺り	—	不 明	明治前半			
15	磁 器 鉢	6.4	—	—	口クロ	施通 付明 外：竹笹・竹笹	—	—	肥 前	18C後半	漆継ぎ		
16	磁 器 鉢	(7.8)	4.8	3.6	口クロ	施通 付明 外：雀	—	—	肥 前	18C後半～ 19C中頃			
17	磁 器 鉢	—	—	4.0	口クロ	施通 付明 外：雨降り柳	—	—	肥 前	1690～1740年代			
111-18	磁 器 鉢	—	—	—	口クロ	—	—	—	肥 前	18C以降			137
19	陶器蓋	17.0	5.0	—	口クロ	透 明	—	イッタン 鉄 印	—	関 西	18C後半		
20	陶 土 鉢	17.0	8.8	7.3	口クロ	透 明	—	イッタン 鉄 印	—	関 西	18C後半		
21	陶器皿	9.0	2.3	3.6	口クロ	自鉄 施通 内：桜花・麻手	—	—	九 州	19C半			
22	磁器皿	(10.6)	2.6	6.0	口クロ	施通 付明 外：松雲 内：山水	—	—	肥 前	19C前半			
23	磁器皿	(13.2)	3.8	7.3	口クロ	施通 付明 外：蓮花・草 内：水鳥	—	—	肥 前	19C前半	蛇ノ目形高台 模範文字		
24	磁器皿	(13.2)	3.0	(7.8)	口クロ	施通 付明 内：松樹	—	—	肥 前	19C前半	蛇ノ目形高台		
25	磁器皿	(12.2)	2.8	7.2	口クロ	施通 付明 内：漢巻・ニッ素	—	源之製	肥 前	19C後半以降	軸下彩 墨人か		

第37表 SK21出土土器・陶磁器類観察表

(冒期=19世紀後半以降)

群 号	器 種	注 量 (cm)			成 形	装 飾		底面・内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	出 土 地 点
		口径	器高	底径		施付・文 様	装飾特徴					
112-1	磁器蓋	10.0	2.9	4.0	口クロ	施通 付明 外：蓮子 内：松竹梅 底：松竹梅門形	型紙摺り	—	肥 前	明治前半～ 明治10年代		139
2	磁器蓋	9.4	2.6	3.9	型 打	施通 付明 外：花ほか 内：松竹	銅板転写	松 月 輪	不 明	明治20年以降		
3	磁器皿	11.2	4.7	3.4	口クロ	施通 付明 外：松竹 内：松竹	—	落 款	不 明	明治20年以降	軸下彩	
4	磁器皿	11.0	—	—	口クロ	施通 付明 外：蓮子 内：松竹	型紙摺り	—	肥 前	明治前半～ 明治10年代		
5	磁器皿	11.8	4.8	4.4	口クロ	施通 付明 外：蓮ほか	銅板転写	松 月 輪	不 明	明治20年以降		
6	磁器皿	11.6	4.7	3.8	口クロ	施通 付明 外：宝篋ほか	—	落 款	不 明	明治20年以降		
7	磁器皿	10.0	4.2	3.6	口クロ	施通 付明 —	—	落 款	不 明	明治20年以降	軸下彩	
8	磁器皿	11.8	5.0	4.0	口クロ	施通 付明 外：一蓮開目	—	—	不 明	明治20年以降		
9	磁器皿	12.0	4.3	4.4	口クロ	施通 付明 外：蓮ほか	—	—	不 明	明治20年以降	軸下彩	
10	磁器皿	12.0	5.0	4.9	口クロ	施通 付明 外：花卉ほか	型紙摺り	—	不 明	明治前半～ 明治10年代		
11	磁 器 鉢	10.3	5.3	5.8	口クロ	施通 付明 外：宝ほか	—	—	不 明	明治20年以降		

種 類	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・底	製作地	製 作 年 代	備 考	記録頁
		口径	器高	底径		絵付・文様	装飾特徴						
112-12	磁 小 鉢	7.5	3.9	4.3	口ク口	染通 付明 外：山水・雲文ほか	—	—	不 明	明治初年～ 明治10年代			139
13	磁 小 鉢	7.0	4.0	3.1	口ク口	染通 付明 外：人物・風景	—	—	不 明	明治初年～ 明治10年代			
14	陶 小 鉢	6.6	5.4	3.0	口ク口	無 飾	—	—	不 明	明治20年以降			
15	磁 小 鉢	6.7	3.5	2.5	口ク口	染通 付明 外：唐子	—	—	不 明	明治初年～ 明治10年代			
16	磁 小 鉢	6.6	4.3	3.2	口ク口	染通 付明 外：詩歌	—	—	不 明	明治初年～ 明治10年代			
17	磁 小 鉢	7.4	4.8	3.8	口ク口	色通 絵明 外：花卉	銅版転写	—	不 明	明治20年以降			
18	磁 小 鉢	7.3	4.0	3.8	口ク口	染通 付明 外：松竹	—	香 欬	不 明	明治20年以降			
19	磁 小 鉢	7.4	4.8	6.4	口ク口	染通 付明 外：蔓草・花	—	—	不 明	明治後半			
20	磁 小 鉢	6.6	4.8	6.4	口ク口	染通 付明 外：蓮弁	—	—	不 明	明治後半			
21	磁 器油皿	4.6	6.0	4.9	口ク口	染通 絵明	—	—	不 明	明治後半	袖下彩		
22	陶 火 鉢	11.6	1.9	5.2	口ク口	透 明	—	—	—	關 西	幕末～明治前半	受 皿	
23	陶 火 鉢	12.0	2.6	4.4	口ク口	透 明	—	—	—	關 西	幕末～明治前半	油 皿	
113-24	陶 磁 鉢	—	—	6.0	口ク口	色通 絵明 外：紫	—	—	—	關 西	明治前半		140
25	陶 磁 鉢	7.1	1.5	2.5	口ク口	染通 絵明 外：蔓草	—	—	—	關 西	幕末～明治前半		
26	陶 土 鉢	8.8	8.7	7.4	口ク口	染通 絵明 外：風景	—	—	—	關 西	幕末～明治前半	汽車土版	
27	陶 磁 鉢	4.5	—	1.6	口ク口	透 明	—	—	—	關 西	幕末～明治前半		
28	陶 磁 鉢	11.6	3.6	2.3	口ク口	透 明	—	—	—	關 西	幕末～明治前半		
29	磁 小 鉢	6.4	1.8	2.0	口ク口	白 磁 外：流籠唐草	—	—	肥 前	幕末～明治後半			
30	磁 器皿	12.6	3.5	7.8	口ク口	染通 付明 外：透紅酒家 内：草花或文に花弁 見込：松竹梅何れ	型紙張り	—	肥 前	明治初年～ 明治10年代			
31	磁 器皿	14.0	2.6	8.3	口ク口	染通 付明 内：松竹梅に鳥	—	—	不 明	明治20年以降			
32	磁 器皿	7.8	1.8	4.0	口ク口	白 磁 内：鶴	—	—	不 明	明治前半			
33	磁 器皿	21.8	2.6	12.5	口ク口	染通 絵明 外：唐草 内：あやめ	—	—	肥 前	明治20年代～ 大正			
114-34	磁 器皿	(14.4)	4.5	(8.4)	口ク口	染通 付明 外：透紅酒家 内：草花或文に花弁 見込：松竹梅何れ	—	—	肥 前	19C 前半～中頃	鮫ノ目彫彫高台		141
35	磁 器皿	13.0	4.4	7.0	口ク口	白 磁 内：花卉	—	—	不 明	明治前半			
36	土 磁 鉢	24.0	21.3	22.1	板作り	—	—	—	不 明	明治後半			
37	陶 火 鉢	24.6	—	—	口ク口	鉄 釉	—	—	不 明	明治後半			

第38表 SK17出土土器・陶磁器類観察表

(資料=19世紀後半以降)

神 風	器 種	法 量 (cm)			成 形	装 飾			底面・ 内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	記 録 頁
		口径	器高	底径		絵付・ 文 様	装飾特徴						
115 ～ 1	磁器皿	(11.4)	6.0	4.4	口ク口	染通 付明 外、見込：人物 ほか	—	—	肥 前	1820～ 1860年代?	端反範?		143
2	磁器皿	(10.2)	3.0	4.3	口ク口	染通 付明 外、見込：人物 ほか	—	—	肥 前	1820～ 1860年代?			

排図	器種	法量(cm)			成形	装飾			底面・内底	製作地	製作年代	備考	出願頁		
		口径	器高	底径		絵付・施文	文様	装飾特徴							
115-3	磁器蓋	(10.4)	2.6	4.5	ロクロ	色透	絵明	外：雲・丸文ほか 内：見込：花作?	—	肥前	20C前半		143		
4	磁器碗	(11.0)	—	—	ロクロ	色透	絵明	外：雲・丸文ほか 内：雲	—	肥前	20C前半				
5	磁器碗	(11.0)	5.7	(5.2)	ロクロ	色透	付明	外：流雲・竜	ゴム印	—	不明	昭和前半	軸下彩		
6	磁器碗	(11.0)	5.8	4.0	ロクロ	色透	付明	外：梅花	—	熊本	不明	昭和前半	軸下彩		
7	磁器碗	11.4	5.7	4.7	ロクロ	緑 コバルト 透明	—	—	肥前 肥前 (注3)	肥前	昭和前半	軸下彩			
8	磁器碗	(10.6)	5.5	(3.4)	ロクロ	色透	絵明	外：紅葉	—	熊本	昭和前半	軸下彩			
9	磁器 内付	9.5	5.6	4.4	ロクロ	クロム 青	—	—	—	不明	明治前半				
10	磁器 内付	5.3	6.8	4.5	ロクロ	クロム 青	—	—	—	不明	明治前半				
11	磁器蓋	4.2	0.8	5.4	ロクロ	透明	外：文 字 (梅の雲)	ゴム印	—	不明	大正～昭和初期				
12	磁土 器	(6.4)	—	—	ロクロ	色透	絵明	外：草花ほか	—	熊本	大正～昭和初期				
13	磁土 器	(9.7)	10.6	(7.6)	ロクロ	古銅 釉	—	—	—	熊本	大正～昭和初期				
116-14	磁器碗	7.4	7.4	4.1	ロクロ	クロム 青	—	—	—	不明	明治前半		144		
15	磁器碗	6.6	6.8	4.5	ロクロ	色透	絵明	—	—	不明	明治前半				
117-16	磁器碗	(6.5)	—	—	ロクロ	色透	絵明	外：草花	—	熊本	近代		145		
17	磁土 器	5.6	3.0	2.3	ロクロ	色透	付明	外：梅花	—	熊本	昭和前半				
18	磁器皿	(12.2)	2.5	(7.0)	ロクロ	色透	付明	外：流雲 内：見込：草花	—	熊本	不明	昭和	軸下彩		
19	磁器皿	(19.6)	3.7	12.7	ロクロ	色透	付明	内：草花	—	不明	昭和	軸下彩			
20	磁器皿	(12.2)	2.6	4.4	ロクロ	透明	—	口紅	—	不明	昭和				
21	磁器皿	(13.2)	2.0	8.6	ロクロ	透明	—	—	熊本 マース	不明	大正～昭和	軸下彩			
22	磁器皿	(14.0)	2.8	7.6	ロクロ	色透	絵明	内：バラ	—	不明	昭和	軸下彩			
23	磁器皿	(14.5)	2.5	(8.0)	ロクロ	色透	付明	内：松樹	—	不明	昭和前半	軸下彩			
24	磁器蓋	20.2	5.8	—	型打	白磁	—	—	—	不明	近代				

第39表 SK24出土土器・陶磁器類観察表

(時期不詳)

排図	器種	法量(cm)			成形	装飾			底面・内底	製作地	製作年代	備考	出願頁
		口径	器高	底径		絵付・施文	文様	装飾特徴					
116-1	磁器 鉢	(5.1)	1.5	1.6	型打	白磁	—	—	—	肥前	18C後半～		146

第40表 SK40出土土器・陶磁器類観察表

(時期不詳)

排図	器種	法量(cm)			成形	装飾			底面・内底	製作地	製作年代	備考	出願頁
		口径	器高	底径		絵付・施文	文様	装飾特徴					
116-3	陶器 鉢	—	—	—	ロクロ	—	—	—	—	熊本	16C	混入か	146

第41表 SK43出土土器・陶磁器類観察表

(時期不詳)

序 号	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・染	文 様	装飾特徴					
119-1	甕 小 群 坏	7.2	5.3	3.6	口タロ	染付・透	外：草花・雲	—	底面・内底	肥 前	1660～1680年代		146
2	磁器碗	—	—	(4.1)	口タロ	染付・透	見込：草花	—	底面・内底	肥 前	1690～1740年代		
3	磁器鉢	(42.7)	17.5	19.6	口タロ	染付・透	—	—	底面・内底	肥 前	18C後半～		

第42表 SP2出土土器・陶磁器類観察表

(I期ないしII期か)

序 号	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・染	文 様	装飾特徴					
120-1	土 器 小 土 器 小	(9.4)	(2.1)	—	手捏ね	—	—	—	底面・内底	在 地			147

第43表 埋蔵遺構出土土器・陶磁器類観察表

(VI期=19世紀後半以降)

序 号	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・染	文 様	装飾特徴					
120-2	陶 器 甕	6.0	12.3	12.5	口タロ	透 明	—	—	底面・内底	九州?	19C～		147

第44表 SX1出土土器・陶磁器類観察表

(VI期=19世紀後半以降)

序 号	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・染	文 様	装飾特徴					
120-3	陶器鉢	36.5	14.8	17.7	口タロ	透 明	—	—	底面・内底	丹 波	19C～		147
4	陶器甕	31.5	26.7	21.0	口タロ	染 色	—	—	底面・内底	太 州	19C～		

第45表 上層遺構出土土器・陶磁器類観察表

序 号	器 種	法量(cm)			成 形	装 飾			底面・内底	製作地	製作年代	備 考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・染	文 様	装飾特徴					
121-1	磁器碗	10.0	5.5	4.6	口タロ	染 色	外：菊花	コンピヤク印	底面・内底	大 宰	18C後半～中葉		149
2	磁器碗	10.0	5.0	4.2	口タロ	染 色	外：草花	—	底面・内底	肥 前	18C後半	くろわんか手	
3	磁器碗	10.6	4.8	4.8	口タロ	染 色	外：海浜風景	—	底面・内底	肥 前	18C後半		
4	磁器碗	—	—	3.6	口タロ	染 色	外：梅花散らし 見込：五弁花	—	底面・内底	肥 前	18C後半～ 19C前半		
5	磁器碗	(10.2)	4.8	4.2	口タロ	染 色	外：水梨・山水	—	底面・内底	肥 前	18C後半		
6	磁器碗	10.8	5.7	4.8	口タロ	染 色	外：水梨・草花 内：四方唐 見込：菊	—	底面・内底	肥 前	18C後半		
7	磁器碗	(9.0)	—	—	口タロ	染 色	外：雲・花卉 内：雲	—	底面・内底	肥 前	1820～1860年代	横瀬	
8	磁器碗	—	—	—	口タロ	染 色	内・外：斜交線	—	底面・内底	肥 前	昭和20年代		
9	磁器碗	(10.0)	5.8	(4.0)	口タロ	白 磁	外：紅雲(陽刻)	—	底面・内底	肥 前	18C前半	白化粘土による文様	
10	磁器碗	(11.3)	6.1	(4.0)	口タロ	染 色	外：四方唐 見込：草花	—	底面・内底	中 国	18C	餐手	

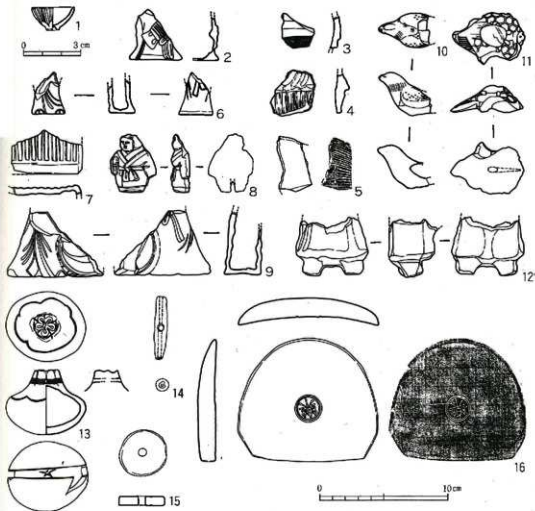
種 類	器 種	法量 (cm)			底 形	装 飾			底面・内 底	製作地	製作年代	備 考	出 所
		口径	器高	底径		胎文・胎 文 様	裝飾特徴						
121 —11	陶器碗	—	—	4.4	口ク口	灰 釉	—	—	錦光山	京 焼	17C後半— 18C初頭		140
12	磁器皿	(9.8)	2.4	(6.0)	型 打	白 磁	内：草花	口 綹	—	肥 前	1690—1740年代		
122 13	磁器皿	10.6	2.3	6.0	口ク口	染 付 明 透	内：緑り花 外：緑れ松葉 見込：五弁花	コンニャク 印・ 印あり	—	肥 前	1690—1740年代		150
14	磁器皿	—	—	(9.0)	口ク口	染 付 明 透	内：草花	—	大明成 化年間	肥前	1690—1740年代		
15	磁器皿	(18.4)	—	—	口ク口	染 付 明 透	外：草葉 内：草花	—	—	肥 前	明治前半		
16	磁器皿	—	—	—	型 打	染 付 明 透	内・外：雲	口 綹	—	肥 前	17C後半— 18C初頭	色絵表地か？	
17	磁器鉢	—	—	—	型 打	染 付 明 透	外：海胆 内：花散らし	—	—	肥 前	19C前半—中頃		
18	磁器蓋	9.2	3.4	4.0	口ク口	染 付 明 透	内：四方帯 見込：五弁花	—	高 麗	肥 前	18C後半		
19	磁器蓋	(10.2)	2.7	—	口ク口	染 付 明 透	外：人物・詩歌 見込：大明年間？	—	—	肥 前	19C前半—中頃		
20	磁器蓋	6.7	2.3	—	口ク口	染 付 明 透	外：花・蔓草	—	—	不 明	近代	積下彩	
123 —1	磁器 形碗	(10.6)	—	—	口ク口	染 付 明 透	—	—	—	肥 前	18C後半—		151
22	磁器 形碗	—	—	—	口ク口	青 磁	—	—	—	肥 前	18C後半—		
23	磁器蓋	(13.8)	(3.5)	—	口ク口	染 付 明 透	外：松樹	コンニャク 印	—	肥 前	1690—1740年代		
24	磁器 形碗	—	—	4.7	口ク口	染 付 明 透	外：海胆・牡丹 丹生本家製	ゴム印	—	不 明	昭和		
25	陶器 形鉢	—	—	—	板作り	—	—	—	—	不 明	不明		
26	磁器 形鉢	(6.6)	3.4	2.4	口ク口	染 付 明 透	外：草花	—	—	中 国	16C末— 17C前半		
27	磁器 形鉢	4.6	1.5	1.2	型 打	白 磁	—	—	—	肥 前	18C後半—		
28	土器 形鉢	26.2	—	—	口ク口	—	—	—	—	在地？			

第46表 試掘段階・排土中出土土器・陶磁器類観察表

種 類	器 種	法量(cm)			底 形	装 飾			底面・内 底	製作地	製作年代	備 考	出 所
		口径	器高	底径		捺付・ 刻 文	文 様	装飾特徴					
124 — 1	縄文 文様	—	—	—	—	—	唐語縄文	—	—	在 地	小池庵上層式(後期)	縄文土器	132
2	土器 印鑑	5.7	7.5	5.3	板作り	—	—	—	—	粵	18C後半	「泉源伊織」	
3	磁器 形碗	—	—	3.7	口ク口	染 付 明 透	外：不明	—	—	肥 前	18C後半— 19C前半	雲雲あり	
4	磁器 形碗	(11.2)	10.4	(8.5)	口ク口	白 磁	—	—	常 書	肥 前	明治～	蛇ノ目四彩高台	
5	磁器蓋	8.6	1.1	7.3	口ク口	透 明	外：文字	ゴム印	—	肥前？	昭和前半	磁器製史料品 話器器	
6	土器 鉢	—	—	—	口ク口	—	外：馬	—	—	在地？			
7	磁器皿	21.0	5.0	12.0	型 打	透 明	内：草葉見込・花文外：通院神鳥	縁取り(内面)	玩	肥 前	19C前半～中頃		

②磁器製品・土製品（第125図）

1～13は玩具類である。1は磁器製のミニチュアの碗で、SK 9から出土したものである。飯事（ままごと）道具で、子供の玩具類として使用されたものであろう。共伴した出土遺物はⅣ期に属し、18世紀後半代に比定される。2は磁器製の人形で、表面の大部分に白磁釉が施されている。上層遺構B-5区からの出土で、製作時期は不明である。3～5はSK 24から出土した土人形⁽⁷³⁾。3・4は同一個体と思われ、3の一部には赤彩が認められる。5は魚の鱗をかたどったものである可能性が高い。いずれも型作り整形によるものである。製作時期は不明だが、18世紀後半代以降に比定される可能性が高い。6・7はSK 34から出土した土人形である。6は人形の下半部で、頭部および胴部上半部を欠損する。7は内面に布目が認められる。何をかたどったものかは不明であるが、箱庭道具である可能性もある。6・7の共伴遺物はⅤb期



第125図 磁器製品・土製品（1はS=1/2、他はS=1/3）

1 SK 9 2・8・9・15・16 上層遺構 3～5 SK 24 6・7 SK 34
10～12 SK 33 13 19a 14 SK 10

で、19世紀中頃前後に比定される。8・9も土人形である。8は幼児をかたどったもので、底部に串などをさして固定するための小穴が認められる。9は人形の下半部であるが、巴文が施された円筒形のもの（太鼓あるいは俵か）を左脚部付近に置いた形態が表現されている。8は上層遺構B-3・4区、9は上層遺構排土中より採集されたもので、詳細な時期決定ができない。10~12はS K 33出土のもの。10は土製の鳩笛⁽⁷⁴⁾で、表面に彩色が施されていた痕跡が認められるが、既に退色している。11は親亀子亀を表現したもので、底部には先細りとなる貫通孔が認められる。この部分に串などをさして固定したものであろう。12は人形の下半部で、外面には木目痕、内面には布目が認められる。10~12の共伴遺物はV b期で、19世紀中頃前後に比定される。13はS K 19 aから出土した土鈴である。つまみ部分には赤彩、胴部上半部には褐色の絵具による彩色が認められる。共伴遺物はIV期で18世紀後半代の製品であらう。14はS K 10から出土した完形の土鍾である。中央部に略円形の刻印が認められる。共伴遺物はV a期で、製作年代は19世紀前半から中頃に比定される。15は中央部に穿孔を有する円形の土製品である。紡錘車であらうか。上層遺構B-3区からの出土で、詳細な年代は不明である。16は「前土器（まえかわらけ）」と呼ばれる茶道具の一種である。上層遺構B-4区からの出土で、詳細な年代は不明であるが、幕末以降のものであろう。当該遺物の使用法や年代等の検討については、V-（4）参照。

③ガラス製品（第126図）

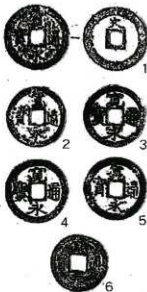
第126図はS K 33から出土したメンコ状ガラス製品である。外面にはバットを構えた野球選手と思われる人物像が、かなりデフォルメされたモチーフで描かれている。S K 33の出土遺物はその大半が幕末前後のものであるが、このガラス製品はモチーフからみて近代以降のものと思われる。本来的にはS K 33の一括資料に属するものではなく、混入品であらう。

④銅銭（第127図）

1~6はいずれも江戸幕府の公銭貨である寛永通寶の銅銭である。寛永通寶は一般に古寛永銭と新寛永銭に分類されており、古寛永銭とは寛永3年（1626）から寛文8年（1668）の間に鑄造された銅銭で、新寛永銭とは寛文8年（1668）に幕府直轄で鑄造された文銭（背に「文」の刻字のあるもの）をはじめとして約200年間鑄造された銅銭と鉄銭である。古寛永銭と新寛永銭とを比較的簡便に弁別するには、「寶」の刻字に着目すればよい。すなわち「寶」字の最終二画が古寛永では「ス」に作り



第126図 ガラス製品(S=1/3)



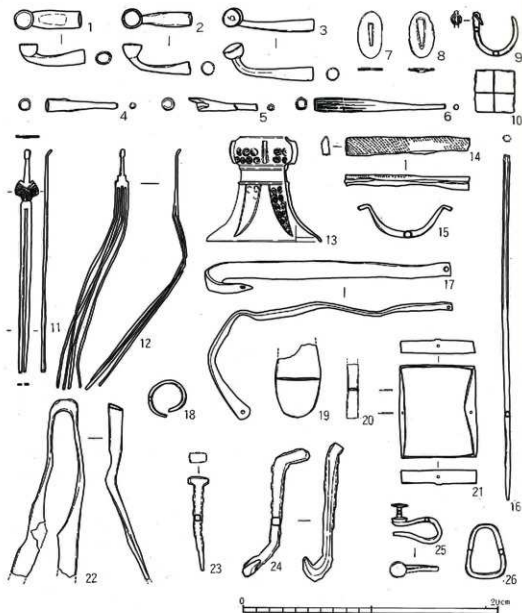
第127図 銅銭(S=2/3)

1 SK 8 2 SK 3 3 SK 44
4・5 SK 19a 6 表土中

(ス寶)、新寛永では「ハ」に作る(ハ寶)。つまりス寶の古寛永の製作年代が1626～1668年、ハ寶の新寛永がそれ以降に比定でき、おおまかな年代の基準となり得る。そのほか「通」字の1・2画の形態や「永」字の細部の特徴などでさらに細分が可能で、製作地までを同定できる場合もある。ただ今回は出土数も比較的少なく、遺構一括資料の年代比定にもさほど影響を与えるものではないので、古寛永銭・新寛永銭以上の細分を行ってない。1は背面に「文」の刻字を持つ新寛永銭、2・5・6は新寛永銭、3・4は古寛永銭である。出土地点はそれぞれ、1がSK8、2がSK3、3がSK44、4・5がSK19a、6が表土中からの採集である。

⑤銅製品・鉄製品(第128図)

1～3は煙管雁首である。1は古泉弘⁽⁷⁵⁾による(5)～(6)段階の過渡的な形態を呈する。SK19aからの出土で、共伴遺物はⅣ期の18世紀後半代に比定される。2はSK3の出土で、古泉(4)段階の形態である。共伴遺物はⅤa期で、18世紀末から19世紀前半。3は排土中からの採集品で、やはり古泉の(4)段階の形態を呈する。4～6は煙管吸口。いずれも古泉の(4)～(6)段階の形態。4はSK24、5はSK10、6はSK21からの出土で、共伴遺物の所属時期はそれぞれ時期不明、Ⅴb期(19世紀前半から中頃)、Ⅵ期(近代以降)である。7・8は青銅製の刀装具で、小刀の切羽。7は上層遺構B-4区からの出土で、時期不詳。8はSK33からの出土で、共伴遺物はⅤb期(19世紀前半から中頃)に比定される。9はSK3から出土した青銅製品で、天秤量りの一端に使用される鍵状製品であろう。共伴遺物はⅤa期(18世紀末から19世紀前半)である。10は用途不明の青銅製の小板状製品で、やはりSK3からの出土である。11・12はかんざしである。11は青銅製である。12は現状では錆青がふいている部分が多く認められるが、全体の印象としては銀白色に近い色調を呈する。鉛分の多い青銅製品、すなわち白銅製のものである。いずれもSK7から出土したもので、共伴遺物はⅤb期(19世紀前半から中頃)である。13はSK12から出土した青銅製品で、仏壇などで使用される仏具で、線香立てのような用途を持つものである。一部が変形しているほか、二次的な被熱を受けている部分が認められる。共伴遺物はⅣ期で、18世紀後半代。14～16はSK34から出土した青銅製製品。14は刀装具の小柄で、表面にはタガネによって打ち出した列点文が認められる。15は引手金具。16は火箸である。上半部は断面六角形であるが、下半部は円形である。SK34からは土師質瓦質火鉢類が複数個体出土しており、これらの遺物と関連する可能性も考えられる。14～16の共伴遺物はⅤb期の新しい段階(19世紀中頃)である。17はSK37出土の青銅製金具で、両端部に穿孔を持つもの。共伴遺物はⅥ期(近代以降)である。18～20は排土中から採集した青銅製品で、時期・用途とも不明のものである。18は銅線、19は平面形態が略楕円形を呈する銅板製品、20は棒状金具である。21はSK34出土の青銅製小両金具で、各側面には釘などで金具を固定するための穿孔が認められる。共伴遺物はⅤb期(19世紀中頃)。22はSK7から出土した鉄製和挟みである。錆腐れによる変形が著しい。共伴遺物はⅤb期(19世紀前半から中



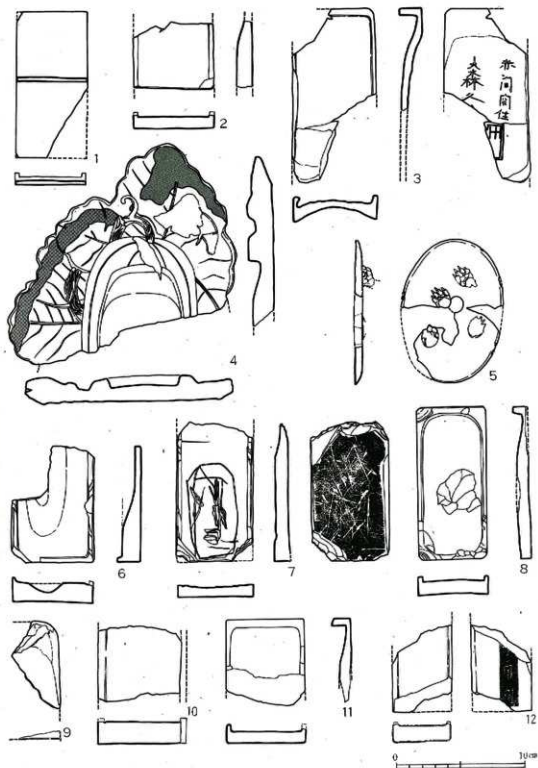
第128図 銅製品・鉄製品(S=1/3)

1・23・24 SK19a 2・9・10 SK3 3・18~20 辨土中 5 SK10 6 SK21 7 上層遺構
8 SK33 11・12・22 SK7 13 SK12 14~16 SK37 21 SK34 25・26 SK21

頃)である。23・24はSK19aから出土した鉄製品で、23は鉄釘、24はかすがい。共存遺物はⅤ期で、18世紀後半代の製品である。釘・かすがいの類は他の遺構や表土中からも出土しているが、いずれも破片であることや錆跡が著しく、図示していない。25・26はSK21から出土した金属製品で、Ⅵ期(近代以降)の製品である。25は鉛製と思われ、その形態からカーテン・レールである可能性が高い。26は銅線の芯に金メッキを施した金具である。

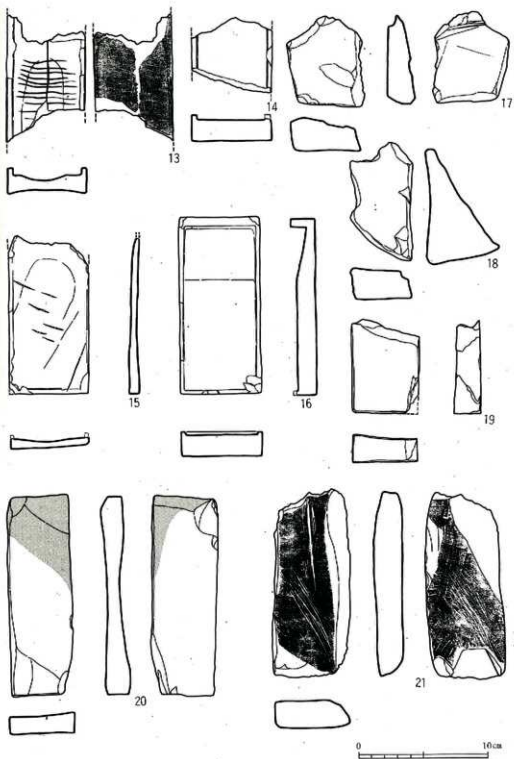
⑥石製品（第129図～第132図）

1～16は硯である。1はSK 8から出土したもので、素材の石材が板状に剝離しており、硯陰部のみしか残存していない。石材はいわゆる赤間石と呼ばれる輝緑凝灰岩製のものが使用されている。共伴遺物はⅢ期（17世紀末から18世紀中頃）に位置づけられる。2～5はSK 14・15からの出土遺物である。2は黄緑灰色を呈する頁岩を使用したもので、縁部を意図的に欠落させている上に、擦り切りによって一端を両側から切断している。砥石として転用された可能性が高い。3は赤間石を使用したもので、硯陰の彫り込み部に「赤間関住 大森久□…」の文字と印判が彫られた上手の製品である。東京都新宿区三栄町遺跡⁽⁷⁶⁾に類似例が出土している。火災による被熱を受け、変形している部分が認められる。4・5はやはり赤間石を使用した硯とその蓋と思われるもので、これも上手の製品であると思われる。4は平面形態が略三角形を呈していたと思われ、約半分が欠損している。硯の部分は瓜をかたどったものである可能性がある。火災による被熱を受け、実測図のスクリーン・トーンを貼った部分には焼土が付着している。5は4とセットになると思われる蓋で、欠損部分が大きい。2箇所に穿孔が認められる。蓋の上部には獣足が4箇所存在しており、獣形をかたどった蓋である可能性が高い。獣足の形状は、優れた表現が細部に渡ってなされている。これも火災による被熱が認められる。前述の通り、SK 14・15の一括出土資料は寛保3年（1743）の火災処理に伴うものである可能性が高く、2～5の製作年代の下限を18世紀中頃に求めることができる。6はSK 19bから出土したもので、黄緑灰色を呈する頁岩を使用している。丘部には使用により擦り減った楕円形状のくぼみが認められる。共伴資料はⅣ期で、18世紀後半に比定される。7・8はSK 2からの出土品で、7は黄緑灰色頁岩、8は赤間石を使用している。7は丘部や硯陰部に顕著な線状痕が認められ、砥石に転用されている可能性が高い。7・8の共伴資料はⅤa期（18世紀末から19世紀前半）である。9はSK 12から出土したもので、角部が隅丸方形を呈するものの破片である。硯陰部の一部が残存しているが、それ以上は板状に剝離して欠損している。共伴資料はⅣ期（18世紀後半）に比定される。10・11はSK 26出土のもの。10は気泡の多い淡褐色を呈する頁岩質の石材を使用している。縁部を意図的に欠落させており、砥石に転用されている可能性が高い。表面は火災による被熱を受けている。11は赤間石を使用したものである。10・11の共伴資料はⅣ期（18世紀後半）に属する。12～14はSK 34出土のものである。12・13は赤間石を使用したもので、12の硯陰部には「赤間関」の文字、13の丘部には使用による楕円形状のくぼみと横方向の線刻が認められる。また13の硯陰部の線刻も、断定はできないが、意図的なものである可能性が考えられる。14に使用された石材は、SK 26出土の10に使用されたものと類似する頁岩質の石材である。12～14の共伴遺物はⅤb期に属するもので、幕末前後に比定される。15は上層遺構B-3区出土で、黄緑灰色頁岩が使用されている。表面の擦痕が著しく、縁部も意図的に欠落させている。砥石に転用されている可能性が高い。16は上層遺構B-4区



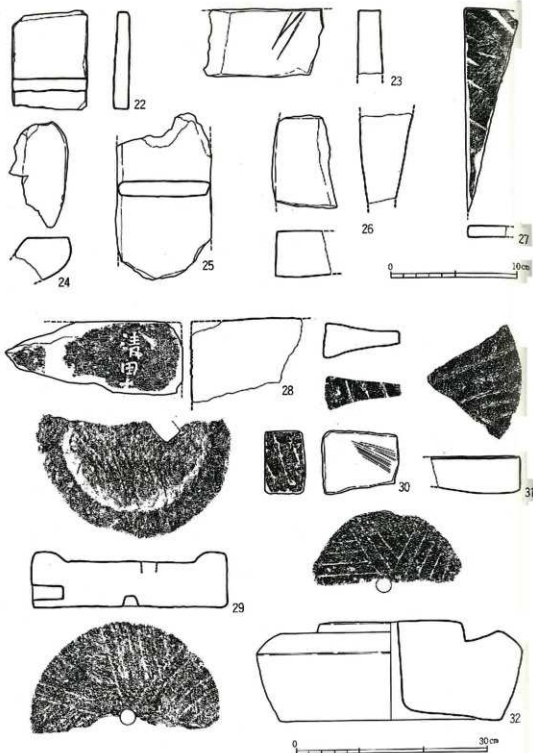
第129図 石製品① (S=1/3)

1 SK8・2~5 SK14・15 6 SK19b 7・8 SK2 9 SK12
10・11 SK26 12 SK34



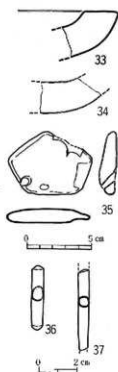
第130図 石製品② (S=1/3)

13-14 SK 34 15-16 上層遺構 17-18 SK 2 19 SK 3 20-21 6 SK10



第131図 石製品③ (22~27は $S=1/3$ 、28~32は $S=1/6$)
 22 SK19a 23~27 SK33 28 排土中

出土のもの。これも黄緑灰色頁岩が使用されているが、表面が黒変している。この黒変の原因は墨によるものではなく、二次的な被熱による影響である可能性が高い。17～27は砥石である。17・22・27は黄緑灰色頁岩、23・24は頁岩質石材、25は結晶片岩、26は砂岩質石材が使用されている。出土遺構と伴遺物の時期は、17・18がSK2でⅤa期（18世紀末から19世紀前半）、19がSK3でⅤa期（18世紀末から19世紀前半）、20・21がSK10でⅤb期（19世紀前半から中頃）、22がSK19aでⅣ期（18世紀後半代）、23～27はSK33でⅤb期（19世紀前半から中頃）である。28は廃土中より採集された直方体を呈する石製品の一部で、凝灰岩製のものである。加工された1面には「清田□□」の文字を刻んでいる。時期・性格ともに不明である。29～32は石臼で、いずれも凝灰岩製のもの。29は上臼、31は下臼、32は茶臼である。31は平面が台形状を呈しており、砥石に転用・再加工されたものであろう。29～32の出土遺構と伴遺物の時期は29は排土中で時期不明、30・32はSK34でⅤb期（19世紀前半から中頃）、31はSK38でⅣ期（18世紀後半代）に比定される。33・34は玄武岩質輝石安山岩製の茶臼下臼の台縁部である。33はSK15からの出土でⅢ期（17世紀末から18世紀中頃）、34は上層遺構B-3区で時期不詳である。35は平面形が不整五角形を呈する石製品で、使用石材は不明である。2箇所に穿孔を有する。上層遺構B-3区出土で、時期・用途ともに不明。36・37は石筆あるいは石墨といわれる文房具で、滑石製のもの。SK21からの出土で、Ⅵ期の明治時代後半から大正時代のものである。



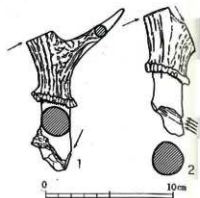
第132図 石製品④
33 SK15 34・35 上層
遺構 26・27 SK21

呂本館	二リ	三島	一リ半	新枝	二リ八丁	二川	一リ九丁	石やくし	廿七丁
品川	一リ半	沼津	一リ半	緑田	一リ	吉田	二リ廿二丁	庄の	二リ
川崎	二リ半	はら	三リ六丁	かなや	一リ廿四丁	御油	十六丁	龜山	一リ半
神奈川	一リ半	吉原	二リ十三丁	日坂	一リ廿九丁	赤坂	二リ九丁	せき	一リ廿四丁
保土ヶ谷	二リ半	蒲原	一リ	かけ川	二リ十六丁	藤川	一リ廿九丁	飯ノ下	二リ半
戸塚	二リ	由井	二リ十二丁	袋井	一リ半	岡崎	三リ十丁	上山	二リ廿五丁
藤沢	三リ半	奥津	一リ一丁	見附	四リ八丁	ちりう	二リ廿丁	山口	三リ半
平塚	廿七丁	江尻	二リ十七丁	浜松	二リ一丁	鳴滝	一リ廿丁	石部	三リ
大いそ	四リ	府中	一リ十六丁	まい坂	海一リ	みや	海七リ	草津	三リ廿四丁
小田原	四リ八丁	まりこ	二リ九丁	荒井	一リ廿四丁	島名	三リ八丁	大津	三リ
はこ橋	三リ廿八丁	岡部	一リ廿六丁	白旗	一リ十六丁	四日市	二リ廿七丁	京師	

第47表 骨・角製品(第133図-3)に刻まれた東海道53次の地名と距離(ゴチック部分が残存。他は欠損)

⑦骨・角製品 (第133図)

1・2は鹿角製品で、実測図の矢印部に意図的な切断痕が認められる。用途は不明である。いずれもSK44からの出土で、共存遺物はVb期(19世紀前半から中頃)である。3も用途不明であるが、骨あるいは象牙製品である。一部を欠損するが、外面には非常に細かい文字で、東海道53次の一部とその距離が刻まれている。53次のうち戸塚—大津間の部分が残存しているが、他の部分(日本橋—保土ヶ谷間および京師)は欠損している(第47表参照)。SK33からの出土で、共存遺物はVb期(19世紀前半から中頃)である。



第133図 骨・角製品 (1・2はS=1/3 3はS=1/1) 1・2 SK44 3 SK33

⑧瓦類

瓦類についてはコンテナ200箱以上の出土量があり、今報告ではそのすべてを詳細に検討していない。資料として紹介するものは、軒平瓦・軒丸瓦をはじめ、戯画や文字を有するものおよびいくつかの道具瓦に留まる。軒平瓦・軒丸瓦は瓦当文様の種類のすべてを提示できるように心がけたつもりであるが、時間的な制約から、それぞれの分類の量的な検討をなし得ていない。また小破片となったものは、瓦当文様の詳細が読み取れないものも多く、あるいは今回提示した以外にも他種の文様を持つ軒瓦が存在している可能性も考えられる。平瓦や丸瓦、ならびに面戸瓦や塀斗瓦などの道具瓦の中には完形で出土しているものも多いが、一部を除いて、紙幅の関係で今回は割愛している。瓦類の組合せや瀬年、年代の検討等の詳細はV-(3)に譲り、ここでは実測図の提示を主な目的として、以下の記述を進めたい。また瓦の中で刻印を有するものが少なからず存在するが、これも瓦の年代観と深く関わるため、一部を除いて、詳細はV-(3)で検討したい。

軒平瓦 軒平瓦については、瓦当文様の分類から以下の28類に細別した。文様細部の名称については、第134図を参照されたい。

軒平瓦A類 (第135図-1・2) 瓦当面に五葉の桐葉文を3単位有するものである。それぞれの桐葉文は1本の蔓草でつながれている。瓦当面上端の一部には、ヘラ状工具によって面取りがなされている。

軒平瓦B類(3・4) 三葉の桐葉文を中心飾りに持つ均整唐草文軒平瓦である。桐葉には葉脈が表現されている。

軒平瓦C類(5・6) 三葉の桐葉文を中心飾りに持つ均整唐草文軒平瓦であるが、桐葉には葉脈が表現されていない。中心飾りの桐葉文の上には珠点が1個認められる。

軒平瓦D-1類(7) 三葉を中心飾りに持つ均整唐草文軒平瓦である。瓦当面上端の一部には、ヘラ状工具によって面取りがなされている。

軒平瓦D-2類(8) 三葉を中心飾りに持つ均整唐草文軒平瓦である。第2唐草の形状がD-1類と異なる。瓦当面上端の一部には、ヘラ状工具によって面取りがなされている。大分県下では、杵築小学校校内遺跡⁽⁷⁷⁾に類似例が存在する。

軒平瓦D-3類(9) D-1類を大型にしたような瓦当文様を持つものである。左袖の欠損部分には接合痕跡が認められ、当該資料が軒棧瓦であったことが判明する。

軒平瓦D-4類(10) 中心飾りの三葉の下に珠点を有する均整唐草文軒平瓦である。D-1類・D-2類と比較して、大型のものである。

軒平瓦E類 軒平瓦E類は、おおまかには細分の番号の順に古いものから新しいものへと型式変化するものである。後段のV-(3)での検討の後、「府内城系列」という名称を与えるものである。

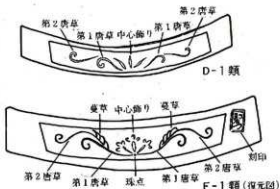
軒平瓦E-1類(第136図-11) 3単位の雄蕊状文を中心飾りとする均整唐草文軒平瓦である。瓦当文様には唐草のほかに蔓草と中心飾りの下に珠点が1個認められる。また右袖部には「助右門」の刻印を有する。

軒平瓦E-2類(12-14) 中心飾りの雄蕊状文はE-1類と同様であるが、その下には珠点を持たない。蔓草の先端部は上方を向いている。

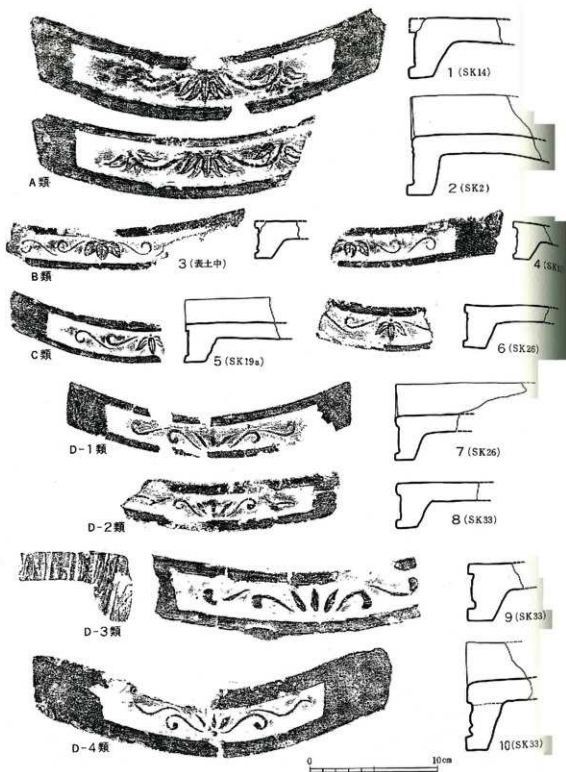
軒平瓦E-3類(15) 3単位の雄蕊状文を中心飾りとする均整唐草文軒平瓦で、中心飾りの下には珠点を持たない。蔓草の先端部は下方を向く。

軒平瓦E-4類(16・17) 3単位の雄蕊状文を中心飾りとする均整唐草文軒平瓦で、中心飾りの下には珠点を有する。第1唐草と第2唐草の間には、蔓草の代わりにデフォルメされた松葉状文を持つ。

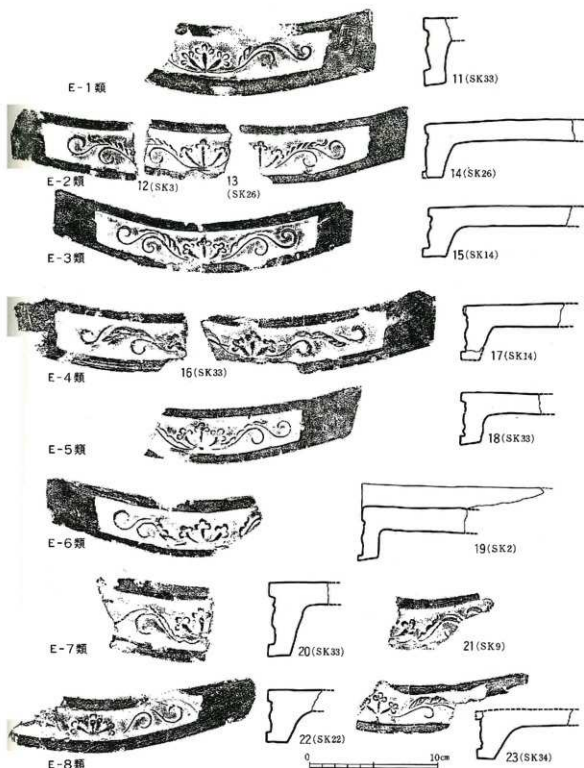
軒平瓦E-5類(18) 瓦当文様が肉細く、力強い印象を受けるものである。蔓草先端部は上方を向き、中心飾りの下には珠点を有する。



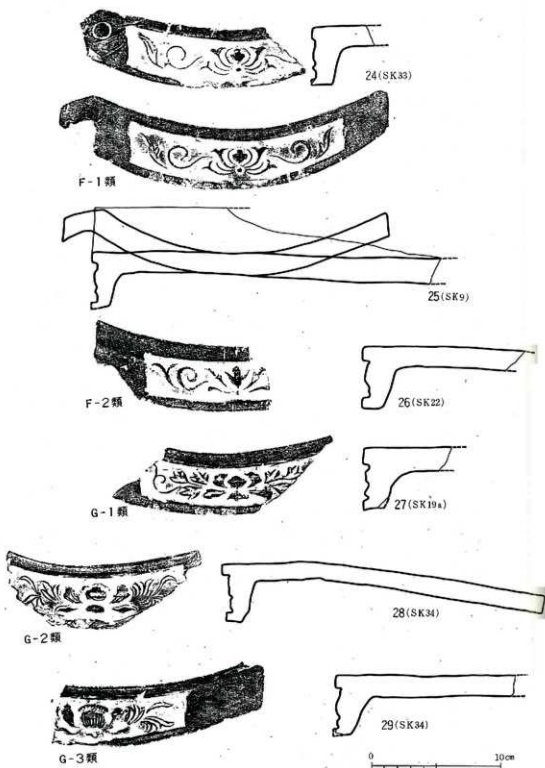
第134図 軒平瓦文様細部の名称



第135図 軒平瓦A～D類 (S=1/3)



第136図 軒平瓦E類 (S=1/3)



第137圖 軒平瓦 F・G類 (S=1/3)

軒平瓦E-6類 (19) 瓦当文様の構成はE-3類に類似するが、蔓草部分が短く収束するものである。また文様全体がやや脱化した印象を受ける。

軒平瓦E-7類 (20・21) 瓦当がやや幅広になり、第1唐草が途中で屈曲して中心飾りの下部に達するものである。蔓草もやや短い。これも文様全体がやや脱化した印象を受ける。

軒平瓦E-8類 (22) 3単位の雄蕊状文を中心飾りとする均整唐草文軒平瓦であるが、他のE類と異なり蔓草を消失する。

軒平瓦E-9類 (23) 3単位の雄蕊状文、中心飾り下の珠点、唐草、蔓草を完備するが均整唐草文軒平瓦である。しかしその瓦当文様は硬化しており、他のE類と比較して時期的に新しい印象を与えるものである。

軒平瓦F-1類 (第137図-24・25) 橋状文を中心飾りとする均整唐草文軒棧瓦である。第2唐草に相当する葉文は細線彫りで構成されている。また左袖部に「〇」の刻印を有するものがある。

軒平瓦F-2類 (26) 橋状文を中心飾りとする均整唐草文軒棧瓦である。F-1類と異なる点は中心飾りを構成する線分が少なくなっていること、第2唐草に相当する葉文が2本の厚肉彫りの線で表現されていることである。F-1類からF-2類への型式変化が想定できる可能性がある。

軒平瓦G-1類 (27) 中心飾りが六葉の花弁状文となる均整唐草文軒平瓦で、第1唐草に相当する部分に3単位の厚肉彫りの葉文を有する。

軒平瓦G-2類 (28) 中心飾りが六葉の花弁状文となる均整唐草文軒平瓦で、唐草文は細線彫りで表現されている。

軒平瓦G-3類 (29) やはり六葉の花弁状文を中心飾りとする均整唐草文軒平瓦であるが、唐草文の表現の細部がG-1類と異なる。また中心飾りの表現も異なっている。

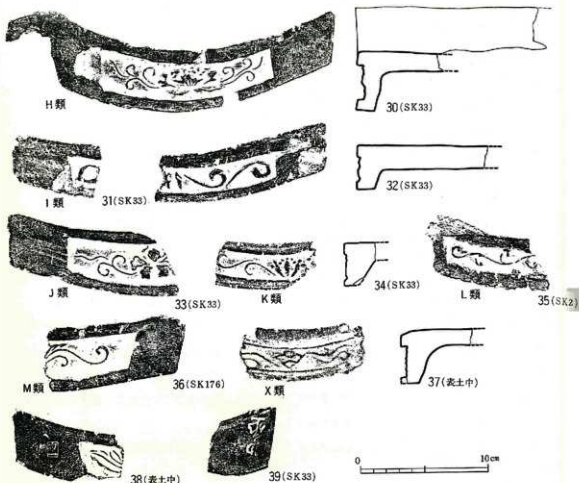
軒平瓦H類 (第138図-30) 多弁の花弁状文を中心飾りとする均整唐草文軒棧瓦で、唐草は4本の線分で表現されている。

軒平瓦I類 (31・32) 均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは一部を欠損しており、余形を窺うことができないが、三葉をモチーフとするものである可能性が高い。

軒平瓦J類 (33) 五葉を中心飾りとする均整唐草文軒平瓦である。杵築小学校校内遺跡Ⅱ'層⁽⁷⁸⁾より類似の軒棧瓦が出土している。

軒平瓦K類 (34) 3単位の雄蕊状文を中心飾りとする均整唐草文軒平瓦である。瓦当文様のモチーフとしてはE-8類と類似しないでもないが、後述するようにE類の府内城系列のものとは直接的な系統関係を持たないものである。

軒平瓦L類 (35) 唐草文を有する軒平瓦であるが、欠損のため全形を復元できていない。中心飾りの形態も不明である。



第138図 軒平瓦H～M・X類ほか (S=1/3)

軒平瓦M類 (36) 均整唐草文軒平瓦と推定されるが、欠損のため不明である。唐草のほかに蔓草が認められ、モチーフの親縁性からE類の府内城系列のものである可能性もある。

軒平瓦X類 (37) 変形花菱文を中心飾りとする唐草文軒平瓦である。大分県臼杵市臼杵石仏群地域遺跡軒平瓦IV類⁽⁷⁹⁾、大分市上野遺跡出土の軒平瓦⁽⁸⁰⁾と瓦当文様が酷似する。臼杵石仏群地域遺跡での調査所見では、室町前期に比定されており、他の軒平瓦と異なり江戸時代の所産になるものではない。従って、軒平瓦X類の名称を与えている。

そのほか軒平瓦袖部に刻印を有する例を紹介しておく。38は左袖部に「市一」、39は右袖部に天地逆方向で「助ノ丞」の刻印が認められるものである。瓦の刻印については、V- (3) を参照されたい。

軒丸瓦 軒丸瓦は瓦当文様の類似性が強く、一見したのみではその特徴を捉え難いものが多い。そこで本稿では巴文を持つものをT類、小菊文を持つものをK類と大別し、それぞれを

瓦当径の大きいものから小さいものへ配列した。そして巴文を持つものについては、その回転方向と尾部の形態ならびに珠文数を細別の基準とした。以下、その結果を提示したい。

軒丸瓦T A類(第139図-1) 瓦当径は復元で12cm前後を測る。巴文は時計回りで、その尾部は離れている。珠文数は復元で10個を数える。

軒丸瓦T B類(2) 瓦当径は13.1cmを測る。巴文は反時計回りで、その尾部がくっついている。珠文数は16個である。

軒丸瓦T C類(3) 瓦当径は13.2cmを測る。巴文は反時計回りで、その尾部は離れている。珠文数は12個である。

軒丸瓦T D類(4) 瓦当径は13.5cmを測る。巴文は反時計回りで、その尾部は離れている。珠文数は22個である。

軒丸瓦T E類(5) 瓦当径は14.5cmを測る。巴文は反時計回りで、その尾部は離れている。珠文数は15個である。巴瓦の中では、最も出上量が多いものである。

軒丸瓦T F類(6) 瓦当径は14.7cmを測る。巴文は反時計回りで、その尾部は離れている。珠文数は16個である。

軒丸瓦T G類(7) 瓦当径は15.0cmを測る。巴文は時計回りで、その尾部は離れている。珠文数は16個である。

軒丸瓦T H類(第140図-8) 瓦当径は15.6cmを測る。巴文は反時計回りで、その尾部は離れている。珠文数は16個である。

軒丸瓦T I類(9) 瓦当径は16.0cmを測る。巴文は反時計回りで、その尾部は離れている。珠文数は13個である。瓦当范がかなり損傷しており、范割れによる文様の乱れを指ナデで修正したものも多い。

軒丸瓦T J類(10) 瓦当径は16.0cmを測る。巴文は反時計回りで、その尾部は離れている。珠文数は15個である。

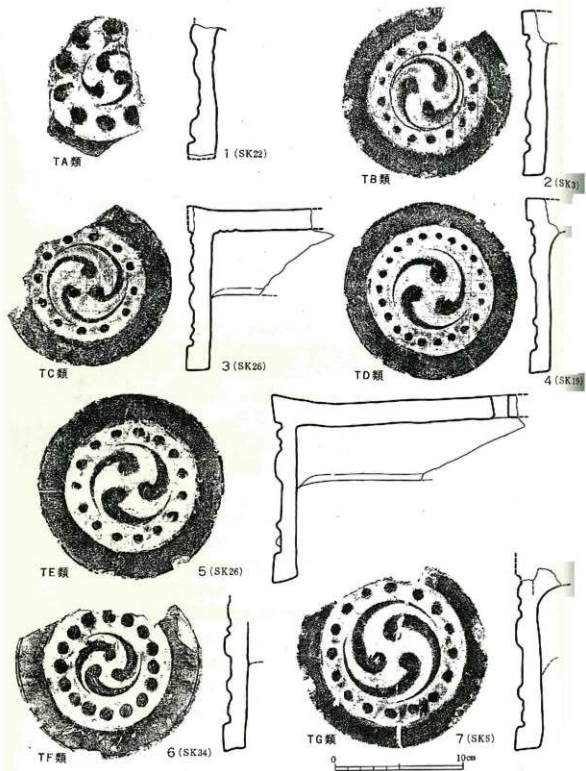
軒丸瓦T K類(11) 瓦当径は17.6cmを測る。巴文は反時計回りで、その尾部は離れている。珠文数は13個である。

軒丸瓦T L類(12) 瓦当径は復元で18cm前後を測る。巴文は反時計回りで、その尾部がくっついている。珠文数は復元で11個を数える。

軒丸瓦T M類(13) 瓦当径は復元で18cm前後を測る。巴文は時計回りで、その尾部がくっついている。珠文数は復元で15個を数える。

軒丸瓦K A類(第141図-14) 瓦当径は復元で9cm弱を測る小型のものである。小菊文は12弁の単弁によって構成されている。

軒丸瓦K B類(15) 瓦当径は復元で13.6cm前後を測る。小菊文はやはり12弁の単弁によって構成されている。

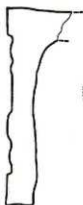


第139圖 軒丸瓦 TA~TG 類 (S=1/3)



TH類

8 (SK34)



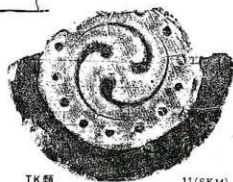
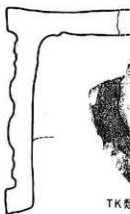
TJ類

10 (SK22)



TI類

9 (表土中)



TK類

11 (SK14)



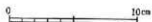
TL類

12 (SK14)

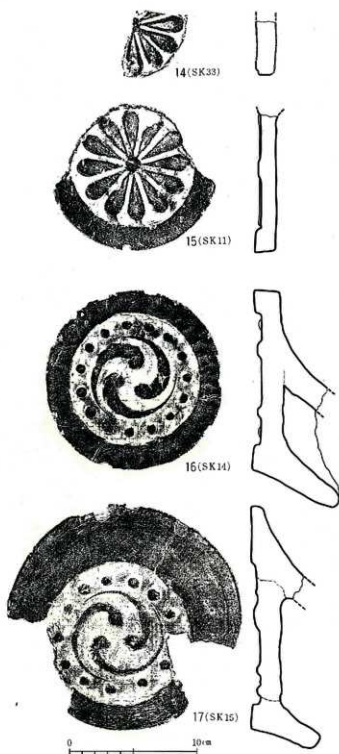


TM類

13 (SK14)



第140図 軒瓦 TH~TM類 (S=1/3)

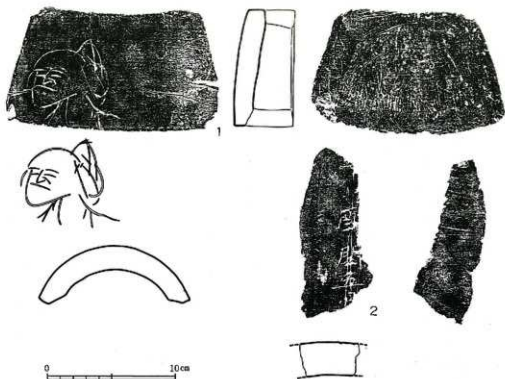


第141図 軒丸瓦 KA・KB 類、鳥衾瓦 (S=1/3)

鳥衾瓦 瓦当面に巴文を有する鳥衾瓦を2つ紹介しておく。第141図-16は反時計回りの巴文を有するもので、その尾部は離れている。瓦当径は14.0cmを測る。瓦当文様は軒丸瓦T E 類と同范である。17も反時計回りの巴文を有するもので、その尾部は離れている。瓦当径は16.5cmを測る。瓦当文様は軒丸瓦T I 類と同范である。

面戸瓦 面戸瓦を1例だけ紹介しておく。第142図-1はSK14より出土した完形のもので、凸面に軽妙なタッチで人物像がヘラ描きされている。火災による二次的な被熱を受け、表面が赤変している。SK14は1743年に発生した寛保の大火に伴う火災処理土坑であり、当該遺物の下限年代を18世紀中頃に求めることができる。ただし共伴する他の瓦資料の年代観からみて、その製作年代は元禄年間(1688-1703)前後にまで遡る可能性が高い。

文字を有する平瓦 第142図-2はSK19a出土の平瓦の破片で、凸面に「…年□酉閏五月…」のヘラ描き文字を有する。酉年で閏5月の

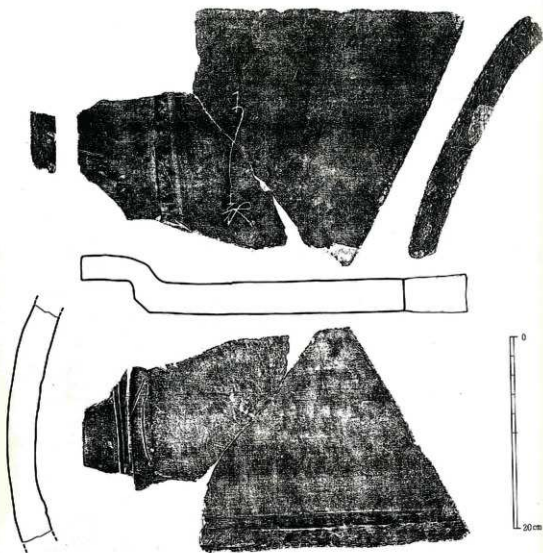


第142図 面戸瓦・文字を有する平瓦 (S=1/3) 1 SK14 2 SK19a

存在する年代は、江戸時代では乙酉年の正保2年(1645年)に限られる。SK19aはⅣ期(18世紀後半代)に位置づけられ、当該遺物の製作年代は遺構一括資料の年代には直接の影響を与えないが、後述する他の瓦類の年代を考える場合には参考資料となるものであろう。

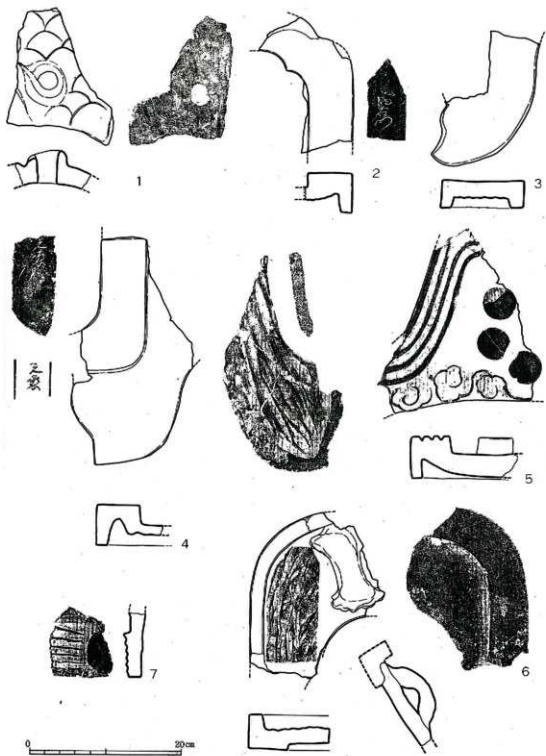
伏間瓦 第143図は角棧伏間瓦⁽⁸¹⁾と呼ばれるもので、棟の最上部に葺かれる道具瓦である。端縁が側縁部に対して約70度の角度をなしており、隅切りの状態で製作されている。凸面には「_上示表」のへら描き文字が認められる。使用部位を示したものであろうか。SK33からの出土遺物で、遺構の年代はVb期(19世紀前半から中頃)である。

鬼瓦(第144・145図) 1は外面に鱗の表現が認められる鬼瓦の破片である。SK19aからの出土で、共伴遺物はⅣ期(18世紀後半)である。2～5はSK33出土のもの。共伴遺物はVb期(19世紀前半から中頃)である。2には「助右門」、4には「助之丞」のへら描き文字が認められる。2～4は二次的な被熱を受けて、表面が赤変している。製作年代も後段で検討するが、元禄年間(1688～1703)前後に遡るものと思われ、被熱していることも考え合わせて本来切り合い関係を有するSK14・15に帰属する資料と思われる。5は外面に七曜文と唐草文の装飾を有するものである。6はSK22からの出土で、共伴遺物はVb期(19世紀前半から中頃)である。7は表面採集のもので詳細な時期を決定できていない。8は京輪甕型鬼瓦と呼ばれるもの⁽⁸²⁾で、SK13と上層遺構採集のものが接合している。SK13はガラス片など近代



第143図 伏間瓦 (S=1/4)

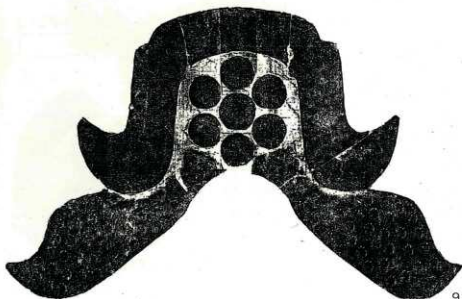
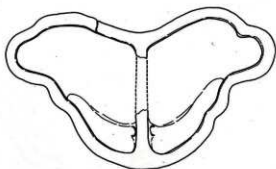
以降の遺物を包含する土坑で、この瓦の製作年代も近代以降に下る可能性が高い。9もS K 33からの出土で、外面に七曜文の装飾を有する。S K 33は木村家の敷地内に存在する遺構であるが、この七曜文が木村家の家紋であるかどうかは確認が取れていない。



第144回 鬼瓦① (S=1/5) 1 SK19a 2~5 SK33 6 SK22 7 表様



8



9



第145図 鬼瓦② (S=1/5) 8 SK13+上層遺構 9 SK33

- 註(1) 尾上実「南河内の瓦器焼」(『古文化論叢』藤沢一夫先生古希記念 1983年)
- (2) 渡辺誠「焼塩壺」(『講座日本技術の社会史』2 塩業・漁業 日本評論社 1985年)
- (3) 両角まり「土師質塩壺類」(『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題』Ⅰ発表要旨 江戸陶磁土器研究グループ 1992年)
両角まり「近世土師質塩壺類整形技法の復元とその意味」(『江戸在地系土器研究会迎例』No.33 1993年)
- (4) 小林謙一「土器研究の現状と方針」(『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題』Ⅰ発表要旨 江戸陶磁土器研究グループ 1992年)
小林謙一・両角まり「江戸における近世土師質塩壺類の研究」(『東京考古』10 1992年)
- (5) 田中一廣「泉州名産『焼塩壺』」(『関西近世考古学研究』Ⅱ 1992年)
- (6) 大橋康二「伊万里磁器創世期における唐津焼との関連について」(『佐久間重男教授退休記念中国史・陶磁史論集』1983年)
- (7) この種の非クロロ系の土師質土器は、17世紀から18世紀前半にかけて江戸遺跡や西日本各地の近世遺跡で散見できるものである。この種のものは、例えばS K 23・20等や本土坑8などの豊後地域における16世紀以降の中世土師質土器の伝統上に位置づけられる「手捏ね」手法による整形の土師質土器とは系譜を異にするものと考えている。この点についても後段で、触れたい。なお、本土坑9のようなタイプの土師質土器小皿は、大分市机原女塚墓地(未発表。大分県教委調査。田中裕介氏教示)でも検出されている。
- (8) 家田淳一「内野山北空路の調査概要」(『第3回九州近世陶磁研究会資料』佐賀県立九州陶磁文化館 1993年)81-85頁。
- (9) 星梓「江戸遺跡における丹波系播鉢覚書」(『貝塚』45 物質文化研究会 1991年)
長谷川真「丹波系播鉢について」(『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 1988年)
松澤修「備前と丹波」(『紀要』第3号 財団法人滋賀県文化財保護協会 1990年)
他に、鈴木裕子「江戸遺跡出土の丹波系播鉢の変遷」(『江戸陶磁器研究会会報』第4号 1992年)も参照した。
- (10) 大平茂「近世丹波焼播鉢の型式分類とその編年」(『下相野家址』近畿自動車道舞鶴線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書XⅧ 兵庫県文化財調査報告第107冊 兵庫県教育委員会 1993年)75-80頁。
- (11) 難波洋三「徳川氏大坂城期の焙烙」(『難波宮址の研究』第九 財団法人大阪市文化財協会 1992年)374・380頁。
- (12) 「年製」銘は生産地では1660-1670年代操業された柿右衛門窯B窯のみに認められることが指摘されている。ただし、府内城三ノ丸遺跡出土資料は輪調・作行などからみて、これより下る1690年代以降の製品である。

大橋康二「肥前磁器の交通—技法と器形からみた—」(『柴田コレクション展』(I) 佐賀県立九州陶磁文化館 1990年)233頁

大橋康二『有田町史』古窯編(1988年)図版228-3

- (13) 註(3)・(4)に同じ。

- (14) 図示したような器形は、京都・大板・堺・大和などで17世紀前半代に多く認められるもので、九州周辺には類例を見ることができない。当初、関西地域からの搬入品と考えていたが、奈良県大和郡山市教育委員会の山川均氏に実物を見て頂いたところ、関西地域のものとは胎土や調整が異なり、関西地域で製作されたものとは考えられないとのことであった。ただし器形や整形技法は類似しており、製作地の問題は残るにせよ、当該資料に見られるような器形の系譜が関西地方に求められる可能性は残されている。後述するように、SK14・15の下限年代は1743年の寛保の大火に求められるので、関西地域での類似器形の火鉢の盛行年代とも大きな開きがある。類例の蓄積を待つとともに、今後の課題としておきたい。なお、関西地域での当該遺物については、以下の文献参照。

土山健史「堺環瀬都市遺跡における、15・16世紀の在地土器」(『中近世土器の基礎研究』V 1989年)49頁

伊野近富「12～16世紀の京都の土器」(同上)120頁。

坪之内徹「中世南部の瓦器・瓦質土器」(『中近世土器の基礎研究』VI 1990年)で風炉IVに分類されるもの。

森毅「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」(『難波宮址の研究』第九 1992年)371・372頁

近江俊秀「大和における中世後期の在地形土器」(『北野殿遺跡』大和高原地域における中世城郭の調査 奈良県文化財調査報告書第63集 奈良県立橿原考古学研究所 1992年)で有窓鉢形土器Fに分類されるもの。

また、近年名古屋城三ノ丸遺跡SD8でも17世紀後半から18世紀初頭に位置づけられる遺物とともに類品が出土している。

金子健一編「名古屋城三ノ丸遺跡(Ⅲ)」(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第3集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 1992年)84頁。

- (15) 鈴木重治「京焼と京焼写し—生産と流通—」(『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨 1990年)

鈴木重治「出土資料にみる京焼と京焼写しの検討」(『同志社大学徳昭館地点・新島会館地点の発掘調査』1990年)

鈴木重治「京焼と京焼写しの検討」(『白鷺』都立学校遺跡調査会 1990年)

また近年、京焼といわゆる京焼風陶器(京焼写し)との異同についての論考が発表されている。

角谷江津子「肥前京焼風陶器と京焼—新島会館出土資料を中心として—」(『関西近世考古学研究』

Ⅲ 1992年)

角谷江津子「京焼の伝世品を観る—出土品研究のために—」(『関西近世考古学研究会第12回例会発表要旨』 1991年)

- (16) 大橋康二『窯ノ辻・ダンバギリ・長古谷』(九州陶磁文化館 1984年)

- (17) 村上伸之・野上建紀『一本松窯・柳門谷窯・中白川窯・多々良2号窯』(有田町教育委員会 1990年)

野上建紀「17世紀における白川地区の窯業について」(『有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館研究紀要』第2号 1992年)

- (18) 大橋康二『肥前陶磁』(考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社 1989年)55頁。

- (19) 註(11)に同じ。

- (20) 見込みの昆虫文は、18世紀後半に限られることが指摘されている。

大橋康二『肥前陶磁』(考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社 1989年)80頁。

- (21) 註(11)に同じ。

- (22) 註(3)に同じ。

- (23) 大橋康二「16・17世紀における日本出土の中国磁器について」(『東アジアの考古と歴史』下 岡崎敬先生退官記念論集 同朋社 1987年)

上田秀夫「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」(『関西近世考古学研究会』Ⅰ 1991年)

- (24) 森村建一「“Witte Leeuw”号の陶磁器(2)」(『関西近世考古学研究会』Ⅱ 1992年) 303頁第4図104参照。

森村建一「“Witte Leeuw”号の陶磁器」(『貿易陶磁研究』No.7 1987年)

- (25) 森銳「元和6・7年銘の木簡を出土した魚市場跡の調査」(『発掘された江戸時代』江戸遺跡研究会 第4回大会発表要旨 1991年)16頁、図9-47

- (26) 「宣徳年製」銘は17世紀後半代に比定されることが指摘されている。

大橋康二『肥前陶磁』(考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社 1989年)70頁。

- (27) 塙産描鉢については、以下の文献参照。

白神典之「塙産鉢と明石描鉢」(『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨 1990年)

白神典之「塙産描鉢考」(『東洋陶磁』第19号 1992年)

- (28) 堀内秀樹「『塙前系統締め描鉢』の系譜」(『東京考古』10 1992年)

- (29) 註(18)に同じ。

- (30) 大橋康二「肥前磁器の変遷—技法と器形からみた—」(『柴田コレクション展』(Ⅰ) 佐賀県立九州陶磁文化館 1990年)233頁。

- (31) 同上。

- (32) 小川望・小伏悟「関東の瓦質土師質火鉢類」(『考古学ジャーナル』No299 1988年)
小川望「近世江戸の上製火鉢類について」(『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 1991年)
- (33) 小林謙一「江戸における近世瓦質・土師質焼酎について」(『江戸在地系土器の研究』Ⅰ 1991年)
- (34) 当遺跡のほかに「深草」の刻印を有する瓦質土器を出した遺跡は、東京都真砂遺跡・四谷三丁目遺跡・内藤町遺跡(いずれも「深草一占」)、鹿児島県大蔵遺跡(「深草菱古」)が存在する。いずれも共伴資料などから、19世紀前半代の製作とみなされる。また、真砂遺跡出土例は前註小林文献ではⅣ期(19世紀前半から中葉)に比定されている。
小林克ほか「真砂遺跡」(真砂遺跡調査会 1987年)261頁。
大八木謙司ほか「四谷三丁目遺跡」(東京都消防庁・新宿区四谷三丁目遺跡調査団 1991年)80頁。
井汲隆夫「内藤町遺跡」第Ⅱ分冊遺物編(東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会 1992年)270頁。
出口清「大蔵遺跡」(鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書15 鹿児島市教育委員会 1992年)45・84・91頁。
- (35) 註(11)に同じ。
- (36) 註(27)・(28)に同じ。
- (37) 大橋康二「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」(肥前地区古窯跡調査報告書第3集 佐賀県立九州陶磁文化館1986年)20・21頁。
- (38) 大橋康二「いわゆる京焼風陶器の年代と出土分布についてー肥前産の可能性のあるものを中心としてー」(『青山考古』第8号 1990年)22頁。
- (39) SK7・SK10のような形態を呈する灯火具は、東京都下の江戸遺跡では出土例が比較的少なく、小林克や岡角まりの集成の中には顕例を見出すことができない。ただし東京都新宿区内藤町遺跡ではC-142号遺構(18世紀後半～19世紀前半の遺物と共伴)などから、志戸呂系(?)陶器とされるものが少数出土している。九州地域では近世の消費地道跡の調査の蓄積自体がまだまだ少ない状況にあるが、府内城三ノ丸遺跡で2例、福岡県北九州市瀬戸方遺跡C区1号溝で1例出土しているのに加えて、生簀地である佐賀県藤津郡塩田町志田焼窯跡で類品が採集されている。現状では、江戸遺跡で出土例が少ないことや九州地域に類品が認められることなどを参考にと、当該資料は九州産のものである可能性が高いと考える。以下の文献参照。
笹尾局之「江戸時代のあかり」(『考古学と江戸文化』江戸遺跡研究会第5回大会発表要旨 1992年)
小林克「『江戸時代のあかり』コメント」(同上)
江戸在地系土器研究会(文責 岡角まり)「江戸在地系土器型録5 灯火具」(『東京の遺跡』No.37 1992年)
井汲隆夫「内藤町遺跡」第Ⅱ分冊遺物編(東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会 1992年)234頁。
前田義人「瀬戸方遺跡」北九州市埋蔵文化財調査報告書第51集(財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1986年)54頁。

坂田町歴史民俗資料館『坂田のやきもの 志田焼展』(1989年)26頁。

(40) 註(33)に同じ。

(41) 註(32)・(33)に同じ。

(42) 註(18)に同じ。

(43) 註(27)に同じ。

(44) 西田宏子・大橋康二『古伊万里』別冊太陽(平凡社 1988年)80・81頁。

(45) 考古資料としての紅皿については、以下の文献参照。

山村博美『江戸時代の化粧—考古資料との関連から—』(『考古学と江戸文化』江戸遺跡研究会 第5回大会発表要旨 1992年)

鈴木裕子『考古資料としての化粧道具—陶磁器の場合—』(同上)

(46) 大橋康二『肥前陶磁の変遷と流通』(『江戸のくらし—近世考古学の世界—』新宿歴史博物館 1990年)

馬場強ほか『長与焼の研究—長与里山古窯物原発掘報告書—』(長与町教育委員会 1974年)

つまりこの紅皿は、大坂新町の笹紅屋からの発注によって肥前長崎長与窯で焼成された後、紅を入れて大坂笹紅屋の店頭で販売されたものを消費者が購入し、大分府内の地に持ち帰ったものである。この消費者が当屋敷に居住する木村氏の関係者であるのか、あるいは贈物などとして第三者から恵与されたものであるのかどうかは不明である。いずれにせよ、この紅皿は肥前→大坂→府内大分の経路をたどったことになる。また近年の調査では、兵庫県明石城下町でも同様の紅皿が出土している。

山下史朗『明石城武家屋敷跡、兵庫県文化財調査報告第109番(兵庫県教育委員会 1992年)図面31。

(47) 西田宏子・大橋康二『古伊万里』別冊太陽(平凡社 1988年)88頁。

鳥屋門を入れた集食容器は肥前で生産されたことが指通されており、本例のような「肥後 渡辺 一処入 鳥屋門」の文字を描いたもののほかに、「肥前 鳥屋門」を記したものが存在する。後者の「肥前鳥屋門」は佐賀県西松浦郡有田町年木谷1号窯や佐賀県藤津郡嬉野町吉田2号窯で出土している。年木谷1号窯では伝承などとも考え合わせて、鳥屋門の容器を焼成したことは間違いないとされているが、吉田2号窯のものは生活で使用されたものが廃棄されたものとされている。なお、「肥後 渡辺 一処入 鳥屋門」を記したものは生産地では確認されていない。

大橋康二『下白川窯・年木谷1号窯』(肥前地区古窯跡調査報告書第5集 佐賀県立九州陶磁文化館 1988年)27・30頁。

大橋康二『嬉野町吉田2号窯跡』(肥前地区古窯跡調査報告書第6集 佐賀県立九州陶磁文化館 1989年)11頁。

(48) 小田村宏・児林一成『関田片川遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第20集 山口市教育委員会・株式会社林業商會 1985年)84頁。

近年の調査では、広島城外堀跡紙屋町交差点地点の調査でも「肥後 渡辺 一処入 烏犀門」の文字を描いたものが出土している。

高下洋一『広島城外堀跡紙屋町交差点地点』（財）広島市歴史科学教育事業団調査報告書第6集 1992年）18頁。

- (49) 西岡義貴ほか『萩焼古窯』山口県埋蔵文化財調査報告書第131集（山口県教育委員会 1990年）
大分県下における現在までのビラ掛け小碗（長門深川焼Ⅱ-b類）の出土遺跡は、府内城三ノ丸遺跡のほか、大分市穂田市遺跡・宇佐市下林遺跡（後者については宇佐市教育委員会小倉正五・江藤和幸氏教示）の3箇所に留まる。ただし当該時期における萩焼の流通の状況から、豊前豊後地域は量的には多量とは言えないまでも萩焼の流通圏に入っていることが予測され、将来県下における近世遺跡の調査が進めば、出土遺跡数はさらに増加するものと思われる。県下における萩焼の出土遺跡については、玉永光洋氏の教示による。
- (50) 古永陽三「長崎の陶磁」（『長崎の陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館 1988年）130頁。
下川達彌「土師野・現川・長与の諸窯の発掘調査について」（同上）136頁。
- (51) 註(18)に同じ。
- (52) 註(32)・(33)に同じ。
- (53) 同上。
- (54) 辻真人「民俗例にみる焙烙」（『江戸在地系土器勉強会通信（仮称）』No.6 1989年）
小川望「蓋形製品に関する一考察」（『江戸在地系土器研究会通信』No.14 1990年）
小林謙一「小川望「蓋形製品に関する一考察」へのコメントーミもフタもない話ー」（『江戸在地系土器研究会通信』No.15 1990年）
辻真人「コメント」（同上）
- (55) 当該使用と酷似する土師質土器小皿が、大分市机原女塚墓（未発表。田中裕介氏教示）より、19世紀前半以降の墓の副葬品として出土している。
- (56) 河原正彦ほか『日本やきもの集成』5京都（平凡社 1981年）115・116頁。
河原正彦『京焼』（平凡社 1990年）117・118頁。
- (57) 鳥飼入れについては、小林克「鳥のえさいれ」について（『江戸遺跡研究会会報』No.15 1988年）参照。また、肥前産の白磁鳥飼入れについては、当遺跡のほかに熊本城跡で出土しているという。大橋康二氏の御教示による。
大橋康二「五日牛南組遺跡出土の鳥飼入れについて」（『群馬県佐波郡赤堀町五日牛南組遺跡発掘調査報告書』歴史時代編所収（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992年）109・110頁。
- (58) 東京大学遺跡調査室「医学部付属病院地点」東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3（1990年）727頁。
- (59) 大橋康二「志田焼について」（『堀田のやきもの 志田焼展』堀田町歴史民俗資料館 1989年）
大橋康二「堀田町志田西川1号窯跡」（肥前地区古窯跡調査報告書第8集 佐賀県立九州陶磁文

化館 1991年)

- (60) 大手前女子学園有岡城跡調査委員会『有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ』(1987年)32頁。
- (61) 清水宗昭・吉田寛「馬場尾遺跡」(『大分空港道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査Ⅱ』大分県文化財調査報告第88集 大分県教育委員会 1992年)191頁。
- (62) 塩田町歴史民俗資料館が1991年に開催した第2回特別展「塩田のやきもの」に出品された資料の中に、明治4年(1871)銘を持つ型紙摺り技法の文様を持つ茶付皿が認められる。このことから明治期の型紙摺り技法は、明治4年には出現していることが明らかになっている。
- 大橋康二「塩田のやきもの」(『塩田のやきもの 第2回特別展』塩田町歴史民俗資料館 1989年)5頁。
- (63) 城島岩太郎については、大橋康二氏の御教示による。
- 中島浩氣『肥前陶磁史考』(1936年)参照。
- (64) 註(33)に同じ。
- (65) 千代田区紀尾井町遺跡調査会『東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告書』(1988年)
- (66) 天内克史「統制経済下における陶磁器生産の様相」(『村上徹君追悼論文集』村上徹君追悼論文集編集委員会 1988年)参照。

大分県下で刊行された発掘調査報告書において、戦時中の統制番号を記載した陶磁器類の報告はほとんどない。管見の限りでは、大分市長谷横穴墓群において「岐108」(「岐」は生産地である岐阜を示す。)を記した磁器碗の実測図の掲載があるのが唯一の例であるが、その性格や時期についての記載はない。長谷横穴墓群の報告例は、例えば横穴墓が戦時中に防空壕などとして使用されたことなどを考古学的に傍証する遺物となり得るものかもしれない。なおこれも蛇足となるが、宇佐市高森城跡の戦時中の出土遺物の一部を紹介した小倉正五のコラムの中にも、この種の統制番号を有する磁器類については注意されていない。

池邊千太郎「長谷横穴墓群」(大分市教育委員会 1992年)72頁。

小倉正五「コラム 史跡としての航空隊」(『宇佐航空隊の世界Ⅰ』宇佐編見談本③ 豊の国宇佐市報 1992年)118-120頁。

- (67) 塩田町歴史民俗資料館(『塩田のやきもの 第2回特別展』1989年)21・25・33頁。
- (68) 瀬戸新製焼きでは明治後半から大正期にかけて、磁器碗の内底部に手書きによる屋号名を描きつけていたものが、大正末から昭和初期にかけて、印に変化することが指摘されている。府内城三ノ丸遺跡でも土坑の一括資料としてはS K 21の磁器碗に見られるような手書きによる屋号名を有するもの(第112図-5・6・17)とS K 17の印を持つものとは明瞭な時期差で捉えられる可能性が高い。東海地域と本遺跡出土遺物の生産地では細かな様相の違いが見られようが、変化の方向を指摘しておきたい。なお、瀬戸新製焼きについては以下の文献参照。

服部郁「幕末から明治の瀬戸窯―瀬戸新製焼―」(『遺跡にみる幕末から明治』江戸遺跡研究会

第6回 大会発表要旨 1993年)

- (69) 大橋康二「肥前磁器の変遷—技法と器形からみた—」(『柴田コレクション展』(1) 佐賀県立九州陶磁文化館 1990年)233頁。
- (70) 註(66)天内克史文献に同じ。
- (71) 天内克史「防衛食」(『郵政省飯倉分館構内遺跡』港区麻布台一丁目遺跡調査会 1986年)314・315頁。
- (72) 内底部に「玩」字を記すものは、佐賀県西松浦郡有田町樋口3号窯跡などで検出されている。大橋康二『有田町史』古窯編(1988年)383頁。
- (73) 土人形については以下の文献参照。
安芸穂子「土人形について」(『川上会館・御殿下記念会館地点』第3分冊考察編 東京大学埋蔵文化財調査室 1990年)
安芸穂子「江戸遺跡にみる土人形—遺跡の性格と出土遺物—」(『江戸在地形土器の研究I』1991年)
惟村忠志「土人形研究の着想と展開—江戸の土人形をめぐる諸問題を中心として—」(『牟婁志』第4号 1991年)
なお、これも蛇足となるが大分県下での近世土人形の出土例は、管見の限りでは府内城三ノ丸遺跡のほかには大分市横田市遺跡(未報告、1994年報告書刊行予定)・大分市内近世墓・杵築市馬場尾遺跡でしか認められていない。ただこれも将来近世遺跡の調査が進めば、出土例が増加するものと思われる。横田市遺跡出土の一部と大分市内近世墓出土例は下記文献で紹介されている。
大分市歴史資料館「九州の土人形—その歴史と世界—」(1991年)3・38頁。
馬場尾遺跡の土人形については、下記文献参照。
清水宗昭・吉田寛「馬場尾遺跡」(『大分空港道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査Ⅱ』大分県文化財調査報告第88輯 1992年)190頁。
- (74) 土製の湯釜は、県下では大分県中津市大根川遺跡(1993年3月報告書刊行予定)でも出土している。
- (75) 古泉弘「江戸を掘る」(柏書房 1983年)120頁。
古泉の煙管の分類については細部の検討の余地はあるものの、おおまかな流れとしては問題のないことが小川望や豊田裕章によって検討されている。
小川望「出土遺物からみた江戸の喫煙風習」(『考古学と江戸文化』江戸遺跡研究会第5回大会 1992年)
豊田裕章「煙管と近世初期風俗画—17世紀代における京・大坂・堺の出土例を中心として—」(『関西近世考古学研究』Ⅲ 1992年)
- (76) 新宿区教育委員会「三栄町遺跡」(1988年)190頁。
三栄町遺跡ではA区第21号遺構より「□間間住 □森土佐守」の文字と印判が彫られた赤面石製

碗が出土している。第21号遺構からはくわんか手の肥前煎染付碗や「泉湊伊織」、「播磨大権上」および「大権上頼盛」の刻印を持つ焼塩甕が出土しており、遺構一括資料の実年代は18世紀後半から末に位置づけられるものである。府内城三ノ丸遺跡S K 14・15出土資料の年代が8世紀中葉を下限とするものであることと比較すると、当該資料には同じ「大森」姓を記しながらも「土佐守」の文字が見られないことや印判の刻印の細部が異なることなどが注意される。今後の検討課題としたい。

- (77) 高橋信武編『杵築小学校校内遺跡』(杵築市埋蔵文化財調査報告書第1集 杵築市教育委員会 1987年)13-14頁。
- (78) 同上。
- (79) 菊田徹編『臼杵石仏群地域遺跡発掘調査報告書』(臼杵市教育委員会 1982年)46-47頁。
- (80) 池邊千太郎『上野遺跡』(大分市教育委員会 1990年)17頁。
- (81) 坪井利弘『日本の瓦屋根』(理工学社 1976年)49頁。
- 坪井利弘『国産瓦屋根』(理工学社 1976年)22頁。
- (82) 註(81)文献に同じ。

Ⅳ.まとめ

前項では、今回の発掘調査で検出した府内城三ノ丸遺跡の遺構・遺物を紹介した。今回は主に土坑出土遺物の年代を基本に、遺構の所属年代を7期8小期に大別した。個々の遺構の所属年代を示したものが第48表である。江戸時代に相当するⅠ～Ⅴ期に所属する土坑は、Ⅰ期（16世紀末～17世紀初頭）2基、Ⅱ期（17世紀前半～後半）6基、Ⅲ期（17世紀末～18世紀中頃）4基、Ⅳ期（18世紀後半）9基、Ⅴa期（18世紀末～19世紀前半）2基、Ⅴb期（19世紀前半～中頃）10基が存在する。このうちいくつかの遺構は出土遺物が少ないものや製作年代が大きくかけ離れた遺物が混在するものがあり、必ずしも良好な一括資料とはいえないものもある。ただし良好な一括資料の中には、考古学的のみならず、府内城下の歴史を考える上でも重要と思われるものが存在する。以下、出土遺物や遺構に関する若干の考察を行い、本調査のまとめに代えたい。

（1）SK20・SK23の出土遺物について —Ⅰ期出土遺物とその意義—

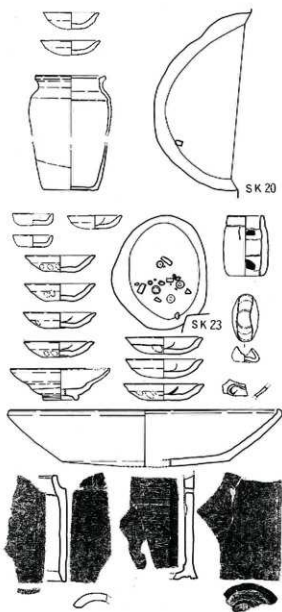
府内城創建期に相当するⅠ期（16世紀末～17世紀初頭）に属する遺構には、SK20とSK23の2つがある。いずれの遺構でも陶磁器類と土師質土器が共伴しており、特にSK23では肥前唐津系陶器皿・備前系陶器大平鉢・焼塩壺・土師質土器小皿・瓦破片などが良好な状態で共伴している（第146

本編	遺構の年代	主要関連事項
1250	0 SK30	
1600	I SK20 SK23	文禄2年(1593) 早川長敏入部 慶長2年(1597) 松原重高入部 慶長4年(1599) 早川長敏入部 慶長6年(1601) 竹中重利入部
1650	II SK29 SK32 SK35 SK36	寛永11年(1634) 日佐野吉明入部
1700	SK31 SK32	万治元年(1658) 松平忠昭入部 番町院建立 延宝4年(1676) 木村藏人屋敷跡となる
1750	III SK8 SK11 SK14・15	寛保3年(1743) 寛保の大火
1800	IV SK1 SK19a SK4 SK19b SK9 SK25 SK12 SK26 SK38	
1850	Va SK2 SK3	上層遺構 SD1?
1900	Vb SK5 SK22 SA2? SK7 SK39 SE1? SK10 SK44 SK16 SK45	明治3年(1870) 幕府院移転 明治9年(1876) 大分県尋常学校設立 明治33年(1900)
1950	VI SK21 上層遺構 SA1? SE2? SK17	大分高等女子学校設立 昭和20年(1945) 第二次大戦終了

第48表 遺構の所属年代

図)。近年の考古学的な成果を参照しながら、個々の遺物の年代と性格を考えてみたい。

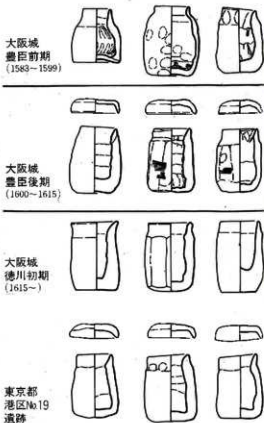
まず、SK23の出土遺物(22-24頁)を検討する。陶磁器類では混入と思われる備前系陶器擂鉢と中岡産白磁皿の破片を除けば、肥前唐津系陶器皿(第12図-20・21)が注目される。これらは内面に鉄絵を施すものと見込みに目積みの跡が認められない二者があり、後者は胎土目積み技法によるものと思われる。これらは大橋康二によって1580年から1610年代に比定されているもの⁽¹⁾で、当該遺構の一括資料の年代を決める示準的な遺物である。次に注目される遺物は焼塩壺(第12図-17)である。本遺構出土の焼塩壺には内面に輪積み痕と布目痕が認められ、口縁部と胴部の境がやや強くすぼまる器形を呈する。胴部外面には面取りがみられる。全体の3分の1程度の破片で、残存部に刻印は認められない。器形の特徴は渡辺誠のA類⁽²⁾、両角まりのA-α-α'類⁽³⁾に分類されるもので、刻印を有することのない比較的初期の焼塩壺である可能性が高い。このような特徴を有する無刻印の焼塩壺の製作年代は、いつごろに位置づけられるであらうか。焼塩壺については、胴部に押印された刻印との関係で実年代が検討されてきた。刻印を有する焼塩壺については渡辺誠により、①「ミなと藤左エ門」→②「天下一堺ミなと藤左エ門」→③「天下一御壺塩師堺湊伊織」→④「御壺塩師堺湊伊織」→⑤「泉湊伊織」の変遷が跡づけられている。そして本項目と関わる初期段階の刻印については、②の刻印を有するものが『堺鑑』(貞享元年=1684年刊行)に見える「天下一」の称号が与えられた承応3年(1654)



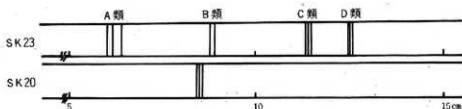
第146図 SK20・SK23出土一括遺物
(遺構S=1/60 土器・陶磁器類S=1/6 瓦S=1/6)

であろうか。焼塩壺については、胴部に押印された刻印との関係で実年代が検討されてきた。刻印を有する焼塩壺については渡辺誠により、①「ミなと藤左エ門」→②「天下一堺ミなと藤左エ門」→③「天下一御壺塩師堺湊伊織」→④「御壺塩師堺湊伊織」→⑤「泉湊伊織」の変遷が跡づけられている。そして本項目と関わる初期段階の刻印については、②の刻印を有するものが『堺鑑』(貞享元年=1684年刊行)に見える「天下一」の称号が与えられた承応3年(1654)

以降に比定されることが指摘されたが、①の刻印を有するものについては具体的な年代が与えられなかった⁽⁴⁾。これについて小川望は、東京大学構内遺跡医学部付属病院地点（以下、病院地点と略称）池遺構で①の刻印を有する焼塩壺1点が寛永6年（1629）銘を有する木製品と共伴したこと⁽⁵⁾と大手前女子大学が行った大坂城三ノ丸跡での調査成果⁽⁶⁾から、焼塩壺に刻印が押され始める時期を元和元年（1615）から寛永6年（1629）の間に考えた⁽⁷⁾。病院地点池遺構では、①の刻印を持つ焼塩壺とともに無刻印の焼塩壺も共伴している。東京大学構内遺跡御殿下記念館地点（以下、御殿下地点と略称）532号遺構⁽⁸⁾では、①の「ミなと藤左エ門」の刻印を持つ多量の焼塩壺とともに17世紀前半代の陶磁器類が良好な状態で出土している。また東京都港区No.19遺跡38号遺構⁽⁹⁾では、無刻印の焼塩壺とともに鉄絵の唐津系陶器皿や志野焼・瀬戸美濃系陶器などが共伴している。この遺構では刻印を有する焼塩壺は出土していない。つまり上記3遺跡での調査成果と陶磁器類の年代線とを参考にとすると、港区No.19遺跡38号遺構→病院地点池遺構→御殿下地点532号遺構の変遷が追え、焼塩壺については時期が新しくなるに従って、無刻印のものから①の「ミなと藤左エ門」の刻印を持つものが増加する傾向にある。そして無刻印の焼塩壺が盛行する年代は、病院地点池遺構での成果より、少なくとも元和元年から寛永6年（1615～1629）以前に考えることが許されるであろう。以上は江戸遺跡での調査を参考にしたものであるが、同様な状況が近畿地方の調査からも窺われる。大坂城⁽¹⁰⁾では検出された焼土層や遺物の年代から、遺跡の時期区分を明応5年から天正8年（1496～1580）の石山本願寺期、天正11年から慶長20年（1583～1615）の豊臣氏大坂城期、慶長20年（1615）以降の徳川氏大坂城期の3期に編年している。さらに豊臣氏大坂城期については慶長2・3年（1598・1599）の三ノ丸築造に伴う盛土層を基準にして、豊臣前期（1583～1599）と豊臣後期（1600～1615）に細分する。考古遺物の様相としては、豊臣後期の一括資料には豊臣前期には認められなかった唐津焼・志野焼・織部焼が共伴することが多くなるといふ。焼塩壺は豊臣前期から出現するようであるが、この時期のものは上底状



第147図 焼塩壺参考資料(S=1/5)



第148図 土師質土器の口径

の平底を有したり、胴部内外面に顕著な指頭痕を有するものが存在するなど、初現期の焼塩甕の形態を表すものとする⁽¹¹⁾。それに対して豊後後期や徳川初期のものになると、先で検討した港区No.19遺跡38号遺構などで見られる無刻印の焼塩甕の形態に類似してくる(第147図)。同じように、京都府平安京内でも唐津焼や志野焼、織部焼などともに口縁がすばまり、胴部に面取りを有する無刻印の焼塩甕が検出されている⁽¹²⁾。府内城三ノ丸遺跡SK23出土の焼塩甕も口縁部と胴部の境が強くすばまることや胴部に面取りを有すること、さらには無刻印である可能性が高いことなどから、港区No.19遺跡や大坂城豊後後期以降の焼塩甕にみられる特徴をよく示している。よって当該資料の年代は、17世紀初頭から第1四半期前後に位置づけられるであろう。次に、土師質土器小皿(第12図-6-16)に注目したい。当該遺構出土の土師質土器小皿はすべて手捏ね整形によるもので、底部に糸切り痕を有するロクロ整形のものは認められない。器形の特徴としては底部付近に指頭痕が認められ、口縁付近に強いナデを施すことによって、端部を外反させるものである。内面にはナデの終点と思われる痕跡が認められることがある。このような整形手法・器形を有する土師質土器は、大分県下では豊前およびH田地域を除く豊後地域全域に分布しており、菊田徹によるⅨ類⁽¹³⁾、王永光洋によるB系列⁽¹⁴⁾、小柳和宏によるD類⁽¹⁵⁾に分類され、16世紀以降に位置づけがなされてきたものである。当該遺構出土資料は中世のものと比較して、器壁がやや厚い印象を与えるが、器形や整形手法の特徴より中世段階以降の在地系の土師質土器の系譜上に位置づけられるものである。さらに注意したいことは、これらが口径や器形から数種類に分類できることである。すなわち口径6.3cm前後のもの(A類)、口径8.8cm前後のもの(B類)、口径11.4cm前後のもの(C類)、口径12.5cm前後のもの(D類)の4種類(第148図)である。当該遺構ではこのうちD類のみに顕著なススの付着が認められ、A～C類は「食器」として、D類は「灯明皿」として使用されたことがわかる。当該時期の土師質土器の使用法について、興味深い史料が存在する。既に小柳和宏によって紹介されているものであるが⁽¹⁶⁾、水戸に幽閉中の大友義統が文禄4年(1595)に記した「当家中作法日記」(『増補訂正關年大友史料』31)がそれで、16世紀代の大友家の年中行事を忠実に伝えたものとされる。大晦日の歳取りの儀礼の中に、次のような記述がみられる。

「…手懸の米 上にだいたい、こふ五、小もちい五、かんし五、かち栗五、
大ちや碗のはち二入。

- 一 銚子ひさげ 口をつつむ
- 一 とし正 かなかけにすはる。
- 一 ひんたらい—— かはらけ—かさね也。下のかはらけに、もろむきをしき 上のかはらけに米を入るなり。
- 一 よろいのかかみ。
- 一 梅干、かはらけ—かさねにして、上のかはらけに米を入るなり。
- 一 へいし—双、口を包。

この史料中に見える「かはらけ」が土師質土器を示すことは疑いなく、その土師質土器を「—かさね」にして使用していることが記されているわけである。「—かさね」にする使用法とは複数規格の口径を有する土師質土器を重ねて使用することを意味するので、当該遺構出土の土師質土器の使用法を示唆するものとして重要であろう。このような土師質土器の使用法は、何処に系譜を求められるものであろうか。これについては、例えば公家の有職故実を記した中世後半から近世にかけての史料である『類聚雑用抄』や『貞丈雑記膳部之部』に見えるものである。後者の記述には手捏ね手法による土師質土器と思われる「へそかわらけ」が「小ちう」と呼ばれ、三回り大きくなるごとに法量規格の単位であると思われる「ど」が増加し、15度までの口径があったことを記している⁽¹⁷⁾。また京都府岩倉木野や深草の民俗学的調査によれば、土師質土器に「オオジュウ・コジュウ・コオロケ」と呼ばれる大・中・小の規格が存在し、土師質土器を重ねて用いる使用法も聞き取り調査によって採集されている⁽¹⁸⁾。このように中・近世段階の京都を中心とする近畿地方では土師質土器の口径が法量分化を起し、その法量の基準となるものが「度」という単位であったことが判明する。さらに複数の法量を有する土師質土器は、「重ねて」使用される視覚的な使用法を採用していることがわかるのである。このような複数の法量を有する土師質土器やそれを重ねる使用法は、古代以来手捏ね手法の伝統を継続してきた京都周辺で形成されてきたものであり、近年の考古学的所見によると15世紀前半には4法量の土師質土器のセットが明確になっているという⁽¹⁹⁾。前出の「当家中作法日記」にみえる「かはらけ」が、SK23出土資料のような手捏ね手法の土師質土器であるか否かの保証はない。ただし、重ねて用いるカワラケの使用法は今まで見てきたように、古代以降伝統的な手捏ね手法による土師質土器の盛行地域である京都地域周辺で育まれてきた可能性が高いことを考慮したい。豊後地域において16世紀以降に出現する菊田Ⅷ類、玉水B系列、小柳D類の土師質土器は、それ以前に手捏ね手法による土器作りの伝統が存在しないことから、京都地域に系譜を有するいわゆる「都ぶり」の土器として解釈されてきた。この「都ぶり」という意味には単に「手捏ね」という土器作りの技術の伝播に留まるものでなく、法量分化と口径の異なる土師質土器を重ねる使用法を含めた複合体としての文化の伝播を考えたいのである。また当該遺構における各型の口径の差異はA類とB類とが約2.5cm、B類とC類とが約2.5cm、C類

とD類とが約1.2cmを測り、土器製作に当たって一定の単位が認識されていたことを予測させる。そして、その認識された単位が京都地域周辺でいう「度」の概念に基づくものと想定することが可能であろう。以上、S K 23からの出土遺物の検討を行った。陶磁器類、焼塩壺、土師質土器ともI期の年代である16世紀末から17世紀初頭を大きく逸脱することがないことを確認しておきたい。次に、S K 20の出土遺物（24・25頁）を検討する。陶磁器については、肥前唐津系陶器壺（第13図-3・4）が認められる。これも大橋康二によって1580年から1610年代に比定されているものであり、一括資料の年代を決める示準的な遺物となるものである。土師質土器小皿（第13図-1・2）はS K 23出土のものと同様の特徴を有するものであり、陶磁器類の年代と同時期とみて差し支えない。土師質土器の内面にはわずかにスガが付着しており、当該遺構出土のものは灯明皿として使用されている。

以上、府内城三ノ丸遺跡におけるI期の出土遺物の年代を検討した。S K 23出土の焼塩壺の年代は17世紀第1四半期までを考慮しておかねばならないが、共存した陶磁器類の年代を参考にして、I期を16世紀末から17世紀初頭の幅の中でとらえておきたい。16世紀末から17世紀初頭という、日本の暦年代に直せば文禄・慶長期に相当する時期に、上記のような出土遺物が当該地点に存在する意義をどのように考えればよいのであろうか。慶長年間の府内地域は、福原直高・竹中重利により府内城およびその城下の建設・整備が進んだ時期である（第49表）。「埴城雑誌」等の記載を参照すれば、慶長4年（1599）に福原直高による三ノ丸屋敷が完成、同7年に（1602）に竹中重利による三ノ丸堀の掘削、同10年（1605）には府内城下を囲う外堀の掘削がなされている。つまり史料による限り、府内城三ノ丸の築造は17世紀初頭までになされていたことになる。前述の通り、S K 23の出土遺物には陶磁器類とともに焼塩壺や土師質土器小皿などが出土しており、江戸時代初頭の時期に当該地点で食物飲食あるいは供献を伴う何等かの儀式が行われたと考えられる。儀式の内容は明らかにはできていないが、少なくとも出土遺物の年代は文献に見える府内城三ノ丸の築造期に一致している。当遺跡におけるI期の遺構の意義は、出土遺物が示す16世紀末から17世紀初頭の時期に当該地点には既に城下が形成されており、居住者が何等かの儀式を行うような環境にあったことを示している。このことは史料にみえる福原直高・竹中重利の府内城三ノ丸築造を考古学的に傍証する史料ともなり得るのである。

以上、I期に位置づけられる遺構・出

府内城および城下の築造	藩主の動向
文禄2年（1593） 福原直高府内城築城に着手	慶長2年（1597） 早川長敏入部
慶長4年（1599） 二ノ丸東三重櫓・ 三ノ丸家臣屋敷完成	慶長2年（1597） 福原直高入部
慶長7年（1602） 竹中重利による府内城天守櫓・膳櫓・ 三ノ丸櫓・北西櫓（後の北里丸）完成	慶長4年（1599） 早川長敏再入部
慶長10年（1605） 府内城外堀掘削	慶長6年（1601） 竹中重利入部
慶長12年（1607） 城下への入り口として笠和口・堀川口・堀九升口の三御門を 設ける。	
慶長13年（1608） 城下の西北に堀川を掘削、京泊と命名する	

第49表 慶長年間における府内城および城下の築造過程

土遺物の意義を検討した。出土遺物の年代観と性格から、江戸時代初頭に当調査地点付近で何らかの儀式が行われた痕跡が検出され、それが史料にみえる府内城三ノ丸の築造を考古学的に傍証するものと考えた。ただしⅠ期の土坑は2基と少数に留まり、さらにいえば今回の調査で三ノ丸の築造を直接に示す整地層や区画などの施設が検出されたわけではなく、上記の想定もあくまでも傍証に留まるものである。今後別地点の調査で、さらに直接的な物証があがることを期待したい。

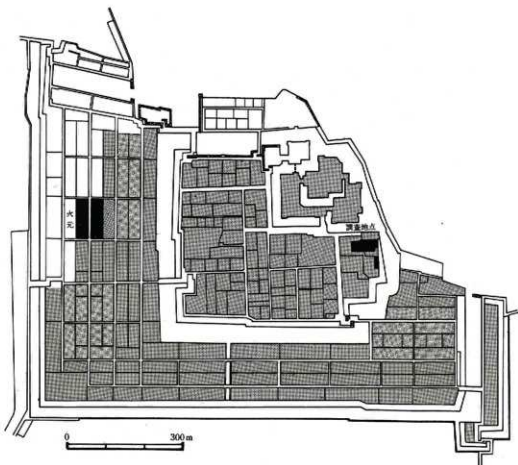
(2) SK14・15の出土遺物について 一寛保の大火(1743年)に伴う一括資料一

SK14・15はⅢ期に属する土坑である。裡土は単一の焼土層であり、出土遺物のほとんどが二次的な被熱を受けている。その中には強く火を受け、複数個体が溶着した状態で出土しているものも認められる。これらは火災により被熱したものが、当該遺構に廃棄されたものと予測できる。つまりSK14・15の性格は、火災処理土坑としての位置づけが可能である。出土遺物の状況から、陶磁器類の碗や皿、猪口の一部は複数個体を重ねた状態で土蔵の棚などに収納していたものが、火災に遭遇したことが想像される。

当該以降出土遺物の中で、時期的に最も新しい様相を持つ陶磁器類は、比較的簡略化されたコンニャク印判を持つもの(第16図-9・12)と蛇ノ目凹形高台を持つ青磁染付碗(13)であるが、これらも18世紀中頃までの製品である。また伝世される可能性が最も少ないものとしては、「サカイ 泉州唐生 御塩所」の刻印を持つ土師質土器焼塩壺(第19図-52)があり、小林謙一⁽²⁰⁾による近年の編年研究に従えば、1720～1740年代に比定できる。第50表は史料中にみえる府内城下で発生した火災の一覧を掲げたものである。このうち、当該遺構の年代と符合するものを検索すれば、寛保3年(1743)・宝暦6年(1756)・宝暦9年(1759)年の大火が浮かび上がってくる。当調査地点は、前述のように府内城三ノ丸の一画の福寿院と府内藩の上級武士である木村家の武家屋敷が存在した地点に相当している。これらの火災の中からその規模や範囲等を勘案すれば、当該遺構は寛保3年(1743)の大火に対応する火災処理土坑である可能性が最も高いと考える。寛保の大火⁽²¹⁾とは、近世府内城下町が体験した最大の火災であった。寛保3年(1743)4月7日午後2時頃、下柳町市兵衛宅より出火。火は北西の風にあおられて南東方向に広がり、中堀を越えて三ノ丸の浄安寺や福寿院、武家屋敷を焼きつくし、さらに内堀を越え府内城中におよび、本丸天守閣も夕方6時頃に焼け落ちた。昼火事だったので、城内・町中で死者は3名に留まったが、城内では本丸天守・東ノ丸・西ノ丸の櫓、里郷蔵・中郷蔵・71軒の侍屋敷(寺院を含む)を焼失し、町人町では門外の塩九升町を含む42町が焼け、焼け残った町は城下町北西部の8町(上、下紺屋町・寺町・今在家町・塗師町・田町・堀川町・船頭町)であった。焼失家屋は1,079軒で、家数の約70パーセントが被災したことになる(第149図参照)。SK14・15出土遺物の溶着した個体や陶磁器類のただれた器面などからも、この

元禄7(1694).11.1 正徳元(1711).3.21 享保19(1734).1.14	西町より出火、焼失町数10町、家数232。 生石村長吉裏出火、焼失188、残家46。 川町松本与七郎土蔵出火、町数24、家603、倉13、死人9(男6・女3)、城内酒井七兵衛屋敷焼失。
元文元(1736).1.14	火元中上市町岩田屋番三郎納屋、7町、家数111(本家89、裏家2、こぼち家2、空き家1、納屋8、馬屋9)。
寛保3(1743).4.7	火元下柳町市兵衛宅、焼失、本丸・天守はじめ城内大半、町42、家数1,079、ほか土蔵37、死人3、馬1。
宝暦6(1756).閏11.27 宝暦9(1759).9.2	火元後小路町、4町109軒。 火元萩原村孫兵衛納屋、4町142軒(内こぼち家4、表家14)ほか納屋8、厩23。
明和8(1771).2.2 安永8(1779).1.29 天明4(1784).12.1	火元下柳町清六、27町、家606、土蔵25、納屋67、馬屋14。 火元下柳町利兵衛、100軒余。 西新町下駄座平兵衛、家中77(内寺2)、家601、土蔵14、納屋60、馬屋6、堂2、室1。
寛政3(1791).1.2 寛政3(1791).12.19	古川町与六、3町、家35、納屋1、室1、土蔵13。 竹町裏助納屋(上柳町段六宅)16町、家301、土蔵4、納屋43室2、空家3、馬屋8、死人1。
享和元(1801).12.15、 12.16	勢家町彦松納屋、勢家、沖浜、船頭家114、馬屋・納屋58、土蔵19、寺社3。
文化7(1810).12.15 文化9(1812).12.19 文化10(1813).11.11 天保9(1838).12.23	下柳町季代治、三ノ丸へ飛び火、187軒。 火元沖ノ浜町、町屋133、徒士足軽4。 萩原出火、241軒。 生石出火、勢家、萩原、農家647、寺2、庵1、土蔵199。

第50表 「府内藩日記」にみえる大火(100軒以上焼失のもの)。「大分市史」中より)



第149図 寛保の大火による被災範囲(『大分市史』中、原図を改定)
(黒ヌリが火元、トーンが被災範囲)

ような大規模な火災をほうふつとさせる印象を受ける。参考までに『豊府指南』にみえる記事を掲げておきたい⁽²⁵⁾。

「右寛保三癸四月七日未下刻、下柳町市兵衛ト申ものの宅より出火、乾ノ風強、三ノ九侍屋敷不残焼失、浄安寺福壽印共ニ。セツ半時、西ノ九二重櫓に火移、本丸書院、居間、玄間、天守、北大門、冠木門、二重櫓、東大門、二階広間、多聞鐘櫓、本丸口櫓門、小森下橋、土蔵、菱櫓冠木門、山里廊下橋、東ノ九座鋪廻り不残、三階櫓、良角櫓、涼所、玄間前平櫓、同所冠木門、玄間、広間、大書院上榎、小書院中奥居間、台所、三ノ九西口二重櫓、同所門番所、里郷倉、中郷倉、侍屋敷、寺院共七十一軒、家中土蔵十二焼失、長池倉とも焼失。

一残分

西九台所、坤角櫓、平櫓、本丸扇子櫓、山里角櫓、東ノ九南ノ角櫓、廊下橋並番所門櫓、土蔵、東口二階門櫓番所、北ノ口二階櫓門櫓番所、西ノ口門櫓、平櫓、北中櫓、中島口小門、北ノ九口小門、中島茶屋、御城米倉、侍屋敷、堀川口船奉行屋敷、奥郷倉、町郷倉、西ノ口中郷倉、但櫓十三ヶ所、内門櫓四ヶ所、侍屋敷七軒、倉三ヶ所、家中門土蔵残分、上蔵七ヶ所、門七ヶ所、内裏門式ヶ所、御城下上下組屋町、寺町、今在家町、塗師町、田町、堀川町二丁、船頭町、三口御門番所、並東西新町、右の分相残候。但獄屋相残也。」

さて、S K 14・15の出土遺物が1743年に発生した寛保の大火に対応するという想定を正しいとして、以下の記述を進めたい。前述のように、S K 14・15の出土遺物には陶磁器の製作年代からみて次の4種類に分類される遺物が存在している（第150図）。

①16世紀末から17世紀前半代に比定されるもの。中河産の製品で、伝世品と思われる。三彩皿（第23図-77）や青磁獅子香炉（69）等注目すべき遺物もこの時期に含まれる。

②1630～1650年代に比定されるもの。青磁皿（第33図-111）と型打ち整形の白磁皿（第23図-72）、および染付瓶類（第17図-36）など肥前産の陶磁器が存在する。量的にはごく少なく、これらも伝世品であろう。

③1660～1680年代に比定されるもの。肥前産の陶磁器類が主体となる。長吉谷窯⁽²⁶⁾などに類例のある染付芙蓉手花鳥文大皿（第29図-93）、青磁大皿（第26図-86）、染付芙蓉手花虫文皿（第30図-96・97）、糸切り細工による染付施紅葉文変形皿（第32図-104・105）、染付波鶴文変形皿（106・107）等が注目される。

④1690～1740年代に比定されるもの。肥前産の陶磁器類が主体となり、ほかに京焼陶器皿（第24図-80-84）や「サカイ 泉州唐生 御塩所」の刻印を持つ焼塩皿（第19図-52）が相当する。肥前産の陶磁器類では、大皿類である染付菊流水文大皿（第26図-87）、染付花盆文大皿（第27図-87）、染付竹垣に蔓草文大皿（第28図-90）、染付楼閣山水文大皿（91）、色絵染錦手大皿（92）等が注目される。

土坑一括資料が、上記のような時期の異なる遺物群で構成されるのは何故か。S K 14・15の



第150图 SK14・15主要出土文物

存在する地点は府内城三ノ丸の中でも木村氏の屋敷地に相当する。第51表はV- (5) の佐藤晃洋論文より、17世紀後半から18世紀中葉前後の木村家の動向を抜き出したものである。木村家は万治元年 (1658) の松平入部と同時に府内城三ノ丸内に屋敷を構えるが、当初の屋敷は本調査地点ではなく、現在の府内町3丁目9番9号の現宮崎銀行付近に位置していた。本調査地

万治元年 (1658)	木村又三郎、松平忠昭の府内入部に当たり三ノ丸内に屋敷を構える。(現在の宮崎銀行付近)
延宝4年 (1676)	木村主水成富、本調査地点付近に屋敷替となる。
元禄5年 (1692)	木村藏人成友、家督を相続。
元禄11年 (1698)	木村主水成富病死。
宝永4年 (1707)	宝永大地震で被災。武家屋敷の門が倒れる。
元文2年 (1737)	木村祐左衛門成良、家督を相続。
元文4年 (1739)	木村祐左衛門成良、三ノ丸屋敷において塾居を命じられる。
寛保3年 (1743)	寛保の大火で被災。
延享3年 (1746)	木村祐左衛門成良塾居を許される、同時に木村又三郎成清に家督を譲渡するよう命じられる。
宝暦8年 (1758)	木村祐左衛門成良、再び筆頭家老に登用される。出仕に当たり、木村矢朝と改名。
宝暦9年 (1759)	木村又三郎成清、江戸で病死。
	木村又三郎成富が家督を相続する。

第51表 17世紀後半から18世紀中葉前後の木村家の動向

点付近に屋敷替えとなったのは延宝4年 (1676) のことで、以後幕末に至るまで本地点に居住している。そして宝永4年 (1707) の大地震で門が倒れるなどの災害に遭遇するが、これは火災を伴うようなものではなく、この時期まで記録に残るような大規模な災害を受けることはなかった。そしてこの1743年に発生した寛保の大火こそが、木村家が府内入部以来、当該地点で初めて遭遇した大規模な災害であったのである。前述したSK14・15の出土遺物は、その状況から複数個体を重ねた状態で土蔵の棚などに収納していたものが存在したことを想定した。これらの出土遺物の中で、①は中国製品で、伝世品と考えると差し支えないものである。②は量的にごく少なく、これらも伝世品であろう。③は木村家が府内に入部し、当該地点付近に屋敷を構えた時期に相当するもので、大皿や変形皿の一部など上手の製品が一定量存在する理由がここにある。④は寛保の大火直前の時期のものであり、当該遺構で量的に最も多数を占めるものである。また陶磁器類の器種でみると、磁器碗はすべて④に属しており、日常的使用頻度の高さを窺わせる。さらに大皿や変形皿には②・③・④に属するものがそれぞれ存在し、皿類が碗類と比較して伝世しやすい器種であったことわかる。つまり伝世しやすい器種と日常的に使用される頻度の高い器種が、当該遺構の一括資料として現出していると考えられるのである。また、当該遺構の出土品は火を受けて変形しているとはいえ、多量の大皿や複数個体で1セットとなる変形皿、および上手の白磁や色絵の猪口、茶陶と考えられる陶器類など高級品と位置づけられる陶磁器類が多く出土しているのことも特徴である。木村家は家老職など府内藩の要職についた上級武士であり、この一括資料は当該時期における府内藩上級武士の武家屋敷における食器の一組成を表すものと考えられる。このようにSK14・15の出土遺物は、火災処理による一括資料という意味で消費地遺跡における編年研究の指標となるのに留まらず、当地方の上級武士階級が有する食器の組成を知る上でも、今後有効な資料となるものであろう。

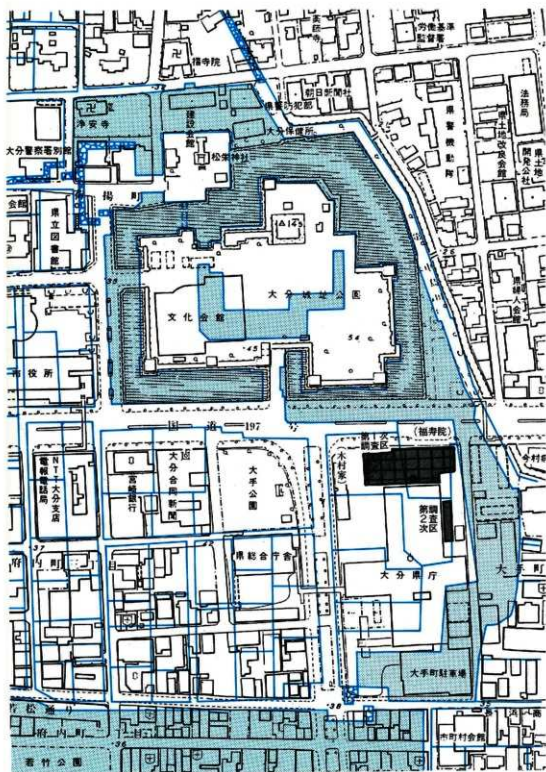
(3) 調査区における江戸時代屋敷割の想定 Ⅲ～Ⅴ期の遺構と遺物について

まず第151図を参照して頂きたい。図中のスクリーントーンを貼った部分が今回の発掘調査区、青のラインが1987年に大分市史編纂委員会が提示した府内城下復元図⁽²⁴⁾による屋敷地割である。『大分市史』所掲の府内城下町復元図は、慶長10年(1597)の「府内城下町絵図」(大分大学付属図書館蔵)を基本にして明治時代初期の地籍図・都市家計面前の測量図・ボーリング資料・現状確認等で補ったもので、絵図を基本とした城下町復元案として高く評価できるものである。復元図の原因図である「府内城下町絵図」を慶長10年(1597)の製作とすることにはやや疑問が残ることは前述したが(7頁参照)、その他の絵図と比較しても今回の調査区付近の屋敷割は基本的には変化が認められず、復元ラインの細かな出入りがあることは予測されるにせよ、まずはこの復元案を信頼して以下の記述を進めたいと思う。

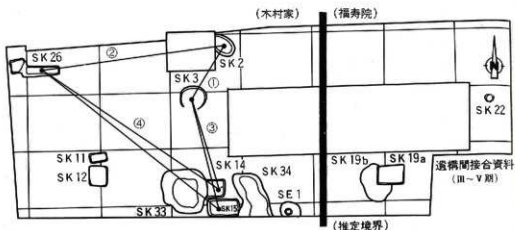
この復元図と文久3年(1863)作成といわれる「豊後府内藩御家中名前付」(写)等によると、今回の調査地点は府内藩の上級武士である木村家の武家屋敷や藩主大給松平氏の祈祷所から発展した寺院である福寿院の存在した場所に相当する。木村家は延宝4年(1676)、福寿院は万治元年(1658)に当調査地点付近に移転してきて以来、幕末に至るまで他の場所に移動することにはなかった。本報告で行っている時期区分ではⅡ期の後半からⅤ期に相当する時期である。ただ前述の通り、Ⅱ期の遺構・遺物は良好ではなく、本項目では比較的多量で良好な遺物が存在するⅢ～Ⅴ期の資料で検討を行いたい。

さて木村家の屋敷割は表屋敷だけでなく、裏屋敷とでもいうような後方に変則的につながる屋敷地を有している。今回の第2次調査区がこの裏屋敷部分に相当する。第2次調査区で検出された土坑S K 44からは「木村九郎次様」の焼継文字を持つ肥前染付角鉢(85頁。第66図-18)が出土しており、当該地点付近が木村家の裏屋敷部分であったことを傍証している。

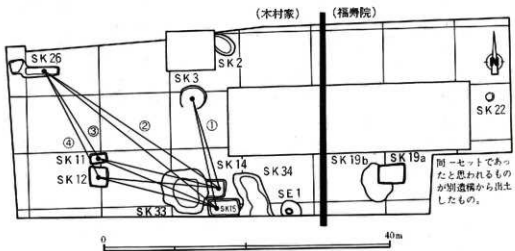
またこの『大分市史』所掲の復元図によると、第1次調査区内に木村家と福寿院の境界が存在することになっている。発掘調査の所見からは、遺構としては溝や櫓等の明確な境界を検出することには成功していない。ただ上記の通り、『大分市史』の屋敷割の復元案がかなり高い精度を有するという本稿の立場からすれば、発掘調査の範囲をも勘案して、遺構としては明確にはできなかったとしても、第1次調査区の範囲内に木村家と福寿院の境界部分が存在したという想定を行いたい。ここで『岡本家文書』所収の「御家中屋敷付」所載史料に着目したい。史料の詳細はⅤ-(5) 佐藤論文を参照頂くとして(306頁)、江戸時代後期の19世紀初頭に木村家と福寿院との間で、小規模な屋敷地の変更が行なわれている。すなわち享保4年(1804)、木村藏人は屋敷地の一部を福寿院9世了義上人の隠宅に提供する。了義上人は翌年の文化2年(1805)に入寂し、隠宅を取り壊した後の敷地は再び木村家に返還されている。了義上人の隠宅が、木村家敷地内のどの部分に存在したかを明確にはできていない。ただ上記史料から少なくともいえることは、木村家と福寿院との境界には例えば堀などの大規模な掘り込みを有する



第151図 府内城下復元図と発掘調査区 (S=1/3,000 ドットはSE1)



- ① SK 2 + SK 3 : 肥前染付蓋 (第57図31・第53図43)
 ② SK 2 + SK 26 : 肥前染付蓋物 (第47図12)
 ③ SK 3 + SK 14・15 : 肥前染付大皿 (第27図86)
 ④ SK 14・15 + SK 26 : 肥前染付芙蓉手花盆文大皿 (第27図89)
 唐津系陶磁器 (第20図60)・鉢 (第21図61) ほか



- ① SK 3, SK 14・15 : 肥前染付花文皿 (第57図32～36・第30図96・97)
 ② SK 26, SK 14・15 : 肥前染付皿 (第48図17・第31図102)
 肥前染付皿 (第48図19・第3図98)
 肥前染付流轉文変形皿 (第32図106, 107・第48図18)
 ③ SK 26, SK 11, SK 14・15 : 肥前染付あやめ文猪口 (第11図14・第47図10・第17図28)
 肥前染付猪口 (第11図15・第17図28・第47図11)
 ④ SK 26, SK 12, SK 14・15 : 肥前染付竹文皿 (第31図100・第48図16・第45図5)

第152図 出土遺物からみた第1次調査区の屋敷割

ような施設は存在せず、比較的容易に移動できる程度の構築物が境界となっていた可能性が高い。安政4年(1857)に作成された「福寿院図」(大分市松榮神社蔵。304頁参照)をみて、その境界部分は瓦葺の塀で区切られているのみであり、この部分に大規模な堀や溝などの施設は存在していないようである。それでは第1次調査区のどの辺りが木村家と福寿院の境界部分に相当するのであろうか。まず、手がかりになるのがSK33・SK34の出土遺物である。当該遺構出土の肥前産磁器碗や皿の中には「木村」の焼継文字を有するものが複数存在し、SK33・SK34付近が木村家の屋敷地内に相当することを示している。また第1次調査区E-5区に位置する井戸SE1⁽²⁵⁾も、SK34に極めて近接する地点に存在することから木村家所属のものと考えておきたい。そうなることの井戸SE1とその東側に位置する土坑SK19a・19bとの間に約8m程の空間が存在することになり、この辺りが木村家と福寿院との境界に相当することが考えられる。つまり、第1次調査区4-5ラインよりやや東側がその境界線付近に想定されるのである。第152図は、第1次調査区における遺構間接合資料と複数個体で1セットと推定される遺物が別遺構より出土したものを掲げたものである。近年東京都下の江戸遺跡では、この遺構間接合の状況が屋敷割推定の大きな手がかりとなっている。すなわち遺構間接合は基本的にひとつの屋敷割の空間内で収まることが、いくつかの遺跡の事例研究によって傍証されている⁽²⁶⁾。図示した通り、第1次調査区の遺構間接合資料は、推定福寿院地区では攪乱部分が多いこともあり、現状では接合資料が認められていない。ただ木村家の屋敷内と推定される4-5区ラインより西側では非常に顕著な遺構間接合資料が認められ、このラインを越えての接合関係は現状では認められていない。このことは複数個体で1セットと推定される遺物が別遺構より出土したものと同様で、むしろ遺構間接合より顕著な状況を示すことが窺われる。このことは屋敷割を推定する上での大きな手がかりとなると考える。

以上、絵図と発掘調査の成果から本調査区内における江戸時代の屋敷割の状況を推定した。境界部分と推定される遺構の残存状況が良好でなく、上記で想定したこともあくまでも状況証拠に留まるものである。今後機会があれば、さらに別地点の調査によって上記の想定を確実にしてゆくことが期待される。

- 註(1) 大橋康二「伊万里磁器創世期における唐津焼との関連について」(『佐久間重男教授退休記念中国史・陶磁史論集』1983年)
- (2) 渡辺誠「焼塩室」(『講座日本技術の社会史』2 塩業・漁業 日本評論社 1985年)
- (3) 岡角まり「土師質塩室類」(『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題』I 発表要旨 江戸陶磁土器研究グループ 1992年)
- 岡角まり「近世土師質塩室類整形技法の復元とその意味」(『江戸在地系土器研究会通信』No.33 1993年)
- (4) 註(2)に同じ。
- (5) 東京大学遺跡調査室「医学部付属病院地点」(東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 1990年) 587-595頁。
- (6) 大手前女子大学史学研究所「大坂城三の丸跡Ⅰ」(1982年)

- (7) 小川望「刻印からみた焼塩釜の系統性について—東京大学構内遺跡病院地点出土資料を例に—」(『医学部付属病院地点』東京大学遺跡調査室 1990年)893頁。
- (8) 東京大学遺跡調査室「山上会館・御殿下記念館地点」第2分冊御殿下記念館地点の調査(東京大学遺跡調査室発掘調査報告書4 1990年)176～192頁。
- (9) 港区西新橋二丁目遺跡調査会「港区No.19遺跡」(1989年)112・113頁。
- (10) 大阪市文化財協会「大坂城跡Ⅲ」(1988年)
大阪市文化財協会「藤波宮址の研究 第九」(1992年)
- (11) 「堺屋」によると焼塩釜は天文年間(1532～1542年)に創始されたという記事があり、その出現が16世紀前半から中頃までは遡る可能性がある。ただし、大坂城豊臣前期の焼塩釜と天文年間に存在したといわれる焼塩釜の関係は、現状では不明である。
- (12) 例えば京都府平安京押小路殿跡第3次調査では、慶長13年(1608)から寛永年間(1624～1644)に比定される土坑101より志野や唐津系陶器とともに無刻印の焼塩釜が出土している。また同志社大学構内遺跡徳照館地点FeSK 208などでも、無刻印の焼塩釜と陶磁器類の良好な資料が検出されている。
財団法人古代学協会「押小路殿跡・平安京左京三条三坊十一町」(平安京跡研究調査報告第12集 1984年)72～81頁。
鈴木重治「同志社大学徳照館地点・新島会館地点の発掘調査」(同志社大学校地学術調査委員会 1990年)32～35頁。
- (13) 菊田徹「東九州における中世土師質土器の様相一坏・皿形土器を中心として」(『専修考古学』第3号 1986年)
- (14) 王永光洋・小林昭彦「安岐城跡・下原古墳」(大分県文化財調査報告第76輯 1988年)32～35頁。
- (15) 小柳和宏「中世土器生産小考—文書・地名から土器生産地を探る—」(『大分県地方史』第143号 1992年)
- (16) 同上 21～22頁。
- (17) 百瀬正恒・橋本久和「中世平安京の土器様相と各地への展開」(『考古学ジャーナル』No.299/1988年)
- (18) 渡辺誠ほか「平安京土御門烏丸内裏跡—左京一條三坊九町—」(平安京跡研究調査報告第10輯財団法人古代学協会 1983年)93～95頁。
- (19) 註(17)に同じ。
- (20) 小林謙一「土器研究の現状と方針」(『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題』)1 発表要旨江戸陶磁土器研究グループ 1992年)
小林謙一・河角まり「江戸における近世土師質塩釜類の研究」(『東京考古』10 1992年)
- (21) この部分の寛保の大火に関する記載は、豊田寛三「大給府内藩の成り立ちと城下町府内」(『大分市史』中 1987年)488頁を参考にした。
- (22) 大分市史編纂委員会編「大分市史」上巻(1955年)633頁より。
- (23) 大橋康二「窯ノ辻・ダンバギリ・長古谷」(九州陶磁文化館 1984年)
- (24) 大分市史編さん委員会編「大分市史」中 付図Ⅳ(1987年)
- (25) 「大分市史」の復元図と調査区とを重ね合わせると、SE1は福寿院の原敷地内に収まってしま(第151図参照)。従って、発掘調査時にはSE1を前出の「福寿院図」にみえる寺院境内南西部の井戸である可能性を想定した。しかしSE1が「木村」の焼鹽文字を有する肥前磁器を出土したSK34と極めて近接する位置に存在することから、やはりこの井戸は木村家の敷地内に存在するものと考えておきたい。そうすると、上記の復元図はこの境界部分に関しては、若干の修正を行う必要が生じることになる。
- (26) 原浦正義「江戸遺跡研究の一視点—江戸の武家地における塵芥処理問題—」(『牟婁志』第3号 1990年)
小林謙一「江戸遺跡における塵芥の研究」(『東京考古』9 1991年)

・なお、Ⅳ-1)に関しては、王永光洋氏よりの直接の御教示と討論により、成稿できたものであることを明記しておきたい。氏の御好意に深く感謝する。

V. 付篇と考察

(1) 府内城三ノ丸遺跡出土の

陶磁器類について

本項目では、府内城三ノ丸遺跡出土の陶磁器類についての検討を行った。検討の目的は、陶磁器類の時間的様相・組成・器種別の変遷を調べ、九州北東部の豊後地域における江戸時代陶磁器の時間的な消費の様相を提示することにある。上記の目的を達成するために、府内城三ノ丸遺跡出土の陶磁器類を第52表に従って分類⁽¹⁾し、それぞれの分類に属する個体数をカウントした。分類に当たっては、2分の1以上が残存する口縁部・底部の個体識別を行い、それぞれを分類項目に当てはめた。破片が小さく分類不能のものについては、これを除外した。また小破片であっても、産地や器形が推定でき分類可能なものについては、カウントの対象としたものがある。さらにカウントには良好な一括資料と思われ、かつ出土個体数が50個以上を数えるSK14・15(Ⅲ期)、SK19a、SK19b(以上Ⅳ期)、SK2、SK3(以上Ⅴa期)、SK33、SK34(以上Ⅴb期)の7遺構を検討の対象とした。Ⅰ・Ⅱ期には良好な資料がなく、またⅣ期に位置づけられるSK26は50個体以上の出土が認められるものの、製作時期が大きく離れた個体が複数混在していたため検討の対象に加えなかった。以上の結果を第53表に示す。次にこの表から、時期別にみられる産地組成、時期別にみられる器種別組成、および碗にみられる時期別・産地別量比を算出し、帯グラフを作成した(第153図)。

第153図-1は時期別にみられる産地組成を示したものである。全時期とも肥前産のものが半数以上を占める。Ⅲ期(17世紀末から18世紀中葉)ではSK14・15というやや特異な状況にある遺構が分析対象となっていることから、伝世品である中国産のものを1割弱含むが、肥前産の陶磁器が7割以上を占め、他に関西系陶器や備前系陶器が少量存在するに過ぎない。Ⅳ期(18世紀後半)では肥前産陶磁器は8割以上を占めるが、関西系陶器碗が量的にやや目

材質	J:磁器	T:陶器
産地	A群:中国系 C群:瀬戸・美濃系 E群:備前・丹波系(専産を含む) F群:秋田系	B群:肥前系(九州産のものを含む) D群:関西系(京焼を含む) G群:兵庫三田系 Z群:不詳
器種	1:碗 3-a:中皿で、蛇ノ目凹形高台以外のもの。 3-b:中皿で、蛇ノ目凹形高台。高台高の低いもの。 3-c:中皿で、蛇ノ目凹形高台。高台高の高いもの。 4:小皿 8:猪口 12:蓋物 16:缸皿 20:漆鉢 24:急須 28:水筒	2:火皿 5:変形皿・型皿 9:仏飯器 13:蓋 17:合子 21:鳥餌入 25:土飯 29:灰落し 6:鉢 10:香炉 14:壺 18:楠木鉢 22:行平鍋 26:灯火具 30:段重 7:小杯 11:飯類 15:壺 19:漫瓶 23:土鍋 27:火鉢 31:その他
肥前産陶磁器の細分		
JB-1-a: b-c以外のもの。丸碗が主体となる。		
JB-1-b:青磁染付類を一括する。		
JB-1-c:小広東碗およびそれに類似したもの。		
JB-1-d:筒形碗。		
JB-1-e:小丸碗。		
JB-1-f:広東碗。		
JB-1-g:端反碗。		
JB-1-h:腰部がハ字状に開く飯碗類。		
JB-1-i:小丸碗口無 ⁽²⁾ とされる湯呑碗。		
JB-1-j:器高が深い湯呑碗。		
瀬戸・美濃系陶磁器の細分		
JC-1-a:端反碗。 JC-1-b:その他。		
肥前産陶磁器の細分		
TB-1-a:京焼風陶磁器。火器手執を含む。		
TB-1-b:唐津系網目紋碗。 TB-1-c:その他。		
関西系陶磁器の細分		
TD-1-a: b-c以外のもの。丸碗主体。		
TD-1-b:埴反の形態のもの。		
TD-1-c:小杉碗といわれる形態のもの。		

第52表 陶磁器類の分類項目

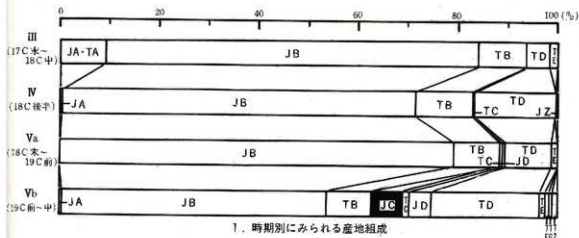
		J A					T A	J B																								
		3	7	10	11	13		17	3	1a	1b	1c	1d	1e	1f	1g	1h	1i	1j	2	3a	3b	3c	4	5	6	7	8	9	10	11	12
Ⅲ	SK14・15	7	1	2		1	1	9	30	2									24	42			11	35	1	3	16		1	1	4	
Ⅳ	SK19a	1							17		2								1	8	8						1				1	1
	SK19b	1							9	1	4	4							6	1			2	1		2	2			1	7	
V a	SK2								21		7								4	2		1	3	3	1	2			1		2	
	SK3								10	3	1	8		1					7			2	1		2					3		
V b	SK33								15	12	1				11	1	10	4	7	5	2	8		3	5		8	2	8		19	
	SK34	1				1			3		1				11	1	4		1	5	2	3		3	8	1	1	2	1	11		

		JB						TB															JC				TC					
		16	17	21	28	29	30	31	1a	1b	1c	3	4	6	10	11	13	14	15	20	24	25	29	31	1a	1b	3	16	1	16	18	
Ⅲ	SK14・15						2		1	1	1		8		2	1	4	2					3									
Ⅳ	SK19a	4				2													6		1										1	
	SK19b	1										2						1	4													
V a	SK2	5			1	1		1	2										6													
	SK3					1		1											3											1		
V b	SK33	15					1	4	2					2	1	1	6		5	9	5		1		17	2					1	2
	SK34	3	1	1			2				1	2					1						1		4	3	1			2		

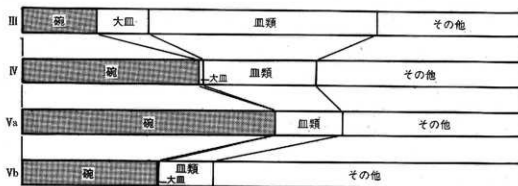
		J D		T D																												T E				TF	JG	JZ	TZ	合 計
		7	10	1a	1b	1c	3	6	10	11	13	14	17	18	22	23	24	25	26	29	30	31	11	20	29	31	1	3	3	7										
Ⅲ	SK14・15					8			1	2													2		1								231							
Ⅳ	SK19a			5			2			5	1				1																		68							
	SK19b				1					1												1									1		53							
V a	SK2			4						2														1	1								69							
	SK3		1	3											1									1	1								51							
V b	SK33	12			7	2	3	1	1	22	1		1	11	1	7	5	3	6														289							
	SK34	4				1	1			4	1		1	1	1	1	1	3						2									103							

第53表 主要遺構出土遺物組成表

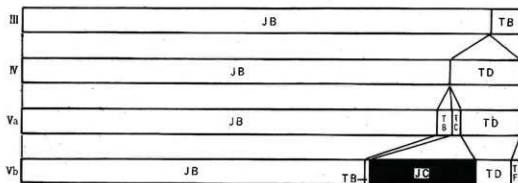
立つようになり、全体の1.6割程度を占める。V a期（18世紀末から19世紀前半）でもこの状況は変わらず、肥前産陶磁器が8.4割、関西系陶器が約1割を占める。この時期になると、量的には少量であるが瀬戸美濃産陶器の槇木鉢（第41回～54）が出現しており、注目される。V b期（19世紀前半から中頃）になると、産地組成に変化がみられるようになる。この時期には、槇木鉢・瓶類・土瓶・急須・行平鍋・土鍋など陶器の器種の多様化に伴い関西系陶器の増加がみられ、総量の2割強を占めるようになる。これによって肥前産のものは6割強と相対的に少なくなる。さらに注目されることは、量的には6.9パーセントと少ないが、瀬戸美濃産の磁器製品が出現し、一定量を示すようになることである。この瀬戸美濃産磁器製品は、いわゆる新製焼きといわれる染付端反碗やいわゆる「寿皿」といわれる見込みに「寿」字を圖案化したスタンプを有する白磁皿（第101図～68）が主体となる。この時期関東地域では、瀬戸美濃産の陶磁器が全体量の3割を超える量を占めるに至る⁽³⁾が、九州北東部に位置する府内では1



1. 時期別にみられる産地組成



2. 時期別にみられる器種別組成



3. 碗にみられる時期別・産地別量比

第153図 陶磁器類の統計化

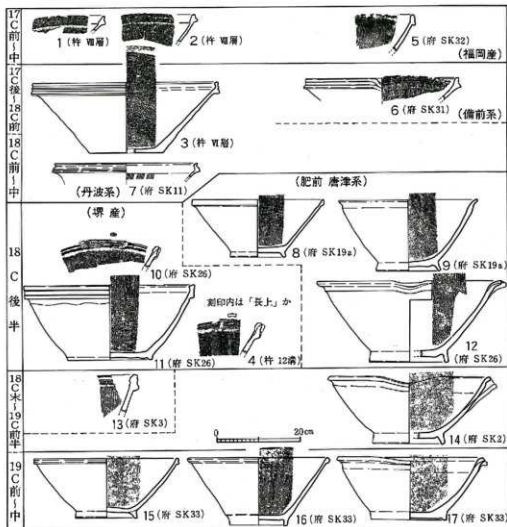
制を越えない程度の量である。とはいえ、当地でもこの時期に陶磁器のシェアにあらたに瀬戸美濃産磁器の参入が認められる意義は大きいと考える。

第153図-2は時期別にみられる器種別組成を示したものである。IV-(2)で既に触れた

ように、Ⅲ期のSK14・15では大皿の出土が1割以上と多く、これを含めて皿類の出土量が全体の5.5割以上に達する。これは碗の約1.5割を大きく上回るもので、当該遺構出土遺物の組成がやや特異であることを窺わせるものである。Ⅳ期では碗約3.5割、皿約2.3割、Ⅴa期では碗約5割、皿約1.3割、Ⅴb期では碗約2.7割、皿約1割強といずれも皿は碗の総量を越えない数値となる。また注目すべき点は、Ⅲ期からⅤa期までは碗と皿類で出土陶磁器類の総量の約6割から7割を占めていたものが、Ⅴb期に至りその他の器種が6割強を数え、碗・皿類とその他の器種とが組成に占める割合が逆転することである。このことは先に指摘した通り、Ⅴb期における陶器類の器種の多様性を反映するものとして興味深い現象である。

第153図-3は碗にみられる時期別・産地別量比を示したものである。全時期を通じて肥前産のものが7割以上を占め、肥前産の陶磁器碗が豊後府内地域における主体的なシェアを担うものであることがわかる。Ⅲ期では肥前産のものが100パーセントとなるが、Ⅳ期以降になると関西系の陶磁器碗が0.7割から1.3割と一定量を占めるようになる。またⅤb期では量的にはごく少量であるが、山口県の新焼陶器碗やピラ掛け小碗などが認められるようになる。さらに注目すべきことは、Ⅴb期になると瀬戸美濃産磁器碗が約2割を数え、関西系陶器碗を上回る数となることである。ただしこの数値には、いくぶん注意が必要と考える。府内城三ノ丸遺跡でⅤb期に位置づけられるSK33・SK34の瀬戸美濃産磁器は、染付端反碗が主体となる。このうちSK33からは複数個体で1セットをなすと思われる同一規格同一形態のものが認められ(第69図)、最少出土個体数が7個以上のものも存在する。SK33からの瀬戸美濃産磁器碗の個体数は総数19個を数え、これは碗の総数82個中の23パーセントを占める。一方、SK34からは外面に隸字体文を描く瀬戸美濃産染付端反碗が3個体以上出土している(第97図-8~10)が、セットとみなされるものではなく、複数個体で同一セットとなるものは認められない。SK34からの瀬戸美濃産磁器碗の個体数は総数4個を数え、これは碗の総数25個中の16パーセントを占める。つまり当遺跡の瀬戸美濃産磁器碗については、複数個体で1セットとなるものや類似文様を描くものが多く認められ、これによって碗総量に占める瀬戸美濃製品の量がやや多めに算出されているのではないかということである。従って、当該時期の碗総量に占める瀬戸美濃製品の量は2割程度を考えておきたい。さらにこの瀬戸美濃製品と関西系の陶磁器碗との量比についての比較は今回は保留することとし、今後の良好な一括資料の検討に期待したい。

最後に今回は量的に良好な資料が得られず、数量的な検討をほとんど行っていない陶器播鉢の動向について付記しておきたい(第154図参照)。今回の調査ではSK32およびSK31で、Ⅱ期(17世紀前半から後半)の播鉢が出土しているが、17世紀代の一括資料は良好とはいえない。そこで杵築小学校校内遺跡⁽⁴⁾(以下、杵築小と略称)での調査成果を参考にし、豊後地域での状況を概観したい⁽⁵⁾。17世紀前半から中頃では、府内城三ノ丸遺跡SK32で福岡産のもの(5)、および杵築小Ⅴ層で備前系・丹波系のものが出土している。丹波系のもの(1・2)



第154図 豊後地域における江戸時代陶器播鉢

1～4 杵築小学校校内遺跡 5～17 府内城三ノ丸遺跡

は下相野窯跡Ⅲ型式ないしⅣ型式⁽⁶⁾に比定される。17世紀後半から18世紀中頃になると府内城三ノ丸遺跡SK31で備前系(6)、SK11で丹波系のもの、および杵築小Ⅱ層で備前系のほかに丹波系のもの(3)が出土している。丹波系のものは府内城・杵築小とも下相野窯跡Ⅲ型式ないしⅣ型式に比定される。18世紀中葉から後半では、肥前唐津系のもののほかに堺産のものが登場する。府内城三ノ丸遺跡SK26では白神典之による堺産播鉢Ⅰ型式⁽⁷⁾が出土しており、注口部に扇形の刻印を有する(10)。杵築小でも扇形の刻印を有する堺産播鉢が12号溝(4)より出土している⁽⁸⁾。肥前唐津系のものと堺産の播鉢の量比では、具体的な数値を提示できないが、前者が優勢である印象を受ける。19世紀代になると肥前唐津系および堺産のものが可

続き存続するが、後者はⅡ型式の形態のもの(13)に変化している。以上を時期別・産地別にまとめると、17世紀代では備前系・丹波系・福岡産のものが認められる。それぞれの産地の量比については具体的にできていないが、丹波系のものが一定量存在することが注意される。また現状では、砂目の唐津系陶器皿に伴う時期の肥前産陶器摺鉢や福岡県北九州市域に散見される鐏状口縁を持つ高取・上野系摺鉢は認められず、これらは最後の地域相と陶器摺鉢のシェアーを反映するものと考えられる。18世紀前半から中頃の様相は明かでないが、やはり丹波系の摺鉢が出土している。18世紀後半以降は肥前唐津系のものが主体となるが、堺産摺鉢もかなり認められ、この状況は幕末まで存続する。なお江戸時代の全時期に渡り、瀬戸美濃産の摺鉢は出土していない。今後は各時期の定量的な検討が必要となるが、これについても将来の良好な資料の蓄積を待ちたい。

以上、府内城三ノ丸遺跡の陶磁器類の検討を行ってきた。検討結果を以下に箇条書きとしてまとめに代えたい。

- ①産地組成については、全時期とも肥前産の陶磁器が半数以上を占める。
- ②19世紀前半から中頃になると陶器器種の多様化に伴い関西系陶器類の占める割合が多くなる。また陶磁器総量の1割以下であるが、この時期から瀬戸美濃産磁器製品が出現する。
- ③SK14・15の一括資料には中国産の製品や皿類が多く、特異な組成をみせる。
- ④陶磁器碗については、やはり肥前産の製品が多く、全時期に渡り7割以上の数値を占める。
- ⑤18世紀後半以降、碗の中に関西系陶器碗が一定量存在するようになる。
- ⑥19世紀中頃前後になると瀬戸美濃産の磁器製品が出現し、碗の中で一定量を占めるようになるが、その量は碗の総量の2割程度であろうと推定される。
- ⑦陶器摺鉢については17世紀代では備前系・丹波系・福岡産のものが、18世紀前半では丹波系のものが、18世紀後半以降は肥前唐津系と堺産のものがそれぞれ主体となる。(吉田寛)

註(1) 分類項目・分析方法については、成瀬晃司・堀内秀樹「消費地における陶磁器の基礎的操作と分析」(『医学部付属病院地点 東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 3 東京大学遺跡調査室 1990年)で提示されたものを本遺跡の状況に合わせて改変した。

(2) 大橋康二「南川窯ノ辻窯・広瀬向窯」(肥前地区古窯調査報告書第3集 佐賀県立九州陶磁文化館 1986年)

(3) 註(1)文献に同じ。

森本伊知郎「江戸における陶磁器流通について—港区郵政省飯倉分館校内遺跡の事例を中心として—」(『考古学の世界』新人物往来社 1989年)

長佐古真也「近世江戸市場の動向と窯業生産への影響」(『法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 3 東京大学遺跡調査室 1990年)

長佐古真也「消費地における陶磁器組成研究の視点とその一例」(『江戸の陶磁器』発表要旨 1990年)

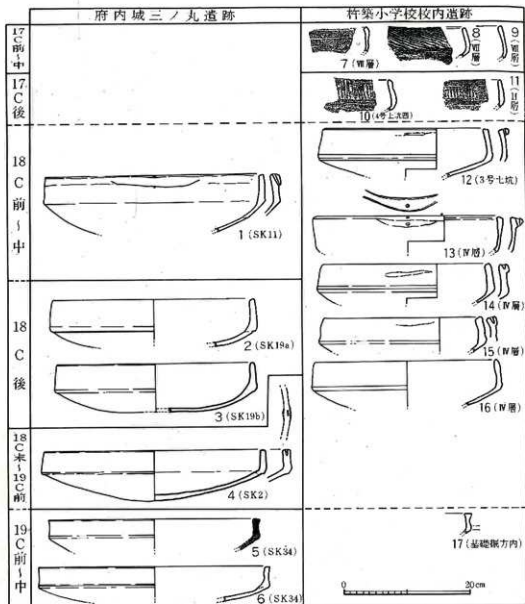
- (4) 高橋信武編『杵築小学校校内遺跡』(杵築市埋蔵文化財調査報告書第1集 杵築市教育委員会 1987年)
- (5) 近世の陶器描鉢の全国的な分布に関しては、荻原敏春「『時家日録』に顔を出さない焼物—西日本」の描鉢一」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集 1989年)参照。
- (6) 大平茂「近世丹波焼描鉢の様式分類とその編年」(『F相野富見』近畿自動車道舞鶴線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書XⅥ 兵庫県文化財調査報告第107冊 兵庫県教育委員会 1993年)75-80頁
- (7) 白神典之「『郷土描鉢と明石描鉢』(『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨 1990年) 白神典之「『郷土描鉢考』(『東洋陶磁』第19号 1992年)
- (8) そのほか扇形の刻印を持つ堺産描鉢は、豊後ではないが宇佐市向野遺跡(本報告、1993年度報告書刊行予定)でも出土している。

(2) 府内城三ノ丸遺跡出土の土師質・瓦質土器について

近年の大規模開発に伴う発掘調査は、近世遺跡についても確実な資料を蓄積しつつある。近世遺跡の年代の指標となる肥前陶磁器については、大橋康二によりその編年綱が完成に近づいている。近年さらに注目すべき事象は、陶磁器類のみならず、在地で生産されたと推定される土師質・瓦質土器についても検討が始められたことである。在地系の土師質・瓦質土器については江戸・佐倉・小田原・名古屋・大坂・堺・京都・伊丹・明石・姫路等で検討が行われ、着実に成果を上げている。今回の府内城三ノ丸遺跡の調査でも、年代の指標となる肥前陶磁器類とともに土師質・瓦質土器がかなりの量出土しており、ここに検討の項目を設けることにした。本項目で目的とするのは、江戸時代における豊後地域の発掘調査の成果から、当地での土器類の動向と在地系土器の抽出を行い、できることならばその生産地の想定を行いたい。しかし、豊後地域における江戸時代遺跡の調査はいまだ少なく、管見の範囲内で検討に耐える内容を持つものは、府内城三ノ丸遺跡の他には杵築小学校校内遺跡⁽¹⁾と本報告である榎田市遺跡⁽²⁾の3遺跡に過ぎない。よって以下の記述は確定的なものでなく、少ない資料から推定した仮説の提示に留まることを最初にお断りしておきたい。土器類全般に検討を及ぼすのは資料不足であるため、小稿では①焙烙、②火鉢・炭炉類ほか、③土師質土器小皿類について検討していく。

①焙烙

焙烙とは、火にかけて食品を炒ったり蒸焼きにしたりするのに用いる土師質・瓦質土器である。その基本的な整形技法としては、外型作りの底部に輪積みによる口縁部を接合するものである。口縁部の外面にはロクロ回転を利用したナデ・ヘラ削りあるいは叩きなどが認められる。



第155図 豊後における焙烙鍋の変遷(S=1/6) 断面トーンは瓦質、他は土師質
 時期が新しくなるに従い、口縁のたち上がりが低くなり、把手も退化してゆくことに注意。

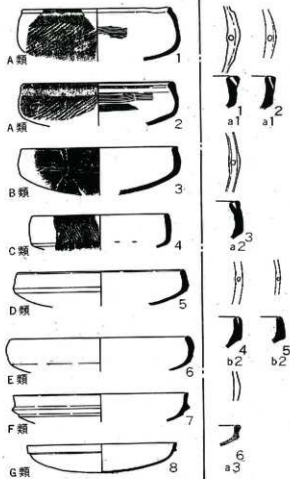
焙烙は安価で一般的な消耗品であり、またその器壁が薄いため壊れやすく、長距離の輸送には不向きなものと考えられてきた。従って、時間相や地域相がその器形に比較的鋭敏に反映されるものとされ、各地で検討の対象となっている²³⁾。豊後地域においては、府内城三ノ丸遺跡と杵築小学校校内遺跡で、比較的良好な資料が得られている(第155図)。

府内城三ノ丸遺跡では、遺構の時期区分を7期8小期に区分している。焙烙の出土が認めら

れるのはⅢ期からⅤb期で、いずれも難波洋三がD類⁽⁴⁾とする器形に類似するものである。第155図-1はSK 11出土で、深めの器高となり、口縁部の2箇所に粘土を貼付け、貫通孔を有する把手を持つ。これは同じく難波によって把手a 1とされるものである。共伴遺物はⅢ期で、18世紀前半から中頃に比定される。2はSK 19a、3はSK 19b出土で、やはり深めの器高を有する。共伴遺物はいずれもⅣ期で、18世紀後半から末に比定される。4はSK 2出土で、器高は浅めとなる。I口縁部の2箇所には、粘土を貼付けず上端部に貫通しない孔を穿った部分が認められる。把手b 2とされるものである。共伴遺物はⅤa期で、18世紀末から19世紀前半に比定される。5・6はSK 34出土で、これも器高はやや浅めである。5は口縁部上端がわずかに肥厚し、面を持つものである。共伴遺物はⅤb期で、19世紀中頃に比定される。以上の府内城・ノ丸遺跡の焙烙は1～

4・6が土師質土器、5が瓦質土器で、時期が新しくなるに従って器高が浅くなり、把手が退化してゆく傾向が窺えることを注意しておきたい。

杵築小学校校内遺跡では層位的な発掘調査がなされており、焙烙もこの中に認められる。7・8はⅢ層出土で、口縁外面に平行叩きを施す。叩きの方向は7が右上がり、8は右下がりであり、両者は製作工人の利き手の違いに起因するものであろうか。難波のA類に類似するが、大坂周辺のものとは異なり、口縁内面端部が明瞭な傾斜面をなさない。この他にも図化できていないが、叩きを施す焙烙の破片が数点存在する。9もⅢ層出土で、口縁外面に叩きが認められずナデを施すものである。難波のB類に類似する可能性があるが、外面に刷毛目状の調整がなされていない。Ⅲ層からは「ミナと藤左衛門」の刻印の可能性がある焼塩窯や高台内無釉の初期伊万里磁器碗などが出土しており、17世紀前半から中頃の遺物を包含する。10・11は口縁部に



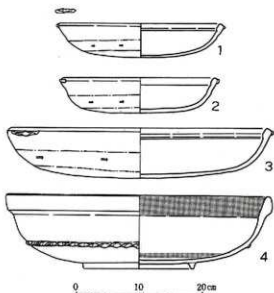
第156図 徳川氏大坂城期の焙烙(左列)とD類把手の形態(右列)(S=1/6、難波1992を改変)

櫛状工具による左上がりの掻き上げ痕を有するもので、難波のC類に類似する。10は4号土坑西側からの出土で、17世紀後半から18世紀前半の肥前産磁器を共伴する。11はⅡ層からの出土で、遊離した遺物である。大坂周辺の調査成果と4号土坑西側での状況を勘案して、10・11の製作年代は17世紀後半代に比定されたと考える。12は3号土坑出土で、難波の把手a1を持つD類に類似する。13～16はⅣ層出土で、これらも難波D類に類似するものである。13は把手a1、14・15は把手a2を有する。Ⅳ層は寛政12年(1800)の火災処理層であるⅢ層の下位に堆積しており、層中には17世紀末から18世紀代の遺物を多量に包含する。焙烙類も18世紀代に比定できるものであろう。17は調査区東端基礎掘方内からの出土で、遊離した遺物である。浅めの器高を有する形態から、19世紀前半から中頃に比定されるものであろう。

さて、ここで今一度豊後地域の焙烙(第155図)と難波洋三によって提示された徳川氏大坂城期の焙烙(第156図)との対比を行ってみたい。まず確認しておきたいことは、豊後地域の焙烙鍋と大坂周辺のそれの変遷とが、基本的に一致することである。17世紀代では、その前半代に盛行するA類と後半代に盛行するC類が、両地方に存在する。杵築小学校校内遺跡のA・C類は、表面に金蛸母を多く含むことや色調が黒褐色を呈することなど、18世紀以降に盛行するD類とは胎土の様相が異なる印象を受ける。ただし、A類については右下がりの叩きを持つものが存在することや大坂地域の焙烙の口縁内面にみられる面取りが豊後地域のものに認められないなどの相違点もあり、これらが大坂地域からの搬入品とみなすことはできない。18・19世紀代に比定されるD類については、その形態とともに把手の形状に特に着目したい。大坂・豊後ともa1→a2→b2という共通した変遷が認められ、豊後のD類焙烙は大坂周辺のそれと細部に至るまで一致している。難波が分類した把手は大坂・堺地域に分布するものであるが、現状では堺に出土例がない把手b2⁽⁵⁾も府内城三ノ丸遺跡SK2で出土している。

以上のように、豊後の焙烙の変遷は大坂地域のそれと軌を一にする。難波によると、17世紀に比定されるA・C類は大坂・堺・伊丹・明石・姫路など近畿地方に広く分布しており、杵築小学校校内遺跡の資料もこの分布圏に含まれる。ただし先に指摘した通り、A類は口縁部の形態や一部の叩きなどに近畿地方のものと異なる点が窺取され、この時期既にA類焙烙が豊後地方で製作・生産されていた可能性を考えなければならない。18世紀代になると豊後の焙烙の変遷は、大坂地域のそれと細部に至るまで一致するようになる。ところがこれとは対照的に、近畿地方ではこの時期より焙烙の地色色が顕在化するようになる。難波の研究成果によると、把手を持つD類焙烙は大坂・堺に分布するのみで、京都にはD類は分布するものの、把手を持つものは認められない。加えて現状では、堺に認められない把手b2が府内城三ノ丸遺跡SK2で出土している。さらに大坂・堺・京都以外の地域ではD類自体の分布が少なく、伊丹・明石・姫路では豊後地域には認められないE類が主体となる。つまり、現状では豊後地域の焙烙は大坂地域の焙烙の動向の影響を、近隣の京都や兵庫地域より強く受けているという結論となろう。

か。府内城三ノ丸遺跡・杵築小学校校内遺跡では、D類焙烙が「一定量出土しており、これらすべてが大板地域からの搬入品とはまず考えられず、やはり在地での製作・生産を考えるべきであろう。九州における他地域の焙烙との対比が現状では不可能であるが、上記の指摘が江戸時代の豊後地域の実状であるとするならば、当地域の焙烙は大板地域の焙烙製作工人の強い影響下にあったと考えなければならない。その背景には瀬戸内海の水運や陸上交通などによる工人の人的交流を考慮しなければならず、具体的な工人の動きについては文献による検討が必要と考えるが、今後の課題としておきたい。



第157図 豊前「高村焼」の土師質土器
(近～現代 S=1/6)

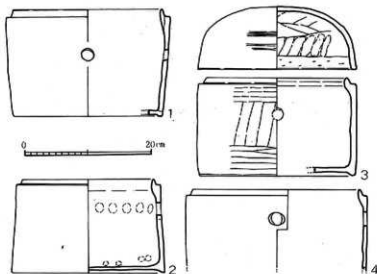
ここで、検討の視点を再び大分県下に戻したい。豊後地域海岸部での焙烙の様相は、府内城三ノ丸遺跡や杵築小学校校内遺跡の資料で一定程度明らかになったと考える。それでは他地域についてはどうか。1991年に大分県立宇佐風土記の丘陵歴史民俗資料館で開催された特別展「やきもの―豊のくらしと文化―」で、大分県宇佐市大字高村（旧豊前地域）で生産されたという土師質土器が展示された⁽⁶⁾（第157図）。その形態から判断して、1～3は焙烙、4は鉢（コネバチ）である。これらは中世以降宇佐宮の祭事に使用する土器類を生産した「高村焼」に比定されるものという。提示された資料自体は近・現代に製作されたものではあるが、焙烙の形態にはいくつかの特徴がみられる。すなわち、口縁内面をいくぶん厚みさせることで段を形成し、口縁部の2箇所にはひねりを加えた板状粘土を貼付けることによって把手とする。口縁内面の段や把手は非常に退化しており、考古学的に常識的な判断を下すならば、これらはある祖形から何段階かの型式変化を経た最終的な形態であることが予測される。現状では資料不足から豊前地域の近世焙烙の様相を明らかにできないが、口縁内面の段や把手の形態は豊後地域の焙烙からは系譜をたどることができず、近世の豊前地方には豊後地方とは異なる形態の焙烙が存在した可能性が高い。第157図-4は同じく「高村焼」とされる「コネバチ」である。当該資料と類似する形態の土師質土器鉢が、宇佐市別府遺跡6次SK5⁽⁷⁾・中津市ガラヌノ遺跡第4号墓⁽⁸⁾・玖珠郡小竿遺跡（豊後内陸部）溝状遺構⁽⁹⁾などで出土している。別府遺跡・ガラヌノ遺跡のものは単独出土で製作年代を確定できないが、小竿遺跡では18世紀後半代の陶磁器と共伴している⁽¹⁰⁾。現状では、この形態の鉢は豊後地域の府内城三ノ丸遺跡や杵築小学

校校内遺跡では認められない。つまり江戸時代以降の上師質土器においても、豊前・豊後地方では比較的明瞭な地域差が認められ、焙烙についてもそれぞれの地域色を反映した形態のものがそれぞれの地域で製作されたのではないかということである。資料不足により、これ以上の検討を進められない現状にあるが、一応の仮説として提示しておきたい。

焙烙についてはその分布と形態の系譜の検討・製作技術の詳細・胎土の分析など、さらなる検討課題が存在することを承知しているが、紙幅の関係から今後の課題としておきたい。

②火鉢・熾炉類ほか

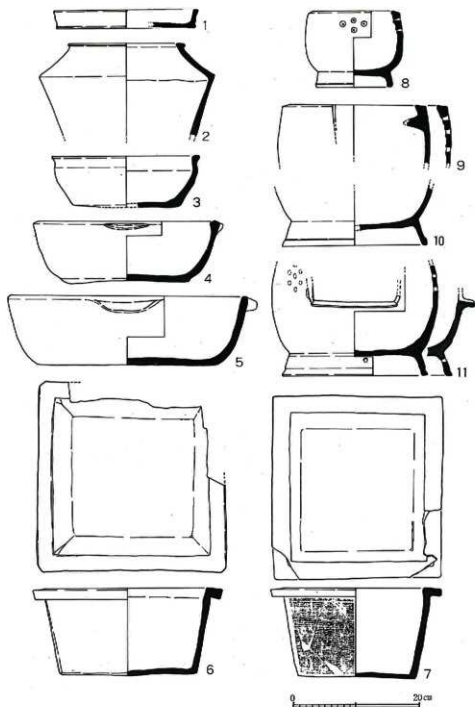
第158図は、SK14・15より出土した上師質土器火鉢とその関連資料である。すでに触れた通り、当該遺物は寛保の大火（1743）に伴う火災処理土坑からの出土遺物であり、その製作年代の下限を18世紀中頃に求められる。その形態は一見して第158図－3・4に示した関西地域（大阪・堺・京都）の火鉢と酷似している。発掘当初は関西周辺からの搬入品と考えていたが、胎土などが関西周辺のものとは異なり、搬入品である可能性は少ない（216頁、註（14）参照）。関西地域においてこの種の器形を呈する火鉢は、16世紀末から17世紀前半代に盛行するもので、17世紀後半代にはそのほとんどが消滅するという。そうすると、関西地域での盛行年代とSK14・15の年代とは大きな開きがあり、特殊な伝世品と考えない限り当該遺物の説明は困難となる。以上のような問題はあっても、このような器形の火鉢は九州周辺には認められず、製作地の問題はあっても、器形の系譜が関西地域に求められる可能性は残る。近年、名古屋城三の丸跡SD08⁽¹¹⁾で、17世紀後半から18世紀初頭の陶磁器とともに類似器形の瓦質土器火鉢が出土した（第158図－4）。名古屋城例も関西地域での盛行年代とはややかけ離れた資料である



第158図 SK14・15出土火鉢と関連資料（S=1/6 各報告書より転載）
1 府内城三ノ丸SK14・15 2 名古屋城三ノ丸SD08 3 大阪城豊臣後期
4 大阪城徳川期

が、類似器形のものが関西より東の地域にも認められる。当該資料については、現状で判明する以上の事象を指摘するに留め、今後の検討に備えたい。

第159図は、Vb期（19世紀前半から中頃）に比定される時期の土坑から出土した瓦質・上師質土器である。提示した土器類の器種には、皿・火消し甕・鉢・箱形の火鉢・



第159図 在地で製産された可能性の高い土師質・

瓦質土器(Vb期=19C前半~中葉 S=1/6)

1 皿 2 火消壺 3 火鉢a 4~5 火鉢b 6~7 火鉢c 8~11 温炉a

1・4・7・8~10 SK33 2・3・6・11 SK34 5 SK44

上記の土師質・瓦質土器は府内城三ノ丸遺跡や梓染小学校校内遺跡で多く出土が認められるが、他地域にはそれほど分布しない形勢のものである。

焔炉がある。結論から最初に記すと、これらは在地で製作された可能性が高いと考える器種である。上記で提示した器種には、①豊後地域海岸部の複数の遺跡で比較的多量に出土する傾向が認められること⁽¹²⁾、②19世紀前半から中頃という時期の江戸・大坂・堺・京都・伊丹・明石・姫路等で類似器形のものが認められないこと⁽¹³⁾という2つの特徴があり、これらが在地産のものであると判断する大きな理由である。1は皿、2は火消し壺、3は口縁上端を平坦にする鉢で、ここでは仮に火鉢a類とする。4は口縁部の2箇所に板状粘土を貼付け把手とする鉢で、同じく火鉢b類とする。5は箱形を呈する火鉢で、火鉢c類とする。なおここで火鉢a～b類としたものは、現状ではいわゆる「火鉢」として使用された確証をその出土状態や遺物そのものの検討からは得ていない。特に火鉢a・b類としたものは暖房具としての火鉢ではなく、「コネバチ」などと呼ばれる調理具であることも想定されるが、機能の検討は今後に譲り、ここでは便宜的な名称として使用しておきたい⁽¹⁴⁾。8～9は調理具の焔炉で、底部は2箇所に貫通孔を有する輪高台であり、胴部上半部に大きく開いた開口部と風通しの貫通穴を4個から7個有する。胴部内面には3～4箇所に中実の角状突起を持つ。調理するものの種類に合わせて、そのサイズも複数の規格があったようで、府内城三ノ丸遺跡では口径・底径とも13cm前後を測る小型のもの(8)と口径・底径とも22cm前後を測る大型のもの(9～11)が出土している。焔炉a類と仮称しておく。焔炉a類は軸田市遺跡や袴染小学校校内遺跡でも複数の個体が出土しており、現状では幕末前後の西日本地域に類似器形のものが認められず、豊後海岸部に特徴的なものと考えられる。ただ16世紀後半代に比定される大阪府堺環濠都市SKT1地点SK1⁽¹⁵⁾の一括資料中にこの種の焔炉と酷似する器形が存在することが注意される(第160図)。16世紀後半と幕末前後では年代に大きな開きがあり、豊後海岸地域の焔炉a類の祖形を直接堺環濠都市の出土例に求めることは困難であるが、将来の資料増加によりこの間を埋める資料が発見されることを期待したい。



第160図 焔炉a関連資料
(S=1/3)
堺環濠都市SKT1地点SK1

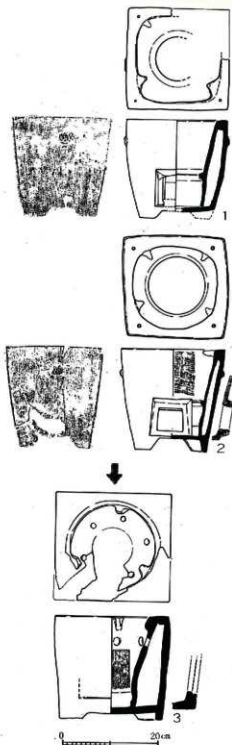
第161図は二重構造を有する焔炉で、「サナ」と呼称される多孔皿状製品をオプション(付属品)として使用する形態のものである。サナを併用する焔炉類は民具研究分野で「七厘」と呼称されることも多い。ここでは焔炉b類と仮称しておく。1・2はSK33出土で、Vb期の遺物を共伴することから、幕末までに製作されたものである。胴部下半部には突出する外枠を持つ開口部が存在する。3はSK21出土で、共伴遺物の中に型紙摺り技法を採用する磁器皿があり、明治前半代に比定される。開口部は引口に変化している。1・2は小林謙一⁽¹⁶⁾の分類に従えば焔炉Ⅱc1類に属するが、江戸遺跡のもの

とは開口部や足部の形態が異なり、また出土個体数の多さも考慮すれば、豊後海岸部の在地産である可能性も残る⁽¹⁷⁾。3は小林の埴輪類に類似するものである。東京大学校内遺跡付属病院地点AD34-1⁽¹⁸⁾や白金館347P⁽¹⁹⁾からの出土例には「三河名産製造組合生田政太郎」の刻印を有するものがあり、その生産地が愛知県であったことが判明する。府内城三ノ丸遺跡例は欠損により刻印の有無が不明ではあるが、明治時代前半という時代状況とも考え併せて、当該資料が愛知県産のものである可能性を考えておきたい。

この他、SK2より出土した「深草辻五」の刻印を有する京都深草産の土師質土器埴輪（第54図-48）が注目されるが、これについてはすでにⅢ-（3）で触れたため（72・73・218頁参照）、ここでは割愛したい。

③土師質土器小皿類

土師質土器小皿類については、府内城三ノ丸遺跡ではⅠ期（16世紀末～17世紀初頭）のSK23、Ⅱ期のSK31（17世紀前半）を除き、良好な資料が得られていない。第162図は土坑の一括性を重視して、土師質土器小皿を年代順に配列したものであるが、上記のSK23・SK31の資料を除けば混入品である可能性も残る。ここではその整形技法から、土師質土器小皿を3分類した。すなわち非ロクロ（手捏ね）整形のもの2タイプとロクロ整形のもの1タイプの計3タイプである。非ロクロ（手捏ね）整形a類としたものは、Ⅳ-（1）で詳述した中世以来の在地系土器の伝統を受け継ぐものである。器形の特徴としては底部付近に指頭痕が認められ、口縁付近に強いナデを施すことによって、端部

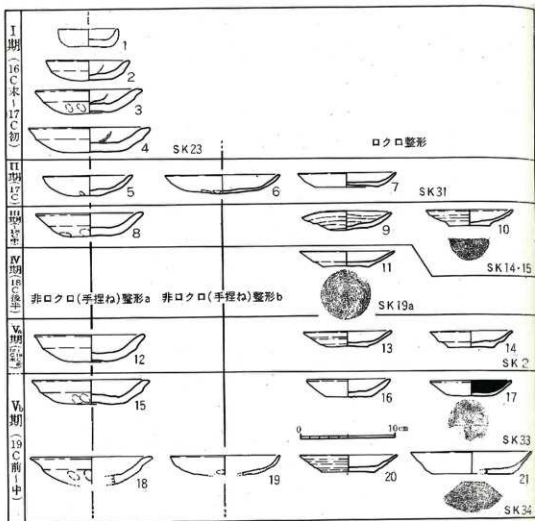


第161図 埴輪bの変遷（S=1/8）

1・2 SK33（Ⅴb期=19c前～中）

3 SK21（Ⅵ期=19c後半=明治前半）

埴輪bは他地域にも種類の出土が認められるが、1・2は府内周辺で製作した可能性も考えられる。



第162図 土師質土器小皿の変遷 (S=1/4)

を外反させる。また内面にはナデの終点と思われる痕跡が認められることがある。江戸時代における非ロクロ(手捏ね) 整形a類は豊後地域以外には認められず、極めて地域性の強い土師質土器である。17世紀後半以降は出土量が激減すると思われるが、幕末前後までは確実に製作されている⁽²⁰⁾。前述の通り、この種の土師質土器小皿は「重ねて」使用することに特徴があるが(227-229頁)、この視覚的な使用法が幕末まで継続していたか否かは確認が取れていない。非ロクロ(手捏ね) 整形b類はa類と比較して器壁が薄く、口縁部に強いナデを施すことがないので、端部は外反しない。このタイプの土師質土器小皿は、西日本地域において17世紀から18世紀中頃にかけて盛行する形態のものである。府内城三ノ九遺跡では出土の絶対量が少ないが、やはり幕末まで継続している。また豊後地域では大分市筑原原女塚遺跡で、18世紀代に比

定される墓の副葬品として出土している⁽²¹⁾。ロクロ整形のものは数種類の形態があるが、資料不足のため今回は細分を行っていない。底部には回転糸切り痕を有し、回転方向はすべて右回転で、17世紀中葉以前に関東地域にみられる左回転のものは全く認められない。ロクロ整形のものも幕末まで継続して製作されるが、19世紀になると内面に柿軸を施す極めて丁寧な作行になる製品が現れる。底部には幅1ミリ前後を測る右回転の溝が認められる(第162図-17)。この種の土師質土器土器はやはり机張原女菰遺跡で、19世紀前半代の紀年銘を有する墓の副葬品として出土している。また内面に柿軸を施さないが、底部にみられる溝状の製作痕跡を有する土師質土器(21)もこの時期から認められる。

以上、府内城三ノ丸遺跡の土師質・瓦質土器について検討を行ってきた。今回検討の組上に掲げた焙烙、火鉢・焔炉類、土師質土器小皿類それぞれについて、他地域から搬入されたものや他地域に系譜をたどり得るものが存在する反面、在地で確実に製作・生産されたものが存在することを指摘した。それでは江戸時代の豊後において、土師質・瓦質土器を製作した地域が存在するのであろうか。江戸時代の豊後臼杵藩の古記録である『古史捷』によれば、現在の大分市東上野の土焼物職庄次郎が大分市大字宮河内の金屋山で茶焼の品々と瓦および風茶碗(陶器類か)を焼いていたという記事がある⁽²²⁾。またこの近隣の大字東上野・大字里にはドキヤ(土岐屋・土木屋)という字名が残る地域がある⁽²³⁾。大字東上野・里は現在の大分市東部に位置し、今でも良質の粘土が採取できる地域で、瓦・土管などの製造業者が多く居住している。さらにこの地域の周辺には江戸時代の肥後領に含まれる馬場村(現北海部郡佐賀岡町神崎)・細村(現大分市細)・市村(現大分市坂ノ市)・久所村(現大分市上久所・下久所)等の瓦生産地があり、東上野を含む現在の大分市東部一帯が当時の一大窯業生産地であったことを示している。府内城三ノ丸遺跡の土師質・瓦質土器の中に他地域に分布しない形態のものが存在することと文献の記載や地名等から大分市東部の一帯が江戸時代の窯業生産地であったことを考え併せれば、豊後海岸部の在地系土器の大部分はこの大分市東部一帯で製作・生産されたと解釈するのが妥当であろう。豊後海岸部の在地系土器として設定した焙烙や焔炉類の一部には、関西地域の土器類の影響が多分にみられるものが存在し、土器製作工人の系譜や動向を検討する上で示唆的な事象である。今後は現地調査や文献の検討をさらに深めることによって、当地の窯業生産の実態に接近していきたいと考えている。

(吉田寛)

註(1) 高橋信武編『杵築小学校校内遺跡』(杵築市埋蔵文化財調査報告書第1集 杵築市教育委員会 1987年)

(2) 吉田寛ほか『植田市遺跡』Ⅰ～Ⅴ(大分県教育委員会 1988-1992年)
概報中では近世遺物についてはほとんど触れられていない。

(3) 佐々木彰『近世焙烙の研究』(『物質文化』53 1990年)

- 藤尾悟一郎「佐倉と江戸—近世の瓦質・土師質土器からみた地域性—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第36集 1991年)
- 辻真人「焙烙の変遷」(『江戸の食文化』 吉川弘文館 1992年)
- 江戸陶磁土器研究グループ「シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題」Ⅰ(1992年)ほか
- (4) 難波洋三「徳川氏大坂城期の焙烙」(『難波宮址の研究』第九 財団法人大阪市文化財協会 1992年)同上381頁。
 - (5) 同上381頁。
 - (6) 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館『やきもの一豊のくらしと文化—』(1991年)61頁。
 - (7) 宇佐市教育委員会「宇佐地区遺跡群発掘調査概報」(1990年)12頁。
 - (8) 栗焼巡児ほか「ガラスノ遺跡」(中津市教育委員会 1984年)17頁。
 - (9) 小柳和宏「小牟遺跡」(玖珠町教育委員会 1985年)34頁。
 - (10) この種の土師質土器鉢は中世期にも類品があるという。王永光洋氏の御教示による。
 - (11) 金子健一編「名古屋城三ノ丸遺跡(Ⅲ)」(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第37集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 1992年)84頁。
 - (12) 第159段—1の皿、2の火消し壺、3—7の火鉢類、8—11の提炉は大分市植田市遺跡でも類似器形のものが出土している。同様に杵築小学校校内遺跡でも皿や提炉などが出土している。
 - (13) 第159段—2の火消し壺は西日本各地で類似器形のものが出土しているが、火消し壺は需要が多く、各地で製作・生産されている可能性が高い器種であるため、ここでは豊後海岸部の在地系土器の中に含めて考えている。
 - (14) 土師質・瓦質土器の分類として重視しなければならないのは「形態」であり、分類に当たり「機能・用途」と混同した名称を与えるのは避けるべきである。「なぜなら用途は資料そのものの属性分析のよって獲られた機能から推定されるものであり、資料そのものの属性ではないからである。」本稿では上記の記述と矛盾する形態と用途を混同した名称を資料に与えた状態で記述を進めているが、これは当地における江戸時代遺跡の調査例がまだ少なく、「形態」に基づく土器類の体系的な分類を完成できていない現状による。将来の資料の蓄積を期待するとともに、今後の課題としたい。下記文献参照。
- 岡角まり「瓦質土師質土器類の分類」(『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題』Ⅰ発表要旨 江戸陶磁土器研究グループ 1992年)91頁。
- (15) 土山健史「堺環濠都市遺跡における、15・16世紀の在地土器」(『中近世土器の基礎研究』Ⅴ 1989年)57頁。
 - (16) 小林謙一「江戸における近世瓦質・土師質提炉について」(『江戸在在土器の研究』Ⅰ 1991年)
 - (17) 提炉b類は明石城域下町遺跡でも、類似器形のものが出土している。
- 山下史朗「明石城域家屋敷跡」兵庫県文化財調査報告第109冊(兵庫県教育委員会 1992年)
- (18) 東京大学遺跡調査室「両学部付属病院地点」(東京大学遺跡調査室発掘調査報告書 3 1990年)
 - (19) 白金館址遺跡調査会「白金館址遺跡Ⅱ」(1988年)84頁。
 - (20) 府内城三ノ丸遺跡や他の近世遺跡でも良好な出土例はないが、大分県杵築市岡城の調査などから非クロコ(手捏ね)整形a類は幕末前後まで存続する可能性が高い。
 - (21) 田中裕介氏教示。
 - (22) 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館『やきもの一豊のくらしと文化—』(1991年)44頁。
- 小柳和宏「中世土器生産小考—文書・地名から土器生産地を探る—」(『大分県地方史』第143号 1992年)10頁。
- (23) 同上。小柳文獻。

(3) 府内城三ノ丸遺跡出土の瓦の分類と編年

1. はじめに

本項では、府内城三ノ丸遺跡出土の軒瓦についての編年的検討を行いたい。軒瓦については軒平瓦と軒九瓦をセット関係を把握するのが、その検討に向けての第一歩となる。ただ、近世の軒瓦は瓦当文様の種類が多岐にのぼり、加えて軒九瓦は巴文を瓦当文様を持つものが主流となる。巴文を瓦当文様を持つ軒九瓦（いわゆる「巴瓦」）は、おのおのの文様の類似度が高く、一見したのみではそれぞれの特徴を捉えにくいものが多い。府内城三ノ丸遺跡でも軒九瓦は巴文を持つものが主流で、今回は時間的な制約もあり、軒平瓦と軒九瓦の明確なセット関係を捉え得ていない。従って、不十分ではなるが、ここでは瓦当文様の介別が比較的容易である軒平瓦を検討の主軸におき、軒九瓦とのセット関係は後段で簡単に触れるに留めることとしたい。

まず、今回の調査で出土した軒平瓦と軒九瓦の型式一覧表を作成した（第163～165図）。個々の型式の実測図は、202～210頁を参照されたい。次に、陶磁器類と瓦が比較的良好な状態で共存していると考えられる11基の土坑を選び、相互の共存関係を検討した（第54表）。Ⅰ・Ⅱ期（16世紀末～17世紀代）には良好な遺情が認められず、Ⅲ期（17世紀末～18世紀中頃）以降のものが検討の対象となる。いちいちの詳細を記すのは省略したいが、瓦当文様の型式変化と第54表に示した陶磁器類との共存関係を考え併せると、軒平瓦は仮に次の3群に大別して検討することが可能である。

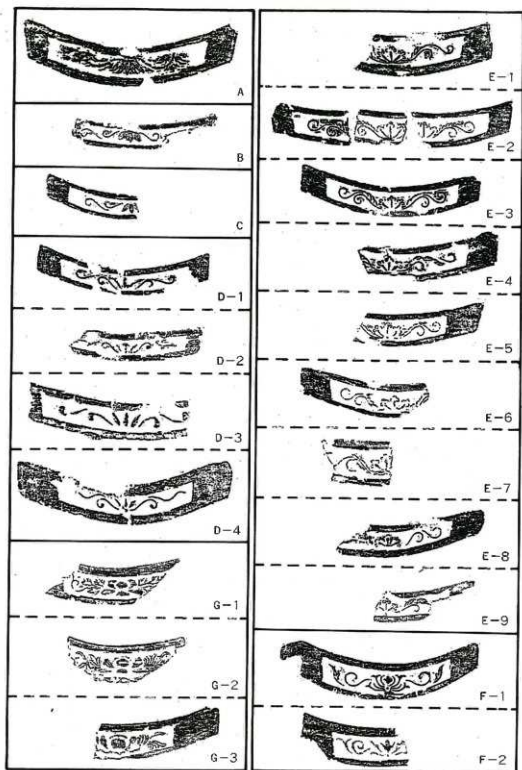
		軒 平 瓦																												
		A	B	C	D-1	D-2	D-3	D-4	E-1	E-2	E-3	E-4	E-5	E-6	E-7	E-8	E-9	F-1	F-2	G-1	G-2	G-3	H	I	J	K	L	M	X	
Ⅲ	SK11 SK14-15	○	○		○					○	○	○																		
Ⅳ	SK26 SK9 SK19a		○		○	○				○		○		○		○			○											
Va	SK2 SK3	○	○	○	○	○				○	○			○	○				○									○		
Vb	SK5 SK22 SK33 SK34										○					○	○			○	○					○	○	○	○	

		軒 九 瓦																KA	KB
		TA	TB	TC	TD	TE	TF	TG	TH	TI	TJ	TK	TL	TM					
Ⅲ	SK11 SK14-15	○										○	○	○	○	○	○	○	○
Ⅳ	SK26 SK9 SK19a		○		○					○									
Va	SK2 SK3	○	○	○	○													○	
Vb	SK5 SK22 SK33 SK34	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

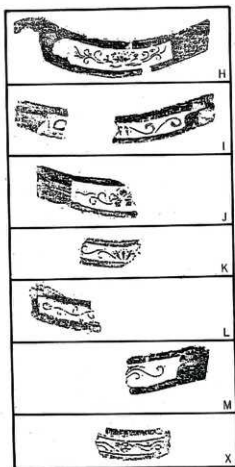
第54表 出土瓦型式一覧

T A 類		徑 12.0 cm	巴 時 計 回 り	珠 文 10
T B 類		徑 13.1 cm	巴 反 時 計 回 り	珠 文 16
T C 類		徑 13.2 cm	巴 反 時 計 回 り	珠 文 12
T D 類		徑 13.5 cm	巴 反 時 計 回 り	珠 文 22
T E 類		徑 14.5 cm	巴 反 時 計 回 り	珠 文 15
T F 類		徑 14.7 cm	巴 反 時 計 回 り	珠 文 16
T G 類		徑 15.0 cm	巴 時 計 回 り	珠 文 16
T H 類		徑 15.6 cm	巴 反 時 計 回 り	珠 文 16
T I 類		徑 16.0 cm	巴 反 時 計 回 り	珠 文 13
T J 類		徑 16.0 cm	巴 反 時 計 回 り	珠 文 15
T K 類		徑 17.6 cm	巴 反 時 計 回 り	珠 文 13
T L 類		徑 18.0 cm	巴 反 時 計 回 り	珠 文 11
T M 類		徑 18.0 cm	巴 時 計 回 り	珠 文 15
K A 類				
K B 類				

第163圖 軒丸瓦型式一覽



第164图 軒平瓦型式一覽①



第165図 軒平瓦型式一覧②

は相当に長く、瓦が製作され、ある遺構に廃棄されるに至るには時間的に大きな隔たりを考えなければならないことも多い。従って、これらの軒平瓦の製作年代を確定するためには、さらに詳細な瓦当文様の模式的検討および文献の記載や紀年銘瓦による絶対年代の推定などが必要となる。以下、資料的制約により不十分な点もあるが、対象とする軒平瓦各型の製作年代についての検討を行ってみたい。

2. 軒平瓦E類について一府内城系列の設定一

軒平瓦E類には仮I群から仮III群に属するものがそれぞれがあり、型式変化の流れが比較的スムーズに追跡できるものである。この中で、仮I群としたE-1～4類は1743年に発生した寛保の大火に伴う火災処理土坑であるSK14・15から出土しており、製作年代の下限をこの時期に設定できる。仮I群としたE類⁽³⁾には雄蕊状の中心飾りの下部に珠点を持つもの(E-1類)や蔓草の先端部を上方に向けるもの(E-2類)や下方に向けるもの(E-3類)があり、

仮I群：18世紀中頃までに出現しているA・
B・C⁽¹⁾・D-1・D-2・E-1
～4類

仮II群：18世紀後半代までに出現しているC
・E-5～7⁽²⁾・F-1・G-1類

仮III群：19世紀以降に出現する可能性が高い
E-8・E-9・G-1・G-2・
H・J・K類

なおVb期(19世紀前半から中頃)の遺構から出土しているD-3・D-4類は出土数が少なく、またI・M類(VI期=18世紀後半までには出現)およびL類(Va期=18世紀末～19世紀前半までには出現)は小破片で現状では瓦当文様全体が窺えないため、今回は検討の対象外とする。

上記で行った検討結果を、とりあえず編年表として提示する(第166図)。ただここで注意しなければならないことは、この図は年代の撰拠を主に陶磁器類との共存関係に負っているために、瓦についてはその廃棄年代を示すに過ぎないということである。一般的に瓦類の使用年代

細かく見ると様々なヴァリエーションが存在する。また、E-1類には瓦当面の右袖部に「助右門」の刻印が見られることに注意を払っておきたい。E-4類は蔓草部を肉太の松葉状文に置換するもので、中心飾りの表現もやや硬化しており、仮Ⅰ群の中では後出の要素が窺える。仮Ⅱ群としたものにも、珠点や蔓草の向きなどの細部にいくつかのヴァリエーションが認められるが、仮Ⅰ群と比較して文様を構成する線が細く、力弱い印象を受ける。またE-6類は蔓草部がかなり委縮した表現となっていることに注意したい。仮Ⅲ群としたものの中で、E-8類はついに蔓草部を消失するに至る。またE-9類は基本的にはE-1類の文様構成を踏襲するが、文様を構成する線分がさらに硬化している。瓦当文様の型式学的検討からは、大まかに仮Ⅰ群（E-1～4類）→仮Ⅱ群（E-5～7類）→仮Ⅲ群（E-8・9類）という変遷が想定され、これは共伴する陶磁器類からも傍証される。以上のように軒平瓦E類は府内城三ノ丸遺跡出土資料を型式学的に配列することで、その変遷をたどることができ、しかもこの種の文様を持つ軒平瓦は主に府内産周辺に分布しており⁽⁴⁾、他地域には認めることができない。従って、ここでは軒平瓦E類を「府内城系列」と呼称することを提唱し、以下の記述を進めたい。

さて、次にこの府内城系列の関連資料をさらに探索することで、各類の製作年代を明確にしてゆきたい。第167図-1は、府内城隅槽に葺かれていたという⁽⁵⁾軒平瓦である。府内城三ノ丸遺跡出土資料と同范のものは存在しないが、それらと比較すると瓦当面がやや幅広く、文様も精美であり、型式学的には仮Ⅰ群としたE-1～4類に先行するものと思われる。右袖部には磨滅により読みとりにくい、E-1類と同様の「助右門」の刻印が押されている。同一2は大分市豊後国分寺薬師堂に使用されていた軒平瓦⁽⁶⁾である。いうまでもなく、豊後国分寺は8世紀代に造営された寺院であるが、江戸期には阿王山国分寺として再興され、奈良期の金堂跡地点に薬師堂⁽⁷⁾が、塔跡地点に観音堂などが建設されている。当該資料は府内城三ノ丸遺跡出土資料と同范のものではないが、瓦当文様の構成は酷似している。仮Ⅰ群のものと比較して、雄蕊状文の先端部がつぶれており、蔓草もやや細くなるなど後出の要素が認められるが、仮Ⅱ群のものほど脱化していない。蔓草の先端部は上方を向いており、E-2類のその特徴と一致する。また当該資料の凸面に以下のヘラ書き文字が認められ、注目される。

「木村惣左衛門／作内伊兵衛／元禄十二年（1699）／四月十日」

第168図-3は平瓦で、凸面に以下のヘラ書き文字が認められる。

「元禄十二□（1699）／四月八日／瓦や惣左衛門／同伊兵衛／同庵ノ助」

同一4・5は別個体の鬼瓦で、側面部分に以下のヘラ書き文字がみられる。

第168図-4：左側面「元禄十二□（1699）」

右側面「国分寺／瓦師姫路惣左衛門尉／藤原政長」

第168図-5：右側面「高島助ノ丞」

4の鬼瓦にみえる「瓦師姫路惣左衛門尉藤原政長」なる人物が、2の軒平瓦や3の平瓦にみ



1 府内城隔櫓



2 豊後国分寺薬師堂(元禄12年銘)



第167図 軒平瓦E類関連資料① (S=1/3)



第168図 軒平瓦E類関連資料② (S=1/3)

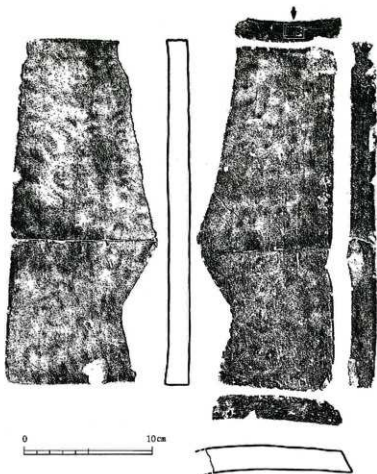
える「木村惣左衛門」や「瓦や惣左衛門」と同一人物である可能性はきわめて高い。「瓦や惣左衛門」についてはこれ以上詳細に出来ない現状にあるが、4の鬼瓦の存在からその出身地が播磨(兵庫県)姫路であることが判明する。また4・5の鬼瓦は豊後国分寺薬師堂でセットとして使用されたものと思われ、「高島助ノ丞」なる人物も木村惣左衛門らとはほぼ同時期に活躍した瓦師である可能性が高いと考える。以上、府内城三ノ丸遺跡出土資料以外の府内城系列軒平瓦とその関連資料の紹介を行った。豊後国分寺薬師堂の資料により府内城系列とした軒平瓦の1型式が1699年に製作されたことが明らかになった。そして瓦当文様の型式学的な検討からは、仮Ⅰ群と仮Ⅱ群との境界付近の実年代が1699年前後に比定される可能性が極めて高いことになる。さらに瓦に残る刻印やヘラ書き文字から、府内城系列の初期の段階には「助右門」なる人物が、17世紀末の元禄期前後には「木村惣左衛門」「高島助ノ丞」らが関係していたことが判明する。この「助右門」・「木村惣左衛門」・「高島助ノ丞」らは「瓦師」と表現される瓦製作工人であった。



第169図 元禄年間(1688~1703)までの瓦の刻印・文字(S=1/1)
1. SK14 2. SK2 3. SK34 4. SK34 5. SK19a 6. SK14 7. SK14 8. SK2

検討の視点を再び、府内城三ノ丸遺跡出土資料に戻したい。上記で紹介した府内城系列の軒平瓦の製作に携わったと思われる工人の刻印やヘラ描き文字が、府内城三ノ丸遺跡出土資料にも認められる(第169図)。1・2は「助右門」の刻印。前述のように、1はB-1類軒平瓦にみられるほか、一部の平瓦・丸瓦に認められる。2は鳥雲瓦に認められるもので、1点のみの出土である。また第144図-2(213頁)に提示した鬼瓦破片の側面にも「助右門」のヘラ描き文字が認められる。この鬼瓦はSK33からの出土であるが、二次的な被熱を受けており、本来切り合い関係にあるSK14・15(寛保の大火に伴う火災処理土坑)に帰属するものであろう。第169図-3は「惣左」と判読できる刻印。「惣左」は元禄年間前後に豊後国分寺薬師堂の瓦製作に携わった「木村惣左衛門」を意味するものと思われる。この刻印は厚手で重量のある大型の平瓦に認められるに過ぎず(第170図)、豊後国分寺薬師堂で中心的な役割を果たした惣左衛門も、府内城三ノ丸の本調査地点(木村家武家屋敷地点)では限られた瓦のみを製作するに留まった可能性も考えられる。第169図-4~8は「助ノ原」のヘラ描き文字あるいは刻印である。6・7はヘラ描き文字で、前者は平瓦、後者は丸瓦に描かれている。4・5は刻印の可能性が高いもので、平瓦・丸瓦に認められる。8は丸瓦に認められる刻印で、1点のみの出土である。また「助ノ原」の文字は軒平瓦右袖部の破片にも認められる(第138図-39, 206頁)が、残念な

がら瓦当文様を欠損している。さらに第144図-4 (213頁)に提示した鬼瓦破片の側面にも「助ノ丞」のヘラ描き文字がみられる。この鬼瓦資料も先に示した「助右門」の文字を描く平瓦と同じS K 33からの出土であるが、当該資料も同じく二次的被熱を受けており、本来S K 14・15に帰属するものであろう。良好な状態とは言えないまでも、「助右門」と「助ノ丞」の鬼瓦が、同様な二次的被熱を受け、同一遺構から出



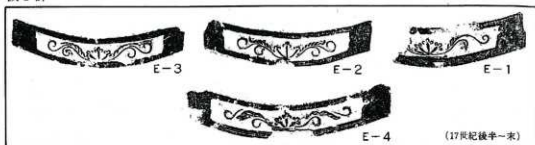
第170図 「惣左」の刻印がみられる厚手の平瓦 (S=1/4)

土していることに注意しておきたい。「助ノ丞」は豊後国分寺薬師堂鬼瓦に見える「高島助ノ丞」を意味するものと思われ、刻印は平瓦・丸瓦・軒平瓦・鬼瓦など多数の瓦類に認められ、本調査地点の瓦類製作の中心的役割を果たした可能性が高い。以上、府内城三ノ丸遺跡出土の仮I群の瓦に関係する刻印・ヘラ描き文字を紹介した。これにより、比較的初期段階の府内城系列軒平瓦には「助右門」・「木村惣左衛門」・「高島助ノ丞」の3人の瓦工人が関係したことがわかる。この3人は府内城三ノ丸遺跡あるいは豊後国分寺で、軒瓦・平瓦・丸瓦のみならず、鬼瓦を製作しており、当時の瓦生産の中心的役割を果たした工人であったことが推定される。豊後国分寺薬師堂の紀年銘軒平瓦より、「木村惣左衛門」と「高島助ノ丞」が活躍した時期は17世紀末前後の元禄年間頃と考えられる。「助右門」の刻印を持つ府内城系列軒平瓦は、「助ノ丞」・「惣左衛門」が関係したと考えられる府内城系列軒平瓦より、型式学的にいくぶん古い様相をみせる。従って「助右門」が活躍した時期は「惣左衛門」・「助ノ丞」より若干先行する可能性が高いが、前述した府内城三ノ丸遺跡S K 33での鬼瓦の出土状態より、活動時期が併行する



府内城隅櫓

仮Ⅰ群



(17世紀後半～末)



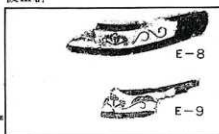
豊後国分寺薬師堂
(元禄12年=1699)

仮Ⅱ群



(18世紀前半～後半?)

仮Ⅲ群



(18世紀後半?)

(19世紀前半)



第171図 府内城系列軒平瓦の推定製作年代

期間が存在することも推定しておきたい。

最後に、上記の検討結果を踏まえて、府内城系列軒平瓦の製作年代を推定しておきたい（第171図）。まず型式組列の最初に置くことができるのが、府内城隅櫓の資料である。次段階には仮Ⅰ群中のE-1～3類が位置づけられる。出土状況からはこの3類に時間的な前後関係を考えることはできず、文様のバリエーションは製作工人差を反映するものとする。今回は量的な検討を行っていないが、整理時の印象ではE-3類が最も多く、E-2類がこれに続く。量的に最も少ないのはE-1類であるが、これには「助右門」の刻印があり、製作工人が判明している。E-4類がE-1～3類より後出する要素が認められることは、前述した。E-1～3類の次段階に位置づけられるものが豊後国分寺薬師堂資料で、紀年銘より元禄12年（1699）に比定される。よってE-1～4類の製作年代は17世紀後半から末前後に比定されよう。府内城隅櫓の資料の製作年代もこの幅の中で考えておきたい。次段階には仮Ⅱ群中のE-6～7類が位置づけられる。陶磁器との共存関係では18世紀後半以降に比定されるが、E-1～4類や豊後国分寺薬師堂資料との兼ね合いからその製作年代が18世紀前半代に遡る可能性が考えられる。同様に仮Ⅲ群中のE-8類も、陶磁器との共存関係からは19世紀以降に比定されるが、やはりその製作年代は18世紀後半代に遡る可能性を考えておきたい。同じ仮Ⅲ群中のE-9類は、文様の硬化が著しく、その製作年代は19世紀前半以降に下るものであろう。

3. 軒平瓦A・B・C・D-1・D-2類について

前述の通り、仮Ⅰ群に位置づけられる軒平瓦はA・B・C・D-1、2・E-1～4類である。このうちE-1～4類については前項で検討し、その型式的位置や製作年代を一定程度明らかにできたと考えられる。本項では軒平瓦A・B・C・D-1・D-2類を検討したい。既に指摘した通り、これらの軒平瓦もそのほとんどが寛保の大火（1743年）に伴う火災処理土坑から一括して出土しており、18世紀中頃以前に製作されたものであることは動かない。

まず、軒平瓦B・D-1類について検討したい。これらは中心飾りに桐葉文もしくは三葉を採用する均整唐草文軒平瓦である。近年の発掘調査の成果より、類似モチーフを持つ軒平瓦を探索してみたい（第172図）。1～3は愛知県西春井郡清洲町清洲城下町時期3⁽⁸⁾に比定されるもので、1は桐葉文、2は三葉を中心飾りの文様として採用するものである。遺構との兼ね合いや瓦の組み合わせから、時期3は1586～1615年に比定されている。4は福岡県京都郡苅田町松山城跡⁽⁹⁾出土の軒平瓦で、中心飾りに桐葉文を有するものである。松山城は天正15年（1587）に黒田孝高が豊臣秀吉から給付され、その後細川氏の所有となるが慶長11年（1606）に破壊されている。瓦の使用地点は主郭の礎石建物周辺と思われ、文献の記載を参照しても、礎石や瓦を採用する織豊系城郭の後半段階⁽¹⁰⁾に位置づけられる。軒平瓦は当該資料1種類に限られるようであり、製作年代の幅を1587～1606年に比定することが可能である。5は福岡県



1



2



3

愛知県西春日井郡清洲町
清洲城城下町遺跡3期
(1586~1615)



4

福岡県京都郡苅田町、松山城跡
(1587~1606)



5

福岡県直方市、鷹取城跡 (1601~1615)



6



7



8

(1594~1600)



9

大分県東国東郡安岐町、安岐城跡
(1600~)



10

大阪府高槻市、高槻城跡Ⅳ期
(元和~寛永=1615~1643)

第172図 軒平瓦B・D-1類関連資料

直方市鷹取城跡⁽¹¹⁾の軒平瓦である。中心飾りは三葉の下に小さな珠点を持ち、唐草は左右に1単位が展開するのみである。鷹取城跡は中世段階に遡る山城であるが、関ヶ原役後に筑前を領有した黒山長政の六端城の割に刷り、慶長6年(1601)に母里太兵衛友信が修築を行っている。その後、徳川家康による元和の一国一城制(1615)により破却される。鷹取城跡に瓦が使用されるのは、この1601~1615年段階が考えられよう。6~9は大分県東国東郡安岐町安岐城出土の軒平瓦⁽¹²⁾で、安岐城Ⅲ期の遺構に伴うものである。6~8は中心飾りに桐葉文を持つもので、報文ではそれぞれⅠa・Ⅰb・Ⅰc類とされる。9は三葉を中心飾りとする均整唐草文軒平瓦でⅢ類とされるものである。安岐城Ⅲ期は大友義統除国後の文禄3年(1594)に入封した熊谷直陳による織豊系城郭として位置づけられ、慶長5年(1600)には黒山長政により落城させられている。従って瓦類の使用期間は1594~1600年に限定されるが、発掘調査の所見か

らⅢ類は安岐城廃絶後の整地層上の建物に使用されたものとされる。10は大阪府高槻市高槻城出土の中心飾りに三葉を持つ均整唐草文軒平瓦⁽¹³⁾である。瓦当文様の検討から、高槻城での分類のⅣ期(元和から寛永年間=1615~1643年)に比定されている。以上、府内城三ノ丸遺跡軒平瓦B・D-1類に関連する資料の紹介を行った。上記の提示だけでは不十分ではあるが、中心飾りに桐葉文や三葉を有する軒平瓦が16世紀の第4四半期前後から17世紀前半代に比定できることを指摘しておきたい。さらに今回は紙幅の関係や型式学的検討が不十分なため提示できていないが、この種の瓦は兵庫県姫路周辺⁽¹⁴⁾や大阪城の豊臣期から徳川初期にも頻例があり、大阪城出土の一部のものには金箔を施すものも認められる⁽¹⁵⁾。瓦に金箔を施すことや城郭に瓦が使用されることは織豊系城郭の整備・拡散に伴う属性であり、桐葉文や三葉を中心飾りに持つ軒平瓦の全国的な分布は、主に織豊系城郭の全国的な拡散にその背景を求めたい。

さて、府内城三ノ丸遺跡軒平瓦B類は中心飾りに桐葉文を採用するものであるが、瓦当文様の型式学的な流れからみて清洲城下町遺跡や松山城、安岐城などの16世紀末から17世紀初頭の段階まで遡ることはできず、17世紀前半まで下げて考えるのが穏当なところであろう。同様に三葉を中心飾りに持つD-1類も16世紀末から17世紀初頭の清洲城下町遺跡のものに対比するのは不可能で、17世紀初頭以降の安岐城や高槻城のものに最も類似することがみて取れる。よって、府内城三ノ丸遺跡軒平瓦B・D-1類の製作年代は17世紀初頭にまでは遡らない17世紀前半代を考慮しておきたい。

府内城三ノ丸遺跡軒平瓦A類は、瓦当文様の基本となる単位文様や中心飾りに桐葉文から変形した可能性が考えられる蓑草文を有するものである。この瓦は直接に年代を対比できる資料を持たないが、出土状況からは上記の軒平瓦B・D-1類との年代差を考えることはできず、やはり17世紀前半代に比定しておく。軒平瓦D-2類は、D-1類の第2唐草を蓑草状に変形させたものであり、この意味では型式学的にはD-1類より後出の要素を持つ。しかし、出土状況からはこれも他の軒平瓦との年代差を考えることができず、17世紀前半代に収めておきたい。D-2類と類似する軒平瓦が、大分県杵築市杵築小学校校内遺跡Ⅵ層で、1660年代の肥前産磁器を多く含む17世紀後半から18世紀前半の遺物と共存している⁽¹⁶⁾ことも考慮したい。軒平瓦C類はSK19aから出土していることに注目したい。SK19aはⅣ期(18世紀後半)の遺構ではあるが、埋土中より「…年□西閏五月…」のヘラ描き文字を有する平瓦(第142図。211頁)が出土しており、共存した軒平瓦にC類が存在する。前述の通り、西年で閏5月が存在するのは、江戸時代では正保2年(1645)のみである。これだけではC類の年代を確定する資料としては不十分であるが、参考資料として考えた場合、C類はB類からの型式変化の流れの中に位置づけられないこともないこと(第166図参照)が注意される。以上の状況から、軒平瓦C類の製作年代を17世紀中頃前後に比定しておきたい。

4. 瓦にみられる刻印について

元禄年間以前の瓦にみられる「助右門」・「助ノ丞」・「惣左」の刻印については、前項で検討した。ここでは18世紀後半以降の瓦にみられる刻印を検討したい。当該期の刻印については、第173図に提示した25種類が認められる。このうち1～3はSK19b・SK9からの出土で、Ⅳ期(18世紀後半)のものである。同様にSK3はⅤa期(18世紀末～19世紀前半)、SK33・SK34はⅤb期(19世紀前半～中頃)、SX1はⅥ期(明治前半～19世紀後半)に比定される。これらはあくまで陶磁器との共伴関係を示したもので、上記の年代が直ちに製作年代に結びつかないことは言うまでもない。刻印は平瓦・丸瓦・軒平瓦に認められるが、本調査地点では前二者に押印されたものが多い。刻印の意味は不明であるものが多い。ただ、⑩の「細安」と⑤の「細瓦師安太」に注目して頂きたい。⑤の「細」は257頁でも触れた細村(現大分市大字細付近)の意味で、細村周辺が瓦生産を含む当時の一大窯業生産地であったことは前述した。「瓦師」は瓦製作工人の意、「安太」は名前であろう。そうすると、⑩の「細安」は本来「細瓦師安太」の意味で、この種の刻印は地名と製作工人を意味するいわゆる「屋号」の性格を有するものであることが推定される。従って⑧の「細和」、⑨の「細義」、⑫の「細常」、⑬の「細乙」も同様に細村に居住する瓦製作工人の屋号であろう。このことを参考にすると、⑭の「市直」、⑮の「市一」にみえる「市」は当時やはり窯業生産が盛んであった市村(現大分市坂ノ市付近)を意味する可能性がある。⑩・⑤は市村に居住する瓦製作工人の屋号であろう。同様に⑯の「蔵惣」の「蔵」は、元禄14年(1701)に市村から分離した蔵惣(倉掛)村を意味するものであろう。さらに⑥・⑪にみえる「神」は、やはり瓦生産が盛んであった現北海部郡佐賀関町幸崎(神崎)を意味する可能性が考えられるが、これについては断定できない。

これらの刻印の実年代を知る手がかりはないものであろうか。記録に残る文献記載を探索すると、「安政4年(1857) 御普請方日記」(『府内藩記録』甲358)中に注目すべき記事がみられる⁽¹⁷⁾。

「四月十日(中略)／(細村)瓦師礮右衛門 同和作 同安太 同新次郎 同八十治／右之者江 川口御番為改之鑑札 相渡置候」

つまり安政4年(1857)4月10日に、府内藩御普請方が当時肥後領であった細村から府内藩に瓦を搬入するための鑑札を細村瓦師礮右衛門ほか5人に発行している記事である。肥後領細村から重量のある瓦を搬出するためには、水運によった可能性が高いため、「川口御番為改之鑑札」が必要であったと推定される次第である。この鑑札が発行された背景には、同年3月に府内城下の塗師町・田町で火災があり、瓦の需要が高まったことなどを想定したい。上記史料中にみえる「安太」は、おそらくは府内城三ノ丸遺跡出土瓦にみられた刻印(第173図-⑩・⑤)の「細瓦師安太」と同一人物である可能性が極めて高い。さらに第173図-⑧の「細和」は上記史料中の「和作」と、同-⑨の「細義」は「礮右衛門」とそれぞれ同一人物であろう。後者の



① 平三



② 大



③



④

SK 19b
(Ⅳ期=18世紀後半)

SK 9
(Ⅳ期=18世紀後半) SK 3
(Ⅴa期=18世紀末~19世紀前半)



⑤ 神



⑥ 吉久



⑦

SK 33 (Ⅴb期=19世紀前半~中頃)



⑧ 細和



⑨ 細義



⑩ 細安



⑪ 受合



⑫ 合



⑬



⑭



⑮

SK 34 (Ⅴb期=19世紀前半~中頃)



⑯ 神



⑰ 市直



⑱ 藏惣



⑲ 引合



⑳ 全



㉑

SK 1 (Ⅶ期=19世紀後半以降)



㉒ 細常



㉓ 細乙



㉔ 市一

表採



㉕ 細瓦師安太

第173図 18世紀以降の瓦に見られる刻印 (S=1/1)

「細義」は碓右衛門の「磯」字の旁部分を屋号の字として採用した可能性を考えたい。以上の検討により、S K 33などから出土した瓦の「細義」・「細和」・「細安」などの刻印の使用の実年代の1点が安政4年(1857)であることが判明した。S K 33は明治初年前後の木村家屋敷引き払いに伴う廃棄土坑と推定しており、刻印使用の時期と考古学的所見は矛盾しない。

さらに驚くべきことに、上記史料でみられる鑑札と瓦に使用された刻印の実物が現存しているらしい⁽¹⁸⁾。大分市大字細に現在も居住する久枝和美氏は、上記史料中にみえる瓦師「和作」の子孫であるようで、氏の実家には木製の刻印と鑑札および軒平瓦の瓦当范、瓦製作の道具などが残されている。久枝氏の調査によると木製の鑑札は縦12cm、横9cm、幅1.9cmを測る板状製品で、表裏に以下の墨書が存在する。

(表)「府内／御普請方 正」

(裏)「安政4(1857)丁巳年／御用 肥後領細村／瓦師 和作／4月」

まさに、「安政4年 御普請方日記」にみえる鑑札のものであろうと推定される。また久枝氏が所有する軒平瓦の瓦当范の文様は、府内城三ノ丸遺跡の軒平瓦G-2・G-3類に極めて類似しており、当該資料の製作年代を推定する上で大きな手がかりとなろう。

5. その他の軒平瓦

これまでの検討に漏れた軒平瓦についての検討を簡単に行っておきたい。まず軒平瓦F-1・F-2類であるが、前者から後者への型式的な型式変化が想定できる可能性を既に指摘した(204・205頁)。F-1類はⅣ期(18世紀後半)以降の、F-2類はⅤb期(19世紀前半から中頃)の陶磁器類と共伴しているが、瓦自体の製作年代はやや遅る可能性がある。大分県佐伯市樺杵礼城関連遺跡古市地区第Ⅱトレンチ⁽¹⁹⁾より、18世紀後半から末の陶磁器類とともにF-2類と類似する軒平瓦が出土していることも考慮しておきたい。この橘状文を中心飾りに持つF類軒平瓦と類似する瓦当文様は、全国的な広がり認められることも指摘したい。H・J・K類は共伴する陶磁器類より、その製作年代は19世紀以降に下るものであろう。またX類は中段階の製作になるもので、当遺跡では表土中から1点が出土しているのみである。同范と思われる軒平瓦は、大分県臼杵市臼杵石仏地域遺跡群⁽²⁰⁾・大分市上野遺跡⁽²¹⁾・大分市天面山城跡⁽²²⁾で認められ、上野遺跡では15世紀から16世紀代の遺物とともに出土している。

6. まとめと展望

以上府内城三ノ丸遺跡出土の、主に軒平瓦の年代についての検討を行った。ここでは府内藩の政治状況を考え併せながら、瓦類の変遷の動向を窺い一応のまとめとしたい。まず、17世紀前半代から中頃に比定されるものは、軒平瓦A・B・C・D-1・D-2類である。これらは中心飾りに桐葉文・三葉・笹状文を持つもので、以上は織豊系城郭の拡散に伴い全国的に分布

する軒平瓦の瓦当文様に系譜をたどり得ることを指摘した。ただし府内城三ノ丸遺跡出土の瓦資料には、瓦当文様の比較から16世紀末から17世紀前半の文様・慶長期に遡るものはほとんどなく、17世紀前半代の元和以降に比定されるものである。『雄城雜誌』等の記載によると、福原直高段階の慶長4年(1599)には三ノ丸家臣屋敷が完成したことになっており、SK23やSK20の出土遺物によりそのことが考古学的に傍証されることを前述した(229頁)。ただ慶長年間に遡る瓦が当遺跡から検出されていない以上、福原段階の三ノ丸家臣屋敷には瓦葺の建物は存在しなかった可能性が考えられる。三ノ丸武家屋敷に瓦葺の建物が出現するのは、竹中重利段階以降の17世紀前半代を待たなければならない。17世紀後半以降になると、本項でE類とした府内城系列軒平瓦が出現する。府内城系列の最古段階の出現は17世紀末の元禄前後の可能性が高いが、遇っても松平忠昭府内入府の万治元年(1658)以前に比定されることは考えられない。府内城系列軒平瓦はその後19世紀前半に至るまで製作が続けられ、この意味では大給松平府内藩を代表する軒平瓦として規定することができるものである。軒平瓦E類を「府内城系列」と命名する由縁である。18世紀後半には、全同的に類似文様が存在するF-1・F-2類が出現しているが、今回は量的な検討を行っていないため、府内城系列との量的な対比はできていない。19世紀前半から中頃になると、当時の肥後領である細村・市村・藏懸村・馬場村神崎など(現大分市東部から北海部郡佐賀関町)で製作されたと考えられる軒平瓦が出現する。軒平瓦G-2・G-3類がそれに該当することは前述したが、あるいはH・J類もそれに含まれる可能性がある。瓦に刻印が押されるようになる背景には、江戸時代後半における城下町の瓦の需要増大に伴い、瓦製作工人・工房が増加し、それぞれの製品の判別を容易にするためのものである可能性を考えたい。

最後に、軒平瓦と軒丸瓦のセット関係について触れておきたい。まず間違いないものは、本遺跡で最も出土量の多い軒平瓦E-3類と軒丸瓦TE類とのセットである。そのほか瓦のサイズと伴関係から、17世紀前半の軒平瓦A類は軒丸瓦TL類と、軒平瓦B類は軒丸瓦TB類とそれぞれセットになる可能性が考えられるが、これについては断定はできない。その他のものについては不明瞭な点が多く、今後の課題としておきたい。(吉田寛)

- 註(1) 後述するが、C類はIV期(18世紀後半)以降の陶磁器と共伴しているが、B類からの型式変化が想定できる可能性があることやSK19a出土の正保2年(1645)銘の平瓦に関連する可能性が考えられることから、仮I群に含めて考えておきたい。
- (2) これも後述するが、E-6類はVa期(18世紀末～19世紀前半)の陶磁器との共伴しているが、府内城系列とするE類の型式変化の流れから、仮I群に含めて考えておきたい。
- (3) 前述の通り、軒平瓦仮I群にはE類の他にA・B・C・D-1・D-2類も存在するが、これらは後に検討したい。

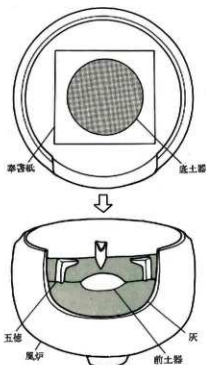
- (4) 府内城系列軒平瓦は大分市植田市遺跡(B-3類と同範か。未報告。1993年度報告書刊行予定)や大分市上野の弥栄神社および大分県杵築市杵築城下町に分布するようである。杵築城下町の府内城系列軒平瓦については、実査の後別稿で検討したい。
- (5) 王永光洋氏教示。現在の府内城に葺かれている瓦の大半は、昭和40年(1965)代の整備時に葺き入れられており、歴史的背景を考慮していない近年の製作によるものが多い。江戸時代に遡る瓦類は一部が隅枿内や床下に保存されている。
- (6) 大分市歴史資料館「表紙紹介-国分寺薬師堂-」(『大分市歴史資料館ニュース』No 4 1989年) 2頁。
- (7) 豊後国分寺薬師堂には元禄7年(1694)の棟札が現存しており、その建立年代を推定できる。大分市教育委員会『豊後国分寺』(1989年)195頁。
- (8) 鈴木とよ江「瓦」(『清洲城下町遺跡』(Ⅱ) 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第27集 1992年) 他に小澤一弘「清洲城下町遺跡出土の瓦について」(『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報 昭和61年度』1987年)も参照。
- (9) 長嶺正秀「豊前国松山城址」(菊田町文化財調査報告書第18集 菊田町教育委員会 1992年)
- (10) 中井均「織豊系城郭の面割-礎石建物・瓦・石垣の出現-」(『中世城郭研究論集』新人物往来社 1991年)
- (11) 直方市教育委員会『筑前高取城跡』Ⅰ・Ⅳ(1987・1992年)
- (12) 王永光洋ほか『安岐城跡・下原古墳』(大分県文化財調査報告書第76輯 1988年)
- (13) 森田克行「屋瓦」(『摂津高槻城 高槻市文化財調査報告書第14冊 1984年)
- (14) 田中幸夫「播磨で活躍した室町・桃山時代の瓦工集団」(『播磨考古学論叢』今里幾次先生古希記念 1990年)
- (15) 大分市文化財協会『大板城跡』Ⅲ(1988年)
- (16) 高橋信武編『杵築小学校校内遺跡』(杵築市埋蔵文化財調査報告書第1集 杵築市教育委員会 1987年)13頁、Fig.10-1。
- (17) 文献の探索は、佐藤見洋氏のご教示による。
- (18) 今回は時間の関係から、残念ながら久枝氏所有の木製瓦札等を実査できていない。今後実査の機会を得たいと考えている。以下の文献参照。
久枝和美「榎川用瓦師」(『続佐野郡一坂ノ市地区郷土史-』大分市坂ノ市公民館豊海大学年 1985年)
なお、久枝氏所有の木製刻印の実物を実見し得ていないが、大分県竹田市岡城跡より「細瓦師和作」の刻印を有する平瓦が出土しており、この刻印の原体である可能性が考えられる。
松田政基「史跡岡城跡」(竹田市教育委員会 1986年)35頁。
- (19) 新宅信久「榎牟礼城址と岡達遺跡発掘調査概報」(佐伯地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ 佐伯市教育委員会 1991年)15頁、第22図-7。
- (20) 菊田徹編『臼杵石仏群地域遺跡発掘調査報告書』(杵築市教育委員会 1982年)46-47頁。
- (21) 池邊千太郎「上野遺跡」(大分市教育委員会 1990年)17頁。
- (22) 採集資料で、詳細は公表されていない。大分市教育委員会坪根伸也氏のご教示による。

(4) 府内城三ノ丸遺跡出土の前土器

と茶道具について

1. 前土器の用途

上層遺構B-4区より出土した前土器（まへかわらけ）は、茶道具のひとつである（第176図）。形は半円形を呈し、幅10.8cm、高さ9.6cm、最大厚1.5cmを測る。色調は灰白色、胎土は斜長石を含むが精緻。焼成は良好である。外面は同心円状のナデ、内面は横方向のケズリの後、周縁部を丁寧にナデ仕上げしており、中央に「樂」印をもつ。さて、茶席では釜をかけて湯をわかす道具として、風炉または炉が用いられる。千利休（1522～91）が今日の炉点前を創案するまでは、風炉のみが用いられていた。現在では5月から10月までは風炉、11月から4月までは炉というように、季節によって使い分けられている。前土器とは、風炉の火窓からの火気を防ぐために立てる半円形の土器のことである。初めは土師質の小皿もしくは坏のようなものを半分に切って使用したもので、前土器として焼かせるようになったのは、利休以降と考えられている。他に風炉に付随する道具としては、五徳、底土器（そこかわらけ）がある。それらの使用法は第174図に示した。まず、風炉に灰を入れる前に底に奉書紙を敷き、その上に底土器を置く。これは風炉の底や敷板を熱から保護するためである。次に灰を入れて五徳を据え、それから左右の五徳の中央に前土器を立てる。前土器には紅白2種類あり、その使用法は流儀によって異なる。例として裏千家の場合をみると、風炉の種類によって使う色が決まっており、白土器は土風炉、唐銅風炉等、赤土器は鉄風炉のみに用いる。また、気温などその時の状況によっても立て方に細かい作法がある（第175図）。



第174図 前土器の使用法



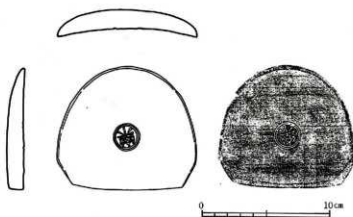
第175図 前土器の立て方
（山藤宗山「風炉の灰形」より）

2. 前土器の年代と印銘

まず出土遺構から年代を検討していきたい。Ⅲ- (2)でも述べたように、前土器の出土した上層遺構は、整地層上に造営された遺構群である。整地層自体は幕末以降に位置づけられ、それより通る可能性はない。しかし擾乱を受けている部分も多く、検出された遺物も17世紀後半から昭和までと時期幅が大きい。ただし主体をなす遺物は18世紀後半から第二次大戦前後であるので、その範囲内には収まるであろう。ここで出土した前土器と手元にある現代のものを比較すると、基本的な形は変わっていない。ただ若干横長(幅11.4cm、高さ8.6cm)になり、厚さは約2分の1(0.7cm)である。こうした違いが新旧の差によるものなのか、資料不足のため不明である。茶道具の多くは各時代の茶の湯の流行や好みによって様々なものが作られていった。しかし、前土器のようにそれ自体で個性を発揮しにくいものは、あまり大きな変化を遂げてこなかったことも予想される。

次に前土器の印銘について検討したい。府内城の前土器は内面の中央に「樂」印を持つ。「樂」という印からまずイメージするのは、京都の樂家である。茶陶を作る多くの窯が本来は日常雑器の類を生産するためのものであったのに対し、樂家の作陶活動は当初から茶陶のみを対象に行われてきた。しかも最初から現在までただ一軒の家によって伝承されていることも大きな特徴である。その開始は、樂茶碗が確実に茶会記に現れる天正14年(1586)頃と考えられており、

創始者長次郎の茶碗は利休の佗茶の精神を最も濃厚に示した造形として知られている。そこで樂代々の印銘を調べた結果、前土器の印に最も類似しているのは12代弘入(1857~1932)のものであった(第177図)。弘入の樂印は左右の幺の形が異なり、特に右の幺の形が8の字になっていることから、8樂印と言われている。弘入はこの印を大正8年(1919)まで使用した。一方、前土器の印を観察すると、幺の部



第176図 府内城三ノ丸遺跡出土の前土器

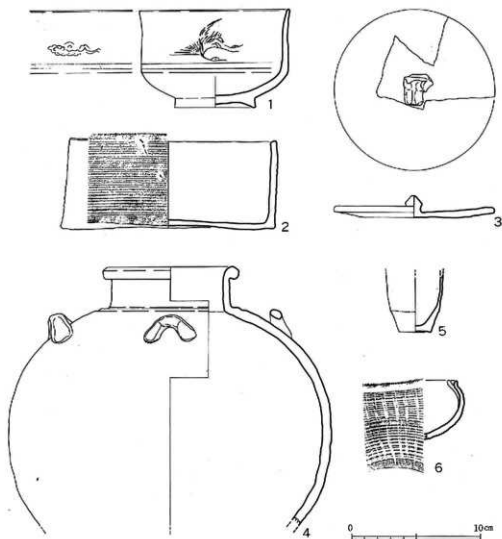


第177図 弘入、保全、前土器の「樂」印

分は8の字になっているが弘入印にはない縦線がついており、しかも左右対称である点などから弘入印とは異なるものと考えられる。

次に第177図に示した「永楽」の銘を見て頂きたい。これは後期京焼の名工永楽保全（1795～1854）の印である。保全は同時に、村田珠光（1422～1502）以来茶の湯で用いられてきた土風炉師、西村善五郎家の11代継承者でもある。従って代々、土風炉とともに前土器を作っていた可能性もないとはいえない。府内城の前土器の印と比較すると「楽」の上部の形は、玄の部分も白の部分もほぼ同じである。しかし下の木の部分をみるとはねの形が微妙に異なり、しかも線の太さも前土器のほうが全体的に細いなど相違点も多く、やはり同一のものとはいえない。

以上、印銘から前土器の年代と製作者について検討を加えてきたが、明確な答えは得られな



第178図 府内城三ノ丸遺跡出土の茶道具（1～4 SK14・15、5、6 SK8）

かった。楽焼といえは利休以来茶陶のブランド品であるため、推測の域を出ないが、そうした印銘を借用して作った模造品とも考えられる。その場合、保金もしくは弘人の字体を模したのだとすると、幕末から大正の間にその年代を捉えることも可能である。これは上層遺構の年代とも重なるものである。

3. その他の茶道具

第178図に示したのはSK 8、SK 14・15から出土した茶道具と考えられる陶器類である。これらの特徴、年代等はⅢ- (3) で既に述べているので、ここでは用途について説明していく。1は類例の少ないもので産地は特定できないが、大きさ、形状等からいわゆる抹茶碗と考えられる。2は灰器と推定されるものである。茶をたてる湯を沸かすために、火をおこす順序をひとつの形式にしたものを炭手前という。灰器とは炭手前で使用する灰を盛る器で、昔は焙烙または灰焙烙といい、元来は素焼きであった。今日では釉のかかった小振りのものを風炉用、素焼きで大振りのものをが用とするのが原則である。3は水指の蓋と考えられる。水指は点前の際に、釜の湯の不足を補ったり、茶碗、茶筌をすすいだりするための清水をたくわえておく容器である。4は茶壺として用いられた可能性が高い。これは抹茶の元になる葉茶を入れたものである。5は茶入れといい、濃茶の容器を指す。抹茶には濃茶と薄茶があるが、古くは濃茶が茶の湯の主体であったので、茶入れというと濃茶の容器を指すようになったようである。これに象牙の蓋がつくのが普通である。6は小片であるため全体の形は不明であるが、茶器であるとなるとやはり灰器と考えたい。

以上SK 8、SK 14・15出土の茶道具について簡単に説明してきた。いずれの土坑もⅢ期(17世紀末～18世紀中頃)に属しており、前土器との関連は想定できないが、同じ遺跡出土の茶道具という点で参考にして頂きたい。

府内域三ノ丸遺跡出土の前土器については、小川望氏(東京都小平市教育委員会)、堀内明博氏(京都市埋蔵文化財センター)よりの御教示・御指導を得た。記して深謝する次第である。

(吉武牧子)

〈参考文献〉

1. 『日本やきもの集成』5 京都 (平凡社 1981年)
2. 『日本やきもの集成』6 近畿Ⅰ (平凡社 1981年)
3. 大河内風船子『日本陶磁体系』17 長次郎 楽代々 (平凡社 1990年)
4. 河原正彦『日本陶磁体系』26 京焼 (平凡社 1990年)
5. 千宗室『茶の湯裏千家』(主婦の友社 1966年)
6. 山藤宗山『風炉の灰形』(淡交社 1987年)
7. 林家辰三郎ほか『角川茶道辞典』(角川書店 1990年)

(5) 近世における府内城下町と府内家臣団 —本調査地域を中心として—

佐藤 兄 洋

(大分県教育庁文化課先哲叢書編さん班)

はじめに—府内城郭及び城下町建設の概観—

元禄7年(1694)に豊後府内を訪れた貝原益軒は、その著『豊国紀行』において、府内城下町を次のように描写している。

府内の町の西南にほりあり。城の要害也。東北の方は海なり。城は町の東北の海の方にあり。頗る大なり。天守あり。城の入口三所あり。町も頗るひろし。万の売り物備れり。

17世紀における繁栄ぶりに思いをはせたくなるこの記述に示されているように、府内城下町は、近世豊後最大の都市であった。元来、府内地域は、大友氏時代の城下町的要素を備えていた(橋本操六「旧府内城下町の信憑性」『大分県地方史』第94号)。近世府内城下町は、この要素を下地とし、慶長2年(1597)3月の福原直高の府内入部を出発点としたといえる。

福原直高は、石田三成の妹婿で、臼杵領主時代の領知高6万石に大分・速見・玖珠3郡の6万石を加増され、慶長4年(1599)5月(8月ともいわれている)までの約2年半、12万石の府内領主として在任した。直高は府内入部後、豊臣秀吉から「豊府八国中ノ咽喉也、汝要害ヲ見立改築スベキ」と命じられ、大友氏時代の城館のあった上野台地から築城地を策定し、北方の河畔の「荷落」と呼ばれている所を築城地とした。ここは、大分川の支流と住吉川の合流する場所であり、北には海がひろがる交通の要地といえる。直高はまず本丸・二ノ丸・三ノ丸(武家屋敷)からなる城郭建設に取り組み、「慶長の朝鮮出兵」出陣によって一時中断したものの、慶長4年(1599)4月には二ノ丸東三重櫓および三ノ丸武家屋敷もほぼ完成している。そして地名を荷落から「荷揚」と改め、新城を「荷揚城」と名付けた。こうして府内城は、直接海に面した平城として、城の東から北にかけて大分川の中に発達した砂州により敷地を規制されつつ、建築されていったのである。しかし、直高は改易され、文禄2年(1593)から慶長2年(1597)までの府内領主であった早川長敏が再入部した。この早川も、「関ヶ原の戦い」において石田三成からの呼びかけに応じて西軍に属したため、徳川家康により除封されてしまった。

慶長6年(1601)3月、府内城に入城したのは竹中重利であった。文禄3年(1594)に豊後高田1万石の領主となった重利が、府内2万石を領知することになったのである。重利は、まず家康の許可を得て城郭の増築工事に着手した。石垣の築造などに加藤清正らの援助を受け、慶長7年(1602)、天守・櫓櫓が完成した。次いで城下町の建設に着手し、城壁の外側に東西10町・南北9町の範囲の町を設定した。城郭を中心にして、内堀と中堀に囲まれた三ノ丸に武家屋敷、その外に菱盤目状に48の町に区画された町屋地域が配置されたのである。町屋地域には、大友

時代から続いていた府内の町や寺院を移転させたという。その後、慶長10年(1605)には町屋の外堀に外堀を掘り、12年(1607)には城下町への入り口として南の笠和町口、西の堀川町口、東の米屋町口(堀九升口)に閘門を建て、人や物の出入りを監視した。13年(1608)には、城の西北に商船出入りのための堀江を開き、その入口に港を設けて京泊と称した。さらに、重利の子重義の時代になって、笠和町口の西側に西新町ができ、城下外の町が作られはじめた。こうして、寛永11年(1634)までの重利・重義二代の竹中頼知時代に、府内城および城下町の建設がほぼ完成したのである。

この後、府内城には、寛永11年(1634)に2万石の領主として日祝野吉明が、万治元年(1658)に2万2200石の領主として大給松平忠昭が入城し、以後廃藩置県まで大給松平氏の居城となった。現在の府内城は、本丸と二ノ丸の区画であった場所が堀と石垣に囲まれて保存されており、当時の建築物として南側の平櫓である宗門櫓と北西角の二重櫓である人質櫓だけが残っている。

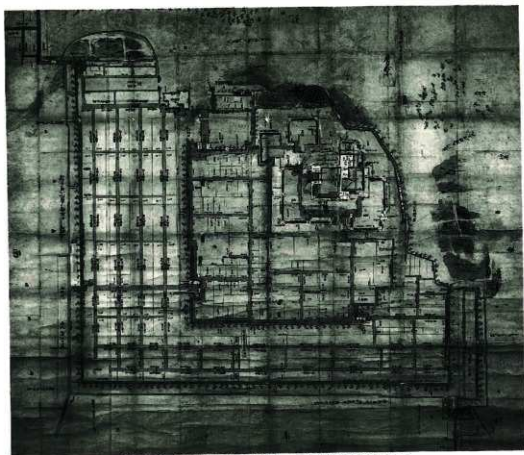
さて、このような府内城および府内城下町については、成立・支配・商業構造などを中心に、『大分県史・近世篇Ⅱ』(大分県・1985年)・『大分市史・中』(大分市・1987年)をはじめ、様々な研究成果が蓄積されている。本稿では、これらの研究成果を手がかりに、本調査地域を中心として、近世における府内城郭・城下町、特に二ノ丸武家屋敷について考察することを課題としたい。あわせて、府内藩における家臣団職制についても概観してみたい。

1. 描かれた府内城郭・城下町

①慶長絵図にみる府内城郭・城下町

府内城郭・城下町を描いた絵図のうち最も精巧なものは、「慶長拾年十一月 府内絵図」という付箋のある「府内城下町絵図」(第179図。大分大学附属図書館所蔵、以下「慶長絵図」と略す)である。絵図の記載事項からみて、付箋記載の年代をそのまま絵図の作成年代とすることはできないと考えられるが、ここでは絵図の作成年代の検討をする余裕はないので、「慶長絵図」を通して府内城郭・城下町を概観するにとどめたい。

「慶長絵図」の絵図面の四辺には東・西・南・北の文字が向かい合わせに記され、方位が示されている。絵図には城郭施設の規模、堀の幅や水深、石垣の高さ、町割りの規模などの細かな注記がなされ、さらには城郭周辺の地形や「惣構堀ヨリ南方山マテ間十五町」などという注記もあり、全体として精緻な絵図となっている。そして、絵図は全体的には平面図といえるが、石垣・樹木・船蔵・芦原・田地などは鳥瞰図的・絵画的描写も用いられている。但し、他の絵図に多くみられるような天守・櫓(矢倉)・番所など城郭主要部分の鳥瞰図的・絵画的描写はみられず、これらの城郭主要部分は白色で彩色されている。この他に彩色が施されている部分としては、土居(上井=土塁)の緑色、道路の黄色、山の灰色などがある。また、「慶長絵図」で



第179図 府内城下町絵図（部分。大分大学付属図書館蔵）

は城下町部分が城郭部分に比べて約60パーセントに縮小して描かれている。これは、この絵図が軍事施設を詳細に描くことを目的としていたことのあらわれといえるであろう。

府内城の城郭は、本丸・二ノ丸（東丸・西丸）・北ノ丸（山里・北丸）・三ノ丸から構成されている。本丸が一隅に片寄って設けられ、本丸から段下がりにより二ノ丸・北ノ丸・三ノ丸が張り出し、城郭が放射状に配置された複雑な形となっている。本丸と二ノ丸・北ノ丸との間には堀があり、二ノ丸と三ノ丸の間には内堀、三ノ丸と城下町の間には中堀、城下町周辺には「惣構堀」と呼ばれる外堀が掘られている。外堀の周辺には、田・畠が広がっている。本丸・二ノ丸・北ノ丸の外周はすべて石垣で、石垣の曲がり角や直線距離が長い石垣の間には櫓が作られている。三ノ丸・城下町の西方面・南方面は土居が築かれ、その上に樹木を植えている。また、本丸は「大潮時深五尺」となるような河口に直接面するような位置に建築され、河口周辺には田が作られており、城郭の北方面には芦原や干潟なども広がっていた。そこで、北方の砂州「中嶋」から城下町東端にかけて人工の堤を築き、内側に石垣、堤上に植林をして、河口からの遮断を考えている。これらの他に、三ノ丸・城下町の道路にT字路・カギ型路・袋小路が

多く、直角に交差する道路が少なくなっていることを特徴としている。これは、城郭・城下町が戦亂に巻き込まれることを想定し、遠見遮断による敵の攻撃力低下を考えたものといえる。府内城は、時代的には元和偃武以前の建築であり、地形的にも無防備な場所における平城のため、このように水城的な四重の堀や遠見遮断をはじめとする防御を考えた設計となっていたのであろう。

そして、北方の砂州の北側には大きな「潮入」があり、ここに八艘の藩船を係留できるように「船蔵」が設けられている。また一般民間用の港としては、船蔵の西方向に海を隔てて「船入」が設けられ、京泊と称されている。但し、「川口遠浅ニテ、小潮時船入兼申候」と注記されている。

ところで「慶長絵図」の三ノ丸部分には、屋敷地割も明確に描かれている。この絵図にみる屋敷地は、他の絵図、例えば享和2年(1802)「清水流規矩元法分間絵図」(大分県立大分図書館蔵)などにみられる屋敷地割とほぼ同様のものといえる。「豊後府内三之丸屋敷間敷覚」(大分県立大分図書館蔵)に竹中・日根野・松平各時代の代々の屋敷拝領者が記されていることも考えあわせると、府内藩主が変わっても三ノ丸の屋敷地割はほぼそのまま踏襲されていたことをあらわしているといえるであろう。

②府内城郭・城下町を描いた絵図

一般に城郭・城下町を描いた絵図は、城地及び城下を含めた城下町プラン全体を対象としたものと、城下町のうちの特定部分を対象としたものに大別できる(矢守一彦「米沢城下絵図について」『史林』56-2)。府内城下町絵図においても同様の分類ができる。特定部分を描いたものとして、破損・焼失などに伴う城郭普請を幕府に届け出た際の控えなどが現存しているが、ここでは、城下町プラン全体を描いたものを考察対象の中心とする。

城下町プラン全体を描いた絵図をまとめると、第55表のごとくである。表の年代欄は、絵図に記されている年代、あるいは絵図に描かれている府内城下町プランのおおよその時期を示している。そのため、必ずしも絵図の製作順というわけではない。

No.	絵 図 名	年 代	所 蔵
①	府 内 城 下 町 絵 図	慶 長 10 (1605)	大分大学付属図書館
②	豊 州 府 内 之 城 之 図	17 世 紀 中 頃	大分県立大分図書館
③	府 内 城 図	17 世 紀 中 頃	臼杵市立図書館
④	府 内 城 図	17 世 紀 中 頃	臼杵市立図書館
⑤	豊 後 府 内 城 之 絵 図	正 保 元 (1644)	国立公文書館
⑥	清水流規矩元法分間絵図	享 和 2 (1802)	大分県立大分図書館
⑦	豊後国府内城下町絵図	天 明 5 (1785)	大分県立大分図書館
⑧	府 内 城 下 町 絵 図	文 久 元 (1861)	大分県立大分図書館

第55表 府内城下町を描いた絵図

城絵図には、幕府の指示によって作成されたものと、藩独自の事情によって作成されたものとがある。第55表の内、幕府の指示により作成された城絵図としては、正保元年(1644)に指示された No.⑤「豊後同府内城之絵図」(第180図。国立公文書館所蔵、以下「正保絵図」と略す)がある。幕府が全国に国絵図・郷帳とともに城絵図の作成・提出を要求した際に、府内城郭・城下町に関して作成したものである。正保城絵図の作成にあたっては幕府から絵図作成基準が示され、それに基づいて絵図元に指名された藩などで作成、幕府に提出された。

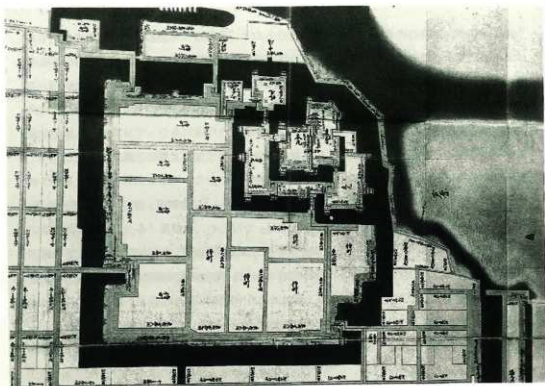
幕府が示した絵図作成基準は国絵図を中心としたものであり、細部にわたって指示がなされている。城絵図に関する作成基準もこの中に含まれており、「好書故事」第28(「近藤正斎全集」第3巻所収)に収録されている「国絵図可仕上覚」をはじめ、佐賀藩「多久家有之候御書類之写」(「鍋島家文書」、佐賀県立図書館所蔵)・「忠宗君記録引証記」(「伊達家文庫」、宮城県図書館所蔵)など諸藩の記録類にみることができる(川村博忠「江戸幕府撰国絵図の研究」、古今書院、1984年)。ここで、「国絵図可仕上覚」から、城絵図に関する項目、城絵図の作成に考慮されたと考えられる項目を抜粋することにする。

- | | |
|-----------------------------|------------------------|
| 一、本・二・三丸、間数書付候事 | 一、堀の深さ・広さの事 |
| 一、殿(天)守之事 | 一、惣曲輪の狭さ・広さの事 |
| 一、城より地形高所有之は、高所と城との間之間数書付候事 | |
| 但、惣堀より外に高所有之共書付候事 | |
| 一、侍町、小路割井間数之事 | 一、町屋、右同断之事 |
| 一、山城・平城書様之事 | 一、本道はふとく、脇道はほそく、朱にて可致事 |
| 一、絵図、山水の書様之事 | 一、海・川、水色書様之事 |

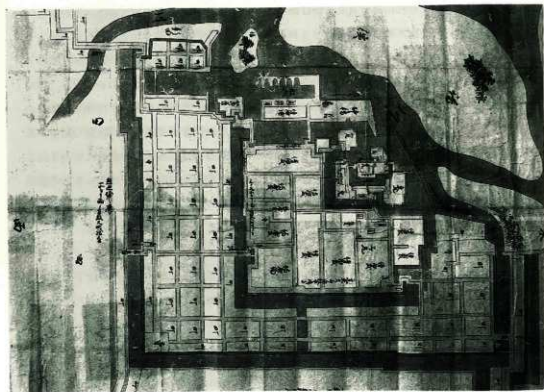
これらの基準をみると、城郭に関わる施設を詳細に描くことが目的とされていたといえる。まず、本丸・二ノ丸・三ノ丸・堀などの軍事的重要な施設の規模を平面図の上に数値で記し、天守・櫓・山・樹木などの城郭構造・周辺地形に関しては克明な景観描写が要求されている。これに対して城下町部分は、町割りの平面図で道路がわかりやすく描かれ、各ブロック毎の規模に関する注記はあるが、細かな町名の記載などは必要とされていない。また、大手門に通じる主要な道筋を朱引きし、藩士らの動線が一目で分かるように示すようになっている。さらに、絵図全体が見やすいように彩色の指示もなされている。

「正保絵図」はこのような基準に沿って作成されたわけであり、まさに城郭・城下町が軍事的観点から図示・注記されているのである。幕府は、正保城絵図の作成・徴収により諸藩城郭の軍事的機能を完全掌握したことを全国に示し、国絵図・郷帳とともに描るぎない全国支配の象徴としたのである。

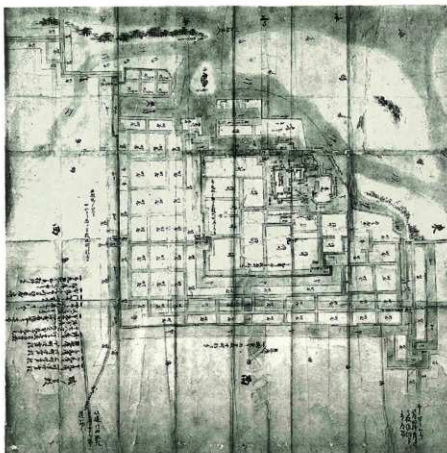
ところで、府内藩における城郭・城下町を描いた絵図をみていくと、「正保絵図」とほぼ同時代の絵図が三点ある。No.②「豊州府内之城之図」(大分県立大分図書館所蔵)、No.③「府



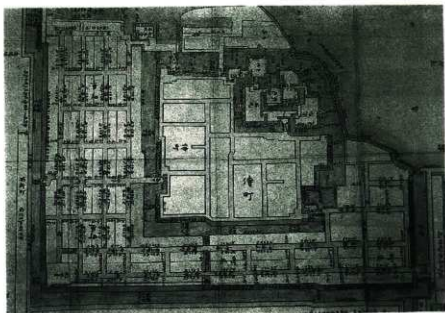
第180圖 豐後府内城之絵図（部分。国立公文書館所蔵）



第181圖 府内城図<No.④>（部分。白井市立図書館所蔵）



第182図 府内城図<No.③>上=全体 下=部分。(臼杵市立図書館所蔵)



第183図 府内城下町絵図<No.③> (部分。大分県立大分図書館所蔵)

内城図」・No.④「府内城図」(第181・182図。ともに臼杵市立図書館所蔵)である。この三点には「御上使御宿」などの記載があり、H根野氏が藩主であった時代の絵図と考えられ、描き方もほぼ同様といえる。特にNo.②とNo.③の二点はどちらか片方が模写したものと考えられ、No.④は前二点を簡略模写したものと考えられる。これらの絵図をみていると、何らかの関連があるように思えてくる。正保国絵図の場合、各藩が藩領図を絵図元の藩に提出し、絵図元の藩において幕府の指示に従って国絵図を完成させている。府内藩に関しても「正保豊後国絵図」(幕府提出絵図は国立公文書館所蔵、扱は臼杵市立図書館所蔵)の作成過程で「H根野時代府内藩領図」(大分市歴史資料館所蔵)を作成し、絵図元であった岡藩・臼杵藩に提出したと考えられている(長田弘通「H根野時代府内藩領図について」『大分市歴史資料館年報1991』)。正保城絵図の場合も、同様の手順が取られたとすれば、府内藩はNo.②「府内城下絵図」を作成し絵図元の臼杵藩に提出、臼杵藩はこれを模写してNo.③「府内城図」を作成し幕府の内見を仰ぎ、No.④「府内城図」のように絵図を簡略化するなどの修正を加え、最終的に「正保絵図」に仕上げたと考えることもできるのではないだろうか。他藩の正保城絵図作成の手順も含め、検討する必要があるであろう。

さて、全国一律に実施された正保城絵図の作成は、幕府の意図とは関わりなく、別の側面も持つことになった。正保城絵図は、絵図様式の統一・図式の記号化などをもたらし、これ以降全国的な城絵図作成の基準的存在となったのである(矢守彦『都市図の歴史 日本編』講談社、1974年)。府内藩においても同様で例えば、天明5年(1785)のNo.⑦「豊後国府内城下町

絵図」や文久元年(1861)の No.⑧「府内城下町絵図」(No.⑧は第183図。ともに大分県立大分図書館所蔵)をみても、鳥瞰図的・絵画的に描写されている箇所や数値を記載している箇所、彩色が施されている箇所およびその色など、全体として「正保絵図」に共通するものが多くみられる。府内藩の場合、「正保絵図」が作成された後、日根野氏が改易され大給松平氏が藩主となっているが、大給松平氏が独自に城郭・城下町絵図を作成する場合でも日根野時代の「正保絵図」を基準とし、模範としたということであろう。ここに、城郭・城下町絵図の作成における「正保絵図」の基準としての存在感が強く感じられる。

2. 府内藩家臣団と武家屋敷

① 大給松平府内藩における家臣団の形成

大給松平氏は、万治元年(1658)に府内に入部するまで、出身地の三河国(愛知県)大給にはじまり、転封を繰り返した(『寛政重修諸家譜』)。



近正は、家康から三河国大給の新田1500石を宛行われた。慶長5年(1600)に近正が伏見城で戦死すると、その跡を継いだ一生は下野国(栃木県)都賀郡坂橋に1万石の領主として移った。その子成重は、元和3年(1617)三河国幡豆郡西尾城に2万石で、さらに元和7年(1621)丹波国(京都府)桑田郡亀山城に2万2200石で封じられた。成重の子で松平府内藩初代藩主となる忠昭は、寛永11年(1634)に領知高はそのまま(大分・速見・玖珠郡内に2万2200石)で豊後国速見郡亀川(別府市)に移封され、翌年には屋敷を大分郡中津留(大分市)に構えている。寛永19年(1642)には屋敷を高松(大分市)に移し、そして万治元年(1658)に府内城に入ったのである。この後、大給松平氏が10代にわたって府内藩主となり(第56表)、府内城を居城としたのである。

藩主	生没年	在任期間	法号
1. 忠昭	元和3～元禄6	寛永10～延宝4	宝林院
2. 近陣	寛永13～享保4	延宝4～宝永2	證真院
3. 近植	寛文5～享保10	宝永2～享保10	人智院
4. 近貞	元禄2～宝暦7	享保10～延享2	雲崎院
5. 近形	享保8～安永2	延享2～明和7	観光院
6. 近修	宝暦4～天保11	明和7～文化元	光沢院
7. 近義	明和7～文化4	文化元～文化4	淨岳院
8. 近訓	寛政11～嘉永5	文化4～天保2	大藏院
9. 近信	文化元～天保12	天保2～天保12	寂靜院
10. 近説	文政11～明治4	天保12～明治4	心寛院

第56表 大給松平府内藩主一覧

このように転封を繰り返した大給松平氏であるが、転封の過程でその家臣にはかなりの移動があった。特に忠昭が豊後国へ転封となった際には、「(亀山城) 御発駕之時分御駕之者其外家来下々多く致欠落、御駕二而可被遊御出處、御駕之者居不申候て御出難成義ニ御座候」という状況であり、さらに「大坂迄来或立退者多」かったというように、多くの家臣が離れている(「松平左近將監忠昭公御代留記」、大分県立大分図書館所蔵)。そして、忠昭に従って豊後国にきた上級家臣は、次のごとくであった。

一、六百石	竹田隼人	一、三百石余	千賀七太夫
一、三百石	宇津木源左衛門	一、三百石	太田忠右衛門
一、三百石	松平庄兵衛	一、三百五十石	岡本主膳
一、貳百石	岡本弥左衛門	一、貳百石	竹居李右衛門
一、貳百石	上田彦左衛門	一、貳百石	浅尾助之進
一、貳百石	木戸波右衛門	一、貳百石	岡本半兵衛
一、貳百石	渡辺清左衛門	一、百五十石	須藤八郎右衛門
一、百五十石	手嶋善太夫	一、百五十石	岡本椿右衛門
一、百五十石	佐々長右衛門	一、百五十石	池田半右衛門
一、百石	木村又三郎	一、百石	岩瀬三郎右衛門
一、百石	中山与右衛門	一、百石	奥本権左衛門
一、百石	戸田三之丞	一、百石	杉浦六太夫
一、百石	佐藤理右衛門	一、百石	柴田清右衛門
一、百石	落合荷右衛門	一、百石	上原長兵衛
一、百石	木村庄右衛門	一、百石	玉置五郎太夫
一、百石	杉浦甚兵衛	一、百石	井出九郎右衛門
一、百石	八嶋宗智	一、百石	松村惣兵衛
一、百石	佐藤小左衛門	一、百石	竹田庄之助
一、百石	小林半兵衛	(「松平左近將監忠昭公御代留記」)	

これらを見ると、最高知行取が600石の「竹田隼人」であり、300石以上が5名、200石が7名、150石が5名、100石が19名となっている。2万2200石の大名である松平忠昭の抱えていた上級家臣が、わずか37名だったのである。このような状況を解消するため、「高松二而知行取(上級家臣)被仰付候者多、切符人(中級・下級家臣)数不知」というように、豊後国において多くの家臣を召し抱えなければならなかった(「松平左近將監忠昭公御代留記」)。

松平忠昭は、寛永14年(1637)の「島原・天草の乱」に際して、肥後国(熊本県)富岡城在番を勤めることになった。竹田隼人ら富岡まで本隊と別行動した家臣を除き、忠昭の本隊は行列を組んで富岡に入城した。この行列において知行高が判明する上級家臣をみると、350石が4名、

300石が2名、250石が1名、200石が5名、150石が5名、100石が16名、合計33名となっている（『松平左近将監忠昭公御代留記』）。これら上級家臣とともに多くの中級・下級家臣によって行列は構成されていたわけであるが、この行列の構成から忠昭が豊後国において家臣団を整備しようとしていた状況を伺うことができる。新たな家臣の召し抱えとともに、亀山以来従ってきた家臣の知行加増をおこなっている。知行加増の幅は、「木村又三郎」のように100石から200石へと100石加増された者もいるが、その他の加増はほとんど50石となっている。しかし、理由は不明であるが「竹田隼人」が600石から500石に知行削減されたように、知行が減少した家臣もいた。

その後さらに家臣団の整備がおこなわれた。富岡において、次の9名が「御暇」として忠昭のもとを離れさせられている。

一、百五十拾石	小林半兵衛	一、貳百石	清水四郎左衛門
一、三百五十拾石	宇津木源左衛門	一、三百石	松平庄兵衛
一、貳百五十拾石	竹田清兵衛	一、三百石	竹居左右衛門
一、百五十拾石	須藤八郎右衛門	一、百石	高倉市左衛門
一、五百石	竹田隼人		（『松平左近将監忠昭公御代留記』）

「竹田隼人」が亀山から従った者6名と、亀山から従った家臣のなかに名前のみえない「清水四郎左衛門」・「竹田清兵衛」・「高倉市左衛門」の合計9名である。「御暇」の理由は明らかではないが、知行は比較的多い家臣たちといえる。前述の「竹田隼人」が知行削減されたことと考え合わせると、忠昭による家臣団整備がある程度進み家臣団統制の妨げとなる者を排除したものとも考えられる。これらのうち、「須藤八郎右衛門」は正保年間に帰参が許可され、正保2年（1645）に「物頭」となっている。その後、家督を「須藤儀兵衛」に譲り隠居しているが、忠昭の府内入城に際しては隠居身分で「旗奉行」として行列に加わっている。

万治元年（1658）4月15日、忠昭は府内城に入った。忠昭は、幕府から府内入城が通達されると、吉田平兵衛・上原長右衛門に「府内御城之武具等可請取之旨」を命じるなど、入城準備を整えた（『松平左近将監忠昭公御代留記』）。入城に際して、忠昭の行列は東新町一西新町一笠和門一寺町一堀川町一北門から三ノ丸へと進んでいる（岡本家文書『忠昭公御入府御家中名付』、大分県立大分図書館所蔵）。行列の構成は、つぎのごとくであった。右端の人数は従者などを示している。役職名は、『豊後府内藩御役名前録』（京都大学所蔵）より記載した。

一、鉄砲	40挺	一、須藤儀兵衛（150石、物頭）	13人
一、鉄砲	30挺	一、岡本勘解山（150石、物頭）	14人
一、鉄砲	30挺	一、芝山清右衛門（150石、物頭）	12人
一、弓	30挺	一、手嶋善太夫（150石、物頭）	17人
一、長柄	50本	一、松浦甚左衛門（150石、鍵奉行）	12人

一、旗	5本		一、須藤八郎右衛門(20石、旗奉行)	8人
一、岩瀬三郎右衛門(150石)	13人		一、吉田治左衛門(100石、郡奉行)	8人
一、佐藤彦太夫(150石)	12人		一、八嶋三左衛門(100石)	11人
一、木戸浪右衛門(200石、旗奉行)	15人		一、平田惣左衛門(100石)	9人
一、岡本八郎左衛門(200石)	13人		一、上原長右衛門(100石、郡奉行)	11人
一、持筒	10挺		一、木村庄右衛門(150石、御用人)	13人
一、持弓	5挺		一、渡辺彦兵衛(250石)	18人
一、矢箱	2つ		一、持鏑	10本
一、落合藤右衛門(150石、御使番)	12人		一、尾崎新五左衛門(100石、御使番)	13人
一、乗替馬	2疋	4人	一、指物竿	1人
一、兜立		1人	一、はやおふひ	2荷
一、養箱	2つ	1人	一、挟箱	4つ
一、硯箱		1人	一、掛硯	1人
一、弓立		1人	一、馬駄	1人
一、笠		1人	一、台笠	1人
一、封鎖		2人	一、火熊	2人
一、十文字寸鎖		2人	一、刀筒	2人
一、古橋十兵衛 他中小姓19人			一、長刀	
一、中小姓	4人		一、乗物(藩主)	6人
一、徒士	10人		一、岡本兵部右衛門(150石、御小姓頭)	20人
一、太田三右衛門(100石部屋住、御側物頭)	11人			
一、酒井数馬(100石部屋住)	12人		一、馬	3疋
一、乗掛	1疋	2人	一、松平全之助(500石)	31人
一、竹山庄兵衛(200石)	16人		一、木村又三郎(200石)	17人
一、岡本主膳(400石、家老)	33人		一、酒井七兵衛(250石、家老)	18人
一、田上図書(200石、御用人)	17人			
一、岡本勘右衛門(100部屋住、御側物頭)	14人			
一、中山弥市右衛門(150石)	16人		一、石川市郎兵衛(150石、町奉行)	15人
一、井手九郎右衛門(150石、町奉行)	11人		一、渡辺市郎右衛門(100石)	9人
一、竹野源左衛門(100石)	8人		一、真木権左衛門(100石)	9人
一、岡野弥兵衛(50石2人扶持)	7人		一、伴四郎太夫(100石)	8人
一、佐藤小左衛門(50石2人扶持、普請奉行)	8人			
一、三輪市兵衛(100石)	11人		一、岐部善左衛門(100石、大坂留守居)	8人

一、松浦茂右衛門 (50石 2人扶持)	8人	一、樋口十郎左衛門 (50石 2人扶持)	8人
一、吉村作之丞 (50石 2人扶持)	9人	一、佐々新兵衛 (50石 2人扶持)	8人
一、岡本惣兵衛	6人	一、芝田辰之助	5人
一、木村甚之助	6人	一、日野三重郎	4人
一、佐藤庄之助	7人	一、竹田右衛門作	7人
一、垣本山三郎	4人	一、佐藤真兵衛	7人
一、木村庄太夫	6人	一、戸田八兵衛	6人
一、木村藤兵衛	7人	一、八嶋五郎兵衛	5人
一、上原基右衛門	3人	一、吉田平兵衛	4人
一、清水五兵衛	2人	一、権藤甚五兵衛	2人
一、田中勘兵衛	3人	一、太田忠右衛門 (500石、家老)	35人
一、人簡 5挺		一、村上助之進	5人

(「忠昭公御入府御家中名付」)

行列の構成をみると、家臣団に4つの区分があることがわかる。まず氏名とともに知行高が記載されている上級家臣、次に氏名のみが記載されている中級家臣(中小姓)、そして氏名記載のない下級家臣(徒士)、人数記載のみの最下級家臣(足輕ら)である。行列は、これらの家臣及びその家来によって構成されており、合計人数は991名となっていた。上級家臣をみると、500石が2名、400石が1名、250石が2名、200石が5名、150石が13名、100石が14名(内、部屋住が3名)、50石2人扶持が6名、20石(隠居料)が1名となっている。これら44名が騎馬で入城した家臣である。彼らが従えていた家来の平均人数は、知行500・400石が33人、250石が18人、250石が15.6人、150石が13.8人、100石が10.1人、50石及び隠居20石が8人となっている。上級家臣が従えていた家来は、知行高に応じて人数が決められていたといえる。忠昭の家臣団にはこれらの他に、「高松より御先え府内城え罷り越し」て本隊の入城準備をしていた者たちもいた。また、各々の家族はこの後に各自に割り当てられた武家屋敷に移り住んでいる。

ただし、これらの家臣団が忠昭の家臣団の完成された姿というわけではない。隠居の須藤八郎右衛門を参加させていたり、萩原・牧・花津留・中津留・今津留(すべて大分市)5か村の庄屋を帯刀させ行列に加えたり(『大分市史・中』)していることから、家臣団はまだ形成過程といえる。府内城に入った忠昭は、これらの家臣に加えてさらに家臣の新規召し抱えも行い(『大分県史・近世篇Ⅱ』)、家臣団の体制を整備していった。大船松平氏が近世大名としての家臣団形成を完成させたのは、府内入城後と考えてよいであろう。整備された家臣団の体制として享保18年(1733)の状況をみてみよう(『府内藩記録』)。まず、上級家臣である「給人」(家老・列座・用人・給人ら)が62名いた。「給人」とは50石以上の知行取または10人扶持以上の切米(扶持米)取給人をさし、「廊下橋番入」(他藩における馬廻りに相当)となる家臣であり、

これ以下の家臣のなかでも「給人格」とされた者もあり広義で「給人」に含まれていた（玉置家文書「職制」、大分県立大分図書館蔵）。そして、切米取である「中小姓」（小姓・近習・中小姓ら）と「徒士（歩行）」が合計 109 名、最下級家臣（中間頭・中間・四組薬持ら）が 309 名いた。これらの他に給人隠居・切米取隠居らが合計 9 名いた。

② 府内藩における職制

府内藩における職制・支配機構は、時期・状況によって変化している。第57表は、大給松平氏の府内入城の時期を中心として10の時期を選び「豊後国府内藩御役名前録」によって職制・支配機構の変化をまとめたものである。10の時期は、忠昭以前の近正・一生・成重の各時代、忠昭の亀山時代、忠昭在世中の近陣時代と忠昭死後の近陣時代、その後役50年毎の時期を設定した。この表をみると、大給松平氏の職制・支配機構は、軍事を前提とした基本的なものは忠昭の亀山時代に存在しているが、行政的役職は近陣の代になってから整備されたといえる。そして、基本的には職制・支配機構はほぼこのまま推移している。これらのことから、府内藩における職制・支配機構の整備された17世紀後半は、家臣団形成の完成時期ともほぼ一致し、大給松平府内藩の藩体制が確立した時期といえる。

さて、整備された職制・支配機構を藩士の家格とともに、元文5年(1740)10月に定められた藩士の席次序列からみてみよう。

	近 正	一 生	成 重	忠 昭 寛永20	近 陣 延宝4	近 陣 元禄元	近 陣 宝永7	近 陣 宝暦8	近 陣 文化元	近 陣 嘉永元
御 城 代						1				
御 家 老	3	3	4	3	3	4	3	4	3	4
御 部 屋 住 御 守 御 家 老				1	1	1	1			
江 戸 御 家 老						1		2	1	
御 儀 物 頭					2					
御 用 人			4	6	3	3	4	5	4	6
御 部 屋 住 御 隠 居 付 御 用 人				1	4	4	1			
御 儀 奉 行			1	1	1	1	1	1	1	1
御 物 頭				2	4	4	4	4	4	4
御 儀 奉 行	1				1	2	2	1	1	1
御 小 姓 頭				1	1	2	2	2	2	3
大 目 付						1	1	1	1	1
町 奉 行					1	2	2	2	3	2
御 勘 定 奉 行				1	2	2	1	2	2	
大 坂 御 留 守 屋				1	1	1	1	1	1	1
御 給 奉 行					1	1	1	1	1	1
村 奉 行									2	1
郡 奉 行				1	2	1	1	1	2	2
御 普 請 奉 行					1	1	2	2	3	3
御 徒 士 頭					1	1	1	1	1	1
御 金 奉 行					2	2	1	1	2	2
宗 門 奉 行						1	1		1	1
江 府 御 儀 物 頭 役								1	1	
江 府 大 目 付								1	1	
江 府 御 留 守 屋 并 御 城 使			1	1	1	1	1	1	1	1

〔注〕「豊後国府内藩御役名前録」より作成

第57表 府内藩職制の変遷

諸役之順 但役人之外高祿家督之順席

年寄共	列座	用人共	列座格	旗奉行
物頭	鎧奉行	小姓頭	大目付	町奉行
江戸聞番	勘定奉行	大坂留守居	郡奉行	普請奉行
金奉行	宗門方			

右之通、元文五庚午年十月廿四日被仰出也

徒士頭	普請奉行	金奉行	宗門方	吟味方
井出奉行	鉄砲頭	天守預	大納戸	納戸
買物奉行	道奉行	祐筆		

右之分、中小姓

代官	台所目付	目付	買物目付	銀札場目付
大坂目付	山奉行	道奉行	中間頭	

右之分、徒士

中間頭	大工頭	持小頭	四組小頭	旗小頭
用人共書役	勘定所手代	江戸勘定所勤人	玄關定番	船頭

(玉置家文書「諸役之順」)

ここに列記されている席次には、支配・行政などに実質的な役割を持つものと家格に応じた単なる待遇だけのものが含まれている。また、ここでも家格により大きく給人・中小姓・徒士・徒士以下という4つに区分されている。家格を越えて重複している役職もあるが、全体的には家格に応じて役職が限定されていたといえるであろう。そして、藩政の中心に位置する重要な役職は、給人と一部の中小姓によって占められていたといえる。

これらのうち給人が就いていた役職の職務内容は、時期により若干の相違はあるが、幕末期にまとめられたと考えられる次の史料により概要をみることができる。

城代	留守ノ職 歴代中置カサルトキモアリタリ		
家老職	藩政ヲ司リ、給人以上ノ進退ヲ掌ル		
列座	列座ハ家老ノ列座ト云フ意味ニテ政事ニ預カラス、只席次ノ待遇ナリ、別ニ職掌ナシ、支配ナキ家老ノ心得、家老ノ諄メタルモノ、或ハ門閥者ノ待遇所タリ		
用人役	藩政ノ一部ヲ分掌シ、小姓・近習番以下ノ進退ヲ掌ル		
列座格	職掌列座ニ重ク、列座格ハ老年マテ勤務セシモノ、慰勞ノ持所タリ		
側物頭	事アルノ日、持筒・持弓組ヲ統率ス		
旗奉行	旗手ヲ統率ス	物頭	先手組ト咄へ足輕ヲ統率ス
鎧奉行	長柄組ヲ統率ス	小姓頭	藩主ノ小姓・近習ノ頭取
大目付	藩主ノ目代トシテ諸般ノ監察ヲ掌ル		

町奉行	町家・商人ヲ支配ス	勘定奉行	藩ノ会計ヲ掌ル
船奉行	藩主ノ船舶ノ事ヲ掌ル	林奉行	山林ノ事ヲ掌ル
郡奉行	郷村ノ事ヲ掌ル	普請奉行	作事・切ヲ掌ル
徒士頭	徒士ノ頭取	金奉行	現金銀ノ管理ヲ掌ル
宗門改役 宗教ノ事掌ル			

右ノ内家老職・用人役ヲ兩役ト唱へ、家老職ハ式百石高ニ滿タサルヲ登用スルトキハ在職中式百石ニ内外ス、用人ハ百石ニ内外ス、而シテ職務分担ハ徳川幕府ノ老中・若年寄ノ如シ、

町奉行以下ハ廊下橋番入給人ノ内ヨリ撰用ス、

廊下橋番入ト唱ハ他藩ニテ馬廻リ石高ヲ存スルモノ、大目付ノ次ニ列ス

江戸詰 家老・用人・物頭・城使・勘定方等アリ

部屋住・隠居 家老・用人等アリ

(玉置家文書「職制」)

若干の補足をしておこう。「城代」は臨時職であり、貞享5年(1688)に任命された「木村主水成庸」、幕末期に任命された数名以外にはいない。「家老職」は、元文5年(1740)の席次序列で「年寄共」と表記されていたものである。そして、藩政は「家老職」と「用人役」が実質的に担っていたのである。「物頭職」は府内人部前後に置かれていた役職でその後廃止されていたが、寛政11年(1799)以降「御用人兼帯」として復活したものである。そのため、元文5年(1740)の席次序列にはみられない。「物頭」は、「古来足輕百人岡本玄蕃・太田忠左衛門両家二五拾人宛御供、從津留村御物頭四組被仰付也」(「豊後国府内藩御役名前録」)として、中津留時代以降は4人が先手組1組ずつを統括していた。また元文5年(1740)の席次序列にみられなかった「船奉行」と「林奉行」が含まれている。「船奉行」は、享和年間前後に京泊新料形が築港されているが、これにともなって新設されたものであろうか。「林奉行」は「是迄山奉行之處、寛政七乙卯年御新法御林奉行被仰付、切符ヨリ御林目付被仰付」(「豊後国府内藩御役名前録」)として、寛政7年(1795)に徒士の役職であった山奉行を林奉行と改め給人から任命したものである。これにともない徒士の役職として林目付を新設している。「徒士頭」は元文5年(1740)の席次序列では中小姓の役職であったが、給人の役職に変更されている。

③三ノ丸武家屋敷と家臣団

さて、府内藩において前述のごとく形成・整備された家臣団の武家屋敷は、三ノ丸地域を中心に割り当てられていた。三ノ丸の状況について年代は不明であるが、「豊府指南」(大分県立大分図書館所蔵)に次のごとく記されている。

一、三ノ丸。間数、東西式百四拾八間、南北百三十一間余。此外、鋪八間高サ三間之土居有之。矢倉五ツ。東西北ノ出口、門矢倉有之候。

一、三ノ丸井中嶋曲輪ノ内、屋敷九十七ヶ所。其内、戎ヶ所寺、九ヶ所蔵屋敷、勘定所一ヶ所、馬屋一ヶ所、稽古場一ヶ所、給人屋敷五拾八ヶ所。

さて、三ノ丸における武家屋敷の状況は、享和2年(1802)「清水流規矩元法分間絵図」(大分県立大分図書館所蔵、以下「享和絵図」と略す)に詳しくみることができ、また絵図以外では「豊後府内三之丸屋敷間数覚」・「御家中屋敷付」(岡本家文書、大分県立大分図書館所蔵)などからみることができる。これらの史料には、屋敷一筆ごとに、間口間数・奥行間数・屋敷の代々拝領者(竹中・H根野・松平各時代)などが記されている。特に、「豊後府内三之丸屋敷間数覚」には、松平時代の屋敷拝領者の各知行高も記されている。ここではこれらの史料によりながら、三ノ丸武家屋敷の状況を概観することにする。

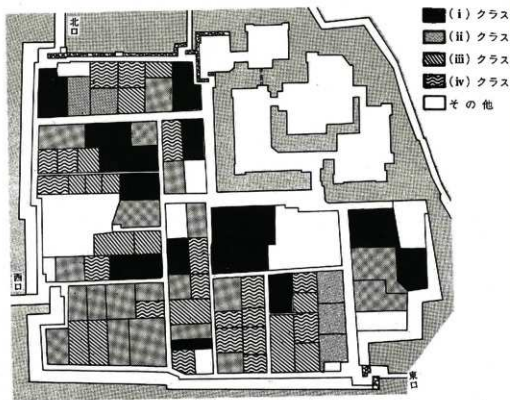
三ノ丸には外部からの入り口が「北ノ口」・「西ノ口」・「東ノ口」の三箇所あり、それぞれに多聞櫓門・二重櫓・番所が設置され、「西ノ口」番所の北隣には「時鐘楼」が置かれていた。この「時鐘楼」は宝暦3年(1753)2月14日に完成したものである。そして、内側は東西に走る道路と南北に走る道路により区画されている。道路には前述のごとく遠見遮断のためにT字路・カギ型路・袋小路などとなっている箇所もあり、三ノ丸の町割は全体的には不統一で複雑なものとなっている。三ノ丸では一応道路を挟んで町が形成されており、第58表にみられるような町となっていた。これら三ノ丸の中には、一般の武家屋敷の他に藩の役所なども置かれていた。「下台所」・「御普請方役所」が大手門正面の広い屋敷地に、「御勘定所」が川里口の南端に、「御用屋敷」が中広小路の西端に、「町御倉」が東ノ口内側に、「里郷御倉」が東立町の南端に、「奥郷御倉」が北ノ口内側に、「牢屋」が南町の東端に、それぞれ配置されていた。

これらの藩の役所とともに、給人・中小姓・武士層の武家屋敷が配置されている。以下、家臣団を禄高により、(i)200石以上、(ii)80石以上、(iii)50石以上及び切米取給人、(iv)切米取(中小姓・武士)の4クラスに分類して、武家屋敷について考察していくことにする。ただし、家臣の屋敷地は三ノ丸以外に、最下級家臣が中心ではあるが、「中嶋」にもあり町人町の内にも混在している。そのため、城下町全体における家臣団の屋敷地に関する検討はこれらすべてについて行わねばならないが、ここではひとまず三ノ丸に限定して行うことにする。

第184図は、「享和絵図」と「豊後府内三之丸屋敷間数覚」によって享和年間における家臣団の屋敷地

町名		間数(間)
東 西	北 広 小 路	120
	西 広 小 路	78
	中 広 小 路	115
	中 横 小 路	102
	覚 勝 寺 町	85
	袋 町	20
	南 町	215
南 北	北 裏 町	112
	東 広 小 路	115
	山 果 口	83
	東 立 町	130
	中 立 町	183
	藪 小 路	66
	西 町	24

[注] 「享和絵図」より作成
第58表 府内城下町三ノ丸の町



〔注〕「享和絵図」・「豊後府内三之丸屋敷間数覚」より作成
第184図 享和年間(1716-1736)における府内城下町三ノ丸武家屋敷

の位置と禄高クラスを示したものである。享和年間における三ノ丸の武家屋敷は、一見すると各クラスともに分散しているように感じられるが、家臣への屋敷地振り分けに際して屋敷地割を前代からそのまま引き継いだという制約があったことを考慮すれば、家臣団の屋敷配置にはある程度の配慮はなされていたと考えてよいであろう。まず、城地に近接している位置は、(i)クラスの屋敷地がほとんどを占めている。(ii)クラスの屋敷地は東ノ口・西ノ口周辺に多くなっている。そして、東ノ口・西ノ口・北ノ口各方面からの主要道路に接する区画は、ほとんどが(i)あるいは(ii)クラスの屋敷地となっており、特に曲り角には(i)クラスが配置されている。また、(iii)及び(iv)クラスの屋敷地は三ノ丸の南方、主要道路の背面に多く位置している。全体として、主要な位置にまず(i)クラス、次いで(ii)クラス、その残りに(iii)及び(iv)クラスを配置しているといえるであろう。ただしこれは享和年間のものであり、屋敷替えが行われれば状況も変化してくるであろう。しかし、屋敷替えの場合でも、後にみる木村家の場合のように、屋敷の位置や禄高などは考慮しておこなっていたであろうし、屋敷配置の考え方には大幅な変更はなかったといえるのではないだろうか。

ところで、家臣の禄高と屋敷地の規模との関係はどうなっているのだろうか。「豊後府内

坪	給 人			中小姓 徒士 (iv)	計
	200石以上 (i)	80石以上 (ii)	80石未満 (iii)		
600～	3	1			4
550～	2	1			3
500～	3	1			4
450～	1				1
400～		5			5
350～		4		2	6
300～	1	4			5
250～	2	3		3	8
200～	2	5	5	9	21
150～		7	1	5	13
100～				3	3
50～		1		1	2
計	14	32	6	23	75

〔注〕「豊後府内三之丸屋敷間数覚」より作成
第59表-1 家臣の禄高と屋敷地規模（松平氏入部当初）

坪	給 人			中小姓 徒士 (iv)	計
	200石以上 (i)	80石以上 (ii)	80石未満 (iii)		
600～	3	1			4
550～		1			1
500～	4	1	1		6
450～	1				1
400～	2	3			5
350～	1	2	1	2	6
300～	1	3		1	5
250～		5		3	8
200～	3	5	5	8	21
150～		6	5	7	18
100～		1	2		3
50～		1	1		2
計	15	24	15	21	75

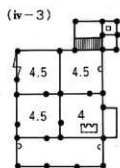
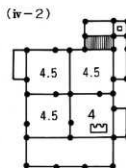
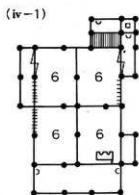
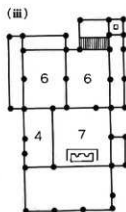
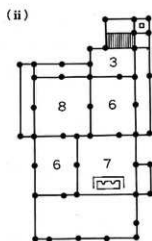
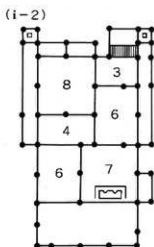
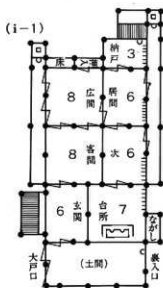
〔注〕「豊後府内三之丸屋敷間数覚」より作成
第59表-2 家臣の禄高と屋敷地規模（天保期）

三之丸屋敷間数覚」によりながら家臣の禄高と屋敷地の規模との関係を見ると、第59表-1、2のごとくである。第59表-1は松平氏入部当初の家臣禄高と屋敷地規模との関係、第59表-2は天保期の家臣禄高と屋敷地規模との関係を示したものである。この2つの時期では各クラスの人数に差はあるが、屋敷数には変化がない。いずれの表をみても、(i)クラスには500坪以上の屋敷地が多くなっている。(ii)クラスには様々な広さの屋敷地があるが、傾向としては200～300坪前後の屋敷地が多くなっている。(iii)クラスには三ノ丸に屋敷地がある者が少ないようであるが、三ノ丸では200坪前後の屋敷地が多いようである。(iv)クラスには三ノ丸以外に屋敷地のある者も多いようであるが、少なくとも三ノ丸においては、(iii)クラス同様に200坪前後の屋敷地が多いといつてよいであろう。屋敷地割そのものが前代からほぼそのまま引き継いであるものであり、禄高の高い者から順に屋敷地を屋敷の配置を配慮して割り当て、禄高の割に屋敷地規模が小さくなったり大きくなったりしている場合もあるということを考慮すれば、全体的傾向としては2つの時期とも、禄高が高ければ屋敷地規模もそれに応じて大きくなっているといえるであろう。

家 格	梁 行	桁 行
i-1 御家老	2間半、縁廻り・縁下懸り	7間半、外3畳敷棟
i-2 列座・御用人	2間半、縁廻り・縁下懸り	6間半
ii 御老頭・150石以上	2間半、縁廻り・縁下廻り	6間半、但3畳敷棟
iii 給入・給人格	2間、縁廻り・縁下	5間半
iv-1 御近習・御中小姓	2間、縁廻り・縁下	5間
iv-2 御歩行目付・御目付	2間、縁付	4間
iv-3 御歩行	2間	4間

〔注〕「御家人建家御渡定式」より作成

第60表 家臣の家格による屋敷規模



[注] 「御家人建家御儀定式」より作成

第185図 府内藩家格毎の屋敷構造

さて、このような屋敷地の中にどのような屋敷を構えていたのであろうか。屋敷については年代は不明であるが「御家人建家御渡定式」(玉置家文書、大分県立大分図書館所蔵)という基準が残されている。その基準によって(i)～(iv)クラスごとにまとめたものが第60表・第185図である。この基準をみると、各人の禄高や役職に応じて屋敷の規模・構造が制約されている状況を伺うことができる。なお、この基準には家老屋敷については特に詳しく次のような建家仕様が示されている。

御家老屋敷家建入用品々并建家仕様

一、梁行 式間半 但三尺下懸り、縁回り孫下	一、桁行 七間半 外三疊敷棟立
一、玄関	一、湯殿
一、床 一ヶ所	一、押入れ 一ヶ所
一、板天井 二ヶ所 座敷・客ノ間	一、雪隠 二ヶ所 板戸二枚
一、蓆天井 三ヶ所 回り縁共二竹 居間・次・玄関	一、惣竹縁 なよ竹
一、七島表 縁付九懸り 三十四枚 座敷・客ノ間・居間・次・玄関	
一、わら畳 十枚 納戸・台所	一、惣すのこ
一、玄間戸 二枚	一、広島障子 十枚
一、大戸 一枚	一、竹骨障子 十九枚
一、板戸 四枚	一、惣障子 八枚

(「御家人建家御渡定式」)

3. 近世における本調査地域

① 福寿院

本調査地域は、三ノ丸東部で東広小路の東に位置し、城地入り口に当たっている。「慶長絵図」における屋敷地割をみると、裏屋敷的なものを持つ屋敷地と方形の屋敷地があったことになっている。ここでは、まず東にあった方形の屋敷地についてみていくことにする。

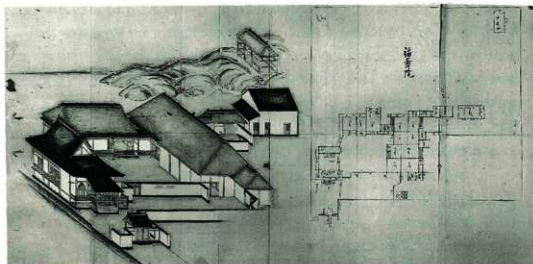
「豊後府内三之丸屋敷間数覚」によると、「表口三拾一間、入拾九間二尺」の屋敷地であったことがわかる。この屋敷地の所有者をみると、竹中時代「胸井庄助」、日根野時代「片田友右衛門」、大給松平時代「三輪市兵衛」・「福寿院」となっている。三輪市兵衛は、大給松平氏が豊後国に米てからの家臣で、府内入城時は知行高 100石であった。市兵衛が屋敷所有者であった期間は短く、高松から移ってきた福寿院に屋敷地を明け渡している。

福寿院については、「雄城雑誌」巻四に次のように記されている。

魔尼山瑞応寺福寿院

本尊不動。弘法大師作。

雑誌(豊府雑誌)曰、真言宗、仁和寺御門主ノ末流ニシテ、吾侯(大給松平氏)ノ祈願所也。万治二(元カ)年、当城賜封ノ刻、此地ニ移ス。当(大分)郡高田氏高松村、宝珠菴其旧址タリ。



第186図 福寿院図（安政4年＝1857、大分市松栄神社所蔵）

また、明治22年(1889)「寺院明細帳」にはその来歴について次のように記されている。

大分郡高田庄高松ニアリシヲ、大給家祖先ノ祈願所トシ、万治元戊戌年、松平対馬守忠照(昭カ)当城ニ移封ノ際、随從シテ字荷揚町東方ノ地ニ移ス。

そして、松平忠昭が中津留に居館を構えていた寛永12年(1635)から寛永19年(1642)までの間の家臣屋敷などを記載していると考えられる「御先代様中津留御屋敷絵図」(郷土史跡伝説研究会『豊府古跡研究』第4冊所収、原図は所在不明)に、福寿院の区画をみいだすことができる。

これらの史料とともに、福寿院を開山した宥雄上人が明暦2年(1656)5月20日に入寂していることを考え合わせると、福寿院は明暦以前に開山されたものであり、少なくとも松平忠昭が居館を中津留に構えていた期間には中津留にあり、大給松平家の祈願所としての役割を担っていたと考えられる。その後、松平忠昭の移動にともなって福寿院も大給松平家の祈願所として高松・府内へと移転したのである。

近世における福寿院代々の住職は、次のごとくである(現在の福寿院住職・浅井龍晃氏の御教示による)。

開基	宥雄上人	明暦2年(1656)5月20日寂
二世	範雄上人	寛文9年(1669)9月9日寂
三世	雄遍上人	宝永6年(1709)7月16日寂
四世	暹理上人	享保20年(1735)3月18日寂
五世	理燈上人	寛延2年(1749)3月26日寂
六世	泰音上人	
七世	理岸上人	
八世	順全上人	

九 世	了 義 上 人	文化2年(1805)正月12日寂
十 世	義 海 上 人	文政8年(1825)10月26日寂
十一世	義 道 上 人	
十二世	有 轉 上 人	文久3年(1863)初七H寂
十三世	貴 亮 上 人	

高野山真言宗を宗旨とし不動明王を本尊としている福寿院は、大給松平家の祈願所でもあり府内藩全体に関わることで、ほぼ毎年春植え付け期に五穀豊饒の祈願をしたり、雨が少ない時期の雨乞いの祈禱などを行っていた。例えば、寛政9年(1797)の場合をみると、次のごとくである(府内藩記録、大分県立大分図書館所蔵)。

一、同日(4月18日)、御領内為五穀成就於福寿院御祈禱被仰付候……尤御祈禱料例之通銀壹枚……

一、同日(閏7月11日)、福寿院雨乞御祈禱被仰付……

恒例の祈願の他に、家運長久をはじめ大給松平家に関することを祈願する場合もあった。例えば、寛政5年(1793)11月に松平近儒が「十二天尊像」12幅を寄進し、内容は不明であるが祈願を行っている(「十二天尊像」福寿院所蔵)。この「十二天尊像」12幅は、日天・月天・多門天・羅刹天・風天の5幅には「近形」、水天・地天・帝釈天・伊舎那天・焰魔天の5幅には「近儒」、梵天・火天の2幅には「近平」とそれぞれに名前が記されている。近形は近儒の先代藩主である。

そして、福寿院の住職自身が祈願する場合もあった。例えば、寛政9年(1797)5月27日、住職順全上人は「涅槃像」1幅を寄進し祈願を行っている(「涅槃像」福寿院所蔵)。同年12月8日には宝篋印塔一字を建てる藩の許可を得ている(「府内藩記録」)。また、年代は明らかにし得ないが、順全上人は祈願・修行のために陸奥へと旅立っている。この時、藩主近儒は和歌1首を贈っている(福寿院所蔵文書)。

法印順全が陸奥へ下り還るを送りて 近儒
おもひやる この奥も はるはると
たつね行らむ はるのまつ山

さて、府内城三ノ丸における福寿院の屋敷地についてみていくことにしよう。

宝永4年(1707)10月4日発生した「宝永の大地震」に際して、福寿院は被害を受けている。

右地震付、……福寿院座敷潰、護摩堂東へ倒掛、…… (「府内藩記録」)

また、寛保3年(1743)4月7日、下柳町からの出火からの類焼により府内城郭をはじめ城下町全体に多大な被害をもたらした「寛保の大火」により、福寿院も被災している。

ところで、享和4年(1804)2月、隣接する木村藏人の屋敷地の一部が福寿院9世了義上人の隠宅とされることになっている。

(木村藏人屋敷の) 付屋敷内少々御借川被成候間、隠宅御建被成候、……尤、隠宅被除候節は早速御指返被成候段、御川人主置舎人殿より木村藏人方へ御積聞有之、此段御普請方へも御沙汰有之、
(「御家中屋敷付」)

この隠宅は了義上人入寂後に取り崩しとなり、木村家の屋敷地に戻っている。

福寿院は、この後明治を迎えるまで同地において松平氏の祈願所という役割を担っていた。そして、明治2年(1869)の版籍奉還により藩主が府内城の外に屋敷地を設けることになり、福寿院の屋敷地が候補地となったことにともない福寿院は屋敷地を移転することになった。福寿院は明治3年8月に当時の町名で「荷揚町10-31」に移転し、現在に至っている。

②木村家概観

本調査地域内のもうひとつの屋敷地は、「慶長絵図」における屋敷地割によると表屋敷だけでなく、裏屋敷とでもいうように後方へ変則的につながるという屋敷地の型をしている。また「享和絵図」によると、本調査地域には「木村藏人」の屋敷地があったと記されている。そこでこれらを手掛かりに、「豊後府内三之丸屋敷間数覚」においてこの屋敷地に相当する項目を探すと、「表口廿二間半、外口二間半、入口七間半、付ケ屋敷有リ」という屋敷地をみいだすことができる。

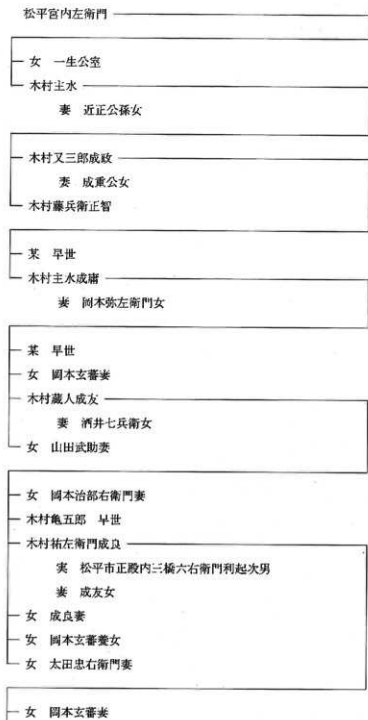
この屋敷地の所有者は、竹中時代「不破茂左衛門」、日根野時代「中村内匠」であったと記されている。不破茂左衛門は、慶長10年(1605)、「関ヶ原の戦い」に関連して徳川家康方の岡藩主中川秀成が石田三成方の臼杵城主太田一吉を臼杵城に攻めた際、今津留(大分市)にいた岡藩船奉行柴山勘兵衛に従い海路臼杵城を攻めた者の中に「府内浪人」として名前をみることができる(碩田叢史「柴山勘兵衛記」、大分県立大分図書館所蔵)。この後、府内に入部した竹中氏に仕えたものであろう。また、中村内匠は、寛永14年(1637)、「島原・天草の乱」に際して府内藩の行動を協議するために府内城に集まった「豊後府城の長臣」の一人として名前をみることができる(「豊府間書」)。中村内匠の知行高は400石であり、日根野氏の家臣団では最高の知行高であった(岡本家文書「日根野織部正家中付」)。松平氏入部後に日根野氏に仕えていた「中村市右衛門」が召し抱えられているが、この中村内匠と関係があるのであろうか。

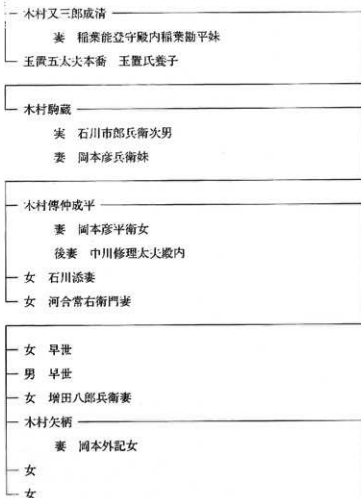
さて、松平氏入部当初(万治元年-1658-4月)には、この屋敷地は知行500石の「松平宗之助」の屋敷地となっている。松平宗之助の屋敷地には、その後「御勘定所」が置かれ、延宝4年(1676)以降「木村家」の屋敷地となっている。

木村家の本国は三河国であり、木村家初代「主水」は松平忠昭の祖父松平一生が下野国板橋を領していた時期に登用されている。これ以前「松平」姓であったものを「木村」姓に改めている。主水の姉は松平一生の室となっており、主水の妻の母は一生の父近正の娘であった。また、主水の長男又三郎の妻は松平忠昭の姉妹から迎えている(岡本家文書「木村家系図」)。

これらのことから、大給松平家と木村家は姻戚関係にあったといえる。

主水以降、木村家は大給松平氏に仕えていたわけであるが、ここで木村家を略系図でみてみることにする。



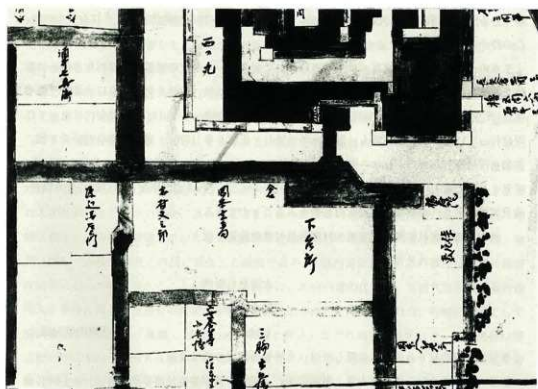


(「木村家系図」)

豊後国と木村家との関係は、2代「木村又三郎成政」から始まる。又三郎は、松平忠昭が豊後国に転封となった際に従った上級家臣37名の中にいた。当時の知行高は100石であった。その後加増され、「島原・天草の乱」の時には200石となっている。また、忠昭の中津留時代の家臣屋敷数などを記載している「御先代様中津留御屋敷絵図」(第187図)の中にも、知行高200石の又三郎の名前をみいだすことができる。又三郎は、忠昭に従い中津留から高松へ、そして忠昭が府内城に入部したのにもともない府内城三ノ丸内に屋敷を構えることになったのである。万治元年(1658)4月15日、忠昭の府内入城行列において又三郎が従えたのは、若党5人をはじめ「鉄砲二挺、具足箱、挟箱、弁当、甲立、鎧、馬取、草り取、沓籠」などの役割を持つ者達、合計17人であった(岡本家文書「忠昭公御入府御家中名付」)。又三郎の最初の屋敷地は、中広小路と東立町が接している場所であり、おおよそ現在の宮崎銀行大分支店がある位置であった。松平氏が府内に入部した当時の三ノ丸屋敷割の状況を記載したと考えられる「白雉城之図」



第167回 御先代様中津留御屋敷絵圖(写) (部分。『豊府古跡研究』第4冊所収)



第188回 白堀城之図(写) (部分。大分県立大分図書館所蔵)

(写が伝えられているが、原図は所在不明)にも又三郎の名前を見ることができる(第188図)。

又三郎には弟「木村藤兵衛正智」がおり中小姓であったが、府内入城後に病死し、跡が絶えている。

又三郎の子息「木村主水成庸」は、高松(大分市)において生まれている(「給人御奉公年数帳」, 大分県立大分図書館所蔵。以下の記述は特記しない限りこれによる)。主水は、寛文6年(1666)に「御見得」となり、貞享元年(1684)に家督を相続、知行高 300石となっている。そして、貞享3年(1686)「廊下橋御帳判改」を経て、貞享5年(1688)3月22日「御城代」に就任している。

御城代

昭重公御代 木村主水成庸

貞享五戊辰年三月廿二日、当御役初而被仰付之、

但シ、御家老之上座被仰付

(岡本家文書「諸役前録 上」)

「御城代」の役職は家老の上席に位置する臨時職であり、例えば元禄3年(1690)正月の城中での儀式に際して家老職にある者が「南座上」に着座したのに対して「北座上、堂ノ上」に着座している(岡本家文書「岡本家旧記」)。主水は、元禄11年(1700)11月25日に病死している。ところで城代となった主水は、延宝4年(1676)に屋敷替えとなり、本調査地域内の屋敷地に移動している(「豊後府内三之丸屋敷開数覚」)。本調査地域に木村家が居住するようになったのは、この時からである。

主水の子息「木村藏人成友」は、府内において生まれ、主水没の翌年、元禄12年(1699)に家督を相続し、知行高 300石となっている。これ以前の藏人は、元禄5年(1692)に15歳で「御小姓」、元禄7年(1694)に15人扶持となり、元禄12～13年(1699～1700)には参勤交代に従って江戸に行っている。家督相続後も、宝永元年(1704)・正徳6年(1716)・享保10年(1725)の3回、参勤交代に随行している。この間、宝永5年(1708)10月28日には「御家老職」に就任している。家老としての藏人の様子を、「府内藩記録」から一・二みてみよう。享保6年(1721)8月21日、検見実施の役人への命令書に藏人の名前をみることができる。

来ル廿四日吉口候間、従東五ヶ村御検見可被相勤候、已上

八月廿一日

太田忠右衛門

岡本玄蕃

木村藏人

(「府内藩記録」)

享保16年(1731)8月の台風に際しては、その被害状況の調査を命じている。

当八日より十二日迄長雨大風、御領内損亡・御城中破損等書付寄可差出旨、……(木村)藏人より(吉田)与八郎へ被申聞……

(「府内藩記録」)

ところで家老就任の約1年前、宝永4年(1707)10月4日発生した「宝永の大地震」に際して、木村家の門が倒れたりしている。

右地震付、……木村蔵人門倒……

(「府内藩記録」)

蔵人は、元文2年(1737)に隠居し、隠居料として知行100石を給付されている。

蔵人には男子1人・女子4人の子供がいたが、男子「亀五郎」が早世したため跡継ぎを迎えなければならなかった。そこで、杵築藩士三橋六右衛門利起の次男を蔵人の次女と娶せ、養子として迎え、「木村祐(助)左衛門成良」と名乗らせた。祐左衛門は、享保3年(1718)に「御小姓」となっている。そして参勤交代にも、享保4年(1719)から翌年まで、享保7年(1722)から10年まで、享保12年(1727)から翌年まで、享保14年(1729)から翌年まで、というように何度も随行している。この間には享保9年(1724)に「伊勢宮代参」を命じられたり、享保10年(1725)には「御小姓御納戸」役となったりしている。さらに、享保13年(1728)には15人扶持・「列座格」、享保14年(1729)には「御広間取次」となっている。そして、元文元年(1736)には知行高100石・「御家老見習」を命じられ、翌年7月28日には父蔵人の隠居にともない家督を相続し、知行高300石・「御家老職」となっている。ところが、元文4年(1739)6月25日、参勤交代に随行して前年よりいた江戸において、「御役御免并知行百石御取上」が命じられ、これ以後一ノ丸の屋敷において8年間「隠居」することになったのである(岡本家文書「諸役前録上」)。理由は定かでない。この間の寛保3年(1743)4月7日、下柳町からの出火により府内城郭をはじめ城下町全体に多大な被害をもたらした「寛保の大火」により、祐左衛門の屋敷も被災している。隠居が許されたのは延享3年(1746)であるが、同時に隠居し子息又三郎成清に家督を譲ることが命じられている。隠居料100石であった。

宝暦8年(1758)8月3日、祐左衛門は再び筆頭家老として役職に就くことになった。役料として7人扶持が給付されることになっている。祐左衛門再登用の理由は明らかではない。祐左衛門は、再出仕に際して「矢柄」と改名している。筆頭家老として職務に就いた矢柄ではあったが、宝暦11年(1761)3月14日には「公領赤松村御境目出入」あるいは「銭瓶石騒動」とよばれる事件が発生し、その解決に迫られることになった。この事件は、府内藩が幕府巡見使の巡回に備えて、府内藩領銭瓶石から幕領浜脇村の枝郷赤松との境界までの道掃除を行った際、境界に関して赤松側農民との間に発生した騒動である(「府内藩記録」)。この事件は江戸の幕府評定所において吟味されることになり、矢柄をはじめ府内藩の代表者、日田代官所など幕府側役人と事件に関わった農民の代表者が江戸に呼び出された。同年11月11日、吟味の結果として府内藩主松平近形は「悪害」、矢柄らは「御預ケ押込」などの処分が決定した。この処分は翌宝暦12年(1762)2月21日に解除され矢柄らは4月には府内に帰国できたが、筆頭家老として幕府との交渉にあたった矢柄は大変な苦勞があったことであろう。矢柄は、同年5月29日、病死している。

矢柄の子息「木村又三郎成清」は、府内において生まれ、矢柄が隠居を命じられた延享3年(1746)に家督相続し、知行高 200石・「廊下橋御番」となっている。そして、寛延4年(1751)から参勤交代に随行し、翌年には「御留守詰」として江戸に残っている。宝暦3年(1753)には「御広岡御取次」、翌年には「御鑑奉行」となり府内に帰っている。宝暦5年(1755)5月5日「御用人役」となり、宝暦7年(1757)には再び参勤交代に随行し、「御留守詰」として江戸に残っている。しかし、宝暦9年(1759)6月13日、江戸において病死している。享年34歳、父矢柄よりも早い死であった。

木村家では、府内藩士石川市郎兵衛の次男を養子として迎え、「木村又三郎成徳」と名乗らせた。そして、宝暦9年(1759)閏7月18日、又三郎に家督を譲った。又三郎は知行高 200石・「幼年二付、御側勤」をすることになった。そして宝暦12年(1762)12月15日、元服し、「廊下橋御番判改、且御留守節泊番」となっている。安永元年(1772)10月30日、束の馬場において藩主松平近衛が家臣の乗馬を閲見した際に、「白河」という馬に乗っている(「府内藩記録」)。安永2年(1773)には参勤交代に随行し江戸に行き、翌年2月3日に「御鑑奉行」となり、府内に帰国している。安永3年(1774)9月1日には「御用人役」となり、翌年3月には農村視察の「御巡郷」を行っている。同年10月25日には参勤交代に随行し江戸に向け出発し、翌年10月5日には「御留守詰」として江戸に残っている。しかし、安永7年(1778)1月19日、江戸において病死している。享年31歳。

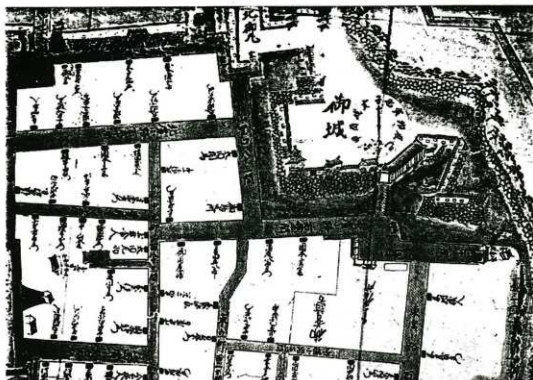
又三郎の急死にともない、同年3月28日、息子「木村蔵人成平」に家督が譲られることになり、知行高 200石となった。蔵人は、府内生まれで当時10歳であった。蔵人は、安永9年(1780)10月28日に「御側勤」となり、天明7年(1787)1月15日に元服し「廊下橋御番判改」となっている。その後、「放生会御名代」・「御留守中泊番」などの役割を果たしている。寛政3年(1791)に参勤交代に随行することになった。

御参府御供被仰付、尤當時格式ニ而被召連候御用は無之候得共、為事馴被召連、御道中・江府共ニ御詰人勤等可被仰付

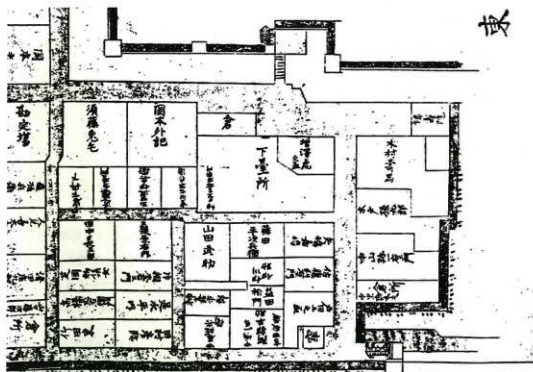
(「給人御奉公年数帳」)

蔵人は、翌年に府内に帰国している。「享和絵図」(第189図)には、この頃の屋敷地の状況が描かれたのであろう。ところで、前述のごとく享和4年(1804)2月、蔵人の屋敷の一部が福寿院9世了義の隠宅とされることになっているが、その後隠宅は取り崩しとなり、屋敷地は元に戻っている。この後、蔵人は文化2年(1805)1月13日に「御側物頭、御用人兼帯」となり、文化10年(1813)6月15日には「御家老職」となっている。しかし、文化13年(1816)3月15日、蔵人は病死している。

蔵人の跡継ぎとなったのは「木村矢柄」である。そして、その跡を継いだのは「木村寿馬」であり、『武鑑』(橋本博「改訂増補 大武鑑」、名著刊行会、1965年)の記載をみていくと、



第189図 清水流規矩元法分間絵圖（部分。大分県立大分図書館所蔵）



第190図 慶長府内藩御家中名前付（部分）

万延元年(1860)から明治元年(1868)まで「用人」の一人として名前をみることができる。また、文久3年(1863)4月作成とされる「豊後国府内藩 御家中名前付」(昭和5年の写が伝えられているが、原因は所在不明)にも、寿馬の名前をみることができる(第190図)。木村家は、この寿馬の代に明治維新を迎えることになったのであろうが、資料的制約により、矢柄・寿馬以降の木村家に関しては概観することができない。

むすびにかえて 近代以降の本調査地域周辺

以上、考察を尽くせない点が多いが、本調査地域を中心として、近世における府内城三ノ丸・武家屋敷について考察してきた。しかし、これはあくまで府内城郭・城下町を研究していく上での基礎作業的なものであり、関連する様々な問題が山積していることは痛感しているが、今後の課題としたい。ここでは、近代以降の本調査地域周辺の変容を概観して、むすびにかえることにする。

明治2年(1869)3月、府内藩は版籍奉還を行い、さらに明治4年(1871)7月、廃藩置県が実施され府内藩は府内県となり、同年11月11日、豊後一円が大分県となったことにともない府内県も統合された。はじめ仮大分県庁は堀川町松平十郎宅に置かれたが、明治5年(1872)9月、事務引き継ぎの完了とともに大分県庁は府内城に置かれることになった。そして明治8年(1875)、城下町地域は大分町となった。このような変動の中、明治3年(1870)8月、福寿院が前述のごとく移転している。

明治8年(1875)の地租改正に際して作成された「地籍図」(大分県立大分図書館所蔵)をみると、本丸地域を「壱番」として、二ノ丸・三ノ丸から町人町まで千数百番の地番が記されている。本調査地域は、「百三十八」・「百三十九」という地番となっている。

そして、明治9年(1876)10月24日、本調査地域を含む現大分県庁地域には「大分県師範学校」が完成している。この大分県師範学校は、中島の府内藩校遊馬館跡に明治7年(1874)8月設立された「師範学校伝習所」が隣家からの出火で焼失したことにともなって、当地に新校舎を建設し、名称変更したものである。明治18年(1885)5月、大分県師範学校の北隣に「大分県立大分中学校」が開校された。初代校長には村上田長が任命され、6月5日に生徒70名とともに開校式が行われている。翌年の中学校令の布告にともなって、大分中学校は「大分県尋常中学校」と改称し、教育内容・施設など充実していくが、入学志願者の増加に伴い収容能力170名程度の校舎では手狭になっていった。そこで、大分県尋常中学校は明治27年(1894)6月、上野の台地に新校舎を建設し移転した。さらに、明治33年(1900)には大分県師範学校も春日浦に新校舎を建設して移転していった。

明治33年(1900)4月1日、これらの跡地に「大分県高等女学校」が設立されることになり、校舎として大分県師範学校の旧校舎を改造して使用することになった。同年6月13日、本科第

1 学年 100名の入学式が行われ、6 月18日、開校式が行われた。そして翌年発令された「大分県高等女学校学則」に沿って諸制度が整備され、9 月1日には校名を「大分県立大分高等女学校」と改めた。明治41年(1908)4月になると、「大分県女子師範学校」が大分高等女学校に併設された。この大分県女子師範学校は、明治44年(1911)4月には長浜に移転し、翌年に新校舎の落成式が行われた。教育制度の整備にともなって、教育熱も高まっていた。大正元年(1912)には大分高等女学校の生徒定員も450名となっている。さらに昭和5年(1930)には「大分県立第二高等女学校」が大分県女子師範学校に併設され、これにともなって大分高等女学校は「大分県立第一高等女学校」と改称された。昭和15年(1940)には第一高等女学校は創立四十周年記念式典を行っている。しかし、昭和20年(1945)3月以降、大分市もたびたび空襲をうけることになり、終戦直前の8月10日に第一高等女学校の校舎はすべて焼失してしまった。戦後、第一高等女学校は大分航空廠大道工場跡を仮校舎として使用することになり移転していった。

昭和29年(1954)12月、本調査地域には「大分県電気局庁舎」が完成し、以後、その東側に大分県警察機動隊が配置されたり、大分県開発公社が置かれたりしている。そして、現在「大分県共同庁舎」(仮称)が建設されている。

[付記]

本稿をなすにあたって様々な有益な助言をいただきました。豊田寛三先生、末広利人文化課長をはじめとする文化課の方々に感謝申し上げるとともに、史料閲覧等に際して多大の御配慮をいただきました。国立公文書館、大分大学附属図書館、大分県立大分図書館、大分市歴史資料館、臼杵市立図書館、福寿院、松榮神社の方々にお礼を申し上げたい。

Ⅵ. 総括

今回の発掘調査で判明したことを、以下箇条書きとして総括に代えたい。

- ①大分県共同庁舎（仮称）の建設に先立ち、1991年4月から6月にかけて府内城三ノ丸遺跡の発掘調査を行った。調査面積は第1次調査区約1,800㎡、第2次調査区約320㎡の合計約2,130㎡である（1頁参照）。
- ②調査区付近は、府内城三ノ丸の中でも府内藩の家老・用人などを務めた「木村家」の武家屋敷や「福寿院」という寺院が存在した地点に相当する。S K 33・S K 34・S K 44から「木村」の焼継文字を有する肥前産の陶磁器が出土したことにより、調査地点付近が木村家の屋敷地であることを考古学的に裏付けた。また発掘調査では明瞭な屋敷境を検出することは出来なかったが、造構の配置や遺物の接合関係などから大まかな境界線を推定することができた（236～239頁参照）。また、木村家や福寿院の沿革等については、303～314頁参照。
- ③土坑一括出土遺物の製作年代を基軸に、遺跡の時期区分を0期（13世紀後半）、Ⅰ期（16世紀末から17世紀初頭）、Ⅱ期（17世紀前半から後半）、Ⅲ期（17世紀末から18世紀中頃）、Ⅳ期（18世紀後半）、Ⅴa期（18世紀末から19世紀前半）、Ⅴb期（19世紀前半から中頃）の都合8小期に区分した（224頁参照）。
- ④Ⅰ期に属する土坑S K 20・S K 23の出土遺物の検討から、慶長年間の福原直高段階の三ノ丸造成の文献記載を考古学的に傍証できる可能性を示唆した。また出土遺物のうち、非クロコ形状の上師質土器小皿の性格に関する考察も行った（224～230頁参照）。
- ⑤Ⅱ期に属するS K 14・15の出土遺物は、寛保3年（1743）に発生した大火に伴う遺物群である可能性を指摘した（230～235頁参照）。また出土遺物には大皿をはじめとした皿類や中国製品が多く、特異な組成をみせることを指摘した（241～246頁参照）。
- ⑥陶磁器類の時期別組成を検討した。詳細は241～246頁を参照願いたい。19世紀中頃の幕末前後になると、瀬戸美濃製品が陶磁器碗の総量の2割程度出現することを特記しておきたい。
- ⑦土師質・瓦質土器には、他地域から搬入されたものや他地域に系譜をたどり得るものが存在する反面、在地で確実な製作された土器類が存在することを指摘した。また、在地系土器は大分県東部から北海道都佐賀岡町付近で製作された可能性が高いことを指摘した（247～257頁参照）。
- ⑧軒平瓦の分類と編年を行い、府内城系列軒平瓦を設定した（259～278頁参照）。
- ⑨製作時期を明らかにできなかったが、「前十器（マエカワラケ）」と呼ばれる土製品が出土し、その用途と使用法などを紹介した（279～282頁参照）。

写真図版



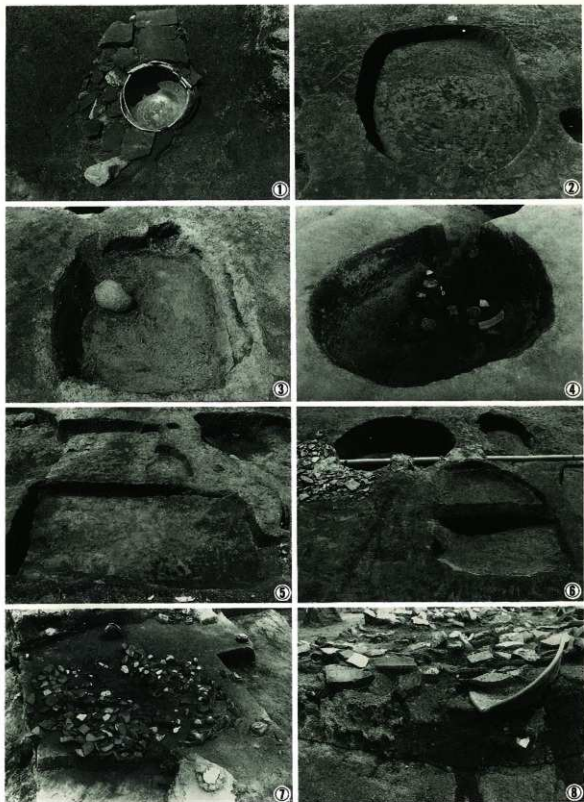
图版 1

① 调查区全景 ② 土坑集中部 ③ 上層遺構 ④ 埴室遺構
⑤ 上層遺構 SD1 近景



図版 2

① SA 2 ② 井戸 SE1 ③ SE1 断ち割り ④ 井戸 SE2



圖版 3 ① SX1 ② SK 30 ③ SK 29 ④ SK 23 ⑤ SK 14 · 15 ⑥ SK 7 · SK 8 · SK 21
⑦ SK 2 ⑧ SK 2 遺物出土狀況

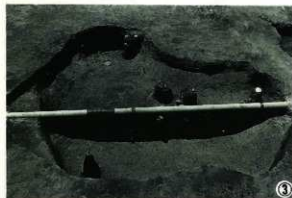


図版 4 ① SK 19a ② SK 19a 土層断面 (SK 19b との切り合いがわかる) ③ SK 16
④ SK 11・SK 12 ⑤ SK 26



図版 5

① SK 3 ② SK 3 青銅製品出土状況 ③ SK 4・SK 5
④ SK 22 ⑤ SK 22瓦出土状況



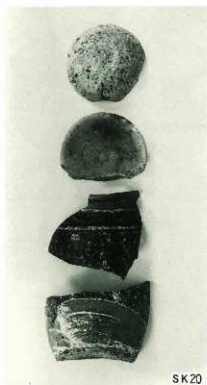
圖版 6 ① SK 1 遺物出土狀況 ② SK 1 遺物出土狀況近景 ③ SK 10 ④ SK 33 調查風景
⑤ SK 33 ⑥ SK 33 鬼瓦出土狀況 ⑦ SK 41 遺物出土狀況 ⑧ SK 17



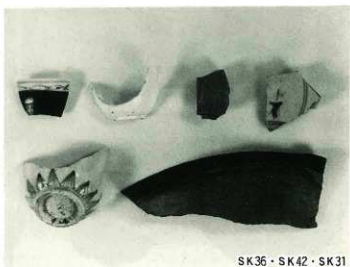
SK20



SK23



SK20

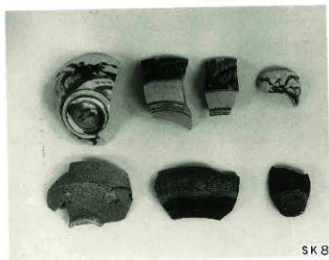


SK36・SK42・SK31



SK32・SK29

図版7 出土遺物①



SK 8



SK 14・15



SK 11



SK 14・15

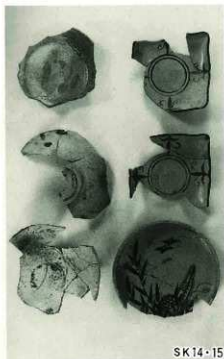


SK 14・15



SK14・15

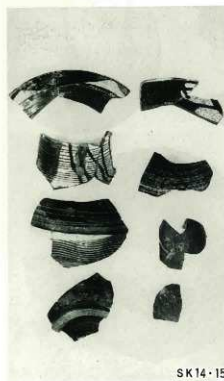
図版 9 出土遺物③



SK14・15



SK14・15



SK14・15



SK14・15



SK14・15
(高熱で溶着した陶磁器)

図版10 出土遺物④



SK14・15



SK14・15



SK14・15



SK9



SK3



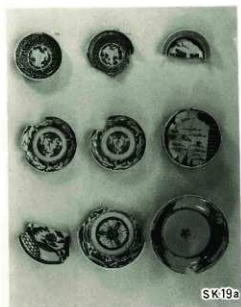
SK26



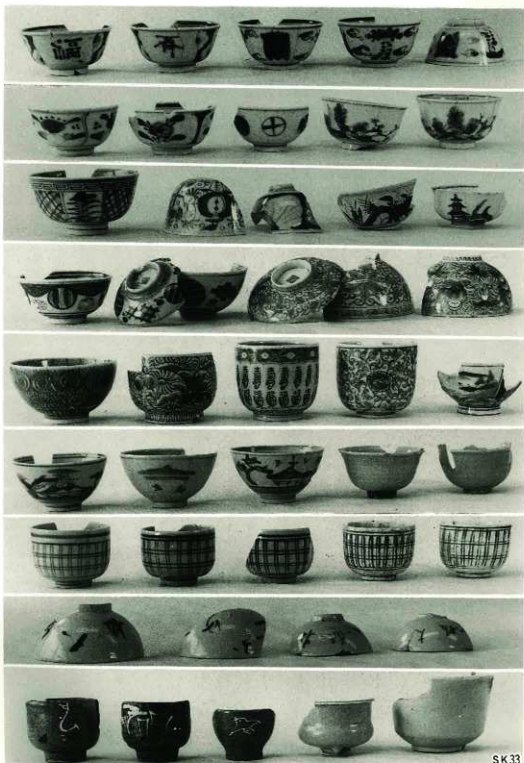
SK26



SK19a



図版12 出土遺物⑤

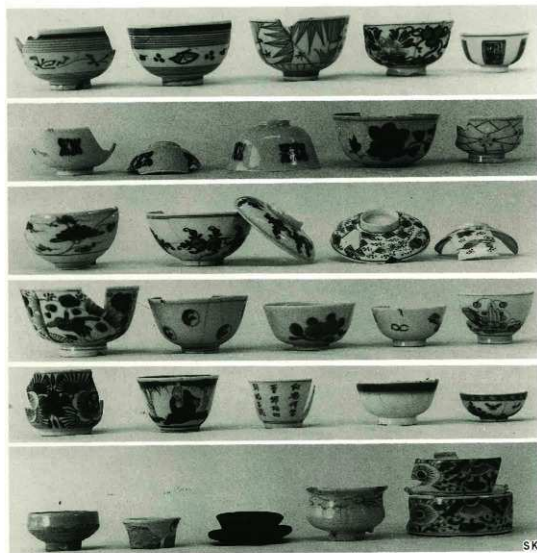


SK33

図版13 出土遺物⑦

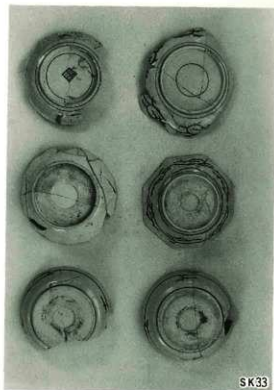
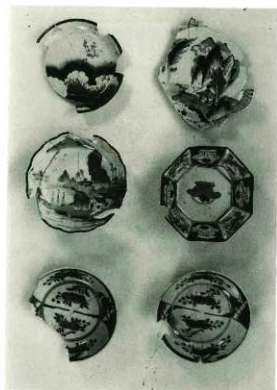
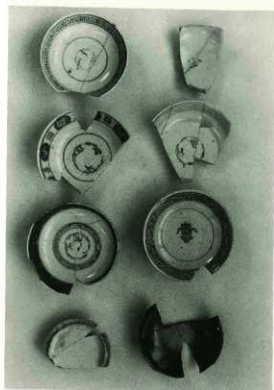
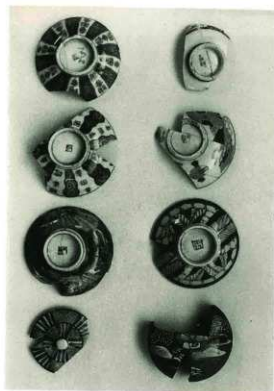


SK33・34



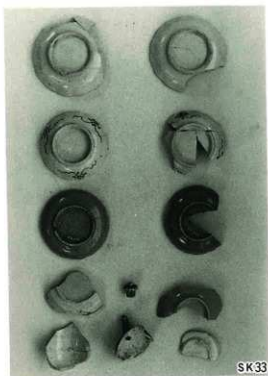
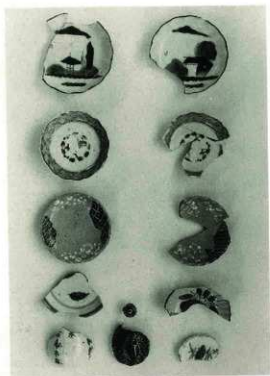
SK34

図版14 出土遺物⑧

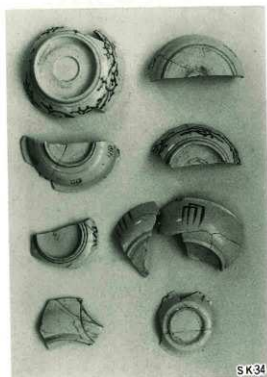


SK33

図版15 出土遺物⑨

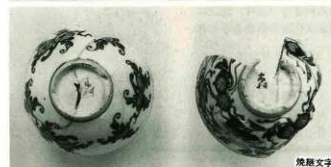


SK33



SK34

図版16 出土遺物⑩



図版17 出土遺物①

府内城三ノ丸遺跡

—大分県共同庁舎（仮称）建設に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1993年3月31日

発 行 大分県教育委員会
大分市府内町3丁目10番1号
印 刷 日の丸印刷株式会社

